

県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 2

東小田遺跡群

朝倉郡夜須町所在峯遺跡・七板遺跡F区の調査

福岡県文化財調査報告書

第 70 集

1985

福岡県教育委員会

県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 2

東小田遺跡群

朝倉郡夜須町所在峯遺跡・七板遺跡 F 区の調査

福岡県文化財調査報告書

第 70 集

昭和 60 年

福岡県教育委員会

序

各種開発事業の企画・立案に際しては、埋蔵文化財の保護についても十分な御配慮をいただくよう広く関係各方面をお願いしているところであります。事業主体が公共団体ならびにこれに準ずる機関であればなおのことであり、県道久留米・筑紫野線建設に際しては、県土木部道路建設課とは当委員会文化課を通じて、建設予定地内に所在する埋蔵文化財の保護について協議を重ねてまいりました。この結果、峯遺跡ならびに七板遺跡については事前に発掘調査を行って記録保存するはこびとなり、ここにその成果の一端を刊行するにいたしました。

調査に際して御協力いただいた関係各位に対して心から御礼申し上げますとともに、本書が広く活用されますことを願ってやみません。

昭和60年3月30日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

例 言

1. 本書は、昭和59年度に福岡県教育委員会が福岡県土木部道路建設課からの委託を受けて実施した、県道久留米・筑紫野線建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査の結果についての報告書である。
2. 本書には
第1地点 峯遺跡（朝倉郡夜須町大字東小田字沼尻，同字坂口所在）
第2地点 七板遺跡F区（同字七板所在）
の計2遺跡を収録した。
3. 峯遺跡の実測図は、石山勲・高田一弘・佐土原逸男・高山浩一が、七板遺跡F区の実測図は石山・木下修・佐々木隆彦・高田・佐土原が作製し、遺構と遺物の実測並びに製図は、調査担当者及び補助員の他、豊福弥生・平田春美・原富子・鶴田佳子の多大な協力を得た。
4. 遺構の写真は、石山が撮影し、遺物写真は、九州歴史資料館の石丸洋技術主査の指導のもとに平島美代子・矢野明美をお願いした。
5. 遺物整理は、福岡県教育庁文化課の整理指導員である岩瀬正信氏の指導助言を得て九州歴史資料館で行った。
6. 竪穴住居跡の面積値はプランニメーターによる測定である。
7. 本書の執筆は、I・IIを石山，峯遺跡を佐土原，七板遺跡F区は佐々木が各々分担した。
8. 本書の編集は、峯遺跡を石山の助言のもとに佐土原が，七板遺跡F区は佐々木が分担した。

本文目次

	頁
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 発掘調査の記録	
1 峯遺跡の調査	
1) 遺跡の概要	7
2) 遺構と遺物	7
(1) 貯蔵穴	7
(2) 甕棺墓	14
(3) 竪穴住居跡	54
(4) その他の遺構と遺物	55
3) 小 結	61
2 七板遺跡F区の調査	
1) 遺跡の概要	65
2) 遺構と遺物	67
(1) 竪穴住居跡	67
(2) 掘立柱建物	152
(3) 周溝状遺構	154
(4) 土 壙	155
(5) 溝状遺構	172
(6) 甕 棺 墓	182
(7) 土 壙 墓	186

(8) その他の出土遺物	186
3) 小 結	191

図 版 目 次

峯遺跡

図版 1	(1) 峯遺跡遠景 (南西より)
	(2) 峯遺跡遠景 (北東より)
図版 2	(1) 1区全景 (北西より)
	(2) 2区全景 (北より)
図版 3	(1) 1号甕棺墓
	(2) 1号甕棺の埋葬状態
図版 4	(1) 2号甕棺墓
	(2) 3号甕棺墓
図版 5	(1) 4号甕棺墓
	(2) 6号・7号甕棺墓
図版 6	(1) 8号甕棺墓
	(2) 9号・13号甕棺墓
図版 7	(1) 10号甕棺墓
	(2) 11号・12号甕棺墓
図版 8	(1) 14号甕棺墓
	(2) 15号甕棺墓
図版 9	(1) 16号甕棺墓
	(2) 18号甕棺墓
図版 10	(1) 19号甕棺墓
	(2) 20号甕棺墓
図版 11	(1) 21号甕棺墓
	(2) 22号甕棺墓
図版 12	(1) 23号甕棺墓
	(2) 25号甕棺墓
図版 13	(1) 26号甕棺墓

- (2) 27号甕棺墓
- 図版 14 (1) 28号甕棺墓
(2) 28号甕棺墓蓋部土層
- 図版 15 (1) 29号甕棺墓
(2) 1号祭祀
- 図版 16 (1) 1号竪穴住居跡（南西より）
(2) 2号竪穴住居跡（南東より）
- 図版 17 (1) 1号甕棺
(2) 4号甕棺
- 図版 18 (1) 2号甕棺
(2) 2号甕棺補修
(3) 7号甕棺補修
- 図版 19 (1) 7号甕棺
(2) 9号甕棺
- 図版 20 (1) 11号甕棺
(2) 13号甕棺
- 図版 21 (1) 14号甕棺
(2) 16号甕棺
- 図版 22 (1) 8号甕棺
(2) 12号甕棺
(3) 27号甕棺
- 図版 23 (1) 28号甕棺
(2) 1号祭祀出土土器
(3) 昭和2年前漢鏡・鉄戈出土地の現況（南から）
- 図版 24 1 1号貯蔵穴出土土器
2 21号甕棺墓埋土中出土土器
3, 7, 8 土器溜り出土土器
4, 5, 6 採集土器
- 図版 25 (1) 採集石器
(2) 採集石器

七板遺跡

- 図版 26 (1) 七板遺跡の遠景（昭和57年当時，東から）
(2) 七板遺跡の遠景（昭和60年1月，南西から）
- 図版 27 (1) 七板遺跡F1区全景（北から）
(2) 七板遺跡F2区全景（南から）
- 図版 28 (1) 3号竪穴住居跡（南から）
(2) 3号竪穴住居跡竈内遺物出土状態
- 図版 29 (1) 3号竪穴住居跡竈内下層遺物出土状態
(2) 4号竪穴住居跡（南から）
- 図版 30 (1) 4号竪穴住居跡竈出土状態
(2) 5号竪穴住居跡（北から）
- 図版 31 (1) 5号竪穴住居跡屋内土壌遺物出土状態
(2) 8号竪穴住居跡と1号周溝状遺構（東から）
- 図版 32 (1) 9号竪穴住居跡（西から）
(2) 10号・11号竪穴住居跡（北から）
- 図版 33 (1) 10号竪穴住居跡屋内土壌遺物出土状態
(2) 12号竪穴住居跡と3号・4号溝状遺構（南東から）
- 図版 34 (1) 12号竪穴住居跡屋内貯蔵穴
(2) 13号・15号竪穴住居跡（北から）
- 図版 35 (1) 15号・36号竪穴住居跡（西から）
(2) 15号竪穴住居の竈と遺物出土状態
- 図版 36 (1) 16号・25号・26号竪穴住居跡（東から）
(2) 17号・18号竪穴住居跡（南から）
- 図版 37 (1) 18号竪穴住居跡竈出土状態
(2) 19号・34号・40号竪穴住居跡，14号土壌（西から）
- 図版 38 (1) 19号竪穴住居跡竈出土状態
(2) 20号竪穴住居跡15号土壌（南東から）
- 図版 39 (1) 20号竪穴住居跡竈出土状態
(2) 21号竪穴住居跡炭化材・焼土出土状態
- 図版 40 (1) 21号竪穴住居跡炭化材・焼土除去後（南から）
(2) 21号竪穴住居跡の炉跡出土状態
- 図版 41 (1) 22号・23号・24号竪穴住居跡，土壌墓（北から）

- (2) 23号竖穴住居跡, 土壙墓 (南から)
- 図版 42 (1) 29号・30号竖穴住居跡と3号周溝状遺構 (南から)
(2) 31号・33号竖穴住居跡と4号土壙 (西から)
- 図版 43 (1) 34号竖穴住居跡 (南東から)
(2) 34号竖穴住居跡竈出土状態
- 図版 44 (1) 36号竖穴住居跡 (南西から)
(2) 37号・38号・39号・40号竖穴住居跡 14号・15号土壙 (南から)
- 図版 45 (1) 40号竖穴住居跡 (北西から)
(2) 40号竖穴住居跡屋内土壙遺物出土状態
- 図版 46 (1) 42号竖穴住居跡と3号周溝状遺構 (西から)
(2) 7号土壙 (南西から)
- 図版 47 (1) 9号土壙 (北東から)
(2) 10号土壙 (南から)
- 図版 48 (1) 11号土壙 (南東から)
(2) 12号土壙 (南西から)
- 図版 49 (1) 1号甕棺墓 (北から)
(2) 2号甕棺墓 (西から)
- 図版 50 2号・3号・4号竖穴住居跡出土遺物
- 図版 51 4号・5号・9号・10号竖穴住居跡出土遺物
- 図版 52 11号・12号・13号・15号竖穴住居跡出土遺物
- 図版 53 15号・18号竖穴住居跡出土遺物
- 図版 54 18号・19号竖穴住居跡出土遺物
- 図版 55 19号・21号・24号・25号竖穴住居跡出土遺物
- 図版 56 26号・27号・30号竖穴住居跡出土遺物
- 図版 57 30号・33号・34号竖穴住居跡出土遺物
- 図版 58 34号・37号・38号・39号・40号竖穴住居跡出土遺物
- 図版 59 40号・46号竖穴住居跡, 1号・3号・9号・10号・12号土壙出土遺物
- 図版 60 12号土壙出土遺物
- 図版 61 12号土壙・1号・3号・5号溝状遺構出土遺物
- 図版 62 5号溝状遺構出土遺物
- 図版 63 5号溝状遺構出土遺物, 1号甕棺
- 図版 64 1号甕棺墓, 2号甕棺, その他の出土遺物

挿 図 目 次

峯遺跡

第 1 図	遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図 (1/50,000「甘木」) ……………	3
第 2 図	峯遺跡周辺地形図 (1/2,000) ……………	8
第 3 図	峯遺跡遺構配置図 (1/100) ……………	折り込み
第 4 図	1・2・3・4号貯蔵穴実測図 (1/40) ……………	9
第 5 図	1号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4) ……………	11
第 6 図	6号・7号貯蔵穴実測図 (1/40) ……………	12
第 7 図	8・9・10号貯蔵穴実測図 (1/40) ……………	13
第 8 図	1号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	15
第 9 図	2号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	16
第 10 図	3号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	18
第 11 図	4・14号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	19
第 12 図	5号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	20
第 13 図	6号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	21
第 14 図	7号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	27
第 15 図	8・13・15号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	28
第 16 図	9号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	29
第 17 図	10・22号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	30
第 18 図	11号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	31
第 19 図	12号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	32
第 20 図	16号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	33
第 21 図	18号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	34
第 22 図	19号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	35
第 23 図	20・23号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	36
第 24 図	21号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	37
第 25 図	21号甕棺墓埋土中出土土器実測図 (1/3) ……………	38
第 26 図	24号・27号甕棺墓, 1号祭祀実測図 (1/20) ……………	39
第 27 図	25号甕棺墓実測図 (1/20) ……………	40

第 28 図	26号・29号甕棺墓実測図 (1/20)	42
第 29 図	28号甕棺墓実測図 (1/20)	44
第 30 図	1号・2号甕棺実測図 (1/8).....	折り込み
第 31 図	4号・8号・27号甕棺実測図 (1/6)	45
第 32 図	7号甕棺実測図 (1/8).....	46
第 33 図	9号甕棺実測図 (1/8).....	47
第 34 図	11号甕棺実測図 (1/8).....	48
第 35 図	12号・28号甕棺実測図 (1/8).....	49
第 36 図	13号甕棺実測図 (1/8).....	50
第 37 図	14号甕棺実測図 (1/8).....	51
第 38 図	16号甕棺実測図 (1/8).....	52
第 39 図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	54
第 40 図	2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	54
第 41 図	土器溜り出土, 表採土器実測図その1 (1/4).....	56
第 42 図	土器溜り出土, 表採土器実測図その2 (1/4).....	57
第 43 図	表採土器実測図 (1/2)	58
第 44 図	石器実測図 (1/2).....	59
第 45 図	甕棺墓群の群構成 (1/150)	62

七板遺跡

第 46 図	七板遺跡周辺地形図 (1/2,000).....	66
第 47 図	七板遺跡F1・2区遺構配置図 (1/200).....	折り込み
第 48 図	1号・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	67
第 49 図	1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	68
第 50 図	2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	68
第 51 図	2号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/2).....	69
第 52 図	3号竪穴住居跡・竈実測図 (1/60・1/30).....	70
第 53 図	3号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/3).....	71
第 54 図	3号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/3).....	72
第 55 図	3号竪穴住居跡出土土器・土製品実測図 (1/2).....	73
第 56 図	4号竪穴住居跡・竈実測図 (1/60・1/30).....	74

第 57 図	4号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/3).....	75
第 58 図	4号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/2).....	76
第 59 図	5号竪穴住居跡実測図 (1/60)	77
第 60 図	5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	78
第 61 図	6号・7号・8号・9号竪穴住居跡, 1号周溝状遺構実測図 (1/60)	79
第 62 図	6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	79
第 63 図	7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	80
第 64 図	8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	80
第 65 図	9号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/2).....	81
第 66 図	10号竪穴住居跡実測図 (1/60)	82
第 67 図	10号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	83
第 68 図	10号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/2).....	84
第 69 図	11号竪穴住居跡実測図 (1/60)	85
第 70 図	11号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/3).....	86
第 71 図	11号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/3).....	87
第 72 図	12号竪穴住居跡実測図 (1/60)	88
第 73 図	12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	90
第 74 図	12号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/2).....	90
第 75 図	13号竪穴住居跡実測図 (1/60)	91
第 76 図	13号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	92
第 77 図	13号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/2).....	93
第 78 図	14号竪穴住居跡, 2号周溝状遺構実測図 (1/60)	93
第 79 図	14号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	94
第 80 図	15号竪穴住居跡・竈実測図 (1/60・1/30)	95
第 81 図	15号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/3).....	96
第 82 図	15号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/3).....	97
第 83 図	15号竪穴住居跡出土土器実測図その3 (1/3).....	98
第 84 図	16号・25号・26号・35号竪穴住居跡実測図 (1/60)	折り込み
第 85 図	16号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	100
第 86 図	17号・18号竪穴住居跡・竈実測図 (1/60・1/30)	折り込み
第 87 図	17号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	101
第 88 図	18号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/3).....	103
第 89 図	18号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/3).....	104

第 90 図	18号竖穴住居跡出土土器実測図その3 (1/3).....	105
第 91 図	18号竖穴住居跡出土土器実測図その4 (1/2).....	105
第 92 図	19号竖穴住居跡実測図 (1/60)	106
第 93 図	19号竖穴住居跡竈実測図 (1/30)	107
第 94 図	19号竖穴住居跡出土土器実測図その1 (1/3).....	108
第 95 図	19号竖穴住居跡出土土器実測図その2 (1/3).....	109
第 96 図	20号竖穴住居跡実測図 (1/60)	111
第 97 図	20号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	112
第 98 図	21号竖穴住居跡炭化材・焼土出土状態実測図 (1/60)	112
第 99 図	21号竖穴住居跡実測図 (1/60)	113
第 100 図	21号竖穴住居跡出土土器実測図その1 (1/4).....	115
第 101 図	21号竖穴住居跡出土土器実測図その2 (1/4).....	116
第 102 図	21号竖穴住居跡出土石器実測図 (1/2).....	116
第 103 図	21号竖穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2).....	116
第 104 図	22号・23号竖穴住居跡実測図 (1/60)	117
第 105 図	22号竖穴住居跡出土石器実測図 (1/2).....	117
第 106 図	23号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	118
第 107 図	24号竖穴住居跡実測図 (1/60)	118
第 108 図	24号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	119
第 109 図	24号竖穴住居跡出土石器実測図 (1/2).....	120
第 110 図	24号竖穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2).....	120
第 111 図	25号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	121
第 112 図	26号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	123
第 113 図	26号竖穴住居跡出土石器実測図 (1/2).....	124
第 114 図	27号竖穴住居跡実測図 (1/60)	124
第 115 図	27号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	125
第 116 図	27号竖穴住居跡出土土製品実測図 (1/2).....	126
第 117 図	28号・29号・30号竖穴住居跡, 3号周溝状遺構実測図 (1/60)	折り込み
第 118 図	30号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	127
第 119 図	30号竖穴住居跡出土石器・土製品実測図 (1/2).....	127
第 120 図	31号・32号竖穴住居跡実測図 (1/60)	128
第 121 図	31号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	129
第 122 図	33号・50号・51号竖穴住居跡, 4号土壌実測図 (1/60)	130

第 123 図	33号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	131
第 124 図	33号竖穴住居跡出土石器実測図 (1/2).....	132
第 125 図	33号竖穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2).....	133
第 126 図	34号・46号竖穴住居跡実測図 (1/60)	134
第 127 図	34号竖穴住居跡竈実測図 (1/30)	135
第 128 図	34号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	136
第 129 図	34号竖穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2).....	136
第 130 図	36号竖穴住居跡実測図 (1/60)	137
第 131 図	36号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	138
第 132 図	37号・38号・39号竖穴住居跡実測図 (1/60)	139
第 133 図	37号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	140
第 134 図	38号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	141
第 135 図	38号竖穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2).....	141
第 136 図	39号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	143
第 137 図	39号竖穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2).....	144
第 138 図	40号竖穴住居跡実測図 (1/60)	145
第 139 図	40号竖穴住居跡出土土器実測図その1 (1/4).....	146
第 140 図	40号竖穴住居跡出土土器実測図その2 (1/2).....	146
第 141 図	40号竖穴住居跡出土石器, 土製品実測図 (1/2)	146
第 142 図	42号竖穴住居跡実測図 (1/60)	147
第 143 図	42号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	147
第 144 図	44号・45号竖穴住居跡実測図 (1/60)	148
第 145 図	44号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	149
第 146 図	45号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	149
第 147 図	46号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	150
第 148 図	49号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4).....	150
第 149 図	52号竖穴住居跡実測図 (1/60)	151
第 150 図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)	152
第 151 図	2号掘立柱建物実測図 (1/60)	153
第 152 図	2号掘立柱建物出土土器実測図 (1/4).....	154
第 153 図	1号・2号・3号土壌実測図 (1/30)	156
第 154 図	1号土壌出土土器実測図 (1/3).....	157
第 155 図	3号土壌出土土器実測図 (1/4).....	158

第 156 図	4号土壌出土土器実測図 (1/6).....	159
第 157 図	6号・7号・8号土壌実測図 (1/30)	160
第 158 図	9号・10号土壌実測図 (1/30)	161
第 159 図	9号土壌出土土器実測図 (1/4).....	162
第 160 図	9号土壌出土土製品実測図 (1/2).....	163
第 161 図	10号土壌出土土器実測図 (1/4).....	164
第 162 図	11号・13号・14号土壌実測図 (1/30)	165
第 163 図	11号土壌出土土器実測図 (1/4).....	166
第 164 図	12号土壌実測図 (1/30)	167
第 165 図	12号土壌出土土器実測図その1 (1/4).....	168
第 166 図	12号土壌出土土器実測図その2 (1/4).....	169
第 167 図	13号土壌出土土器実測図 (1/4).....	170
第 168 図	14号土壌出土土器実測図 (1/4).....	171
第 169 図	1号溝出土土器実測図 (1/3).....	172
第 170 図	1号溝出土石器実測図 (1/2).....	173
第 171 図	3号溝出土土器実測図 (1/4).....	173
第 172 図	5号溝土層断面図 (1/40)	175
第 173 図	5号溝出土土器実測図その1 (1/4).....	177
第 174 図	5号溝出土土器実測図その2 (1/6).....	178
第 175 図	5号溝出土土器実測図その3 (1/4).....	179
第 176 図	5号溝出土土器実測図その4 (1/4).....	180
第 177 図	5号溝出土土器実測図その5 (1/4).....	181
第 178 図	5号溝出土石器実測図 (1/2).....	181
第 179 図	5号溝出土鉄器実測図 (1/2).....	182
第 180 図	5号溝出土遺物実測図 (1/3).....	182
第 181 図	1号・2号甕棺墓実測図 (1/20)	183
第 182 図	1号・2号甕棺実測図 (1/6).....	184
第 183 図	1号甕棺墓境内出土石器実測図 (1/2).....	185
第 184 図	土壌墓実測図 (1/30)	186
第 185 図	その他の出土土器実測図その1 (1/4).....	187
第 186 図	その他の出土土器実測図その2 (1/4).....	188
第 187 図	P-68出土石器実測図 (1/2).....	190
第 188 図	P-5出土鉄器実測図 (1/2).....	190

第 189 図 表採出土土製品実測図 (1/2).....190

表 目 次

峯遺跡

第 1 表 峯遺跡甕棺墓一覧表.....53
第 2 表 甕棺の主軸方位と埋置角度.....63

七板遺跡

第 3 表 1 号掘立柱建物計測表..... 152
第 4 表 2 号掘立柱建物計測表..... 153

I 調査に至る経過

県南の中心久留米地区と国道 200号線冷水 B. P. (一部区間開通) を介して筑豊地区とを結ぶ捷路として、県道久留米・筑紫野線の新設が計画されたという。この建設予定地内に所在する各種埋蔵文化財については、県教育委員会と土木部道路建設課との間で執行委任事業として事前の発掘調査を実施するという協議が成立している。これに基づき、既に昭和51・53両年度には小郡市所在干潟遺跡(第6地点)の調査を行い、報告書の刊行も了えている(『干潟遺跡 I——県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告1』〈福岡県文化財調査報告書59〉1980年)。

54～57年度は中断したが、58年度に至って北端の朝倉郡夜須町東小田地区が着工される運びとなった。このため、峯遺跡(第1地点)、七板遺跡F地区(第2地点)の両遺跡の発掘調査を実施した。調査の組織および現地調査期間は以下のとおりである。

調査組織

土木部道路建設課

課長	内田 勝士
庶務係主事	松尾 昭典

土木部甘木土木事務所

所長	石松主基生	
工務第二課第一係	技術主査	藤井 久春(前任)
"	"	深見 政夫

福岡県教育委員会

総括	教育長	友野 隆
	教育次長	安倍 徹
	管理部長	伊藤 博之
	" 文化課長	前田 栄一
	" 課長補佐	中村 一世
	北筑後教育事務所長	大平 岩男
	" 社会教育課長	藤 征弘
調査	管理部文化課庶務係長	松尾 満
	" 主任主事	竹内 洋征
	" 調査第一係長	宮小路賀宏
	" 技術主査	柳田 康雄

管理部調査第二係主任技師 佐々木隆彦
 北筑後教育事務所技術主査 石山 勲 (調査担当)
 調査補助 高田 一弘 佐土原逸男 高山浩一

調査期間

峯 遺跡

自 昭和59年2月6日
 至 昭和59年3月16日

七板遺跡F地区

自 昭和58年5月2日
 至 昭和58年8月5日

遺構実測に際しては、県文化課木下修主任技師の来援を得た。

なお、調査は夜須町教育委員会（中司和宗教育長、徳永文男社会教育課長、白木慶一社会教育係長、佐藤正義嘱託）の御支援をいただいて順調に進行した。末筆ながら諸氏の御高配に対して心から御礼申し上げます。

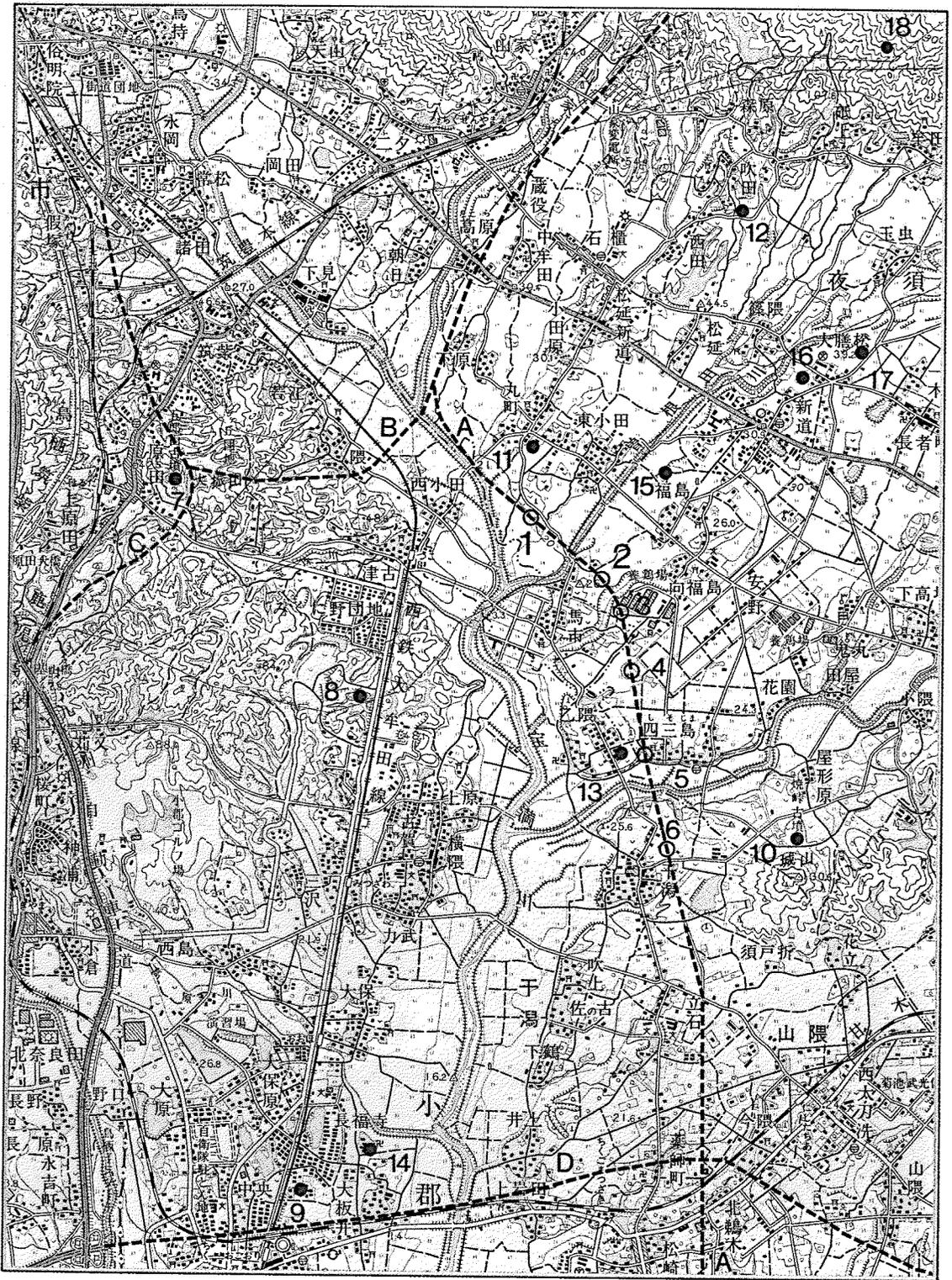
II 位置と環境

甘木をも含めた現在の朝倉郡は、旧筑前国に属した夜須・^{しもつあきくら}下座・^{かむつあきくら}上座の計3郡が明治29年（1896）4月に統合されたもので、夜須町は郡の西端に位置する。本町の南西に接する現小郡市は旧筑後国、その西隣りは近年銅鐸鎔范の出土で俄に耳目を集めている旧肥前国佐賀県鳥栖市にあたり、三国境の町という性格を見逃せない。

第1図 遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布（1/50,000 「甘木」）▶

- | | | |
|----------------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 1 峯遺跡（第1地点） | 2 七板遺跡（第2地点） | 3 第3地点（未調査） |
| 4 第4地点（未調査） | 5 第5地点（未調査） | 6 ^{ひがた} 千潟遺跡（調査済） |
| 7 五郎山装飾古墳（国史） | 8 種蓄場遺跡（県史） | 9 小郡官衙跡（国史） |
| 10 ^{やけのとうげ} 焼峠前方後方墳（国史） | 11 ^{なかばるまえ} 中原前遺跡 | 12 ^{ふきた} 吹田遺跡 |
| 13 ^{おとぐま} 乙隈遺跡 | 14 大板井遺跡 | 15 塔ノ本遺跡 |
| 16 大木遺跡 | 17 江藤遺跡 | 18 観音塚装飾古墳 |

A. 県道久留米・筑紫野線 B. 国道200号線冷水^{ひやみず} B.P. C. 国道3号線筑紫野 B.P. D. 九州横断道



第 1 図 遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図 (1/50,000「甘木」)

地勢的には、広大な筑紫平野の北西端にあたり、北縁を山郡山地に属する低山地が走り、西縁からは背振山地が迫っている。従って、玄界灘に面した福岡平野方面から筑紫平野へと南進する際には避けて通れない箇所といえる。一方、国道3号線から分岐して冷水峠へと向う国道200号線は、筑豊地区を介して関門地区へと抜ける最短路として大型車の往来が激しいが、その路線はかつて西国大名が往還した旧長崎街道にほぼ沿っている。

また、日田街道（現国道386号線）の追分の一つ石櫃と秋月街道の松崎宿とをつなぐ旧道（註1）にほぼ沿って新設が計画されたのが、調査の発端となった県道久留米・筑紫野線（第1図A）に他ならない。以上からみても、当該地域が古今を通じて交通上の要衝の一つであることは明らかで、事実、周辺地域一帯は各時代にわたる多種多様な遺跡の宝庫となっている。

さて、夜須町には西から山家川、曾根田川、草場川の三筋が西流して宝満川に注いでおり、さらに南下して筑後川に合流している。以下に報告する峯・七板両遺跡は、曾根田川と宝満川との合流点にほど近い比高4～6mの段丘上に、右岸と左岸とに分かれて位置している。

周辺地域では、弥生時代の各種金属器類の出土例が少なからず知られており、以下にそれらを列挙する。

峯遺跡（夜須町大字東小田字峯2754、図版 ー23）

須玖式甕棺内から連環文昭明鏡1、棺外から鉄戈1（昭和2年出土、註2）

^{なかばるまえ}中原前遺跡（夜須町大字東小田字中原前2860—2、第1図11）

中広形銅戈鎔范1（昭和30年出土、註3）

^{かきた}吹田遺跡（夜須町大字吹田字小路田、同字原、第1図12）

須玖式甕棺外から鉄戈1（昭和34年出土、註4）

七板遺跡B地区（夜須町大字東小田字七板）

住居跡から鉄戈1（昭和57年出土、註5）

^{おとくま}乙隈遺跡（小郡市大字乙隈字東畑542、第1図13）

中広銅戈2（昭和29年出土、註6）

大板井遺跡（小郡市大字大板井、第1図14）

中細銅戈7（註7）

昭和57年度から、当町でも圃場整備事業に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査が開始されており（註5）、今後10年間の継続調査がみこまれるという。調査の進捗に伴って重要遺物の出土も相次いでおり、従来等閑視されがちであった当該地域の重要性が認識されつつある。

最後に遺跡名について言及しておきたい。台地先端部にあたる第1地点は、第1区が字坂口2617及び2618番地に、第2区が字沼尻2639、2640番地に各々属する。一方、前漢鏡と鉄戈とが出土した学界著名の前出峯遺跡は、この第1地点の北方僅か70m足らずに位置している。従って、小字名こそ異なるものの、第1地点は峯遺跡の広がりの中に包括され得るものと判断して

いる。

また、字沼尻からこの西隣りの字塚本にかけての一带には、弥生時代の住居・墓地（甕棺墓・土壇墓・石棺墓）などの存在も知られている（註8）。峯遺跡を含めたこれら地域の遺構の性格・範囲などについての詳細は、昭和60・61両年度に予定されている東小田地区圃場整備事業に伴う切土部分についての発掘調査によって明らかとなるだろう。この結果によっては、遺跡名の整理・統合などが必要となるかもしれない。

註 1 旧街道については、佐藤尚隆 「秋月街道を歩く——その3」 『筑前秋月城跡』 〈甘木市文化財調査報告 17〉 1984年 を参照した。

註 2 中山平次郎 「クリス形鉄剣及前漢鏡式鏡の新資料」 〈考古学雑誌 第17巻第7号〉 1927年。鏡式については、樋口隆康 『古鏡』 1979年 に拠る。

註 3 松本憲明 「福岡県夜須町出土の銅戈鎔范」 〈考古学雑誌 第52巻第2号〉 1966年

註 4 柳田康雄 「朝倉郡夜須村吹田発見の鉄戈」 『埋もれていた朝倉文化』 1969年 所収

註 5 佐藤正義 『夜須地区遺跡群 I』 〈夜須町文化財調査報告書 6〉 1984年

註 6 井上俊男・柴田泰典・渡辺正気 「福岡県三井郡小郡町大字乙隈発見の二口の銅戈」 〈九州考古学 14〉 1962年

註 7 九州考古学会編 『北九州古文化図鑑1』 1950年

註 8 前出『埋もれていた朝倉文化』参照

III 発掘調査の記録

1 峯遺跡の調査

1 遺跡の概要

前章で述べたように県道久留米・筑紫野線道路新設計画が調査の端緒となり、対象地は東西57m×南北25mと細長い。微高地の南西端に位置しており、近世墓として使用されていた。前漢鏡・鉄戈を出土した峯遺跡からは南へ約70m、沼尻遺跡は峯遺跡との間に塚本遺跡は北西約200m程にそれぞれ位置する。

今回の調査では弥生時代の貯蔵穴11、甕棺墓29基、甕棺墓に伴う祭祀遺構1、住居跡2軒、溝状遺構やピット等を検出したが調査地が近世墓地のため殆ど削平、攪乱を受け旧状を保つものが少なかった。

貯蔵穴11基は平面形状から円形8基、方形3基、規模で大型8基、小型3基に分けられた。遺物は1号貯蔵穴埋土から壺形土器が出土した他は細片であった。

甕棺墓29基と祭祀遺構1基は墓塚、甕棺が近世墓の削平、攪乱を受け全体の明確なものが少ない。遺構の分布は第3図に示す様に発掘区の北東側と南西側に片寄り中央付近が空白である。ここに近世墓が集中して旧状をとどめないが便宜上、南西側をAグループ、北東側をBグループとした。

29基の甕棺は、墓塚形状や残存する甕棺片から大型棺18基、中型棺3基、小型棺8基である。また、合せ口式23基、単棺1基、その他6基は削平、攪乱がひどく単・複の区別が出来なかった。甕棺墓群の時期に伴う祭祀遺構は、Bグループ最北端で検出した。

住居跡2軒は、1・2区でそれぞれ1軒ずつ検出した。

その他に溝状遺構やピット等が数ヶ所見られたが近世墓で切られ全体の形状や時期不詳のため削除した。

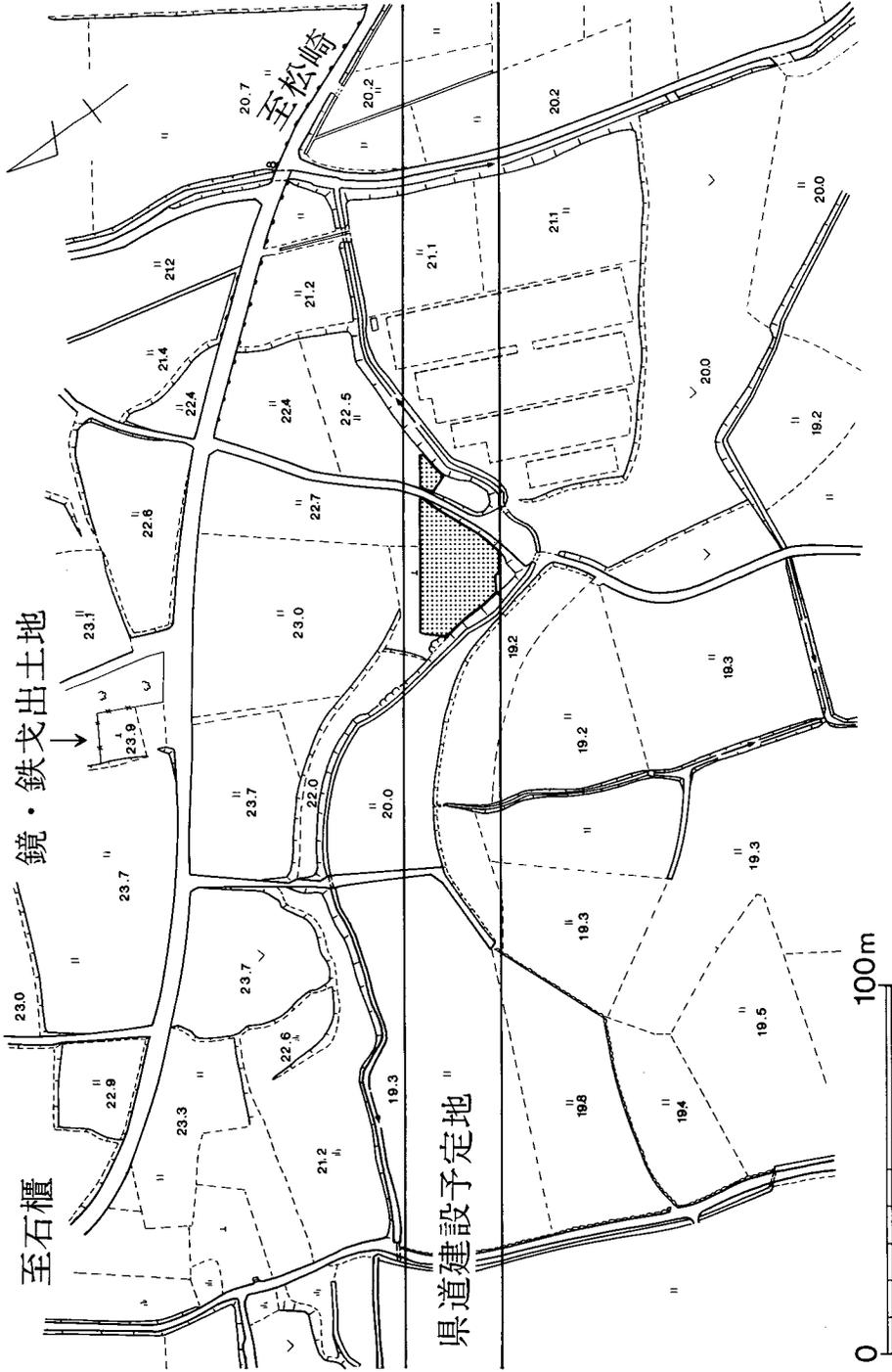
なお、遺跡の名称については前章で述べた理由により、著名な峯遺跡を踏襲している。

2 遺構と遺物

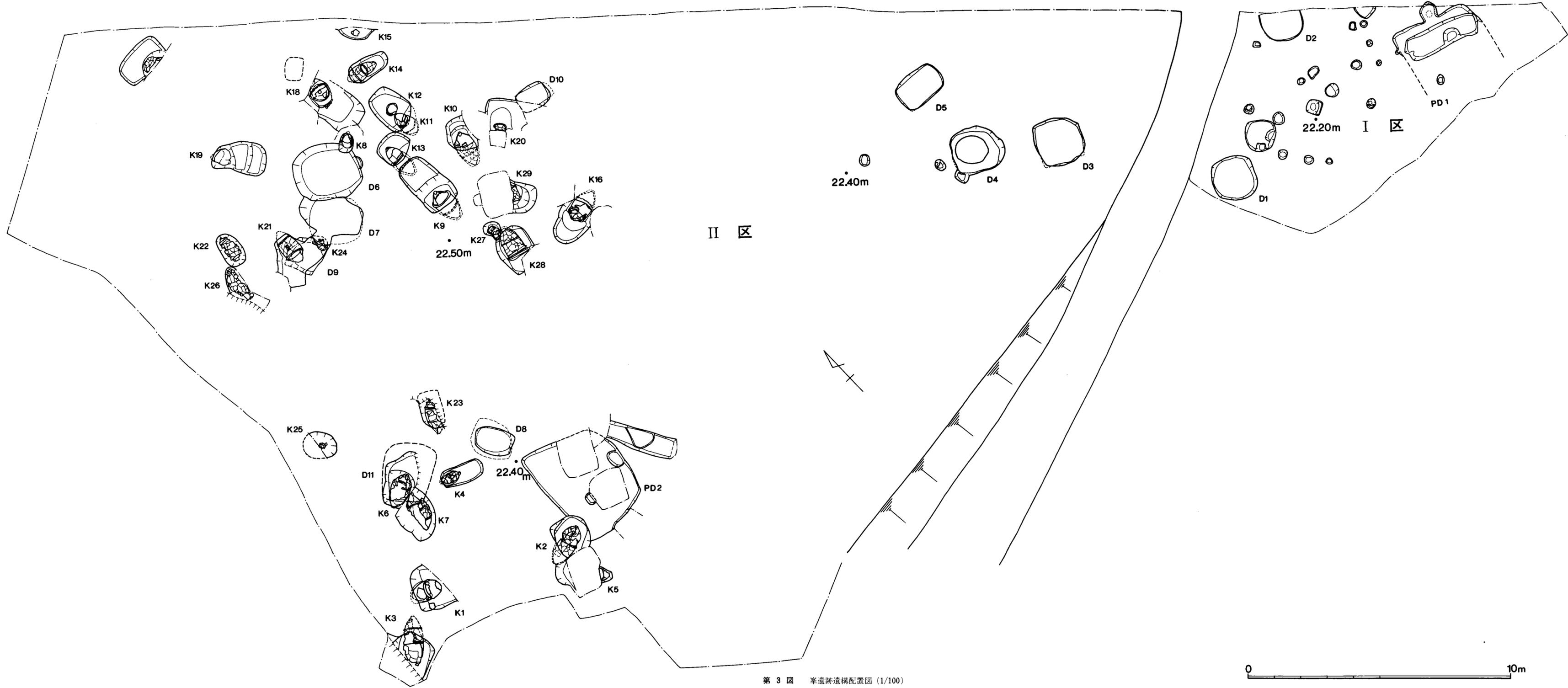
(1) 貯蔵穴

1号貯蔵穴(第4図)

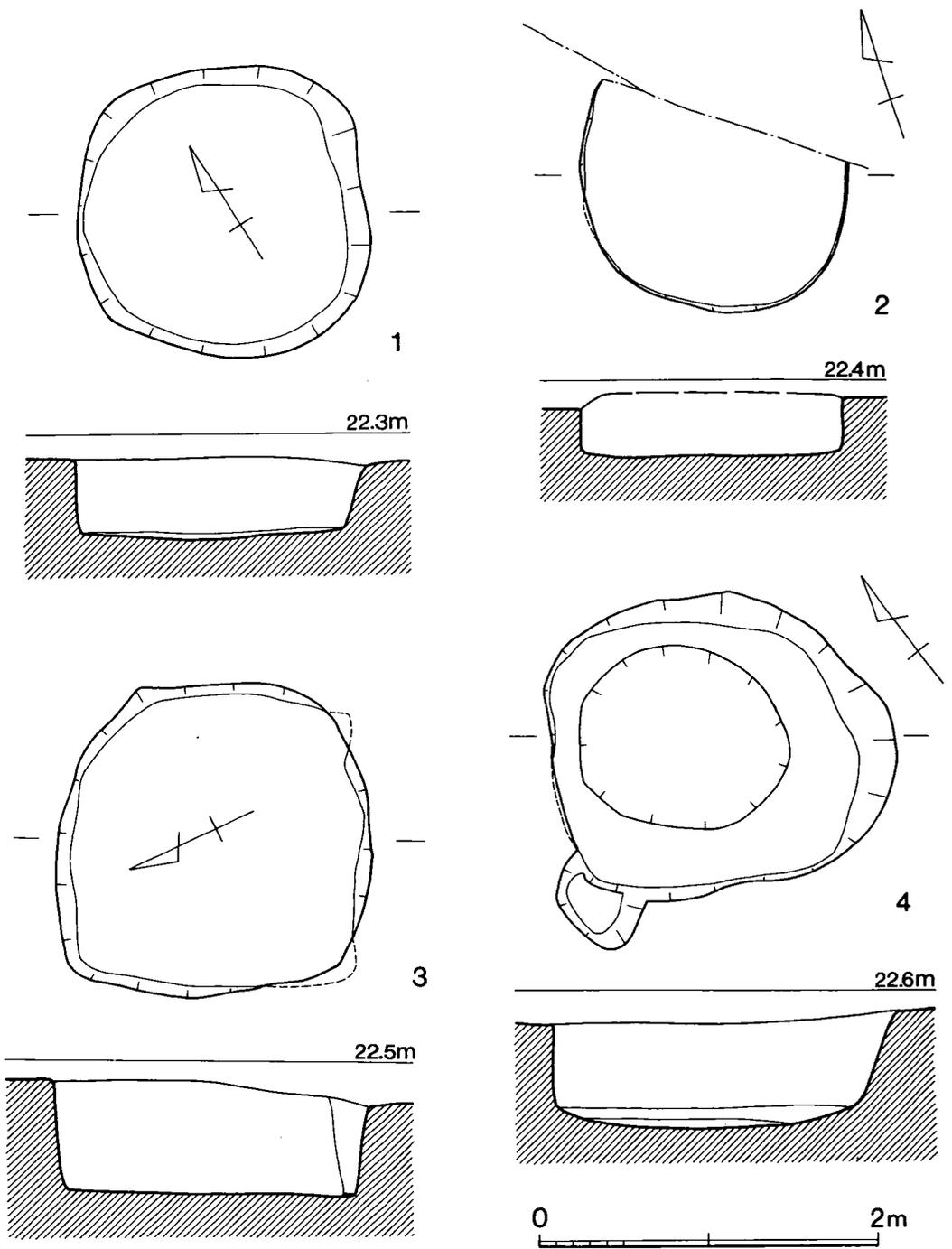
発掘区の東側、第1区で検出した径170cm程の円形プランを呈し大型に属する。残存する45



第 2 図 峯遺跡周辺地形図 (1/2,000)



第 3 图 峯遺跡遺構配置図 (1/100)



第 4 图 1 · 2 · 3 · 4 号贮藏穴实测图 (1/40)

cmの壁は垂直に近く立ちあがる。床面は中央部へ僅かに窪んでいる。埋土中より弥生時代前期末の壺形土器1点が出土した。

出土遺物(図版24—2, 第5図)

如意口縁を有する底部欠損の壺形土器で復元口径16.7cm, 胴部最大径26.6cm, 残存高25.6cmを測り, 肩部には1条の沈線を巡らす。焼成は良く胎土には1~4mm位の砂粒を多量に含む。また, 赤褐色粒, 金雲母も見られる。色調は茶褐色を呈し外面体部中位に黒斑が見られる。外面は若干磨滅気味である。仕上げは外面がヨコ方向の篋ミガキで, 内面は丁重にナデられている。

2号貯蔵穴(第4図)

1号貯蔵穴の北東に位置し, 半円形で東側半分は調査区外に拡がり径155cm程の円形プランを呈すると思われる。残存する30cmの壁は, 1号貯蔵穴と同様に垂直近く立ち上り, 床面は平坦で遺物の出土は見られない。

3号貯蔵穴(第4図)

1・2号貯蔵穴とは農道を挟み, 第II区の最東部に位置する。隅丸方形に近い円形プランは径170cm程で大型に属し, 残存する壁は, 1・2号貯蔵穴同様に垂直近く立ち上り65cmを測る。床面は平坦で遺物の出土は見られない。

4号貯蔵穴(第4図)

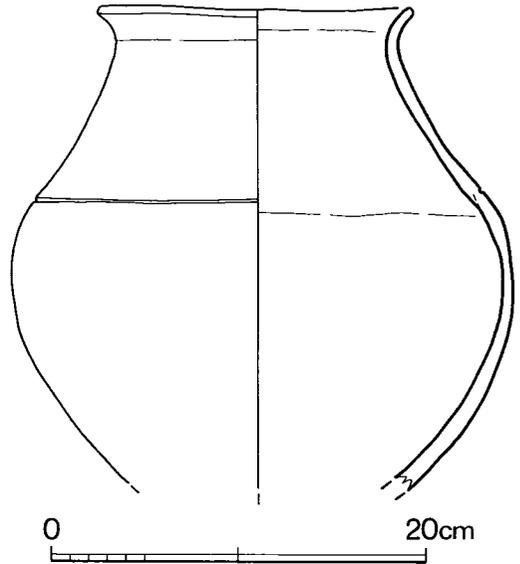
3号貯蔵穴の西側に位置し, 上面200cm×175cm程の楕円形, 床面は180cm×160cm程の円形で規模から大型に属する。垂直に近い65cmの壁は, 床面付近で僅かに傾斜し床面に接する。2・3号同様遺物は出土しなかった。

5号貯蔵穴

4号貯蔵穴の北側に位置し, 長辺185cm×短辺125cm程の長方形プランを呈し深さ61cmを測る。残存壁は垂直に近く立ち上がる。遺物は出土しなかった。

6号貯蔵穴(第6図)

7号貯蔵穴と南西で接し、250cm×200cmの楕円形プランで深さ110cmの壁は東側で平坦な床面から僅かに袋状を呈しながら立ち上がる。旧状は大型の袋状貯蔵穴と思われる。東・北側に径30cm程のピットが検出できたが貯蔵穴と関係するものではなかった。また、遺物は出土しなかった。



第5図 1号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

7号貯蔵穴(第6図)

6号貯蔵穴と北東側、9号貯蔵穴と南側で接し、南側を21・24号甕棺墓に切られる。

残存する東側から復元すると上面径120cm程、床面径190cm、深さ140cmの円形プランを呈する袋状貯蔵穴である。遺物は出土しなかった。

8号貯蔵穴(第7図)

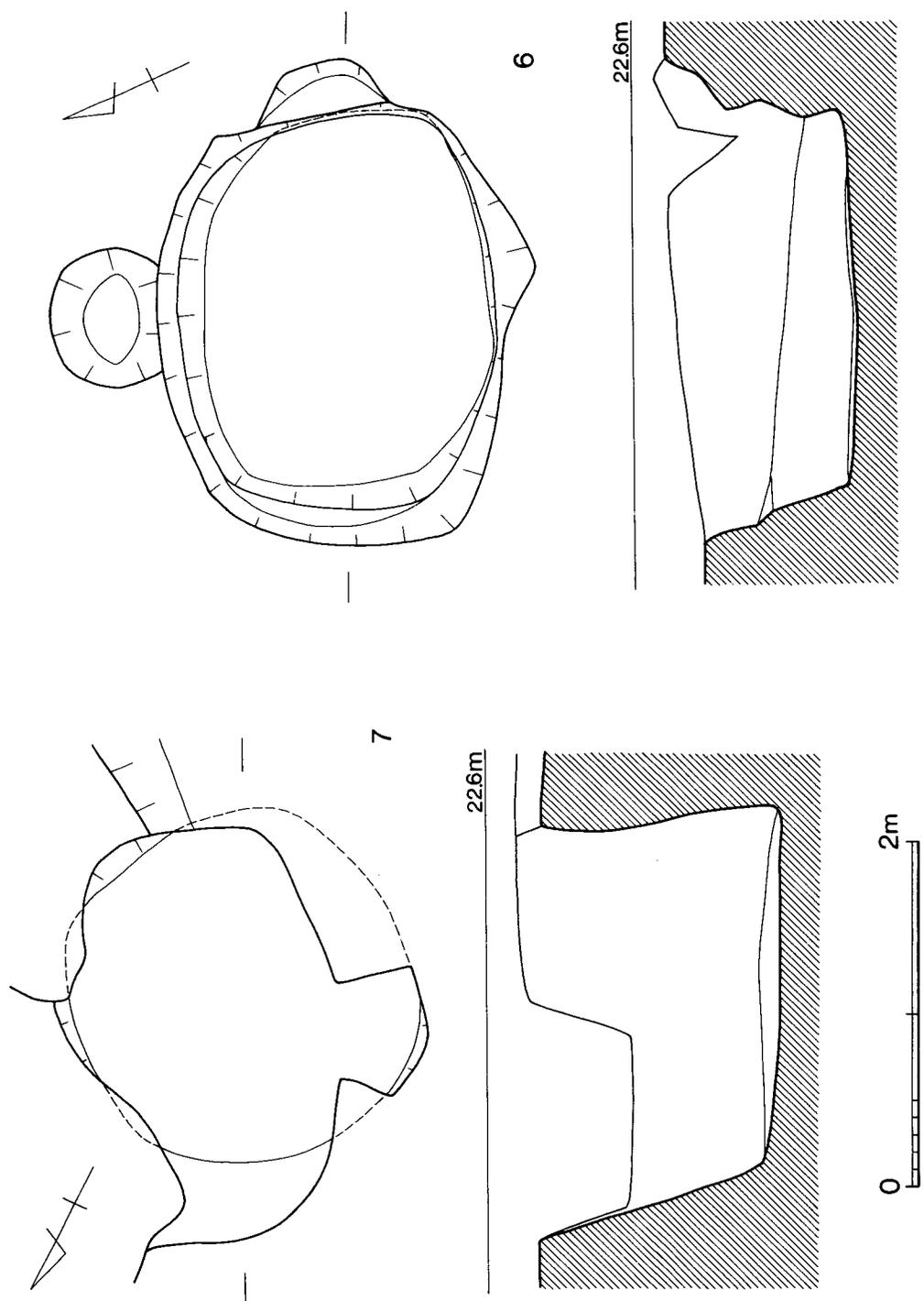
4号甕棺墓の東側に位置し、東壁の一部を近世墓で失っているが上面140cm×105cm程の楕円形プランで深さ115cm、床面170cm×140cmの規模を有する小型袋状貯蔵穴である。遺物は出土しなかった。

9号貯蔵穴(第7図)

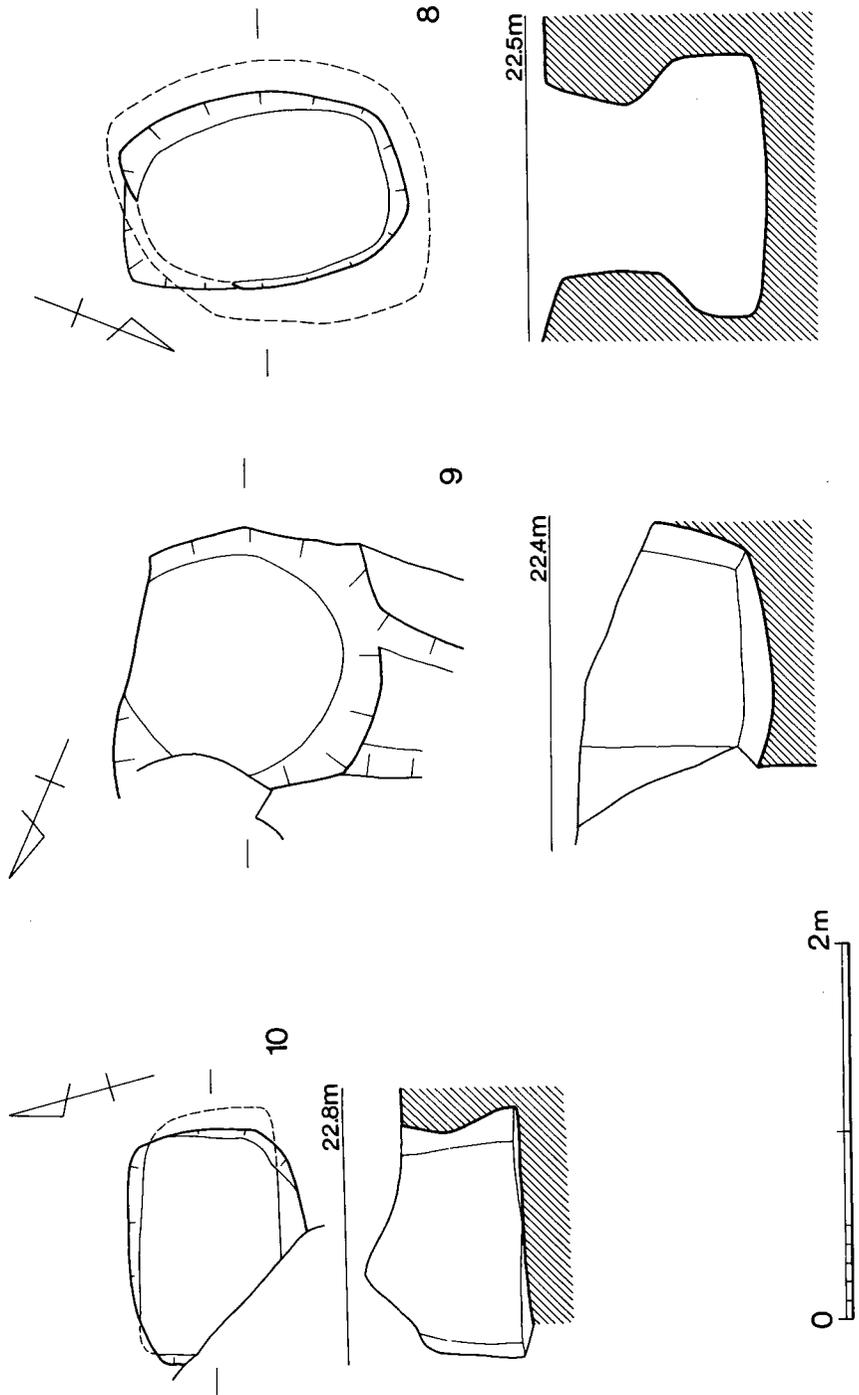
埋土が近世墓や甕棺墓と違い、他の貯蔵穴埋土と同様の黒色土であることから貯蔵穴として取りあつかった。21号甕棺墓の墓壙と重なり、東・南側を近世墓、北側を24号甕棺墓と殆んど失い、中央部に向って若干窪む床面を残す。床面の規模から小型に属すると思われる。

10号貯蔵穴(第7図)

20号甕棺墓の東側に位置し、西側を近世墓で失っているが上面125cm×95cm、床面135cm×75cmの長方形プランを有する。85cmの壁は、平坦な床面から僅かに袋状を呈し立ち上がる。遺物



第 6 图 6 号·7 号贮藏穴实测图 (1/40)



第 7 图 8 · 9 · 10号贮藏穴实测图 (1/40)

は出土しなかった。

11号貯蔵穴

近世墓，6・7号甕棺墓に上面の殆どを攪乱され旧形をとどめないが，甕棺墓の墓壙床面に深さ150cm程の黒色土を有し残存形状から大型貯蔵穴と思われる。完掘しなかった。

(2) 甕棺墓

1号甕棺墓(図版3—(1)(2)，第8図)

第Ⅱ区の南西部で検出した成人用甕棺墓である。墓壙は東側を近世墓で失っているが1辺170cm前後の方形を呈すると考えられる。墓壙西側に斜位に横穴を穿ち下甕を埋置している。下甕頸部下の上面を破損し，他の大甕片で補修している。上甕は大甕の胴部突帯より上位で打ち欠き使用している。上下甕の接合部には粘土目貼りは見とめられなかった。甕棺の主軸方位はS—70.5°—Eで埋置角度は45°である。墓壙南側床面には補修土器の残片が出土した。

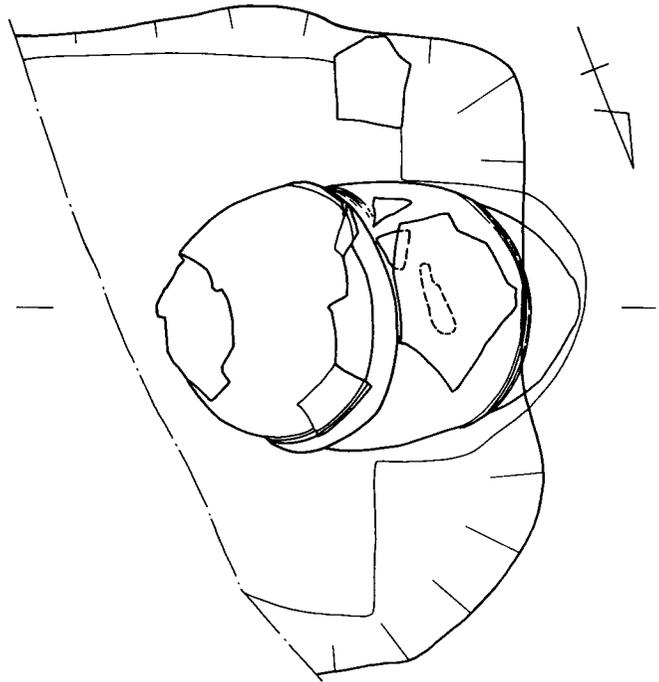
甕棺(図版17—(1)，第30図)

上甕 大甕の胴部突帯上位より半截されたもので二条の三角突帯を有する。底部は径11.8cmを測り若干上げ底気味である。内外面ともナデ仕上げされているが，底部より7cm程上まで細かい刷毛目が残る。焼成は良好で胎土は微・細砂を多く含み色調は暗橙色である。時期は、胴部より上位を欠くが弥生中期後半と考える。

下甕 若干下方へ垂れ気味のT字状口縁を有する大甕で，口縁端部は凹状となる頸部は僅かに内傾し胴部は直線に近く胴部突帯付近より底部へと窄む。突帯は頸部下に「M」字状が一条，胴部に「コ」字状が二条貼付られている。仕上げはナデ仕上げが施れているものの底部より7cm程に細目のハケ目が残る。焼成は良好で胎土は細砂を多く，金雲母も含む色調は橙味黄褐色から淡橙味茶色を呈する。時期は弥生中期後半である。

2号甕棺墓(図版4—(1)，第9図)

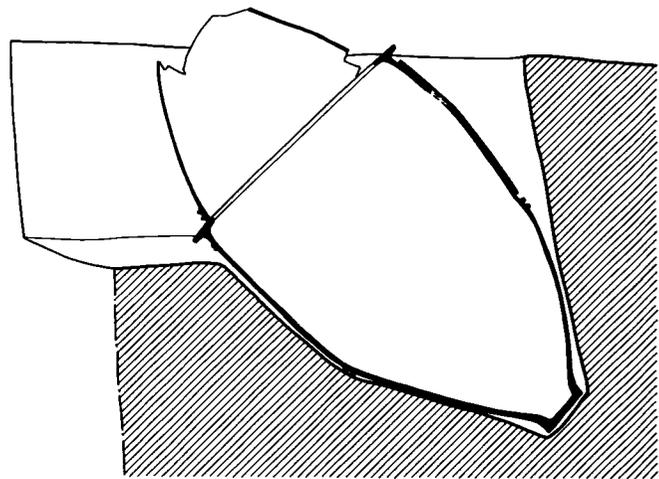
1号甕棺墓の東側に位置し、Aグループに属する。140cm×130cm程の方形に近い墓壙は南側を近世墓で失っているが棺体までは及んでいない。しかし、上下甕とも上面を破損している。西辺の南寄りに穿かれた横穴は、東壁下の床面より徐々に傾斜している。上下甕とも大甕を接口式に合せて、上甕側面の口縁部近くを鉢形土器で補修している。甕棺の主軸方位は、N-74°-Eで埋置角度は17°であった。



22.2m

甕棺 (図版18-1(2),
第30図)

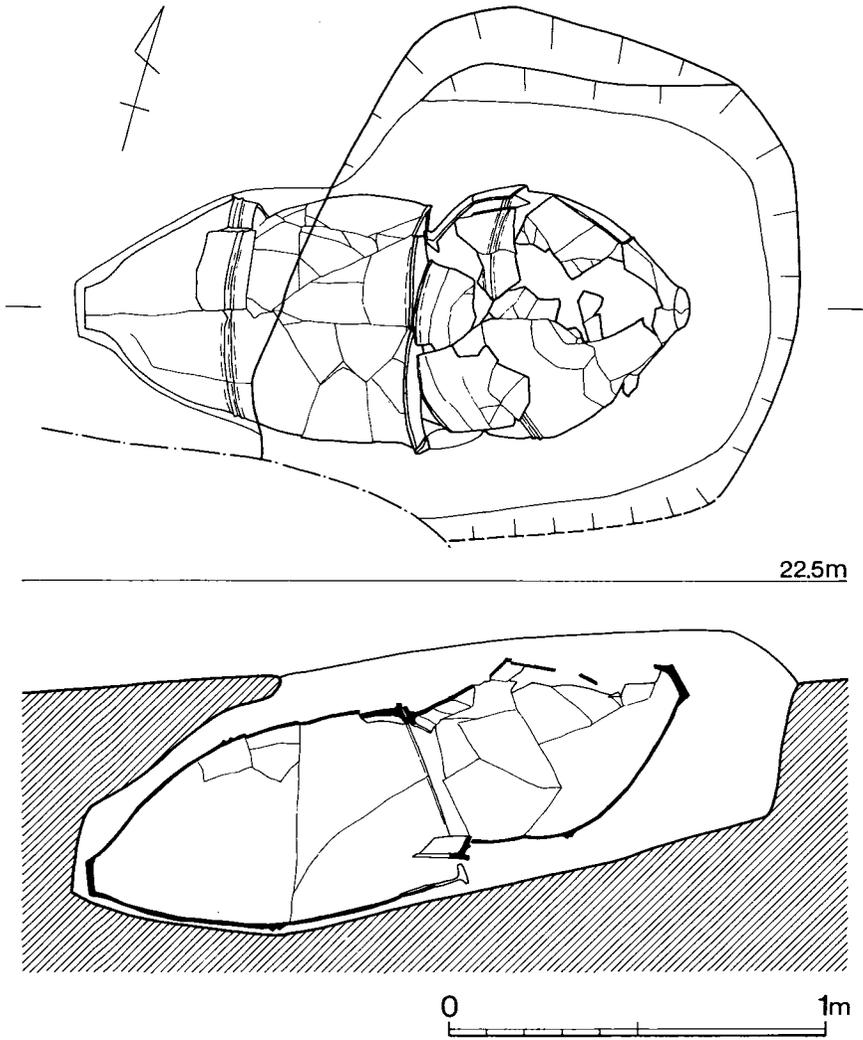
上甕 T字状の口縁を有する卵倒形の中甕である。頸部は内傾し脹みを持ちながら胸部上位の最大径となる。突帯は頸部下に一条、胸部に二条の三角突帯が貼付られている。焼成は良く胎土は1~5mm位の砂粒をかなり含み金雲母、赤褐色粒も見られる。仕上げは、口



0 1m

第8図 1号甕棺墓実測図 (1/20)

縁部、突帯部がヨコナデで他はナデによる。色調は、内面茶褐色で外面が黄褐色から褐色・黒色と変化する。また、外面には黒塗りが施されたらしく部分的に残る。時期は、中期後半と考える。



第 9 図 2号甕棺墓実測図 (1/20)

補修土器 上甕の補修に使用された底部欠損の鉢形土器である。T字状口縁の上面は平坦に近く、若干外側へ傾く。端部は凹状気味である。焼成は良好で胎土には微細砂を少し含む。仕上げは口縁部がヨコナデ、他はナデられ色調は橙に近い茶色を呈する。

下甕 T字状口縁を有する大甕である。口縁部が下方に若干傾き、端部は僅かに凹を有するが直線に近い。頸部から直線的に伸びる器体は、胴部中位で僅かに屈折し大き目の底部へ窄む。突帯は胴部中位に三角二条を貼付ける。焼成は良好で胎土には微・細砂を多く含み金雲母・石

英も見られる。色調は内面が黄茶褐色から淡黄茶で外面は明茶から淡黄褐色を呈する。また、外面の上半に3ヶ所、胴部下半から底部にかけ1ヶ所の黒斑が見られる。仕上げは口縁部、突帯部のヨコナデで他はナデによる。

3号甕棺墓 (図版4-1(2), 第10図)

Aグループに属し、1号甕棺墓の南側、台地端の崖面中で検出した大甕+大甕の成人用甕棺墓である。墓壙は削平を受け全体が明確でないが残存部形状から方形に近いと察せられる。上甕の下半と上・下甕の上面を失っている。甕棺の主軸方位はS-44°-Wで埋置角度は残存する甕棺底面から水平に近いものと思われる。下甕内で人頭骨片を確認できたが遺存状態が悪く年令・性別は不詳であった。時期は中期中葉と考えられる。

4号甕棺墓 (図版5-1(1), 第11図)

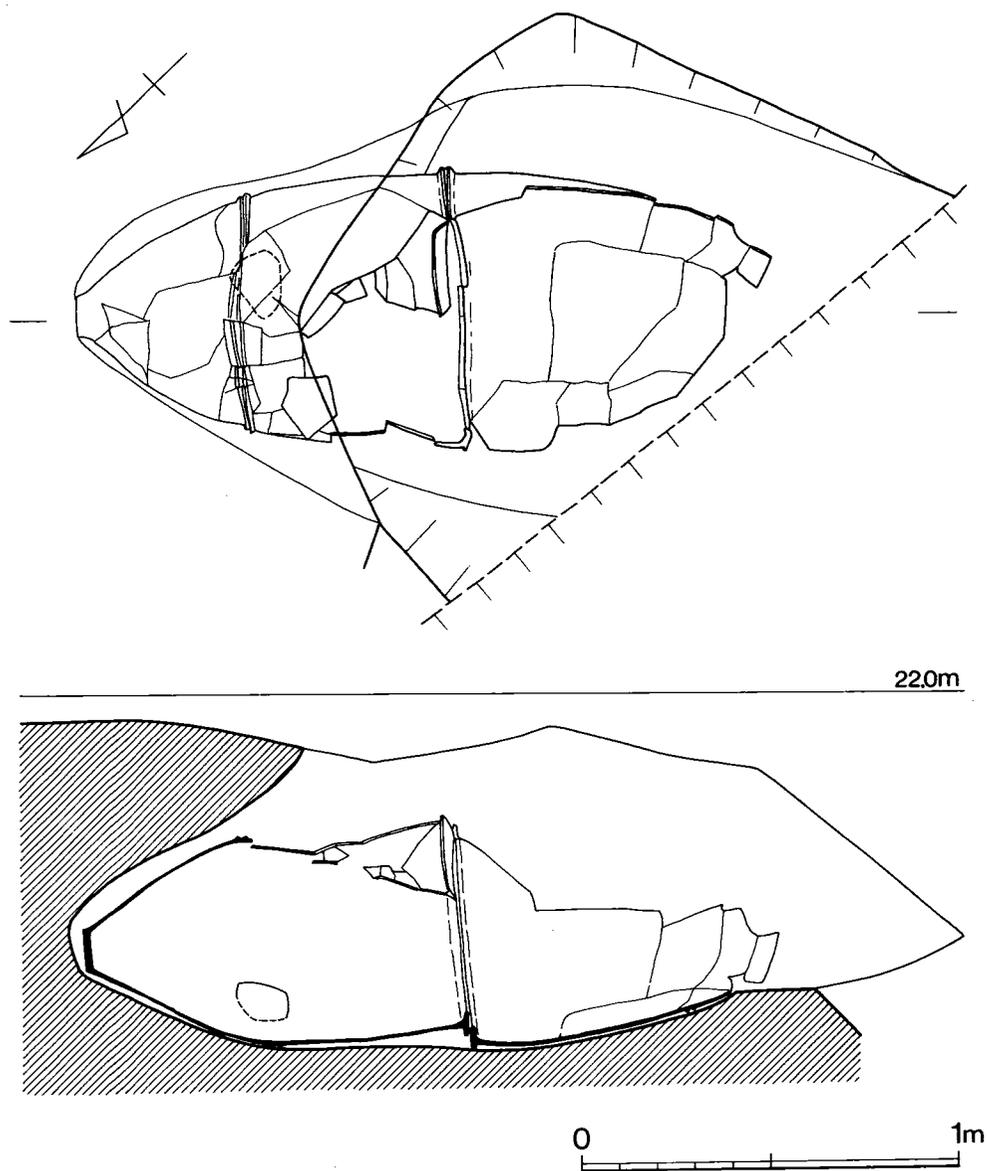
8号貯蔵穴の西側で検出した甕+甕の小児用甕棺墓でAグループに属する。墓壙は、160cm×70cmの長方形プランで深さ25cmを測る。墓壙の西側で楕円形の掘り込みは、西壁を僅かに横穴状に穿って甕棺を接口式に埋置している。粘土の目貼は見られない。甕棺の主軸方位は、S-72°-Eで埋置角度は6°である。

甕棺 (図版17-1(2), 第31図)

上甕 若干内側に突出した逆L字状口縁はT字状に近い。口縁上面は僅かに下方へ傾き端部は舌状をなす。胴部上位より大きめの底部へと緩やかに窄む。突帯は貼付されていない。仕上げは、外面が荒い刷毛(巾3.5mm程)でタテ方向に底部まで、内面はナデ仕上げされている。焼成は良好で胎土に微・細砂を多く含み色調は内面が黄褐色で外面茶褐色である。時期は、中期中葉と考える。

下甕 T字状に近い口縁部は上面が平坦に近く、端部で舌状をなす。頸部より若干下位の胴部上位には三角突帯一条が貼付られている。胴部上位から脹みを持ちながら大きめの底部へと窄む。底部は僅かに上げ底気味の平底である。

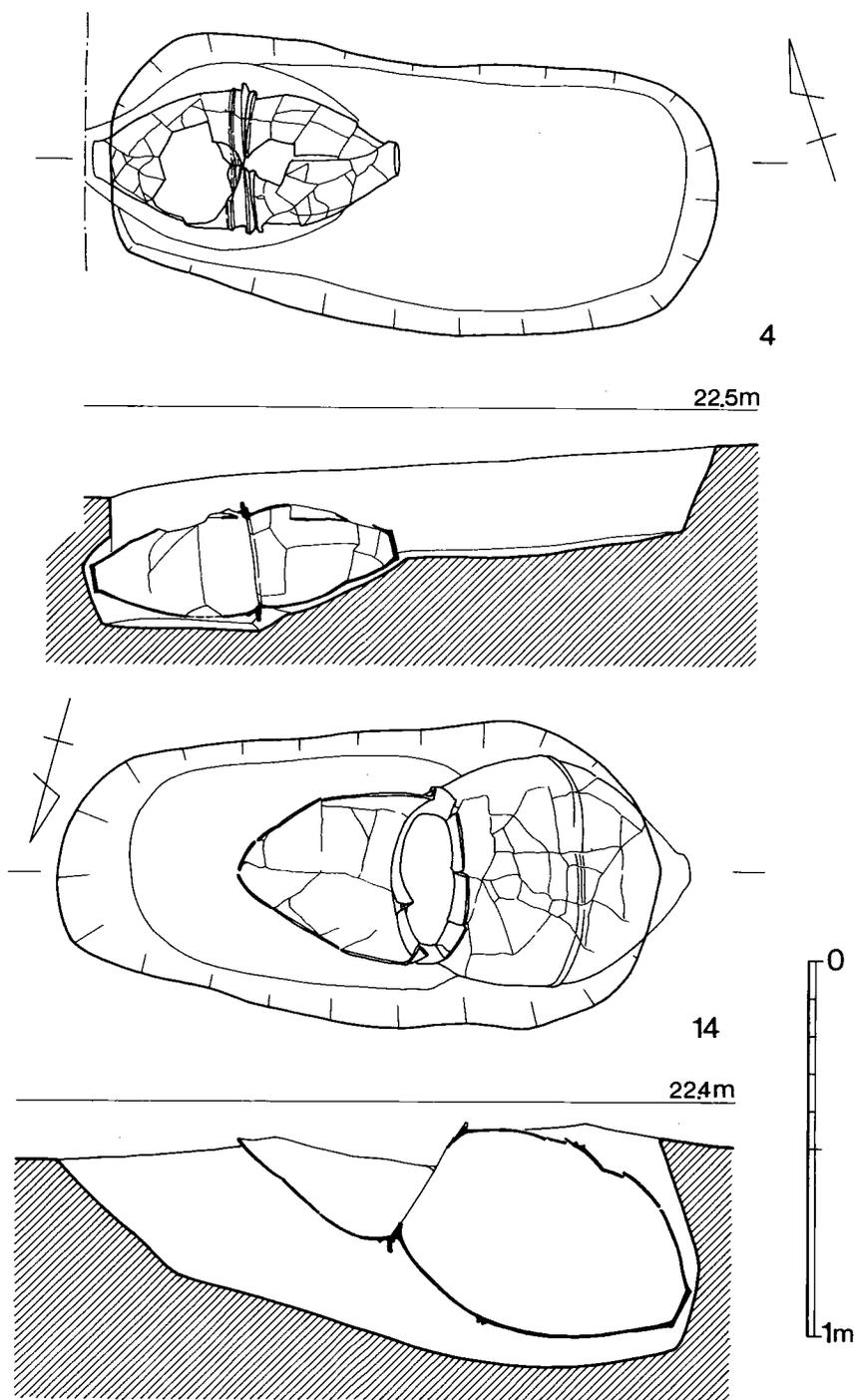
仕上げは、胴部上位より底部まで荒い刷毛、胴部上位より内面上位(突帯部の内側)までヨコナデ、それより内底までナデが施される。焼成は良好で胎土には微・細砂を多く含み、色調は内面が黒灰色、外面は橙味茶色である。



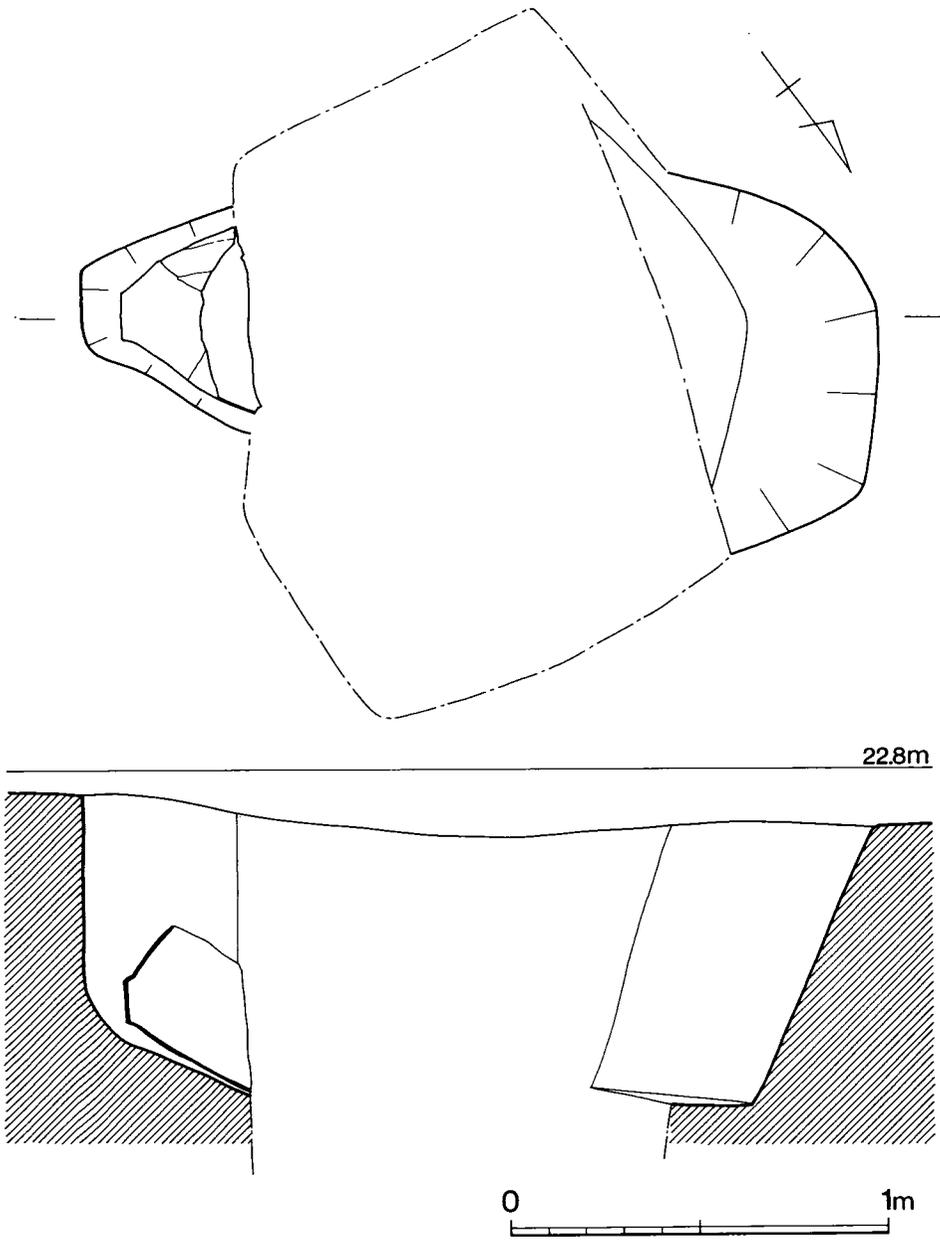
第 10 図 3号甕棺墓実測図 (1/20)

5号甕棺墓 (第12図)

2号甕棺墓の南側に隣接し、検出遺構中では最南に位置する。近世墓で殆んどを失い、墓壙の一部と甕棺下甕の胴部下位から底部の一部を残す甕棺墓である。詳細は不明だが残存する下甕の大きさから成人用甕棺墓と考えられる。甕棺の主軸方位は、凡そN-54°-W程である。



第 11 图 4·14号甕棺墓实测图 (1/20)

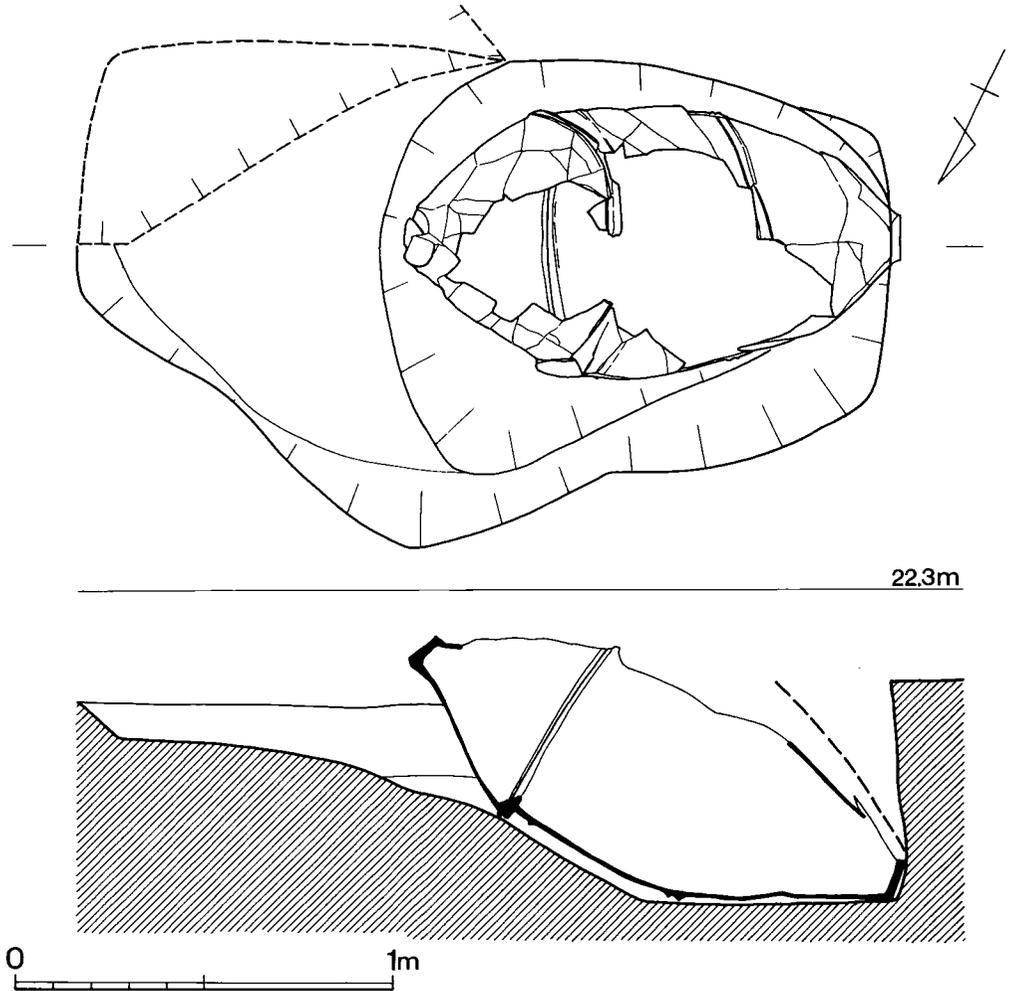


第 12 図 5号甕棺墓実測図 (1/20)

6号甕棺墓 (図版5—(2), 第13図)

Aグループに属し、7号甕棺墓より切られる。また、墓壙東側を近世墓で失い甕棺上面も破

損している。甕棺は、鉢+大甕の成人用で合せは接口式である。甕棺の主軸方位は、N-64°-Eで埋置角度は29°であった。時期は、中期後半と考えられる。



第 13 図 6号甕棺墓実測図 (1/20)

7号甕棺墓 (図版5-(2), 第14図)

Aグループに属し、6号甕棺墓の墓壙を切って埋置された成人用甕棺墓である。墓壙は、北東部・南西部を近世墓で失い形状は不明である。

甕棺は、上甕には中甕を胴部上位で半載し、下甕に大甕を接口式に使用している。また、上甕打ち欠きの残片を下甕胴部上面・側面の補修としている。甕棺の主軸方位は、N-20°-Eで

埋置角度は26°であった。

甕棺(図版18—(3), 19—(1), 第32図)

上甕・補修土器 卵倒形にT字口縁を有する中甕で胴部上位で半截し、下位を上甕に上位を下甕補修に使用している。口縁部の上面は平坦に近く、内外両端で僅かに下方へ傾く。また、口縁内外端は舌状をなす。窄んだ頸部から脹みを持ち外方へと拡がり胴部上位で最大径となり胴部下位まで脹みを保ちながら窄み底部付近で直線的に変る。突帯は、最大径部より若干下位で胴部に三角突帯が二条貼付られている。焼成は良く胎土には1～3mm位の砂粒を含み色調は橙褐色を呈し、外面の胴部中位に黒斑が見られる。仕上げは、口縁部・突帯部付近がヨコナデの他はナデが施され口縁内面に指圧痕が残る。時期は、中期中葉と考える。

下甕 T字状口縁を有する大甕である。口縁上面の平坦部外側は、若干下方へ傾き端部は凹線が巡る。頸部から極て僅かに脹みを持ち胴部上位で最大径となり徐々に底部へと窄む。均整のとれた器形には、頸部下に「M」字状が1条・胴部中位に2条の三角突帯を貼付けている。焼成は良く胎土に紅土を多く含み金雲母が若干見られる。色調は、内面茶褐色～淡橙色で外面は淡褐色を呈する。また、外面には口縁部下から胴下半に黒斑が見られる。仕上げは、口縁部・突帯部付近はヨコナデ、他は内外面ともナデが施され底部から7cm程まで細い刷毛目が残る。時期は、中期中葉と考える。

8号甕棺墓(図版6—(1), 第15図)

Bグループに属し、6号貯蔵穴の北側に位置する。甕棺上面が削平され上甕の大半を破損する。甕+甕を接口式に合せた小児用甕棺墓である。墓壙は、削平を受け70cm×50cm程の楕円形をとどめる。甕棺の主軸方位は、S—56°—Wで埋置角度は40°を測る。

甕棺(図版22—(1), 第31図)

上甕 逆L字状が、く字状に近く立ち上る口縁は舌状で頸部から徐々に脹み胴部上位で最大径となる。突帯は、最大径の胴部上位より若干下位に三角突帯が一条貼付られている。焼成は良く胎土に1～2mm位の砂粒を含む。色調は、橙褐色を呈し外面胴部上位に灰黒色の黒斑が見られる。仕上げは、外面が口縁部から突帯部までヨコナデ、突帯部より下位は荒い刷毛で内面はナデが施されている。時期は、中期後半と考える。

下甕 逆L字状の口縁は僅かに上方へ脹みを持ち口唇部へ向う。口縁下方も若干脹みを有し口縁端部は舌状をなす。頸部より2cm程に三角突帯一条を貼付け、胴部上位で最大径となり僅かな脹みを有しながら底部へと向う。底部は径9cmを測り、上げ底ぎみの平底である。仕上げは口縁部から突帯部下1.7cm程までヨコナデ、突帯部下より底部まで荒い刷毛で内面はナデが施されている。また、外面の口縁から胴部下位まで広範囲に煤の付着が見られ日常用器の転用を思わせる。時期は、中期後半と考える。

9号甕棺墓(図版6—(2), 第16図)

Bグループの中央に位置し、墓壙・甕棺とも近世墓の影響を受けていない。鉢+大甕の成人用甕棺墓である。墓壙は、220cm×140cm程の隅丸長方形を呈し、掘り方は二段掘りで南壁下に斜位に横穴を穿ち下甕を埋置している。上・下甕の合せは接口式で粘土の目貼りは認められない。甕棺の主軸は、N—3°—Wで埋置角度は33.5°である。人骨は遺存しなかった。

甕棺(図版19—(2), 第33図)

上甕 T字状に近い鋤先状口縁部を有する鉢形土器で口縁端部は凹線が巡る。体部は、口縁部付近で弯曲し、直線的に底部へ向い、底部はわずかに上げ底となる。焼成は良く胎土には1~2mm位の砂粒を含む。色調は、内面が黄褐色で外面が淡黄色である。仕上げは、口縁部付近がヨコナデ、胴部はナデで部分的に刷毛目が残る。内底付近には指圧痕も残る。時期は、中期中葉と考える。

下甕 T字状の口縁を有する大甕で口縁上面は僅かに丸味を持ち、外側が若干下方へ傾き、頸部でごく僅かに窄み胴部中位より若干上で最大径となり、僅かな脹みを持ち底部へ向う。底部は、径10cm程の平底である。突帯は、胴部中位に三角状のダレたものが二条貼付られている。焼成は良好で胎土には石英、砂粒を含む。色調は、黄褐色を呈する。仕上げは、口縁付近と突帯部付近にヨコナデを明瞭にのこす他はナデと思われる。時期は、中期中葉と考える。

10号甕棺墓(図版10—(1), 第17図)

Bグループに属し、9号甕棺墓の東側に位置する。鉢+大甕を接口式に合せた成人用甕棺墓である。墓壙は、東側を近世墓で失っているが残存する西・南・北辺から復元すれば、125cm程の方形を呈すると思われる。掘り方は、二段掘りで二段目が東壁に穿かれた横穴へ若干の窪みを持ち続く。甕棺は、上甕の上面と下甕の口縁下上面を若干破損している。上甕は鋤先状の口縁を有し、突帯は無い。下甕は、胴部に三角状突帯2条が貼付られている。時期は、中期後半と考える。

11号甕棺墓 (図版10—(2), 第18図)

12号甕棺墓と墓壙を共有する。中甕+中甕を接口式に合せた成人用甕棺墓である。墓壙は不整形で170cm×120cm程あり、掘り方は、東壁側に傾く床面から斜位に深さ100cm程の横穴を穿ち下甕を埋置した変則的な二段掘りである。上甕は、胴部上位より打ち欠いたものを使用し、残片を上甕上面の補修としている。甕棺の主軸方位は、N-13°-Eで埋置角度は42.5°である。

甕棺 (図版20—(1), 第34図)

上甕・補修 卵倒形にT字状口縁を有する中甕で、胴部上位の最大径付近で打ち欠き、下半を上甕とし、上半を上甕の上面接合部付近の補修に使用している。頸部より脹みを持ちながら外方へと拡がり胴部上位で最大径となる。突帯は、最大径より若干下位の体中位に「コ」字状を二条貼付ける。焼成は良好で胎土は細砂を多く含み金雲母・石英が見られる。色調は、橙褐色を呈している。仕上げは、口縁部・突帯部付近が丁寧にヨコナデされ他は内外ともナデが施されている。また、内面の口縁下にはナデ前の指圧痕が明瞭に残る。時期は、中期後半と考える。

下甕 卵倒形にT字状の口縁を有する中甕である。最大径は、胴部上位に見られ、体中ほどに三角状突帯が二条貼付けられている。焼成は良く胎土には1~2mm位の砂粒をかなり含み金雲母・赤褐色粒が見られる。色調は内面が黄褐色、外面は黄褐色から淡いクリーム色を呈する。

また、胴部上位から中位にかけ黒斑が見られる。仕上げは、口縁部・突帯部付近がヨコナデで他はナデ仕上げが施され、底部から10cm程に細い刷毛目を残している。時期は、中期中葉と考える。

12号甕棺墓 (図版10—(2), 第19図)

11号甕棺墓の墓壙内に11号とは主軸を直角に近く交叉する恰好で検出した。甕+甕の小児用甕棺墓である。甕棺は、上・下甕とも上面を削平され、特に上甕はひどく口縁部から胴部付近の下面を残すのみで合せ目が接口式か覆口式なのか判定しがたい。主軸方位、S-71°-Wと埋置角度44°は下甕よりの測定値である。なお、埋置状況から、11号甕棺墓の埋葬後に埋置されたことは明らかで埋土に乱がなく同時埋葬と考えられ血縁的な絆を有するものと思われる。

甕棺 (図版22—(2), 第35図)

上甕 逆L字状の口縁を有する甕形土器で胴部から底部を欠損し、かつまた、口縁部から胴部の $\frac{1}{2}$ 程を残すもので器高はさほどなく残高27cm、復原口径30cmを測る。口縁平坦面は、外方へ僅かに傾く。胴部最大径は、頸部の1cm程下位に見られ脹みを保ちながら底部へ急速に窄む。焼成は甘く胎土には微・細砂を多く、金雲母も含み色調は淡黄褐色である。仕上げは、器面が磨滅しているが胴部付近に細い刷毛目を残し、内面はナデが施されている。

下甕 卵倒形にL字状口縁を有する中甕である。頸部から脹みを持ちながら体中位で最大径となり、僅かに脹みを持ちながら底部へと窄む。突帯は、頸部下に「コ」字状が1条貼付られている。焼成は良好で胎土には細粒を含み精良である。色調は鈍い橙色を呈し、外面の胴部には黒斑が見られる。仕上げは、口縁部から胴部上位までヨコナデ、他はナデが施されている。時期は、中期中葉と考える。

13号甕棺墓 (図版6—(2), 第15図)

9号甕棺墓の北側に位置し、Bグループに属する。中甕+中甕を接口式に合せた成人用甕棺墓である。墓壇は110cm×120cm程の不整形で、床面は北壁下で60cmあり僅かに傾斜しながら東壁側へ向い、中央より若干東寄りで横穴の北端となる。横穴は、西壁に平行し沓状に穿かれ東壁からの奥行は65cm程ある。甕棺の主軸は、9号甕棺に近くN—2°—Wで埋置角度は、14°である。

甕棺 (図版20—(2), 第36図)

上甕 卵倒形に逆L字状の口縁を有する中甕である。口縁平坦面の外側は僅かに下方へ傾き、頸部下に三角突帯一条を貼付け、胴部最大径は突帯より若干下位にあり、僅かな脹みを持ちながら底部へ向う。底部は径11.2cmで若干上げ底ぎみである。焼成は良好で胎土には微・細砂を多く含み金雲母、石英も見られる。色調は、橙味褐色を呈する。仕上げは、口縁部から突帯部下までヨコナデ、突帯部下より底部まで細い刷毛で内面はナデが施されている。時期は、中期中葉と考える。

下甕 卵倒形にT字状の口縁を有する中甕である。口縁上面は平坦に近く外側で僅かに下方へ傾き、口縁端部は凹み、内端は舌状をなす。頸部から脹みを持ち外側へひらき、胴部上位で最大径となり、僅かな脹みを有しながら径12.5cmの底部は僅かに上げ底ぎみである。突帯は、最大径の下位、体中位にダレた三角状突帯を二条貼付けている。焼成は普通で胎土には1～3mm位の砂粒をかなり含み金雲母も見られる。色調は、黄褐色から褐色を呈し、外面の胴部中位

ほどに黒塗りの痕跡をとどめる。仕上げは、口縁部、突帯部付近のヨコナデの他はナデが施されている。時期は、中期中葉と考える。

14号甕棺墓 (図版8-1), 第11図)

11・12号甕棺墓の北側に位置し、甕棺上面を削平され甕+中甕を接口式に合せた成人用甕棺墓である。墓壙は、削平を受け旧形をとどめないが残存する東側より120cm×80cm程の楕円形と思われる。西壁は僅かに弯曲し横穴状を呈する。東壁は若干の屈折で床面に接し、床面は若干の窪みを有し西壁に達する。下甕埋置前に若干埋めもどし床面の整形を行っている。甕棺の主軸方位は、N-75°-Eで埋置角度は29°である。

甕棺 (図版21-1), 第37図)

上甕 く字状口縁部を有する底部欠損の甕形土器である。頸部より若干下位の体上位で胴部最大径となり、僅かに脹みを持ち底部へ向う。また、口縁内径部には稜線が看取される。突帯は、頸部下に三角状を一条貼付けている。焼成は普通で胎土には1~3mm位の砂粒をかなり含金雲母・赤褐色粒も見られる。色調は、黄褐色から橙色を呈する。仕上げは、口縁部・突帯部付近はヨコナデでその他は外面が荒い刷毛、内面はナデが施されている。時期は、中期後半の終りから後期初頭と考える。

下甕 卵倒立形にT字状の口縁を有する中甕である。頸部から外方へ脹みを持ち拡がり胴部上位で最大径となり、脹みを有しながら底部へと窄む。突帯は、体中位にダレた三角状を二条貼付けている。焼成は、良く胎土には1~3mm位の砂粒をかなり含み赤褐色粒も見られる。色調は淡黄橙色を呈し、外面体中位の広範囲に黒斑が見られる。仕上げは、口縁部、突帯部がヨコナデの他は内外面ともナデが施されている。

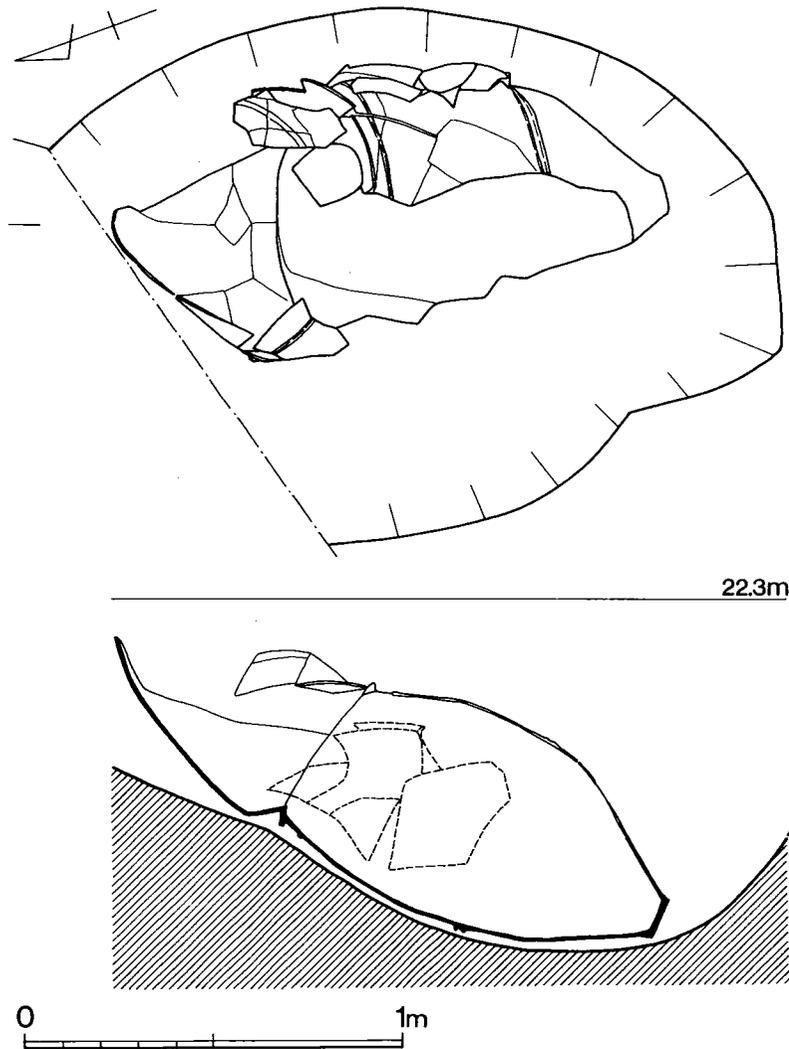
15号甕棺墓 (図版8-2), 第15図)

14号甕棺墓の北側で発掘区外に拡がる径120cm、深さ約15cm程の楕円形落ち込みに甕形土器の胴部より下半が横倒しの状態で出土した。出土状況や埋土から小児用甕棺としてあつかった。

甕棺の残りや墓壙の拡がりなど詳細は不明。ただし、甕棺の主軸方位は、S-37°-E程で埋置角度も水平に近い。

16号甕棺墓 (図版9—(1), 第20図)

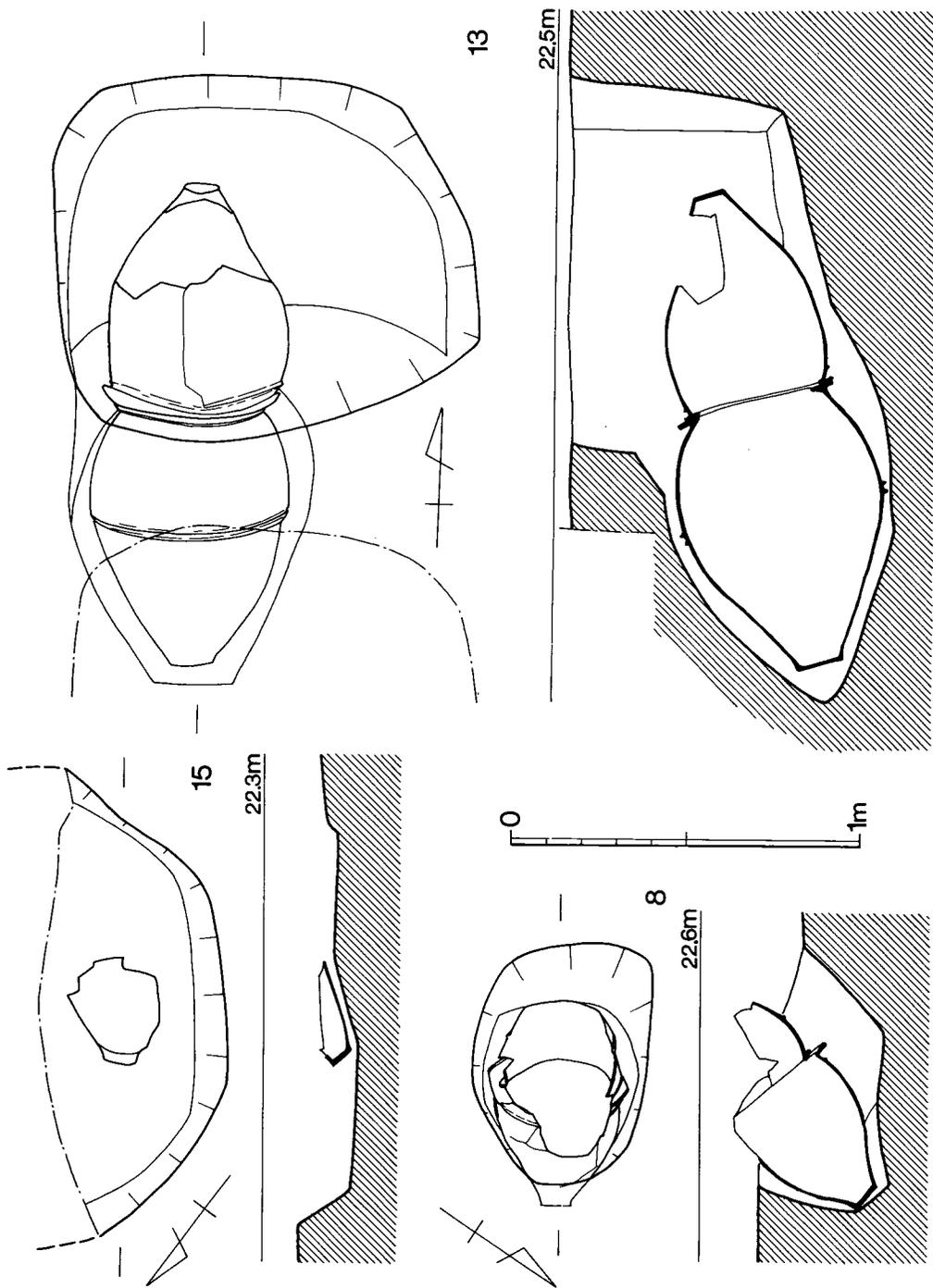
Bグループに属し、甕棺墓では最東端に位置する鉢+大甕の接口式に合せた成人用甕棺墓で甕棺上面を破損している。墓壙は、東・西両側の一部を近世墓で失っているが残存部から170cm×110cm程の楕円形を呈すると思われる。掘り方は、二段掘りで床面で僅かに屈折する程度である。東壁に穿かれた横穴は、奥行60cm程を測る。甕棺の主軸方位は、N-75°-Eで埋置角度は29°である。



第14図 7号甕棺墓実測図 (1/20)

甕棺 (図版21—(2), 第38図)

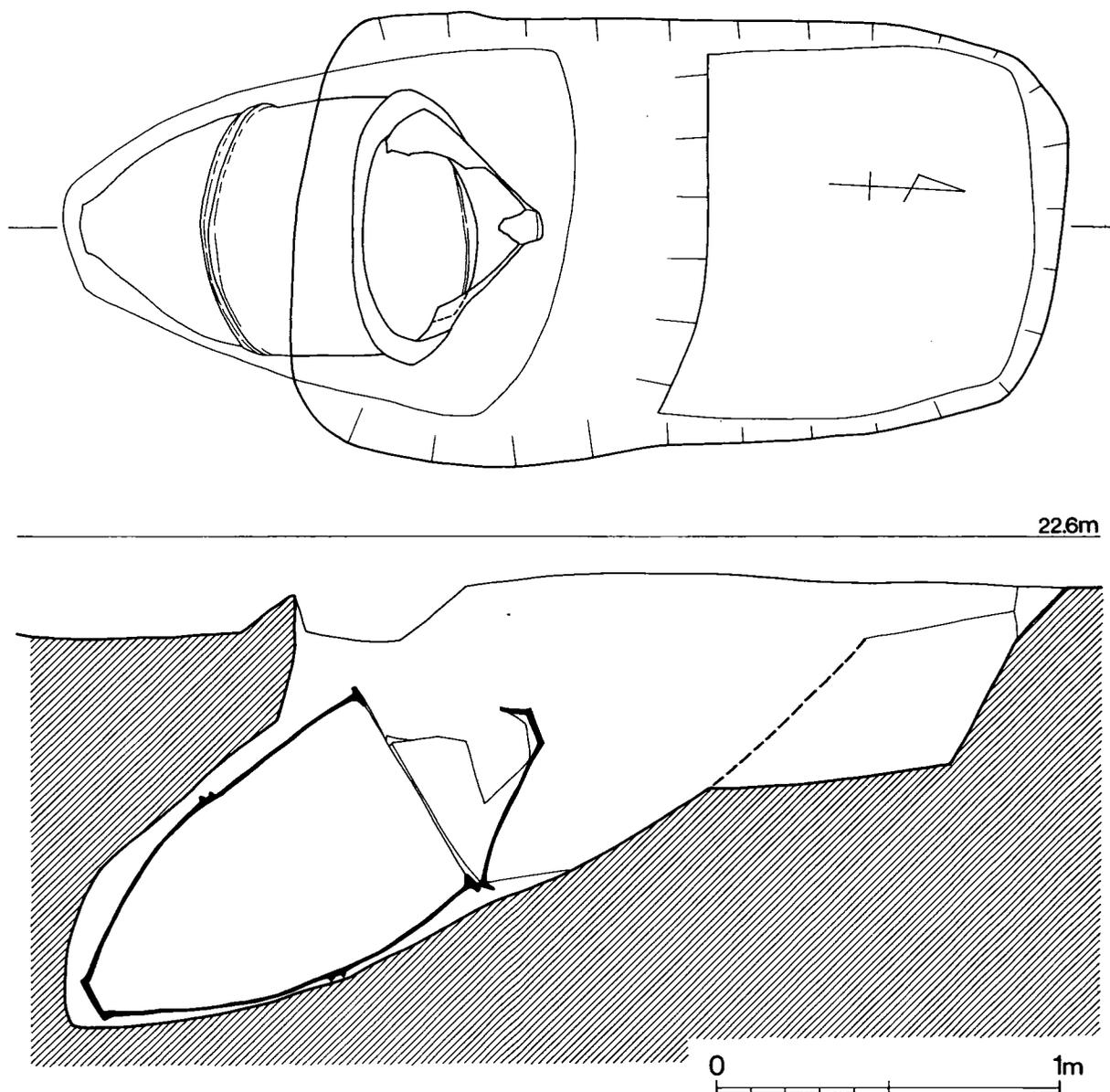
上甕 底部を欠損した鉢形土器で口縁端部は凹みを有し、内側に弯曲しながら底部へ向う。焼成は普通で胎土には1~2mm位の砂粒をかなり含み赤褐色粒や金雲母も見られる。色調は、内面が黄褐色で外面は淡黄褐色である。仕上げは、口縁部付近のヨコナデ、他は内面に僅かに刷毛目を残すのみで器面が荒れ



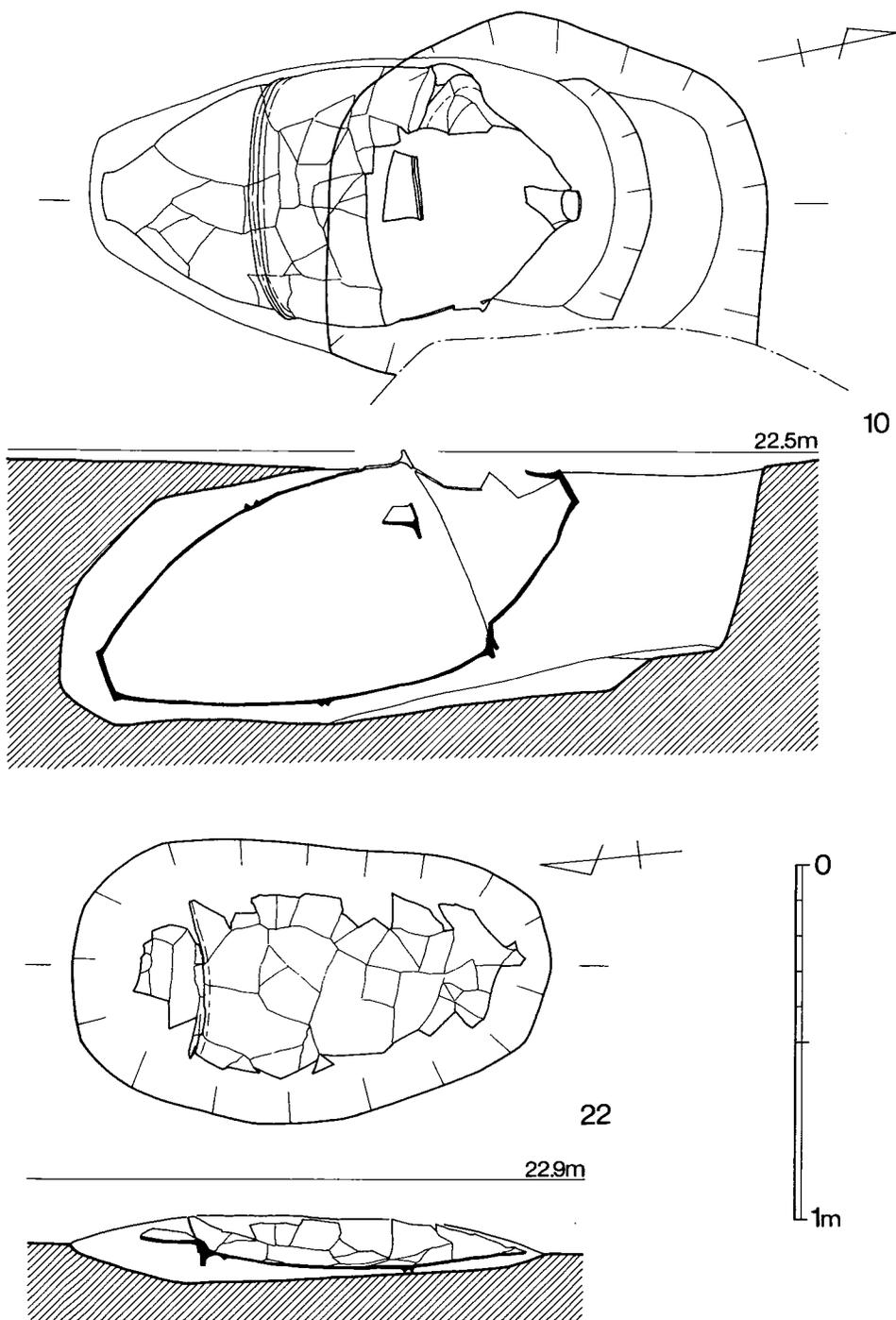
第 15 图 8 · 13 · 15号甗棺墓实测图 (1/20)

不明確である。時期は、中期中葉と考える。

下葬 T字状の口縁を有する大甕で口縁部上面の外側は僅かに下方へ傾き、口唇部は、きわめて僅かに凹状になる。頸部から胴部は直線近く、胴中位より底部へ僅かな脹みもち窄み



第 16 図 9号甕棺墓実測図 (1/20)

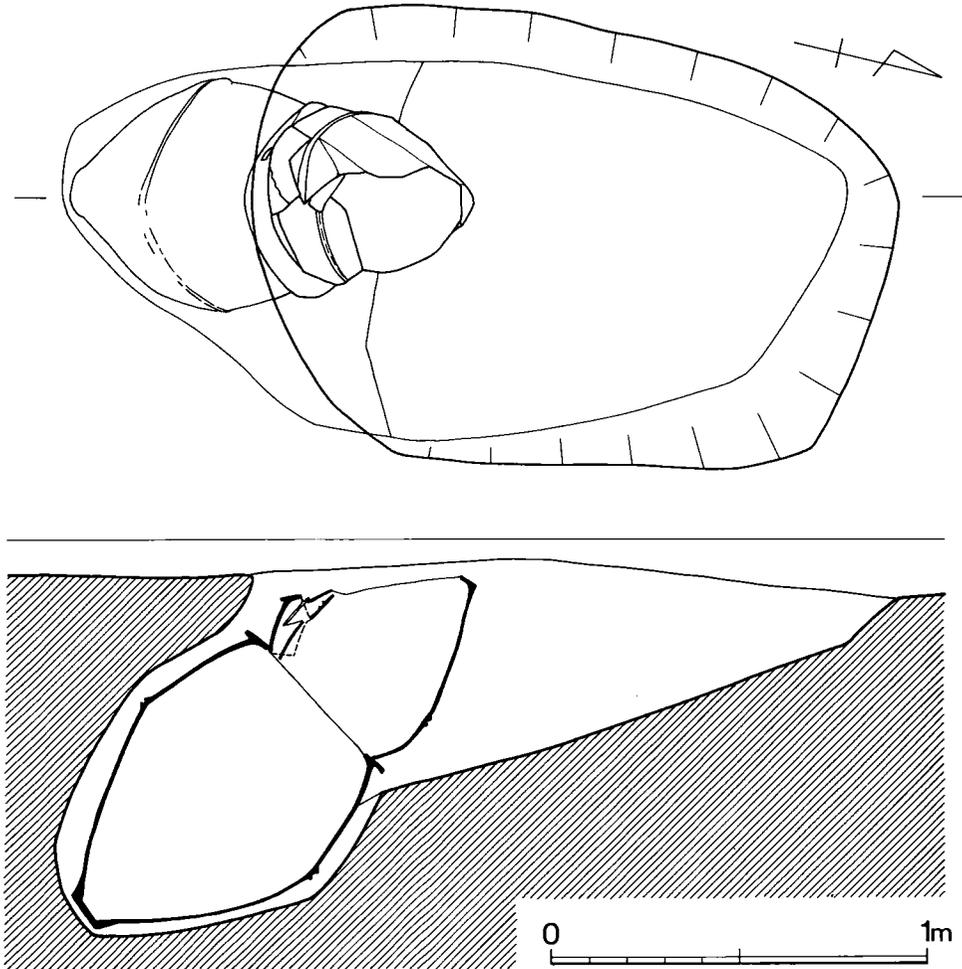


第 17 图 10·22号葬棺墓实测图 (1/20)

底部へ向う。底部は、径14.3cmの平底である。突帯は、三角で頸部下に一条、胴部に二条がそれぞれ貼付られている。焼成は普通で胎土には1～3mm位の砂粒を若干含み金雲母も見られる。色調は、内面が黄褐色から褐色で外面が淡黄褐色である。また、内面の胴部中位と外面の胴部上位に2ヶ所、体中位から底部と広範囲に黒斑が見られる。時期は、中期中葉と考える。

17号甕棺墓

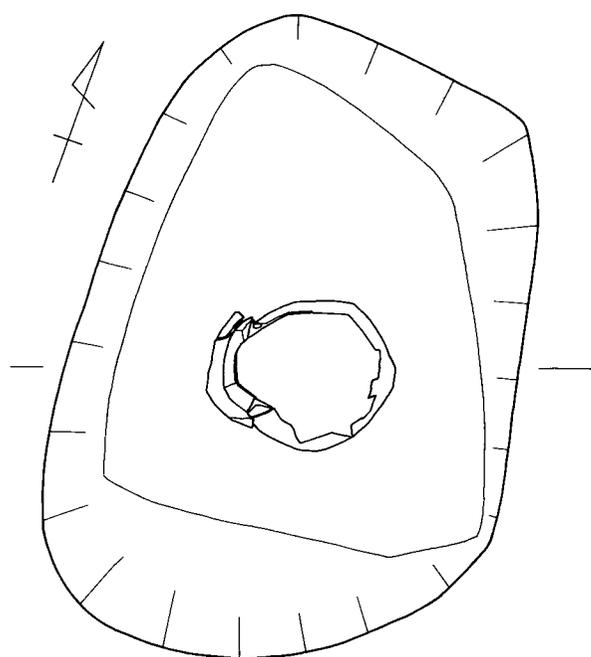
18号の北側に位置し、墓塚の一部と甕棺の僅かを残し、そのほとんどを近世墓で失った小児用甕棺墓である。



第 18 図 11号甕棺墓実測図 (1/20)

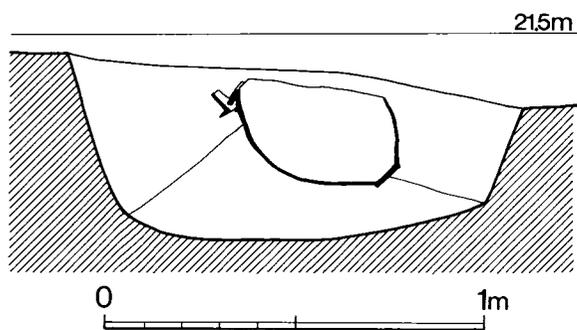
18号甕棺墓 (図版9-(2), 第21図)

14号甕棺墓の南側に位置する鉢+大甕の成人用甕棺墓である。甕棺は、上甕を近世墓の掘削時に取り除かれ下甕に埋納され、下甕も胴部下半を欠損している。また、墓壙も南西隅と北東側を失っているが残存部より130cm×130cm程の隅丸方形を呈するものと思われる。床面は平坦に近く、下甕口縁下より斜位に横穴を穿ったと考えられる。甕棺の主軸は、下甕からS-3°-Eで埋置角度は29.5°程と推定される。



19号甕棺墓 (図版10-(1), 第22図)

18号甕棺墓の南側で検出した207cm×117cm程の楕円形墓壙に大甕胴部下半を残す甕棺で、甕の規模から成人用甕棺墓と思われるが甕棺上面を削平され詳細は不明である。ただし、掘り方は2段掘りで横穴は、二段目の北側で斜位に穿かれている。残存する甕棺から主軸方位は、凡そS-45.5°-Eで埋置角度は37°前後と推定される。



20号甕棺墓 (図版10-(2), 第23図)

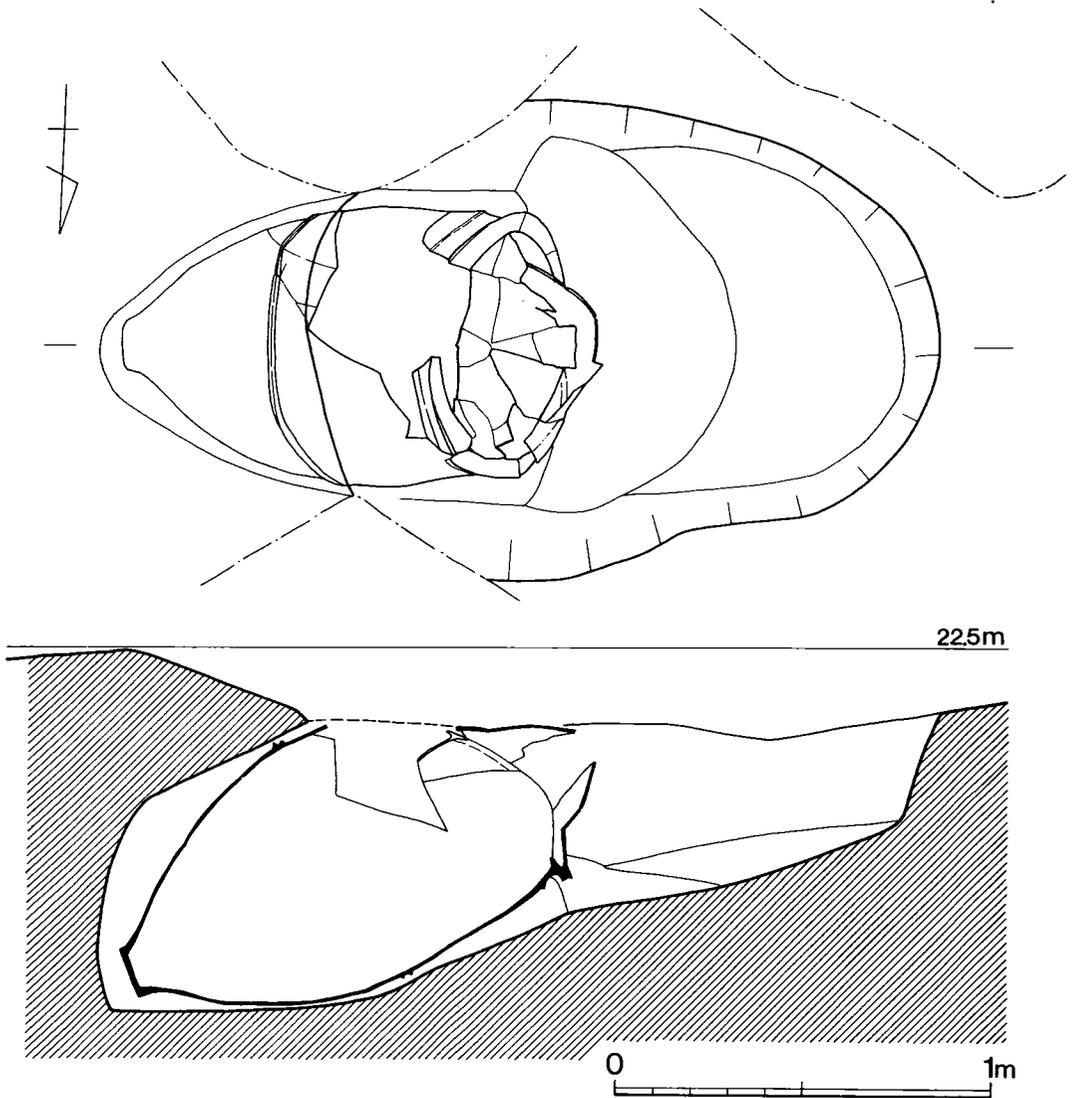
10号甕棺墓の東側に位置し、近世墓で墓壙・甕棺の大半を失っている。甕棺は、大甕の胴部上半の底面半分のみを残し検出した。甕の規模から成人用甕棺墓と考えられるが、単・複棺は不明である。墓壙も近世墓で攪乱されているが、残存部から方形に近い形状を呈すると考えられる。甕棺の残存部から主軸方位は、S-

第19図 12号甕棺墓実測図(1/20)

40.5°-W前後で埋置角度は推定しがたい。

21号甕棺墓 (図版11-(1), 第24図)

19号甕棺墓の南側に位置し、Bグループに属する鉢+大甕を接口式に合せた成人用甕棺墓である。墓壇は、東・南側を近世墓で失い墓壇の形状は不明であるが、掘り方は甕棺の埋置状況から一段掘りと察せられ上甕・下甕の接合部下面には厚さ10cm程の粘土目貼りが施されている。



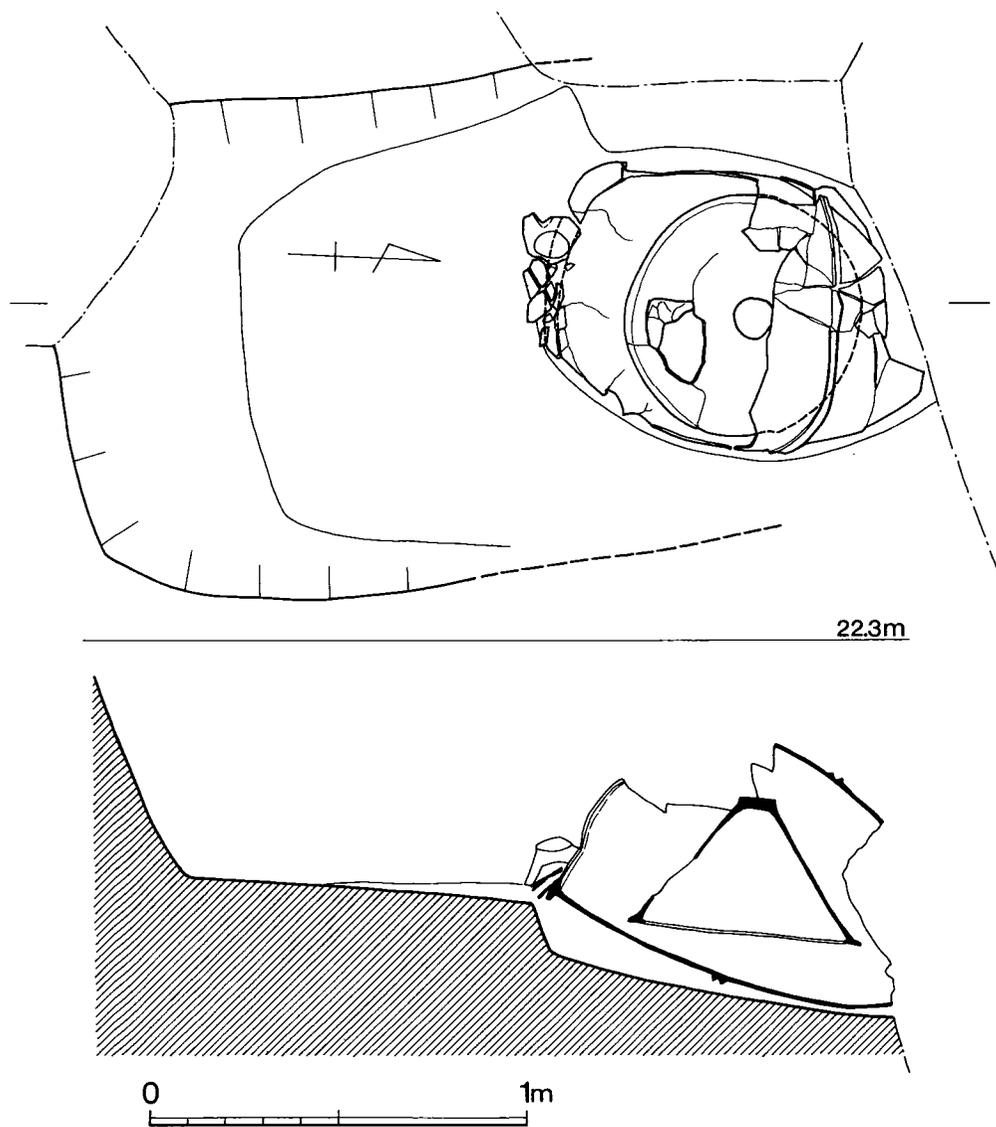
第 20 図 16号甕棺墓実測図 (1/20)

また、下甕の胴部底面に拳位の穴が穿かれている。甕棺の主軸方位は、 $S-1.5^{\circ}-W$ で埋置角度は 21° である。

また、下甕胴部上面の埋土中より、丹塗り壺片が出土し祭祀に用いたとも考えられる。

甕棺

上甕 鋤先状に近いT字状口縁を有する鉢形土器で突帯は貼付けていない。



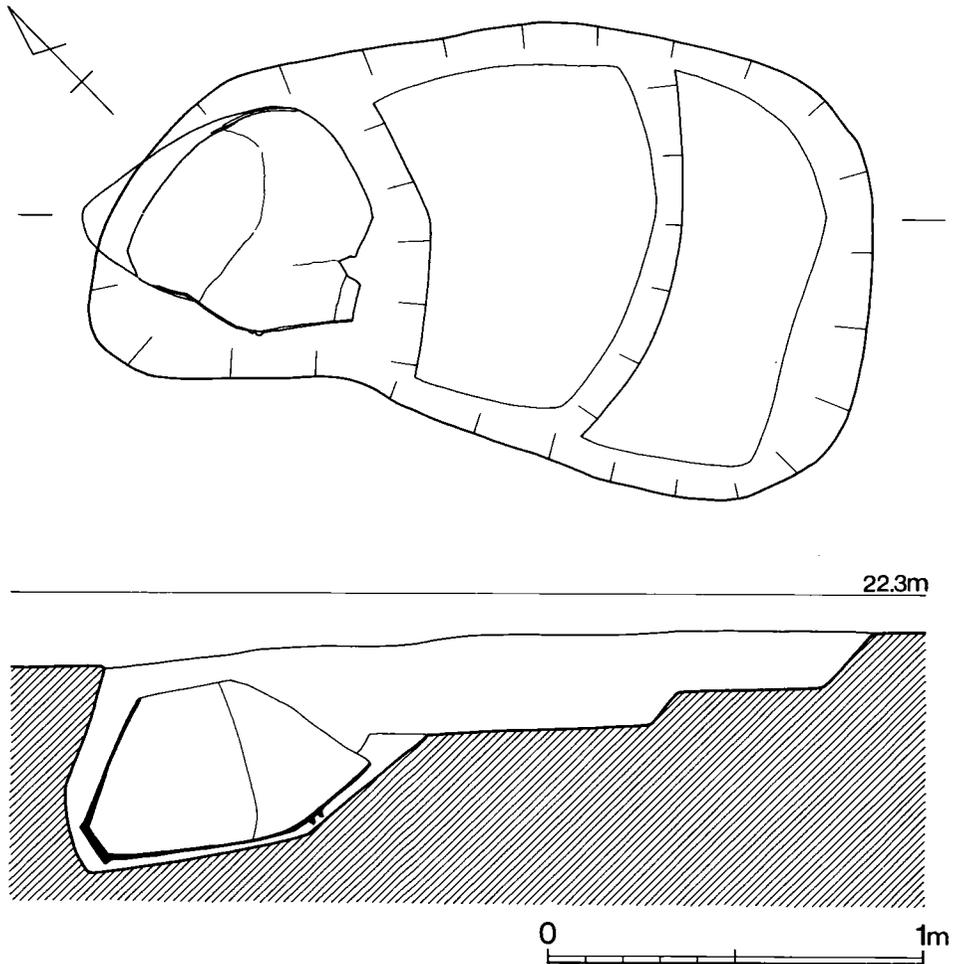
第 21 図 18号甕棺墓実測図 (1/20)

下甕 T字状口縁を有する大甕で突帯は、胴部中位に三角状を二条貼付けている。時期は、中期中葉頃と考える。

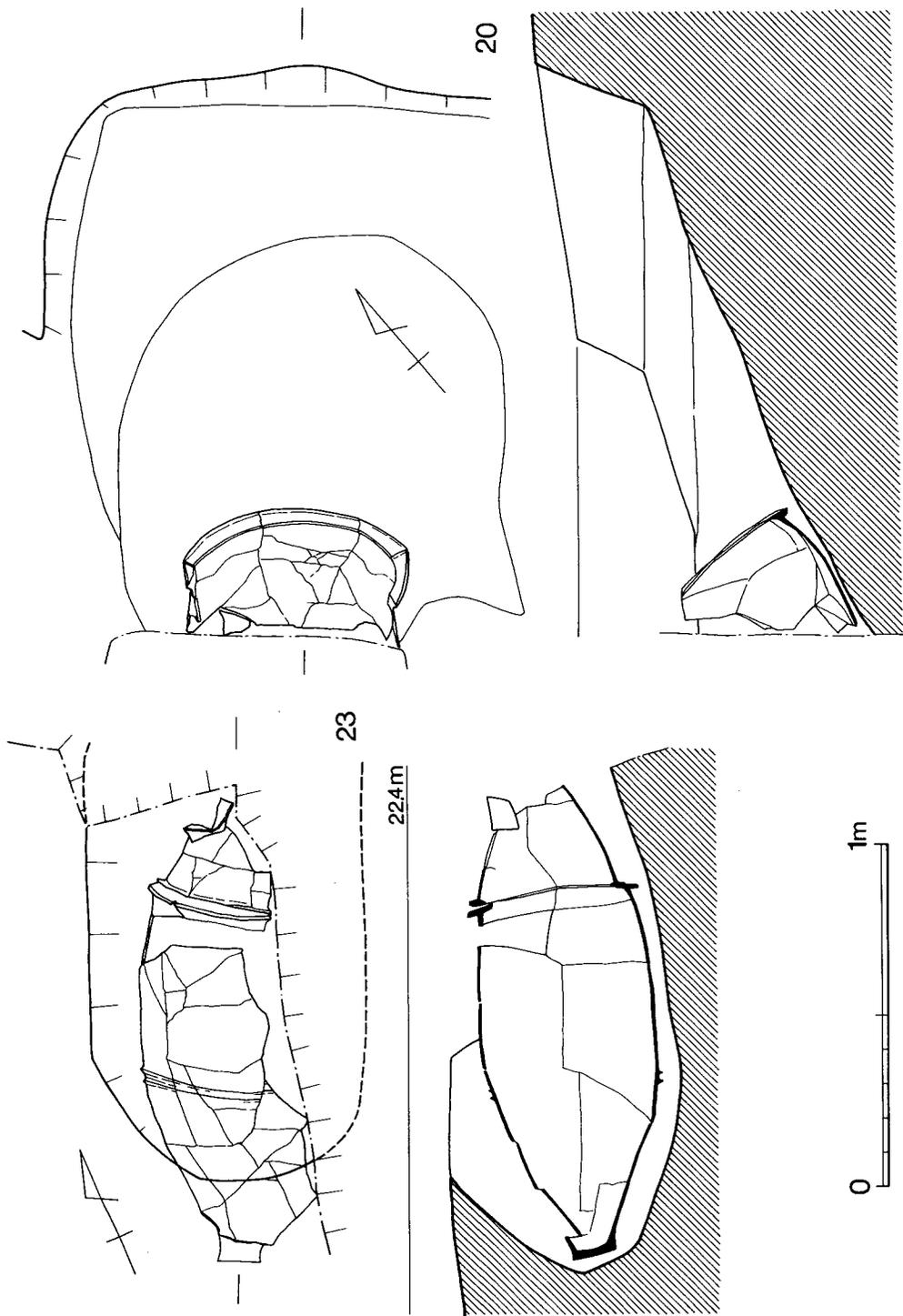
埋土中出土の丹塗り壺片 短頸壺の胴部約 $\frac{1}{2}$ 程の破片で、器面には丹塗りが施されている。焼成は良好で胎土には砂粒をかなり含む。色調は、内面が薄い灰黒色で外面が臙脂色を呈する。仕上げは、内面がナデで部分的に指圧痕を残し、外面はヨコ方向のヘラミガキが施されている。

22号甕棺墓 (図版11-(2), 第17図)

21号甕棺墓の北側に位置し、Bグループに属する。墓坑、甕棺とも削平を受け大半を失うが



第 22 図 19号甕棺墓実測図 (1/20)



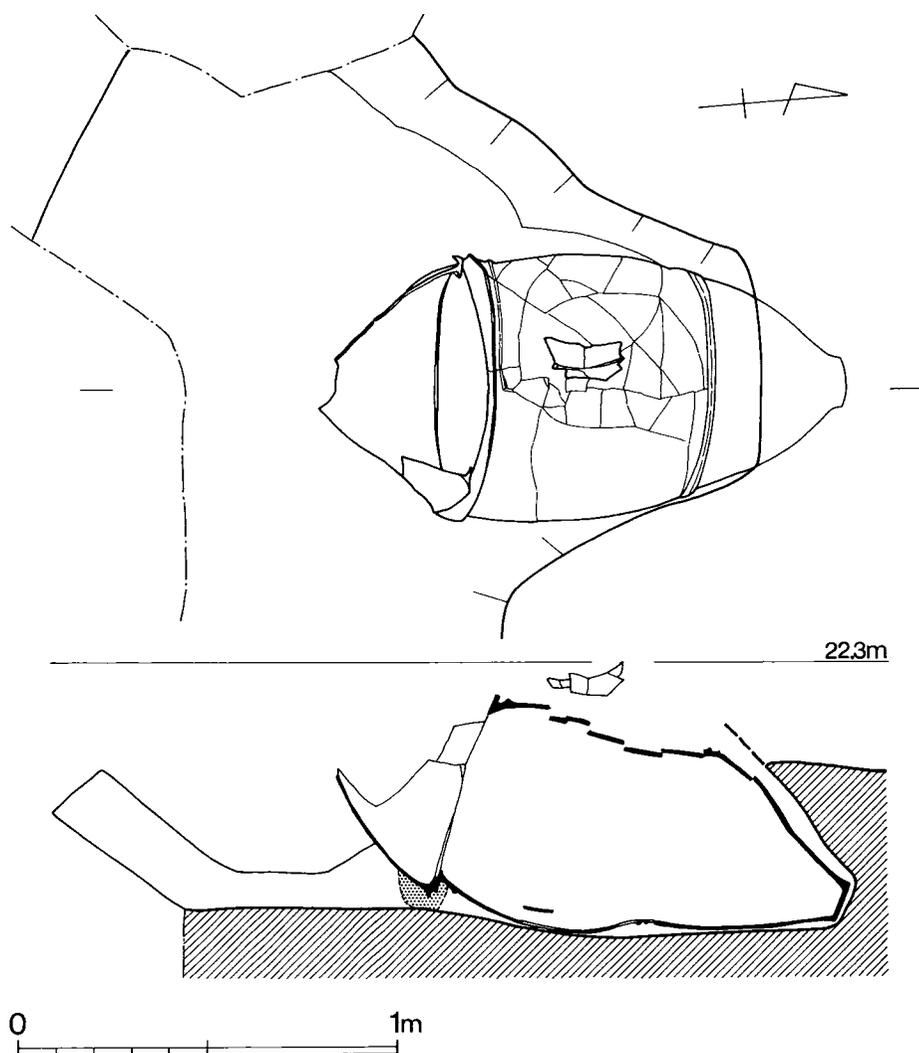
第 23 图 20·23号葬棺墓室剖图 (1/20)

鉢+大甕を接口式に合せた成人用甕棺墓である。甕棺の残存部から主軸方位は、N-5.5°-Eで埋置角度は水平に近いと察せられる。

甕棺

上甕 T字状に近い鉢形土器で口縁部は鋤先状を呈する。

下甕 T字状口縁部を有し、頸部下に一条、胴部に二条の三角突帯を貼付ける。時期は、中期中葉と考える。

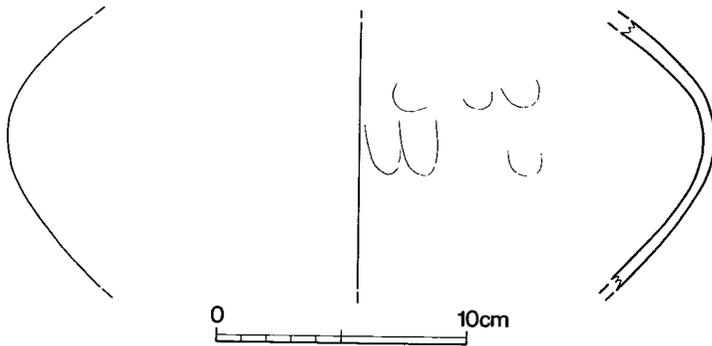


第 24 図 21号甕棺墓実測図 (1/20)

23号甕棺墓 (図

版12—(1), 第23図)

7号甕棺墓の北側に位置し、Aグループに属する鉢+大甕を接口式に合せた成人用甕棺墓である。墓壙の殆どと甕棺の北東半を近世墓で失っているが、床面



第 25 図 21号甕棺墓埋土中出土土器実測図 (1/3)

の残存部から掘り方は一段掘りで南側下甕方向に若干の傾斜が見られた。甕棺の主軸方位は、N—23.5°—Eで埋置角度は水平に近く8°を測る。

甕棺

上甕 鉢形土器で全体の約 $\frac{1}{2}$ を残す。口縁部は鋤先状をなし、突帯の貼付けはない。

下甕 T字状の口縁を有する大甕である。胴部中位に三角状突帯を二条貼付ける。時期は、中期中葉と考える。

24号甕棺墓 (第26図)

21号甕棺墓の北東部に位置し、Bグループに属する。7号貯蔵穴を切って埋置された小児用甕棺墓である。甕棺の上面を削平され、単複棺の形式は不明である。また、墓壙形状、掘り方は貯蔵穴埋土との判別が出来ず若干掘り過ぎた。

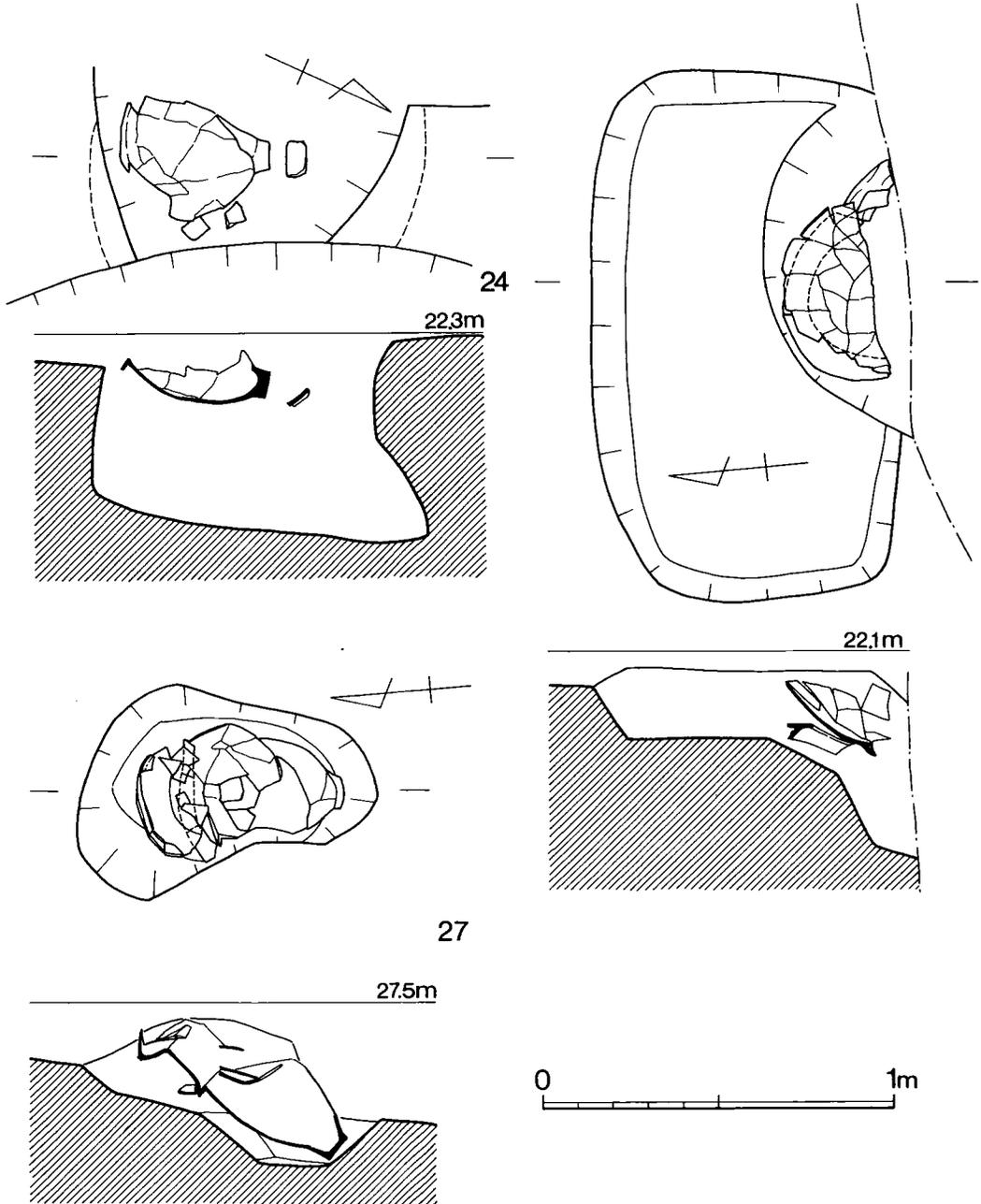
甕棺の主軸方位は、S—24.5°—Eで埋置角度は水平に近い。時期は、中期後半と考える。

25号甕棺墓 (図版12—(2), 第27図)

6号甕棺墓の西側に位置し、Aグループに属する。近世墓の攪乱と削平を受け、甕の底面を残す。土壙、掘り方、単複形式など不明だが周辺の状況から小児用甕棺墓として取りあつかった。甕の残存から、主軸方位はS—50°—E程で埋置角度は水平に近いと思われる。時期は、中期後半と考える。

26号甕棺墓 (図版13—(1), 第28図)

22号甕棺墓の南側に位置し、Bグループに属する。鉢+大甕を接口式に合せた成人用甕棺墓である。甕棺は削平を受け甕棺底面のみを残し、墓壙、掘り方の殆どを近世墓で失い旧形をと



第 26 図 24号・27号甕棺墓, 1号祭祀実測図 (1/20)

どめない。甕棺の残存部から、主軸方位はS-6°-W程で埋置角度は水平に近いと思われる。

甕棺

上甕 鋤先状の口縁を有し、突帯は貼付けていない。

下甕 T字状口縁を有し、胴部に二条の三角状突帯を貼付ける。時期は、中期中葉頃と考える。

27号甕棺墓 (図版13-(2), 第26図)

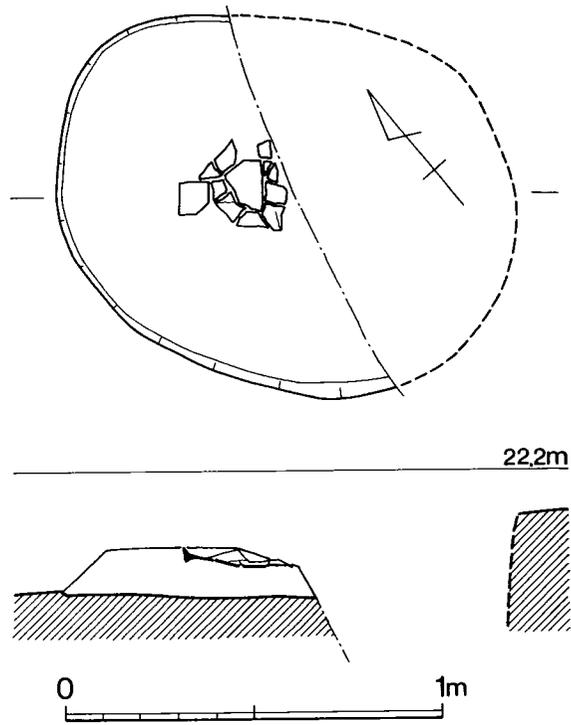
9号甕棺墓の南側、28号甕棺墓々壙の北辺に接して埋置された開口壺+甕

を覆口式に合せた小児用甕棺墓である。甕棺は、上面を削平され破損し、墓壇も旧形をとどめないが掘り方は、二段掘りである。甕棺の主軸方位は、N-5°-Eで埋置角度は42°である。

甕棺 (図版22-(3), 第31図)

上甕 底部を削平で欠損した開口壺である。頸部から口縁部までの中位程は直立、急に外反し口縁端部付近では水平近くなる。口縁端部は凹み一巡する。口縁部から頸部にかけて、篋で暗文状にミガキが施され頸部に一条の沈線が巡る。胴部は、上位で最大径となり「M」字状の突帯を貼付けている。焼成は良好で胎土は微・細砂を含むが精良である。色調は、内面が薄黄茶色から暗黄茶褐色で外面は口縁付近が淡黄茶色、胴部が黄茶褐色、底部は黄茶褐色を呈する。また外面胴部に若干煤が付着する。時期は、中期後半と考える。

下甕 逆L字状の口縁を有する甕形土器で口縁部上面の中ほどから外側が僅かに下方に傾き、口縁端部は舌状をなす。頸部より僅かに外開きし胴部上位で最大となり底部へ向って窄む、底部は若干あげ底ぎみの平底である。焼成は良好で胎土には微・細砂を多く含む。色調は、内外面とも黄茶褐色を呈する。また、外面の胴部に煤の付着が見られる。仕上げは、口縁部付近がヨ



第 27 図 25号甕棺墓実測図 (1/20)

コナデで外面はタテ方向の荒い刷毛，内面は丁重なナデが施されている。時期は，中期中葉頃と考える。

28号甕棺墓 (図版14-(1)(2), 第29図)

27号甕棺墓の南側に位置し，Bグループに属する大甕の成人用単棺墓である。墓壙は，南東側と西側を近世墓で失うが残存部から125×165cm程の長方形と思われる。掘り方は，1段掘りで甕棺前面の床面には巾15cm，長さ90cm，深さ10cm程の細長い掘り込みが見られ木蓋埋設部と察せられる。甕棺の主軸方位は，S-11°-Wで埋置角度はほぼ水平と思われる。

甕棺 (図版23-(1), 第35図)

T字状口縁を有する大甕である。口縁上面の中央より外側が下方へ若干傾き，端部付近で僅かに上方を向く。口縁端部は，凹み一巡する。体部は，頸部から胴部上位まで直線的で底部に向かって窄む。底部は径12cmの平底である。突帯は，頸部下に「M」字状一条と胴部に「コ」字状二条が貼付られている。焼成は良好で胎土には，砂粒を含み，色調は薄黄褐色を呈する。

仕上げは，口縁部，突帯部付近がヨコナデで他はナデが施されている。また，内面の一部に叩きの痕跡を見取れるが図示できるほどでない。時期は中期中葉頃と考える。

29号甕棺墓 (図版15-(1), 第28図)

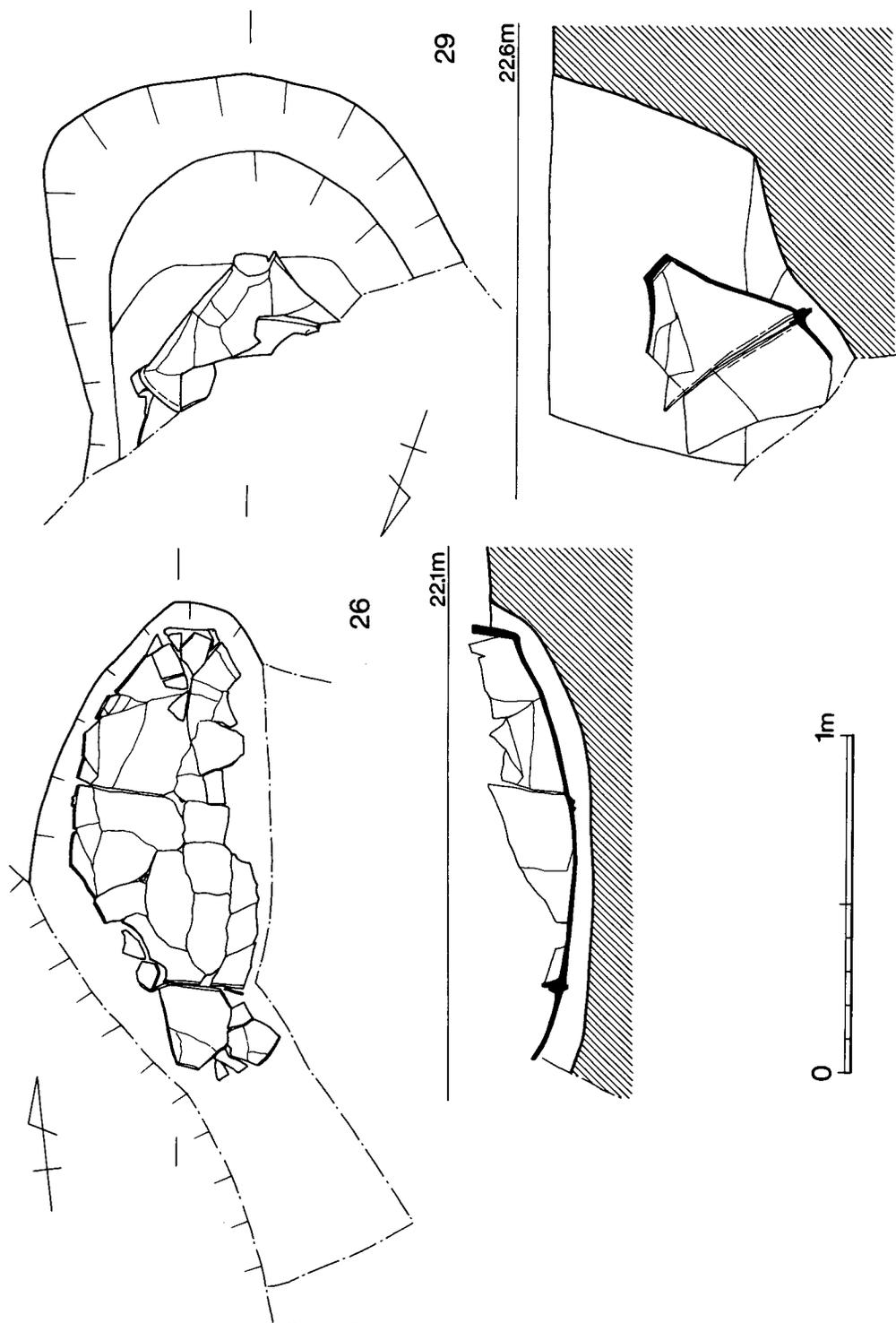
28号甕棺墓の北東側に位置し，Bグループに属する鉢+大甕を接口式に合せた成人用甕棺墓である。甕棺は，上甕の1/3程と下甕の大半を近世墓で失い，同様に墓壙も北半を削平されている。残存する甕棺から，主軸方位はS-19°-E程で埋置角度は水平に近いものと察せられる。

甕棺

上甕 鋤先状の口縁を有する鉢形土器で突帯は貼付けられていない。

下甕 T字状口縁を有する大甕。頸部下に突帯は貼付されていない。胴部は欠損し不明。時期は中期中葉頃と考える。

祭祀遺構 (図版15-(2), 23-(2), 第26図)



第 28 图 26号·29号葬棺墓实测图 (1/20)

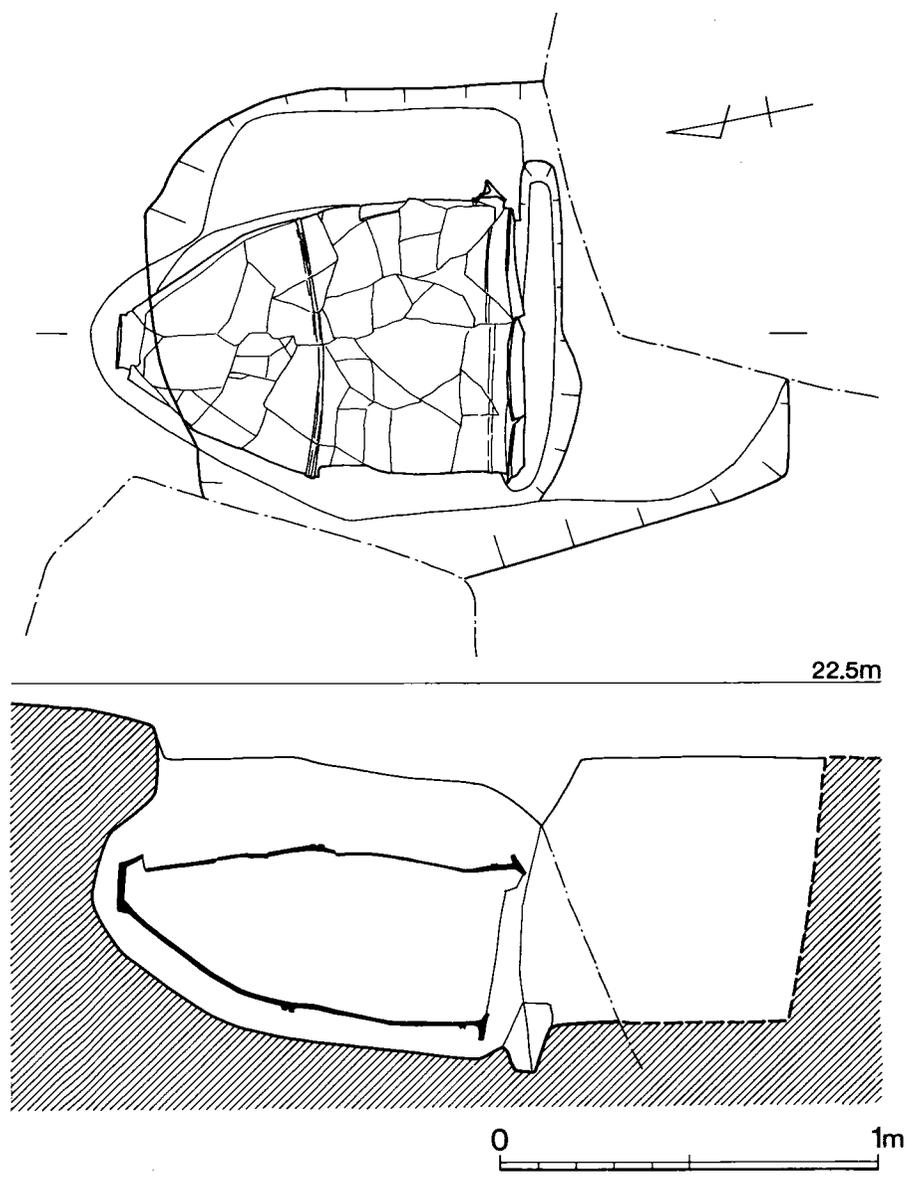
検出遺構の中で最北端に位置する。上面を削平され、土壌は、長辺 115 cm×90cmの長方形を呈し、南側を近世墓で失っている。土壌内の南隅に径90cm程の半円形落ち込みを有し、中甕の頸部より若干下位で半截した口縁部付近を直立状態に据え、この上に別個体の甕を合せ覆せた2個体の土器が出土した。この甕の下には深さ約50cmのピットがある。甕棺に不用となった甕口縁部を利用して祭祀に使用されたと思われる。この様な遺構は、他の甕棺墓遺跡でも例があり、当遺構も詳細は不明だが、祭祀遺構とした。

甕1 上位より出土した甕で底部から口縁の $\frac{2}{3}$ 程を欠損している。口縁部は逆L字状を呈するが、若干上方に立ち内面には稜線は見られない。口縁外面は僅かに脹み、端部は舌状をなす。

頸部は窄み、体上位で胴部最大径となる。突帯は、頸部下に三角状を一条貼付ける。焼成は良好で胎土には砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。仕上げは、口縁部から突帯までヨコナデで体部は細い刷毛、内面はナデが施されている。

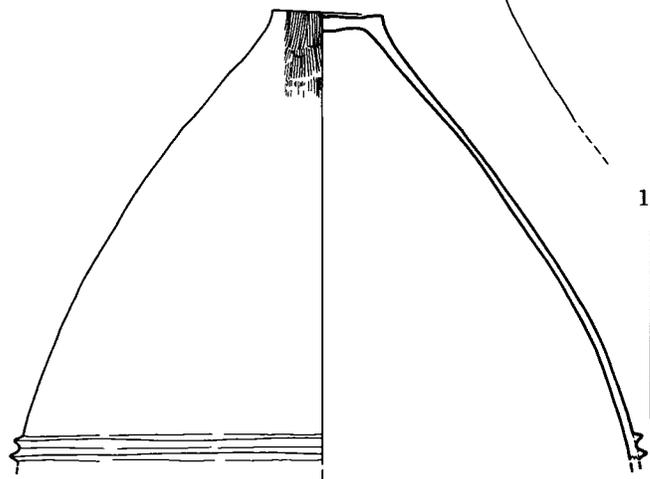
また、外面には煤の付着が見られる。

甕2 T字状の口縁を有する中甕の頸部下で半截された口縁部付近で約 $\frac{1}{2}$ を残す。残存口縁から復元口径は45cmを測る。口縁部上面は、外側で若干下方へ傾き、内端部は舌状となり外端部は凹みが一巡する。頸部は窄み、胴部上位へ僅かな脹みを有し拡がる。頸部下には「コ」字状突帯を一条貼付ける。焼成は良好で胎土には細砂を多く含み金雲母が見られる。色調は、にぶい橙色を呈する。半截部は、直線的で内側に剝離面が見られる。時期は、中期後半と考える。



第 29 图 28号甕棺墓实测图 (1/20)

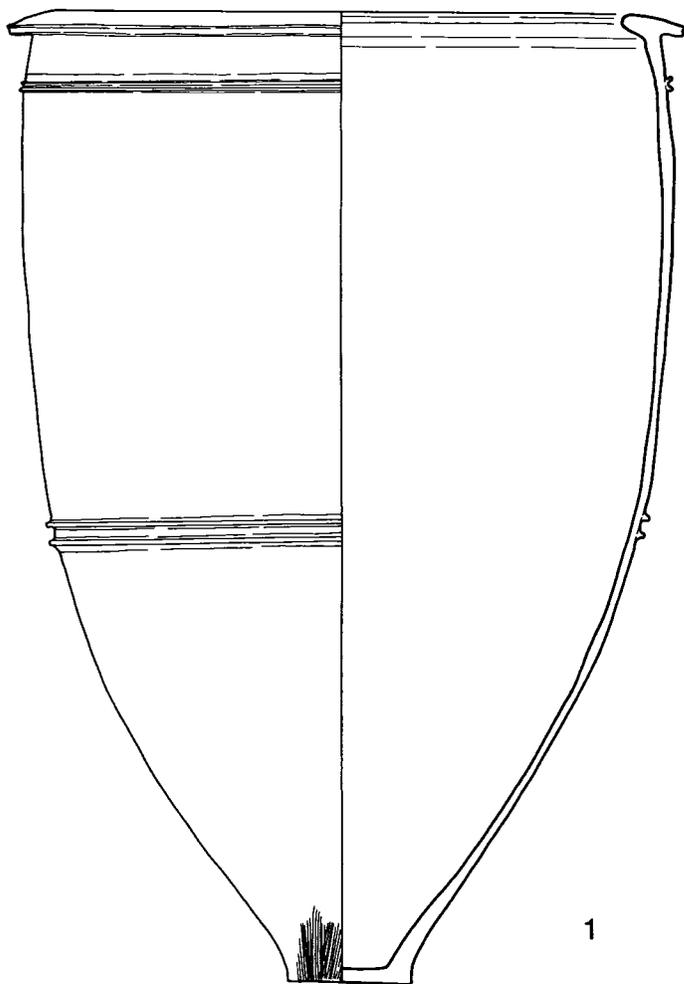
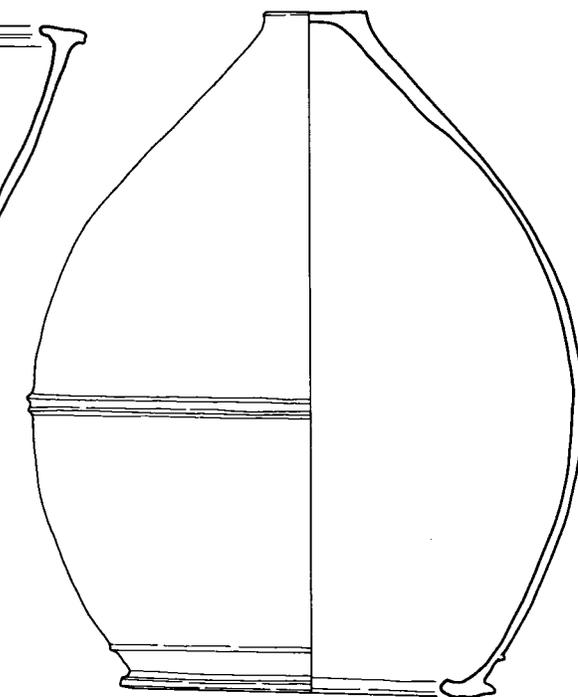
器	高	
口	径	
口	縁内径	
胴	部最大径	
底	径	11.8cm



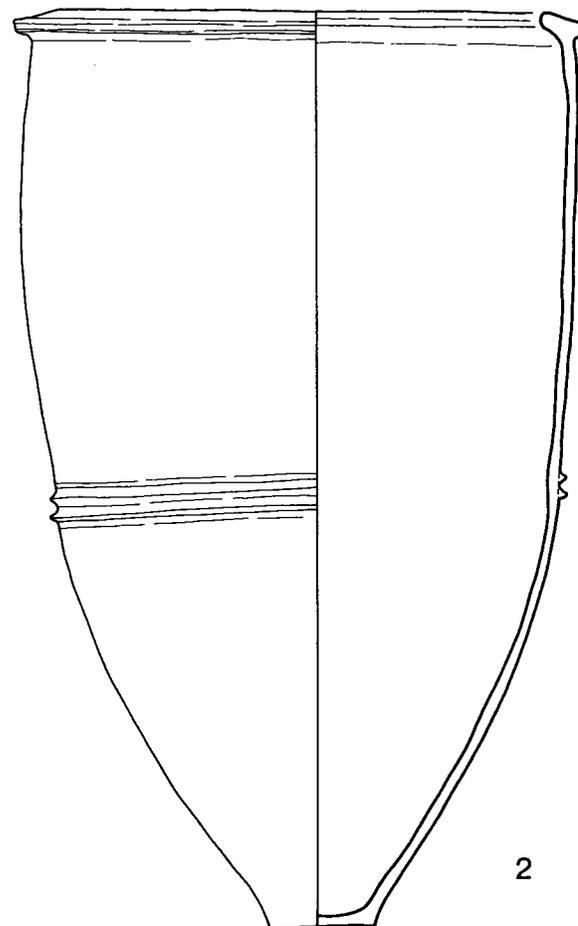
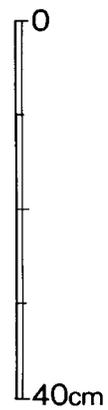
1号 補修土器

器	高	
口	径	56.7cm
口	縁内径	47.1cm
胴	部最大径	
底	径	

器	高	71.8cm
口	径	39.7cm
口	縁内径	28.3cm
胴	部最大径	59.3cm
底	径	10.8cm



1

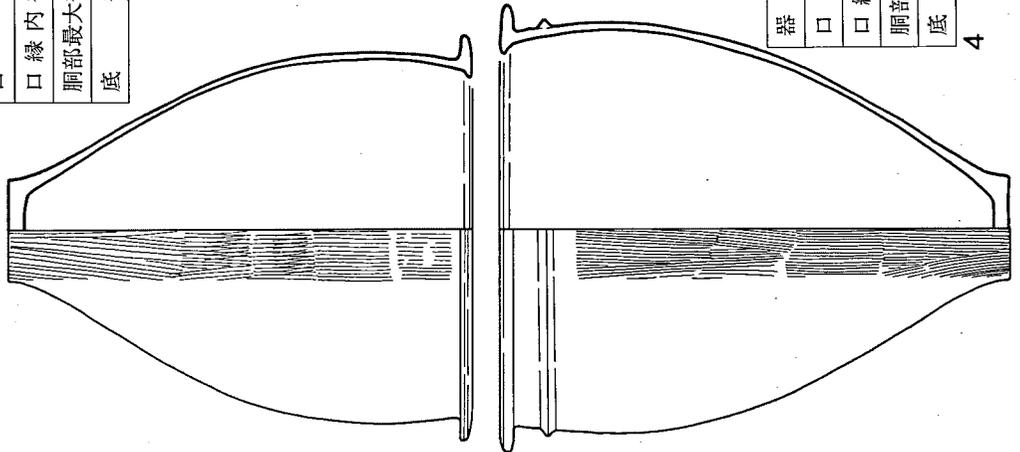


2

器	高	102.9cm
口	径	71.6cm
口	縁内径	58.4cm
胴	部最大径	69.2cm
底	径	13.2cm

器	高	96.7cm
口	径	61.0cm
口	縁内径	50.2cm
胴	部最大径	58.7cm
底	径	11.0cm

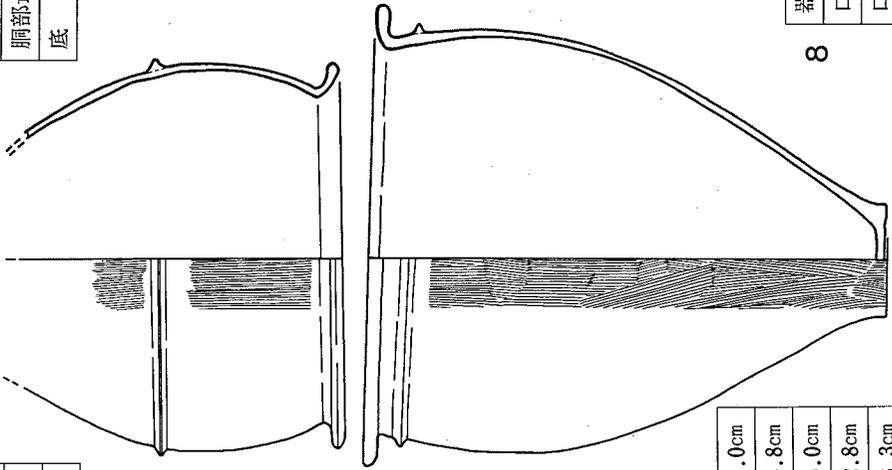
器	高	37.0cm
口	径	32.4cm
口	缘内径	25.6cm
胴部最大径		29.7cm
底	径	8.25cm



器	高	41.0cm
口	径	35.8cm
口	缘内径	28.0cm
胴部最大径		32.8cm
底	径	8.3cm

4

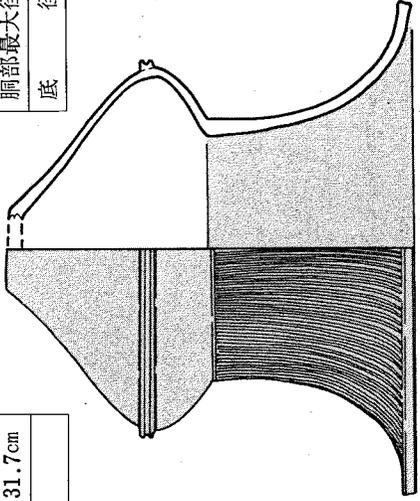
器	高	30.7cm
口	径	25.5cm
口	缘内径	31.7cm
胴部最大径		
底	径	



器	高	41.6cm
口	径	36.9cm
口	缘内径	29.9cm
胴部最大径		33.6cm
底	径	9.0cm

8

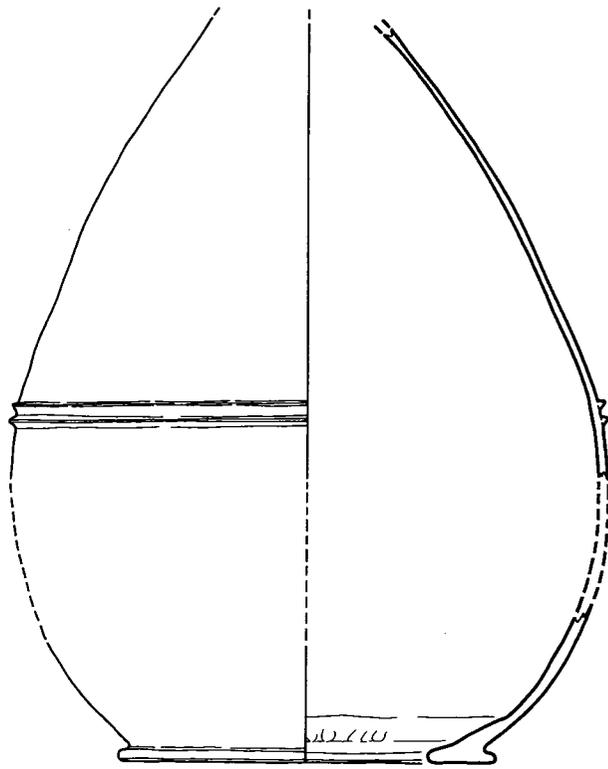
器	高	32.5cm
口	径	39.4cm
口	缘内径	38.6cm
胴部最大径		30.0cm
底	径	6.7cm



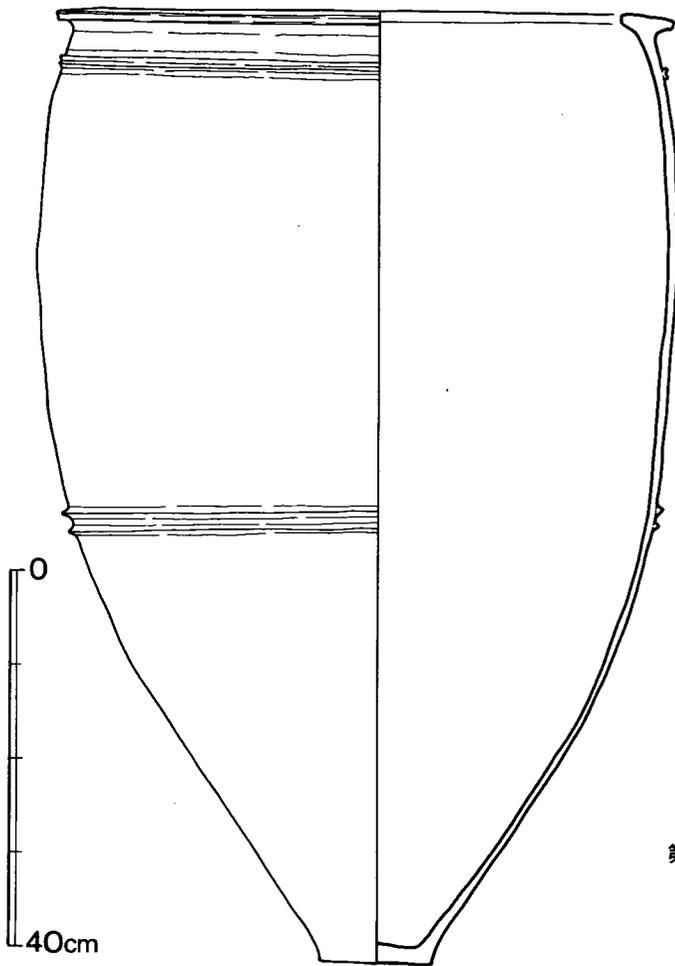
27

器	高	40.2cm
口	径	31.8cm
口	缘内径	24.6cm
胴部最大径		30.1cm
底	径	8.3cm

第 31 图 4号・8号・27号甗植奘测图 (1/6)

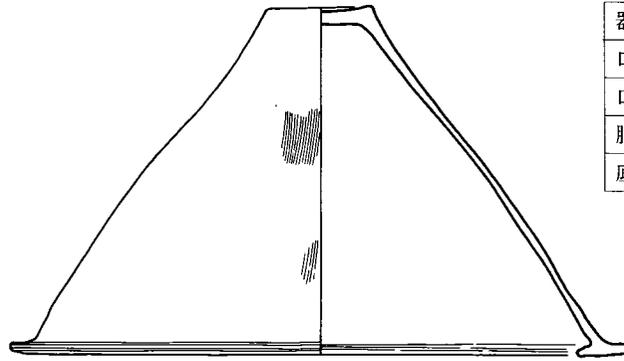


器	高	
口	径	40.0cm
口	縁内径	26.0cm
胴部	最大径	63.6cm
底	径	

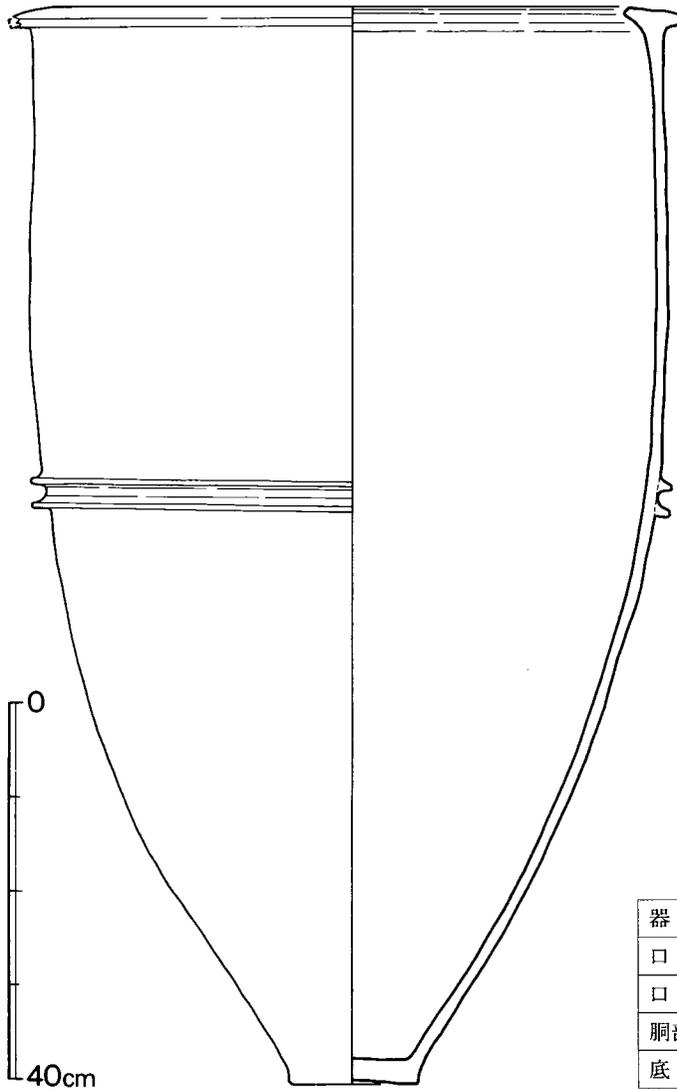


器	高	100.5cm
口	径	65.5cm
口	縁内径	54.1cm
胴部	最大径	67.5cm
底	径	12.0cm

第 32 图 7号葬棺实测图 (1/8)

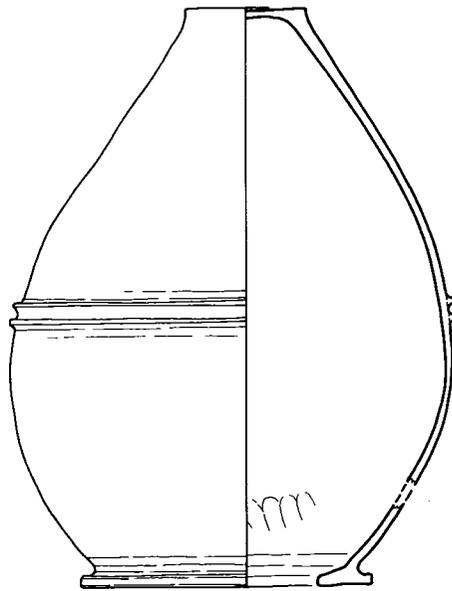


器	高	37.0cm
口	径	65.0cm
口	縁内径	54.8cm
胴部	最大径	
底	径	11.4cm

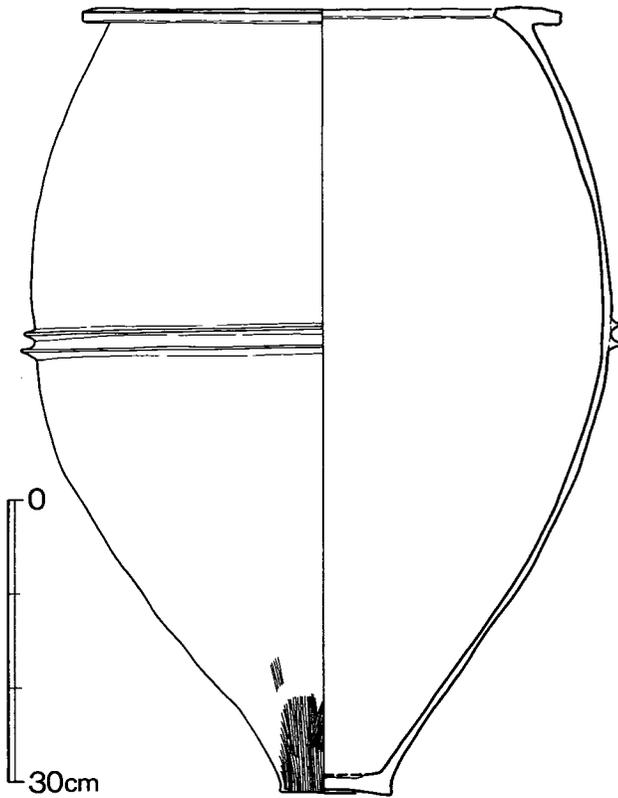


器	高	114.0cm
口	径	71.4cm
口	縁内径	59.0cm
胴部	最大径	67.8cm
底	径	13.6cm

第 33 图 9号葬棺実測図 (1/8)

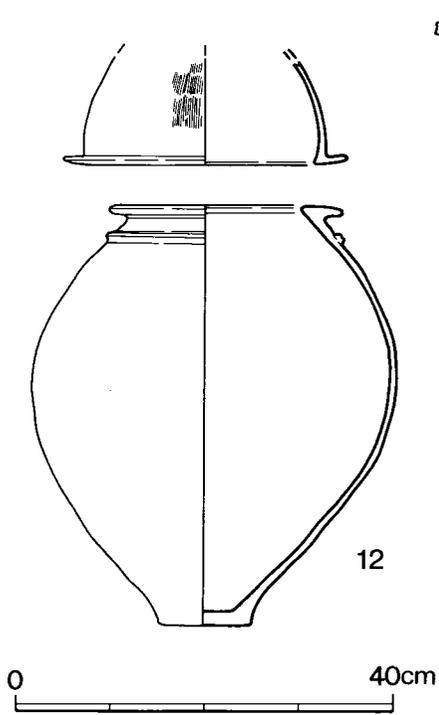


器	高	61.3cm
口	径	30.8cm
口	縁内径	19.4cm
胴	部最大径	47.2cm
底	径	13.0cm



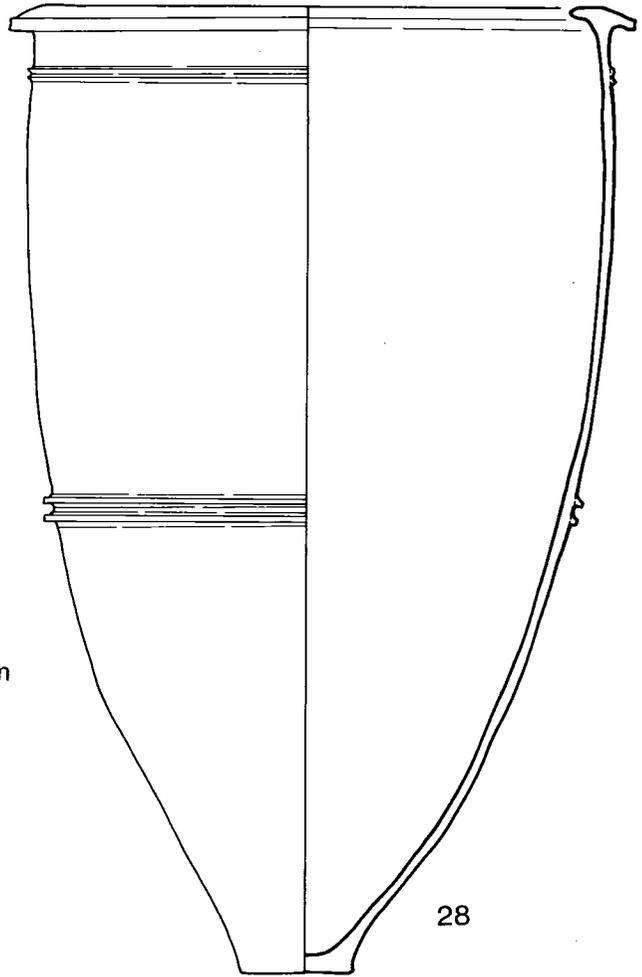
器	高	82.7cm
口	径	50.7cm
口	縁内径	36.3cm
胴	部最大径	63.2cm
底	径	11.9cm

第 34 図 11号甕棺実測図 (1/8)



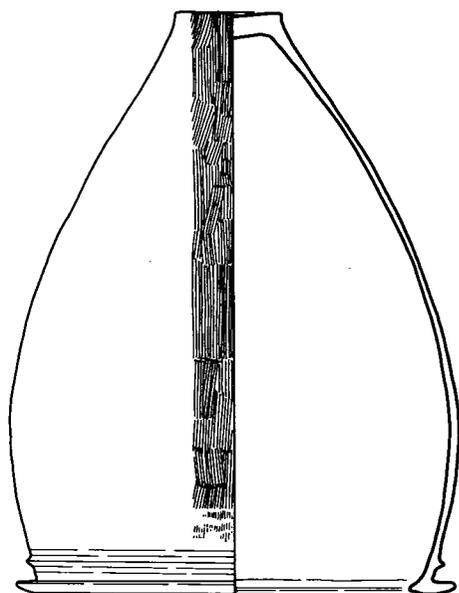
器	高	
口	径	30.0cm
口	縁内径	23.2cm
胴部	最大径	
底	径	

器	高	44.5cm
口	径	24.5cm
口	縁内径	15.7cm
胴部	最大径	38.5cm
底	径	9.6cm

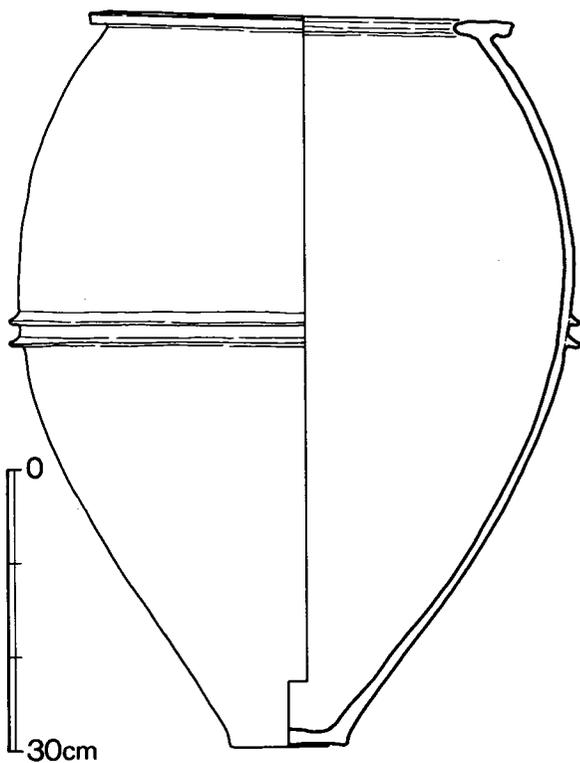


器	高	102.0cm
口	径	66.2cm
口	縁内径	52.0cm
胴部	最大径	62.0cm
底	径	12.0cm

第 35 図 12号・28号甕棺実測図 (1/8)



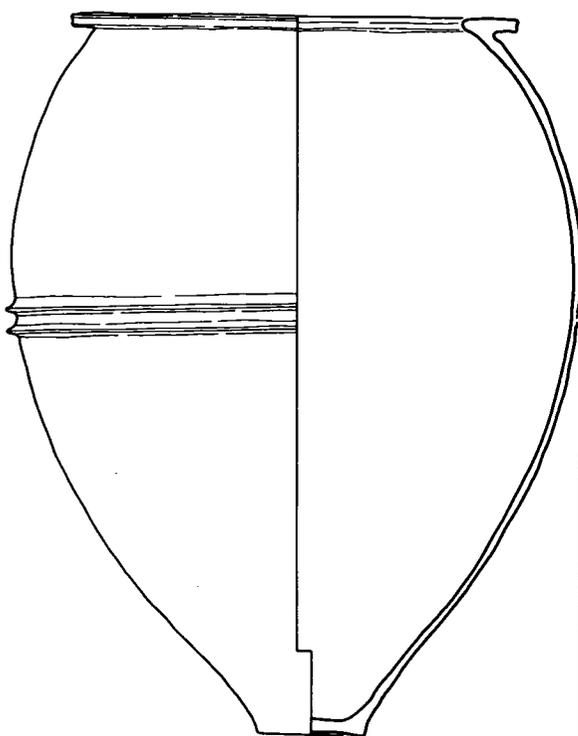
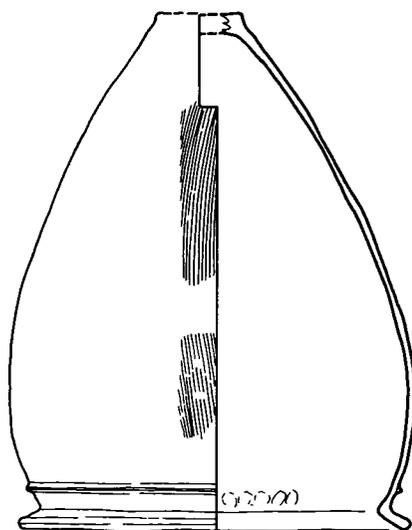
器	高	61.4cm
口	径	46.2cm
口	縁内径	36.6cm
胴部	最大径	47.0cm
底	径	11.2cm



器	高	77.1cm
口	径	45.0cm
口	縁内径	32.5cm
胴部	最大径	60.4cm
底	径	12.5cm

第 36 图 13号甗棺实测图 (1/8)

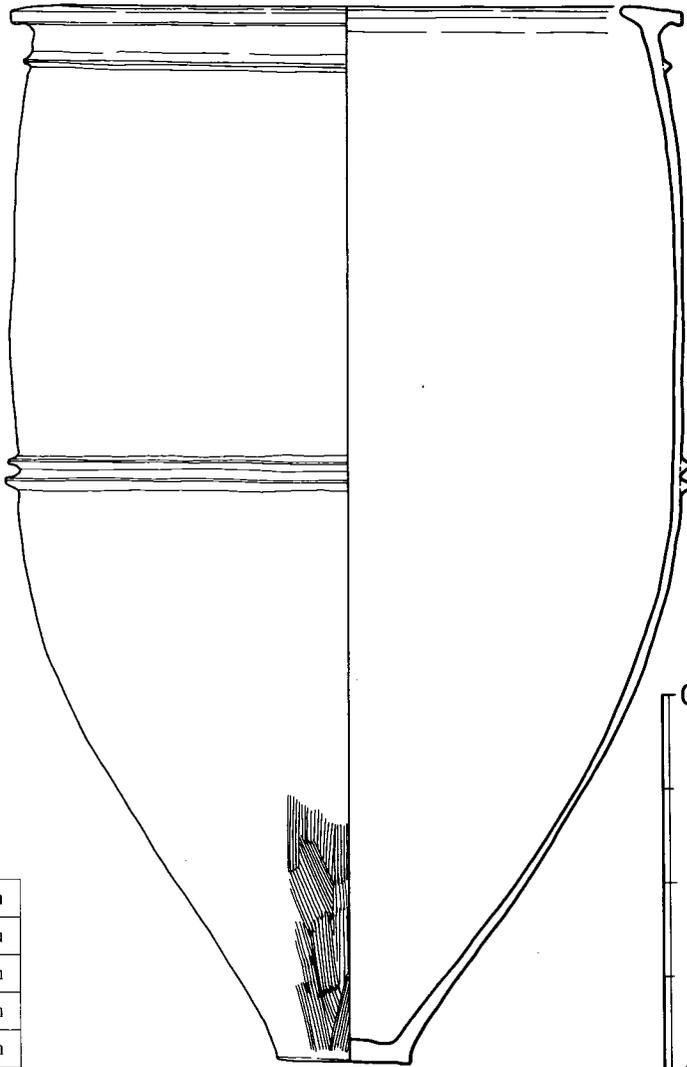
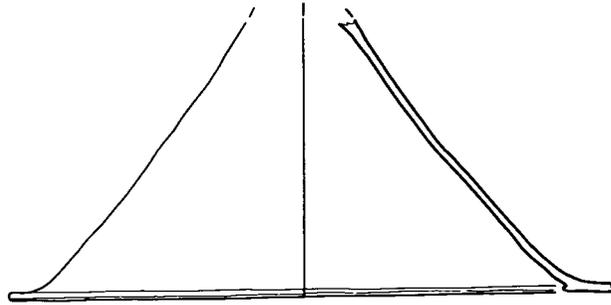
器	高	54.6cm
	口	径
	口	縁内径
	胴部	最大径
	底	径



器	高	76.0cm
	口	径
	口	縁内径
	胴部	最大径
	底	径

第 37 図 14号甕棺実測図 (1/8)

器	高	
口	径	63.9cm
口	縁内径	53.3cm
胴	部最大径	
底	径	



器	高	111.8cm
口	径	70.8cm
口	縁内径	57.8cm
胴	部最大径	72.7cm
底	径	14.3cm

第 38 図 16号甕棺実測図 (1/8)

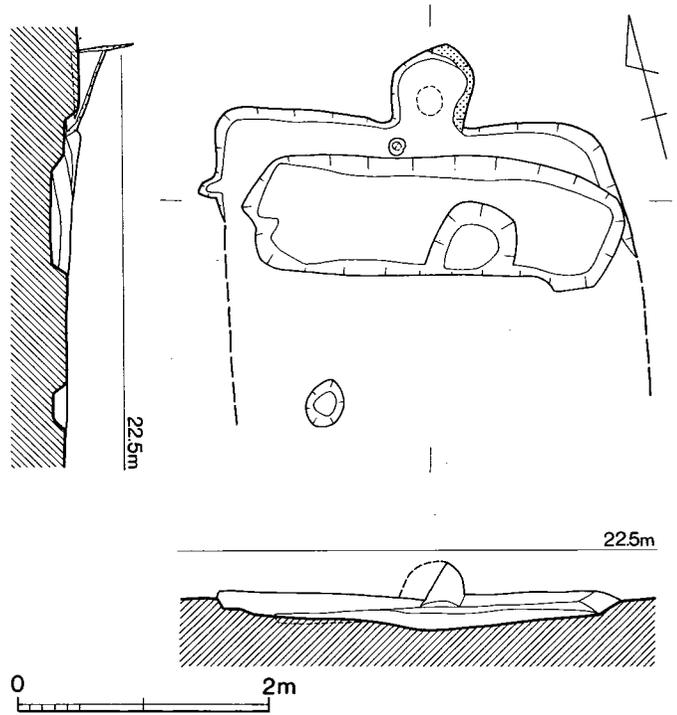
峯遺跡 甕棺墓一覽表

番号	墓壇形状	形	式	合せ形式	主軸方位	埋置角度	補修	備	考
1	方形	成人用	大甕形	接口	S-71°-E	45°	ナ	大甕打ち欠き使用	
2	不整形	成人用	中甕形	接口	N-74°-E	17°	ナ	口縁部付近補修	大甕打ち欠き使用 口縁部付近補修
3	方形?	成人用	大甕形	接口	S-44°-W	水平に近い	不明	頭骨片遺存	
4	長方形	小児用	大甕形	接口	S-72°-E	6°	ナ		
5	不明	成人用	大甕形	不明	N-54°-W?	不明	不明	近世葬で殆ど尖う	
6	楕円形?	成人用	大甕形	接口	N-64°-E	29°	不明	上唇を破損 11号貯蔵穴を切る	
7	不明	成人用	中甕形	接口	N-20°-E	26°	上甕残	中甕打ち欠き使用 胸部から前面補修	11号貯蔵穴を切る
8	不明	小児用	大甕形	接口	S-56°-W	40°	不明	上唇を破損 6号貯蔵穴を切る	
9	長方形	成人用	大甕形	接口	N-3°-W	34°	ナ		
10	方形	成人用	大甕形	接口	N-12°-E	23°	不明	上唇を破損	
11	不整形	成人用	中甕形	接口	N-13°-E	42.5°	上甕残	口縁付近上面補修	
12	不整形	小児用	中甕形	覆口?	S-71°-W	44°	ナ	口縁部を若干残す 上面を欠損	
13	不整形	成人用	中甕形	接口	N-2°-W	14°	ナ		
14	楕円形	成人用	中甕形	接口	N-75°-E	29°	ナ	上面を破損	
15	楕円形?	小児用	甕形	不明	S-37°-E	水平に近い	不明	削平を受け破損	
16	楕円形	成人用	大甕形	接口	S-75°-E	29°	ナ	上面を破損	
17	不明	小児用	甕形	不明	不明	不明	不明	殆ど尖う	
18	方形	成人用	大甕形	接口?	S-3°-E	29.5°?	不明	口縁上面・胸部下半を欠損	
19	不整形	成人用	大甕形	不明	S-45.5°-E	37°?	不明	上半を欠損	
20	方形?	成人用	大甕形	不明	S-40.5°-W	不明	不明	上面、下半を欠損	
21	不明	成人用	大甕形	接口	S-1.5°-W	21°	ナ	上面を破損 下甕胸部底面穿孔	
22	不明	成人用	大甕形	接口	N-5.5°-E	水平に近い	不明	口縁底面の一部残す 底面を残す	
23	不明	成人用	大甕形	接口	N-23.5°-E	8°	不明	約半分残る 口縁から胸部下位欠損	
24	不整形	小児用	甕形	不明	S-24.5°-E	水平に近い	不明	上面を欠損	
25	不明	小児用	甕形	不明	S-50°-E	水平に近い	不明	底面の一部を残す	
26	不明	成人用	大甕形	接口	S-6°-W	水平に近い	不明	口縁上面を欠損 底面を残す	
27	不整形	小児用	開口甕形	覆口	N-5°-E	42°	ナ	上面と底部を欠損 上面を破損	
28	長方形	成人用	甕形	単棺	S-11°-W	水平に近い	ナ		
29	不明	成人用	大甕形	接口	S-19°-E	29°	ナ	上面を欠損 胸部から口縁部を残す	

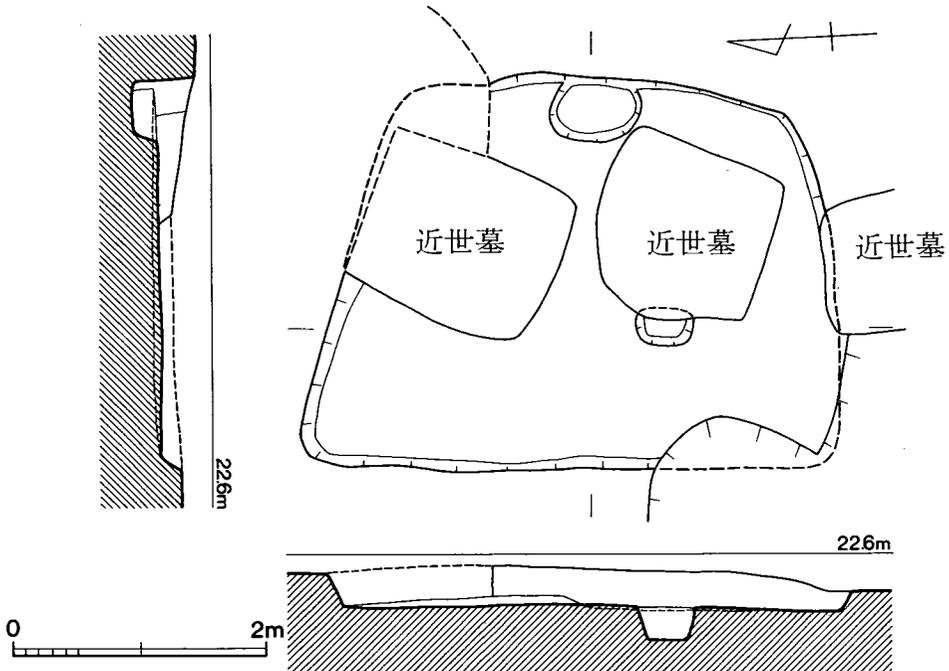
(3) 竪穴住居跡

1号住居跡 (図版16-(1), 第39図)

第I区で検出したカマドを有する住居跡である。上面を削平され、北辺と東・西辺の一部を僅かに残す。東辺から300cm程の方形プランを呈すると考えられ、北辺中央部より若干東寄りに作り出しのカマドを付設している。残壁高は10cm前後で床面に楕円形の窪みを有すが粘土で整形し平坦としていた。カマドには焼土、灰が見られたが構造は不明。カマド左脇床面から土師器坏身1個体が伏さって出土したが、紛失した。坏身は、奈良終りから平安初め頃と思われた。



第 39 図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 40 図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

2号住居跡(図版16—(2), 第40図)

第II区, 8号貯蔵穴の南側で2・5号甕棺墓と近世墓に大半を切られている。残存部から, 400cm × 300 cm, 深さ30cm前後の方形に近いプランを呈する住居跡である。東辺中央に接し75cm × 45 cm, 深さ30cmの屋内貯蔵穴と思われる落ち込みを持ち, 床面中央付近に径45cmの柱穴らしきピットが見られる他は不明である。時期は, 遺物が出土せず明確でないが, 2・5号甕棺墓より先行することから弥生中期前半頃以前と考える。

(4) その他の遺構と遺物

1 遺構

前節で述べた通り, 溝状遺構やピット等が数ヶ所見られたが削平や近世墓の攪乱が著しく全体の形状や性格, 時期など全容が不明なために図示しなかった。

2 遺物

1 土器(図版24, 第41・42・43図)

① **甕** 覆土より採集した長胴の甕で口縁部を約 $\frac{1}{4}$ ほど残し, 復元口径25cm, 残高15cmを測る。く字状に緩く外反する口縁部を有し, 口縁端部は僅かに凹状に窪む。焼成は良く胎土には1~4mm位の砂粒を含み金雲母や赤褐色色粒も見られる。色調は橙褐色を呈し, 外面には煤が附着する。仕上げは, 外面は叩き後に刷毛で内面は口縁部から内頸までヨコ方向, 頸部下は左下から右上への刷毛が施されている。

② **甕** ①と同じく採集の球状に近い胴部を有する甕で復元口径は20cm程ある。頸部は弯曲し口縁部に直線的に伸び, 端部は舌状を呈する。焼成は不良で胎土には1~2mm位の砂粒をかなり含み赤褐色色粒も見られる。仕上げは, 焼成が不十分なため器面の荒れがひどく僅かに体部の叩きと内面の刷毛目を部分的に看取される程度で詳細は不明である。

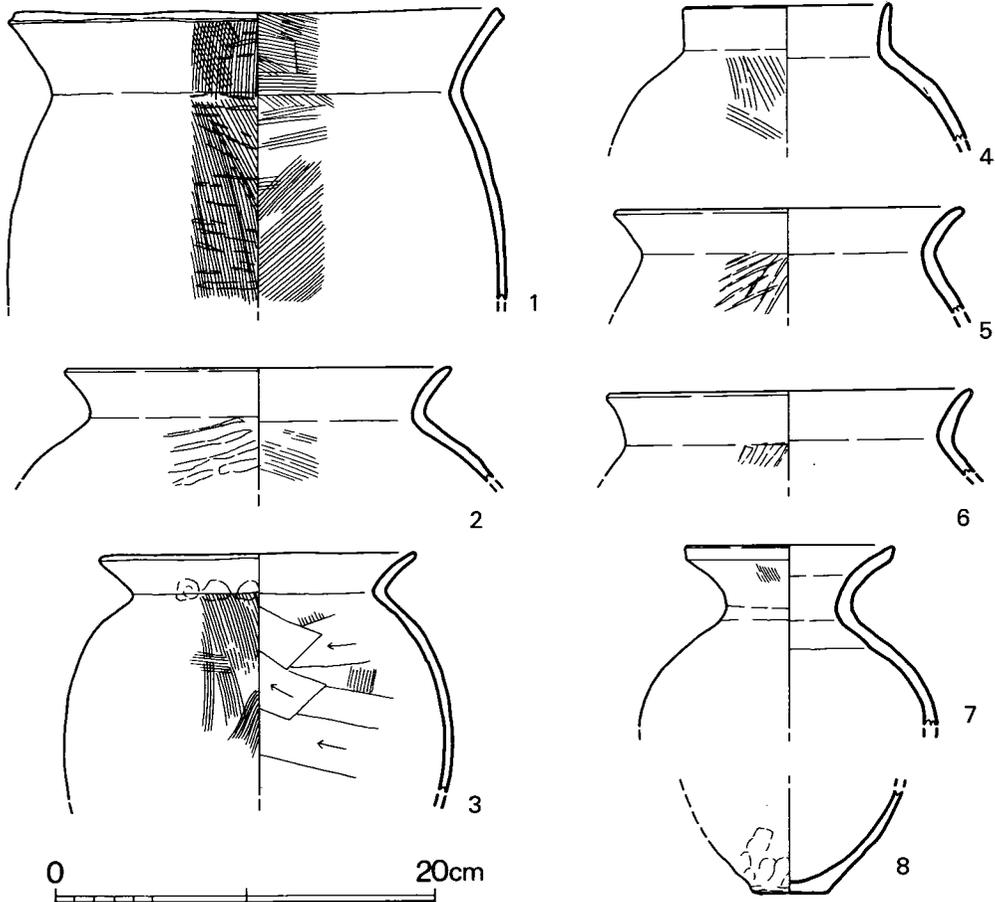
③ **甕** 土器溜りより出土した若干縦長の球状を呈する甕で口径16cm, 残高12cm程ある。焼成は普通で胎土には1~3mm位の砂粒を多量に含み赤褐色色粒, 金雲母が見られ, 色調は橙色を呈する。仕上げは, 体部上位まで細い刷毛でそれから頸部は若干荒い刷毛, 口縁外面はヨコナデで口縁内側から内頸下までナデられ, それ以下は刷毛後に左下から右上へのケズリが見られ

る。また、外面頸部付近には指圧痕も看取される。

④ 甕 覆土より採集した直口に球状の体部を有する壺に近く、口縁付近の約 $\frac{1}{4}$ を残した甕である。復元口径は11cmで、残高は7cmを測る。焼成は良く胎土には1~3mm位の砂粒をかなり含み金雲母が見られる。色調は、外面が橙色で内面が黄褐色を呈する。仕上げは、外面が頸部まで荒い刷毛後ナデで口縁部がヨコナデされ内面はナデが施されている。

⑤ 甕 覆土より採集した口縁部の約 $\frac{1}{4}$ ほどを残す甕で復元口径18cm、残高5.5cmを測る。焼成は不良で胎土には1~3mm位の砂粒をかなり含む赤褐色粒も見られる。色調は、黄褐色を呈する。仕上げは、焼成が不十分なため不明確で頸部下の叩きを僅かに確認できる。

⑥ 甕 覆土より採集した口縁部付近の約 $\frac{1}{4}$ ほどで復元口径19cmを測る。焼成は不良で胎土

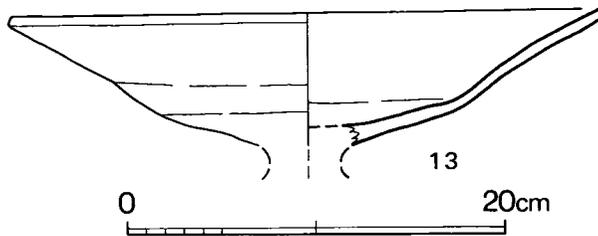
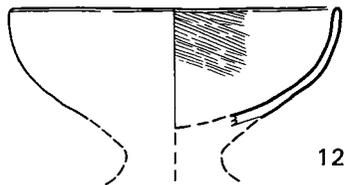
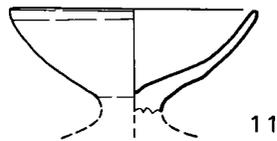
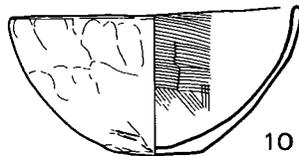
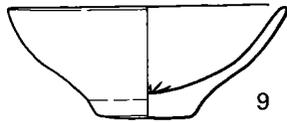


第 41 図 土器溜り出土，表採土器実測図（その1）(1/4)

に1~2mm位の砂粒をかなり含む。色調は黄橙色を呈する。仕上げは、焼成が不十分で外面は荒れ僅かに頸部下に叩きが残る。内面は口縁がヨコナデで頸部以下はナデられている。

⑦ 壺 覆土中より採集した口縁から胴部付近の約 $\frac{1}{4}$ 程を残し、復元口径11cm, 残高9.5cmを測る。焼成は不良で胎土には1~5mm位の砂粒をかなり含み赤褐色粒も見られる。色調は、薄黄橙色を呈する。仕上げは、焼成不十分ではあるが内面はナデ外面の口縁下に刷毛目を残す。

⑧ 底部 土器溜りより出土した底径4cm, 残高5.5cmを測る粗雑な作りの壺底部である。焼成は良く胎土には1~3mmの砂粒を若干含み金雲母も見られる。色調は、内面が褐色から灰黒色で外面は灰黒色を呈する。仕上げは、内外ともナデが施され内底付近に篋状工具の木口痕を残す。また外底部に木葉痕を鮮明に残す。



⑨ 鉢 土器溜りで出土し、口縁部の約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。器高5.9cm, 復元口径14.6cmを測る。焼成は良く胎土には1~2mm位の砂粒を若干含む。色調は、暗褐色を呈する。仕上げは、内外ともナデで口縁付近はヨコナデが施され内底付近に篋状工具痕が見られる。外底部には靱痕2個が看取せられる。

⑩ 鉢 覆土中より採集した口縁部の約 $\frac{1}{2}$ ほどを欠損すが、口径15.2cm, 器高7.4cmを測る。焼成は良く胎土には1~2mmの砂粒をかなり含み金雲母が見られる。色調は、茶褐色を呈する。

仕上げは、内面の底部付近がナデで口縁部まで左下から右上に向

第42図 土器溜り出土、表採土器実測図(その2)(1/4)

って刷毛が見られ外面はナデが施されている。口縁下には、粘土帯を押えた指圧痕が2段に見られる。また、外面には煤の付着が見られる。

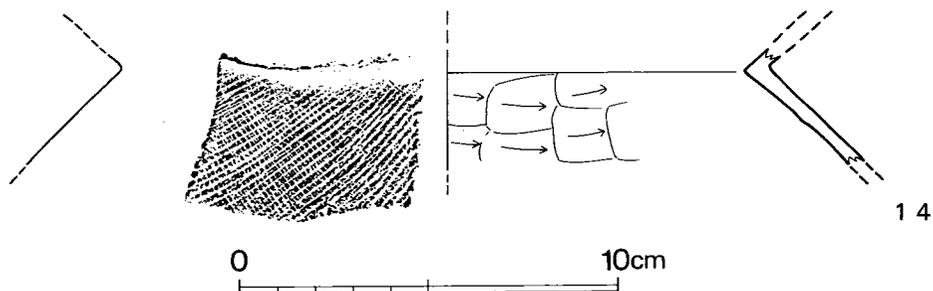
⑪ **台付埴** 土器溜りから出土した脚部と口縁部約 $\frac{1}{2}$ ほどを欠損している。埴部は5.5 cm、口径13cmを測る。焼成は良く胎土は1～3 mm位の砂粒を若干含み金雲母が見られる。色調は、薄橙褐色を呈する。仕上げは、内外ともナデが施され、内底から中ほどまで放射状のミガキが見られる。

⑫ **台付埴** 脚部と埴部約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。

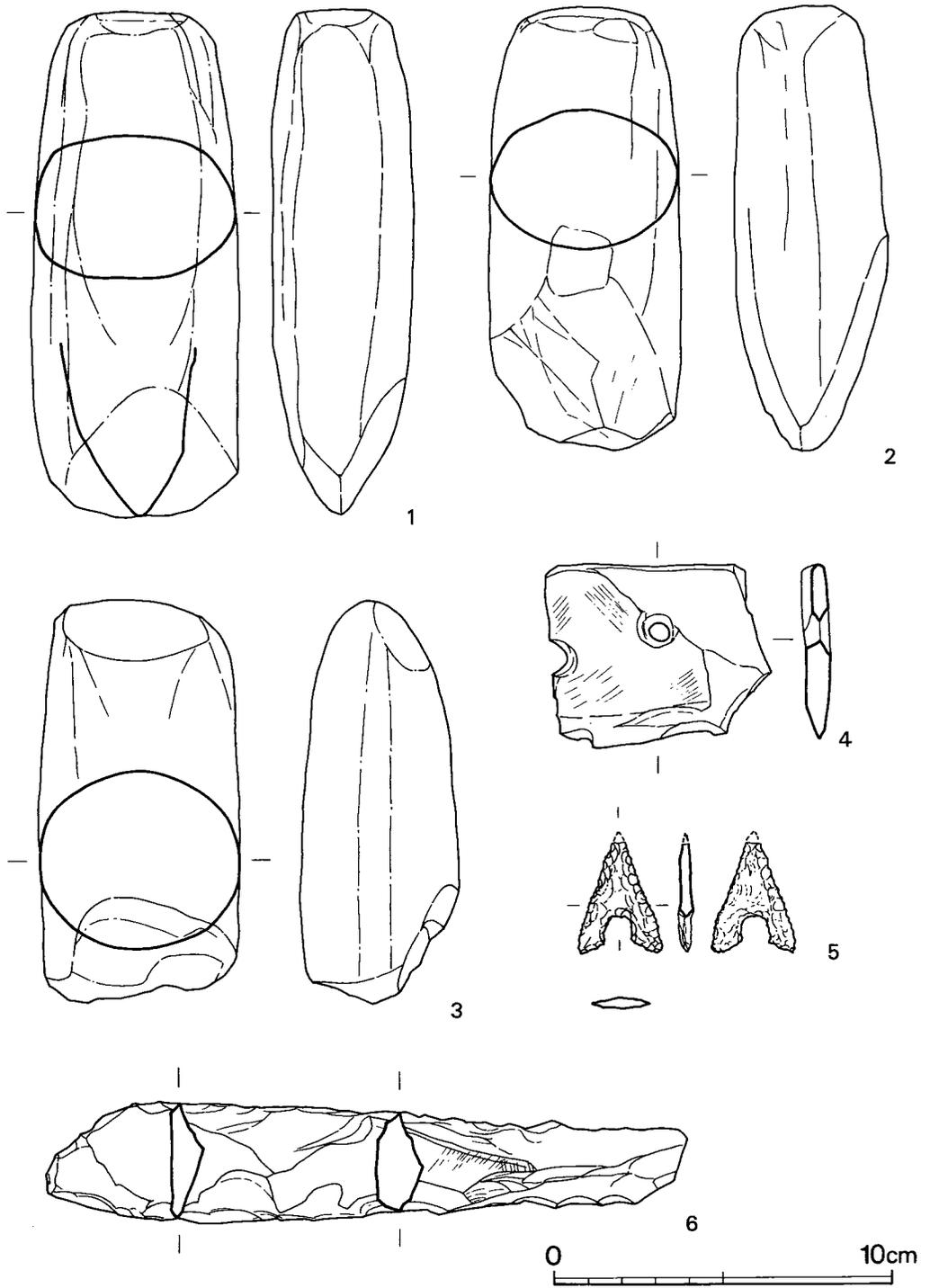
埴部高6.3 cm、復元口径17.4cmを測る。焼成は良く胎土には1～2 mm位の砂粒を若干含み赤褐色粒、金雲母も見られる。色調は、茶褐色を呈する。また、口縁部から体部中位にかけ2ヶ所の黒斑が見られる。仕上げは、内面が口縁から体中位まで左下から右上に向う刷毛で、中位以下の内底付近はナデられ、外面はナデが施されている。

⑬ **高坏** 覆土より採集した脚部を欠損し、坏部の約 $\frac{1}{2}$ を残す復元口径31cm、坏部深さ6 cmを測る。焼成は不良で胎土には1 mm位の砂粒を僅かに含み赤褐色粒も見られる。色調は、茶褐色を呈し外面の口縁下に黒斑を見る。仕上げは、焼成が不十分なため不明確であるが、外面の一部に暗文と思われる縦方向の篋磨きが見られる。

⑭ **甕** 頸部から口縁部にかかる4cm×7cmほどの細片ではあるが、器形は球形を呈する甕形土器である。焼成は良く胎土には細い砂粒を含むが精良である。色調は内外とも明茶褐色で外面には煤が付着している。仕上げは、外面は明瞭で頸部下が右下から左上へ、その後左から右上方向へ叩きが見られ、さらに頸部から口縁にかけて叩き目を消すようにヨコナデしている。内面は右から左へケズリを施している。器壁は、口縁部で4 mm、頸部下では2.5mmときわめて薄く作られている。以上の特徴から、庄内式土器と考えられる。



第 43 図 表採土器実測図 (1/2)



第 44 图 石器实测图 (1/2)

2 石器 (図版25, 第44図)

埋土中より, 石包丁, 石斧, 石鎌, 砥石が出土した。

石包丁(4) 扁岩製で両端を大きく欠損し, 残長6.5cm, 身巾5.5cm, 厚さ0.7cmを測る。刃部は片面より大きく研ぎ出し, 他方より若干の研ぎが見られる。

石斧(1～3) 3個体の蛤刃型石斧を採集した。1は完形品で, 砂岩製で全長15cmを測る。刃部は丁寧に研がれ使用痕を残す。2は刃部を若干欠損する。砂岩製で全長13cm程と思われ1と同様に刃部は研がれている。3は刃部の研ぎ出し部より欠損した砂岩製で残長12cmを測る。

石鎌(5) 6号甕棺墓の埋土中より出土した全長3.5cm, 基部巾2.5cm, 厚さ3mmの黒曜石製で丁寧に作られたもので弥生期の所産であろう。

砥石(6) 粘盤岩製で使用面の剥離が著しく, 側面には意識的と思われる剥離も見られ残存形状から石剣と見違えるほどである。

これらの石器の時期は, 縄文期の遺物出土がないことや今回までの資料から弥生前期から中期前半の所産と考えられる。

3 小 結

当遺跡は、弥生時代前期の貯蔵穴群と同中期中頃から同後期初頭の甕棺墓群が主体で、さらに歴史時代の竪穴住居跡からなる複合遺跡である。調査範囲が狭く、なおかつ近世墓で攪乱されているため不明確な点が多いが内容をまとめると次の様になる。

貯蔵穴11基の内、1号貯蔵穴を除いた他は遺物の出土がなく時期の決め手を欠く。しかし、1号貯蔵穴とさほど時間差がないと思われ1号貯蔵穴出土の土器が弥生前期末と考えられること、および8号甕棺墓と6号貯蔵穴、24号甕棺墓と7号貯蔵穴、21号甕棺墓と9号貯蔵穴、6号・7号甕棺墓と11号貯蔵穴などの切り合い関係と貯蔵穴の形状から、他の貯蔵穴も前期末から中期中頃頃に属するものと考えられる。

甕棺墓29基は、近世墓により著しい攪乱を受けてはいるが、甕棺の形状から時期は中期中葉から後期初頭と考えられる。また、墓域も全容を示すものではないが調査区の西半に片寄っていて、近世墓の攪乱がなかった調査区中央部の北側、標高22.5mの発掘区内では最高所の16号甕棺墓の北東部から5号貯蔵穴の一带には全く検出されなかったことから16号甕棺墓が墓域の東限と考えられる。西側は、台地の縁にそって北から22号・26号・25号・3号甕棺墓と続いている。南側は、3号・5号甕棺墓と検出のうち3号は台地の縁辺崖面中であって地形的に南限といえる。以上から甕棺墓は、東西10～15m南北30m程の略U字状に集中し北側は同時期の甕棺墓が検出された沼尻遺跡、さらに鏡・鉄戈を出土した峯遺跡へ続くものと思われる。

検出した甕棺墓は、第2表に示す通りに主軸方位、埋置角度に一定の規則性は見られない。しかし、第45図に示すように甕棺墓相互の空白地からA・B・C・Dの4群に分けられ、各々次のようになる。

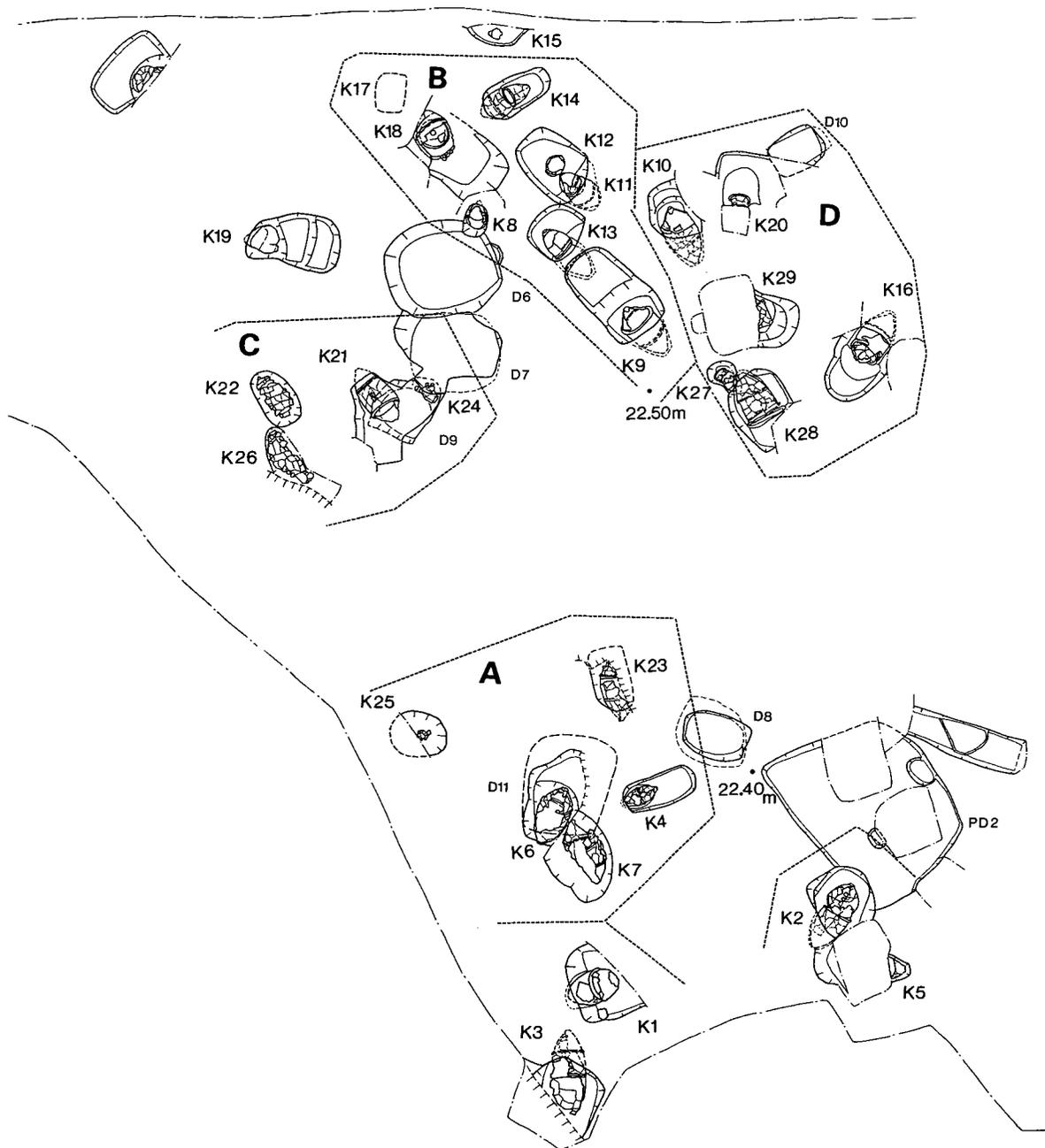
A群 6・7号(成人用)が中心で周囲には23号(成人用)4・25号(小児用)があり4号は6号の東側に位置している。

B群 9・11・13号(成人用)が中心で周囲には14・18号(成人用)8・12号(小児用)があり、8号は18号墓壇の南隅上面に12号は11号墓壇内に位置している。

C群 21号(成人用)が中心で周囲には22・26号(成人用)24号(小児用)があり、24号は21号墓壇の北東側近くに位置している。

D群 29号(成人用)が中心で周囲には10・16・20・28号(成人用)27号(小児用)があり、27号は28号墓壇の北側で接する。

1～2基の成人用甕棺墓を中心に4～7基で1つの単位を構成し、1～2基の小児用甕棺墓を含んでいる。B群の11号と12号甕棺墓については前節で触れた通り血縁的絆をなすと考えられ、他群中に見られる成人用と小児用甕棺墓においても同様な関係が窺え群を構成する4～7基の甕棺墓



第 45 図 甕棺墓群の群構成 (1/150)

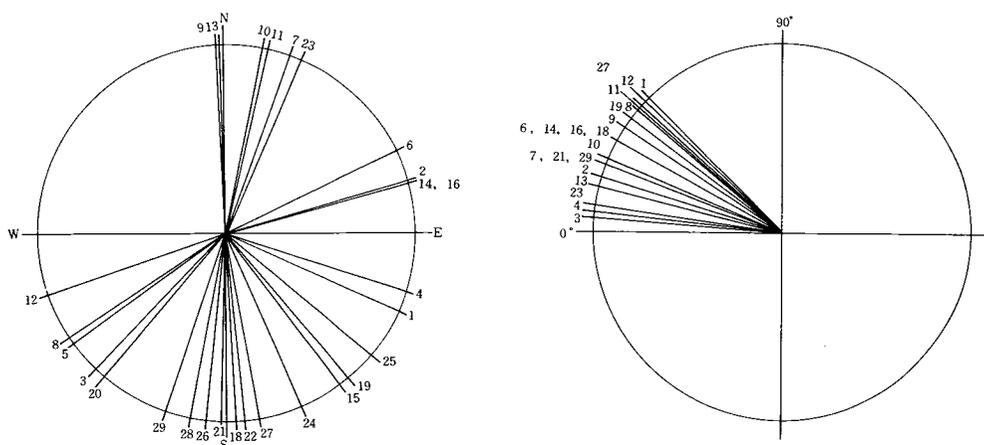


表2 甕棺の主軸方位と埋置角度

は家族的血縁関係をなすものと憶測される。

土器溜りと覆土中より採集した弥生終末から古墳時代初頭の遺物は破片資料が多いが、在地的要素に移入土器の影響を受けたものが多い。また、庄内式土器片もあり今後の調査で当該時期の遺構検出が期待できる。

遺跡は、前記したように約400m×150m程の低台地に所在し、同台地上には峯・沼尻、塚本等の遺跡が散在する。

その内容については「埋れていた朝倉文化」⁽¹⁾、「甘木市史」資料⁽²⁾、考古編に記述されている。

【峯遺跡】では甕棺墓8基が発見され甕棺内より前漢鏡（連弧文昭明鏡）1面、鉄戈1口が出土している。

【沼尻遺跡】では弥生前期土塚墓4基、同中期小児甕棺墓1基。および古墳周溝らしき溝が検出されている。また弥生中期甕棺墓内より古墳時代初頭の銅鐻2点出土し、石剣・石斧なども採集されている。

【塚本遺跡】では弥生中期から同後期の住居跡、および古墳時代初頭の方形周溝墓らしきものが検出され、二重口縁壺、高杯が出土している。

これらの遺跡と今回調査の遺跡とは各時期にわたって併存するものである。特に今回調査の弥生中期甕棺墓群は、昭和初めに調査された峯遺跡の鏡、鉄戈を副葬した甕棺墓と同一時期であり、相互に密接な関連を有することが窺える。しかし、今回調査対象地とは相互にかなりの間隔があり直接的に関連づけにくく、他の時期の遺構に関しても同様である。

現在までの調査は試掘的段階で、断片的資料にとどまっている。近く周辺では圃場整備事業の計画もあると聞く。今後の調査で全面的調査へと進み、遺跡相互間の有機的関係が明らかとなり史的全容を明らかにしたいと思う。

註1. 福岡県立朝倉高等学校史学部「埋もれていた朝倉文化」一昭和44年一

註2. 甘木市史編さん委員会「甘木市史」(上巻)一昭和57年一

図 版



(1) 峯遺跡遠景(南西より)



(2) 峯遺跡遠景(北東より)



(1) 1 区 全 景 (北西より)



(2) 2 区 全 景 (北より)



(1) 1号 甕 棺 墓



(2) 1号 甕 棺 の 埋 葬 状 態



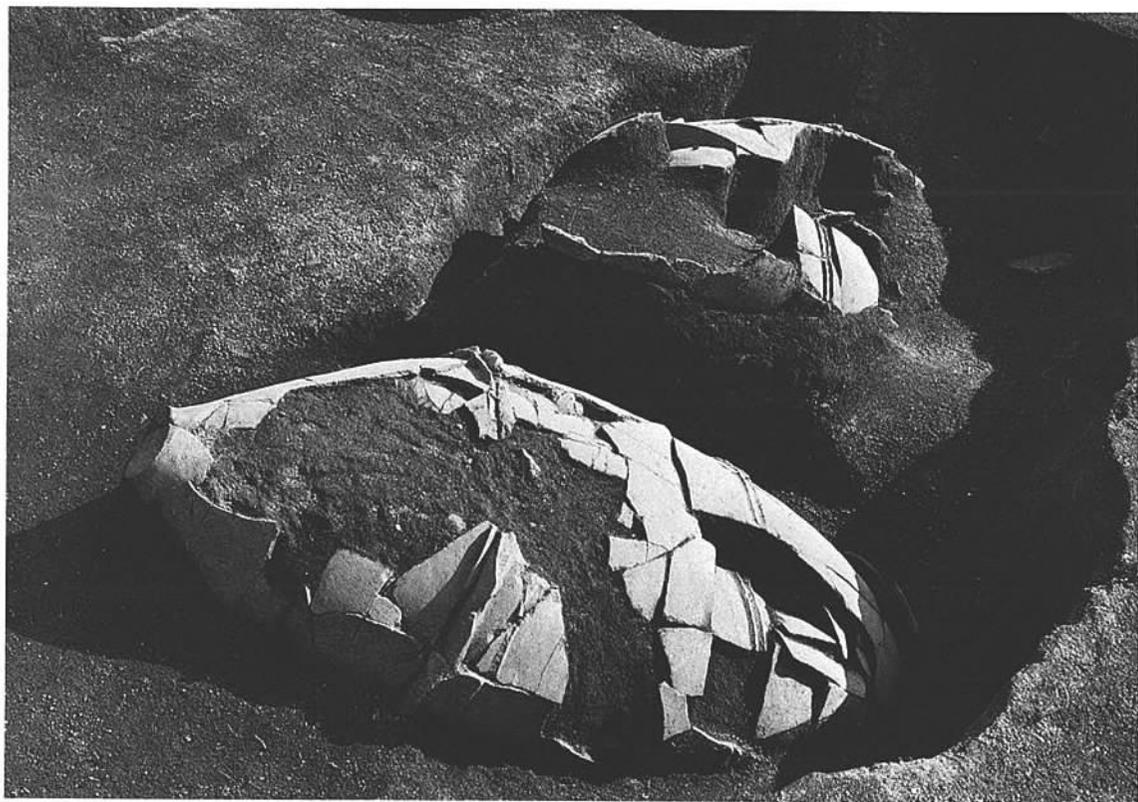
(1) 2 号 葬 棺 墓



(2) 3 号 葬 棺 墓



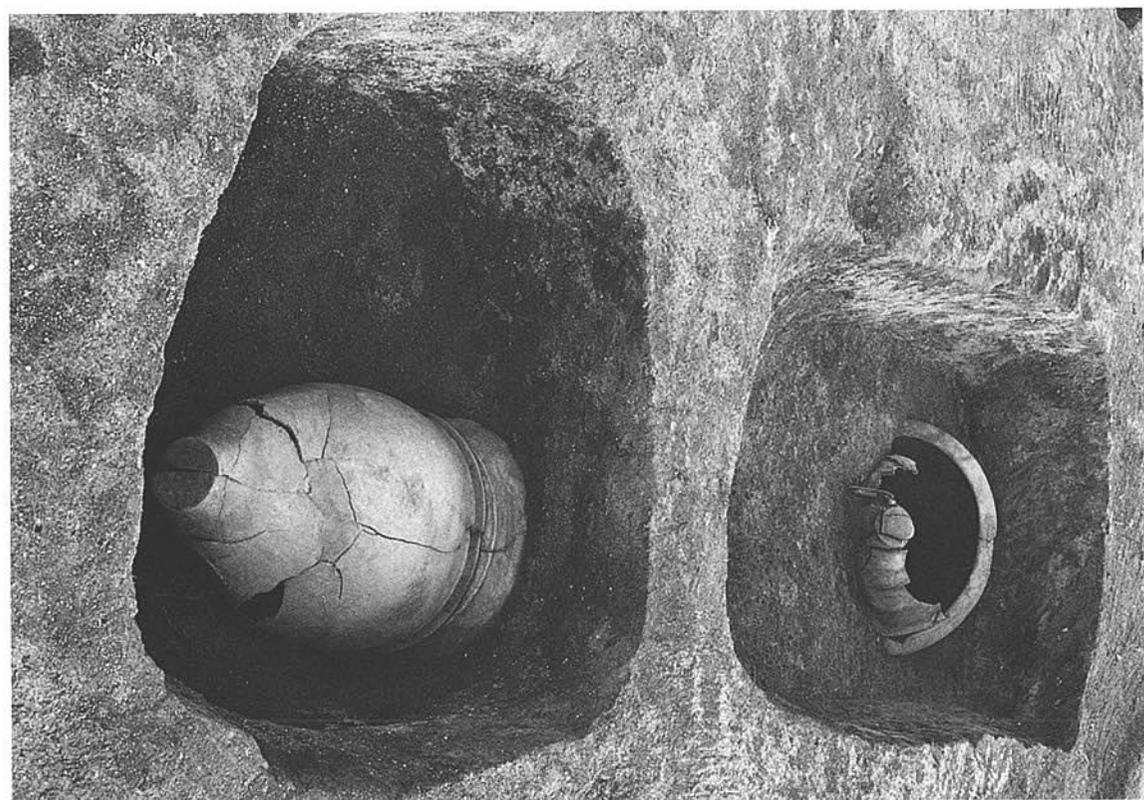
(1) 4 号 甗 棺 墓



(2) 6 号 · 7 号 甗 棺 墓



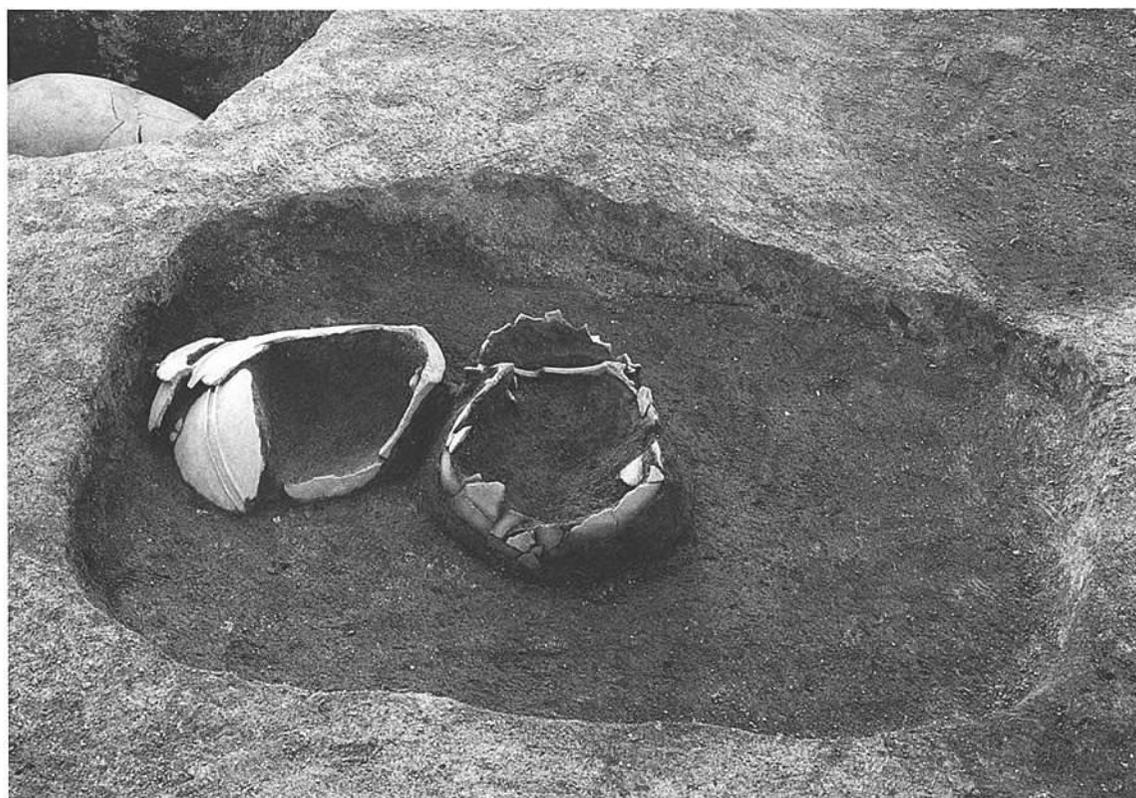
(1) 8号 甕 棺 墓



(2) 9号 · 13号 甕 棺 墓



(1) 10号 甗 棺 墓



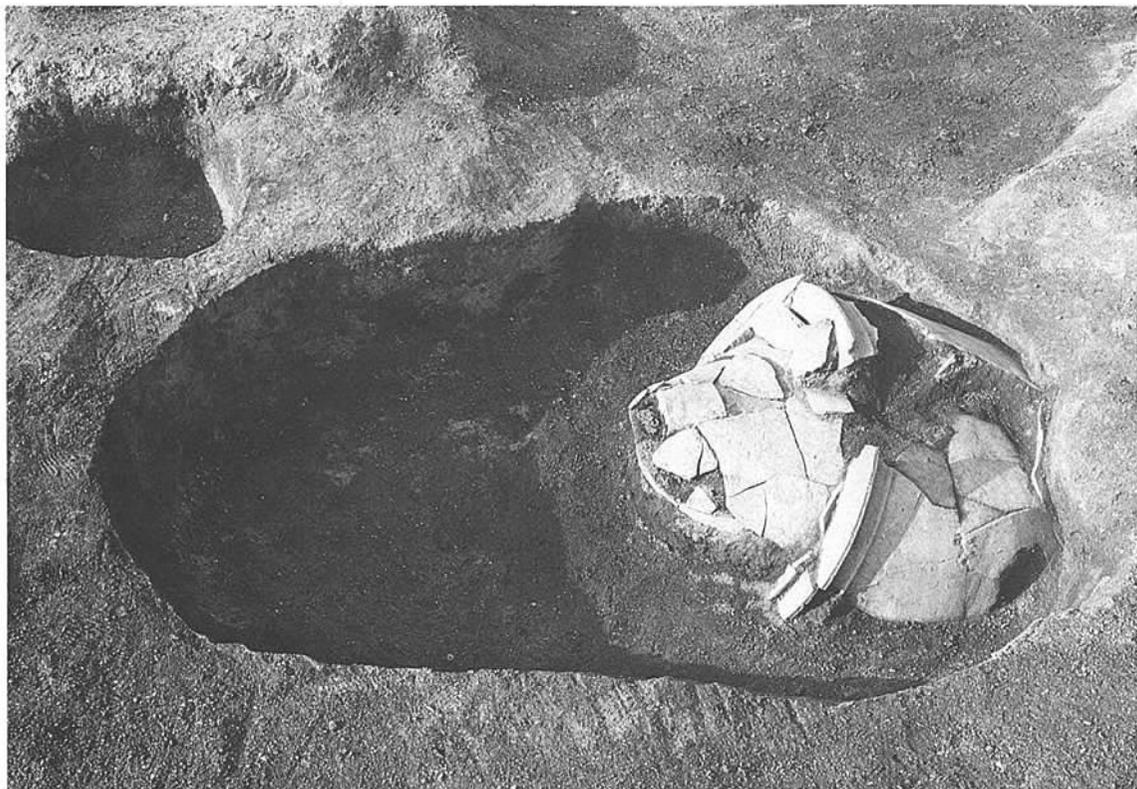
(2) 11号 · 12号 甗 棺 墓



(1) 14 号 甗 棺 墓



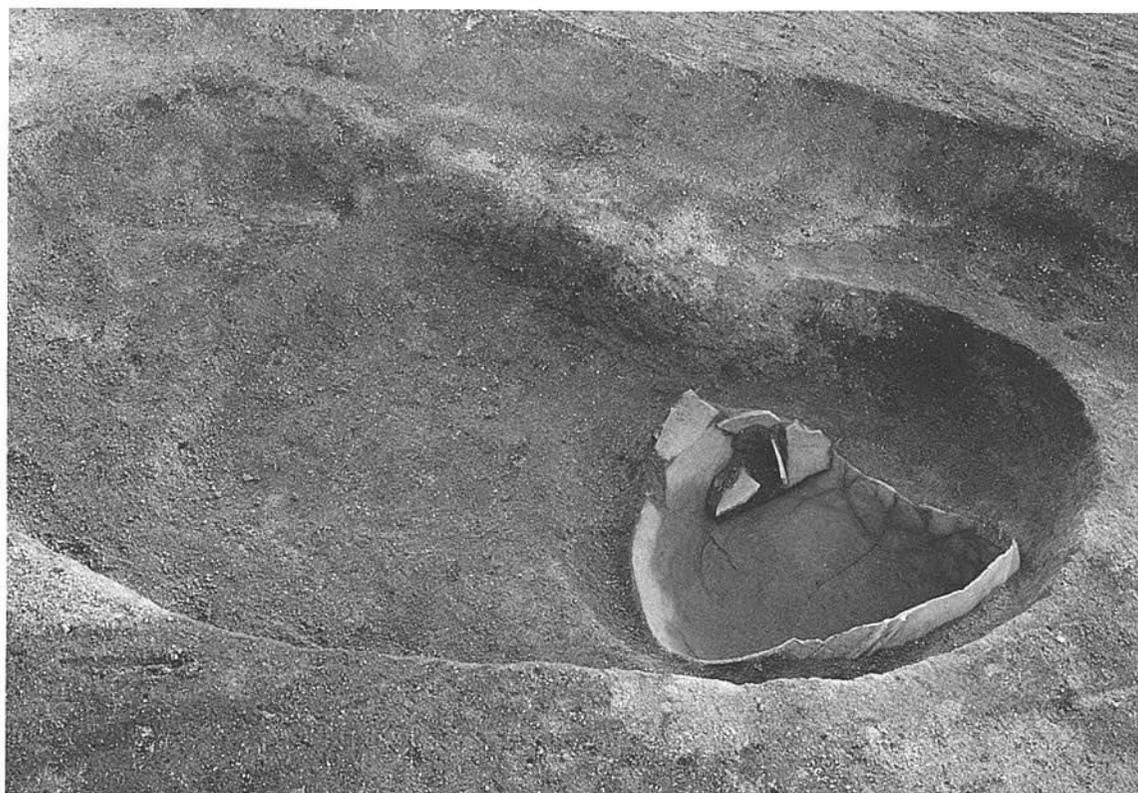
(2) 15 号 甗 棺 墓



(1) 16号 甕棺墓



(2) 18号 甕棺墓



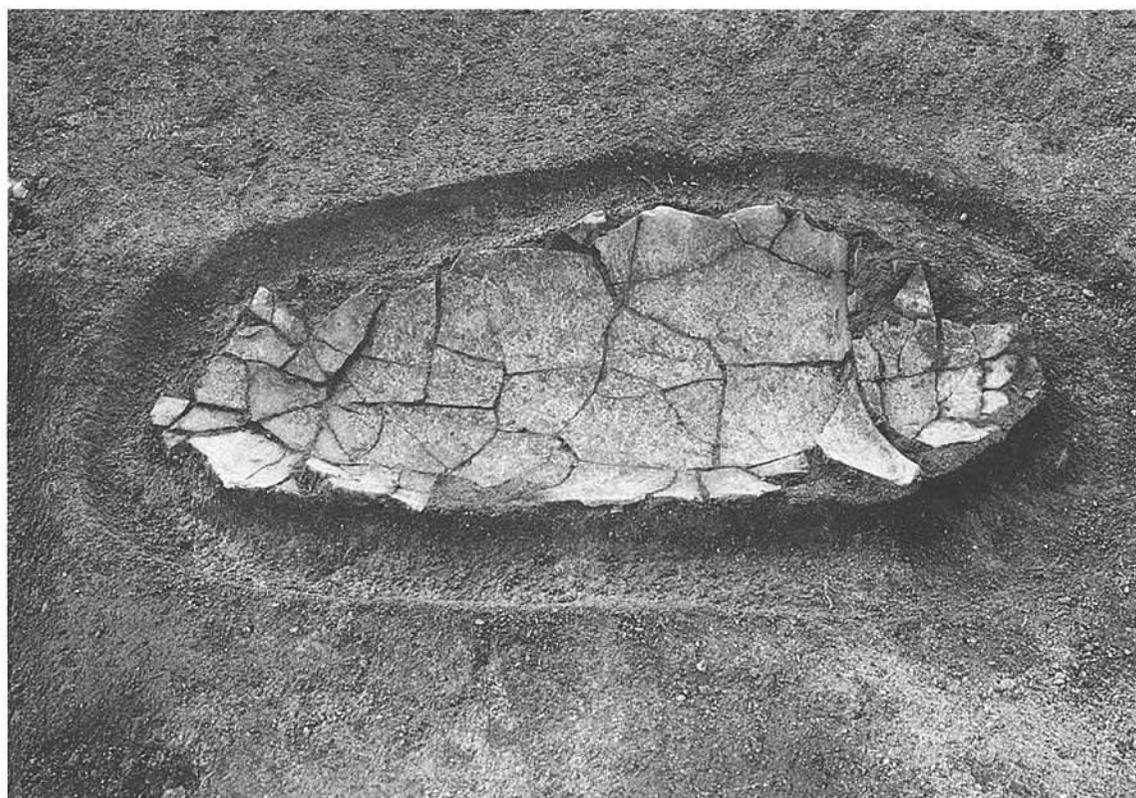
(1) 19 号 甗 棺 墓



(2) 20 号 甗 棺 墓



(1) 21 号 甗 棺 墓



(2) 22 号 甗 棺 墓



(1) 23 号 裹 棺 墓



(2) 25 号 裹 棺 墓



(1) 26 号 甗 棺 墓



(2) 27 号 甗 棺 墓



(1) 28 号 甗 棺 墓



(2) 28 号 甗 棺 墓 盖 部 土 层



(1) 29 号 葬 棺 墓



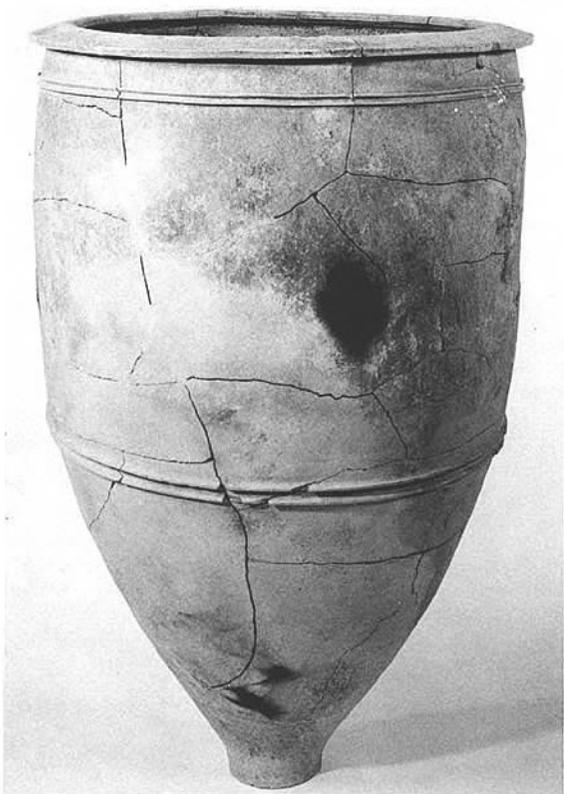
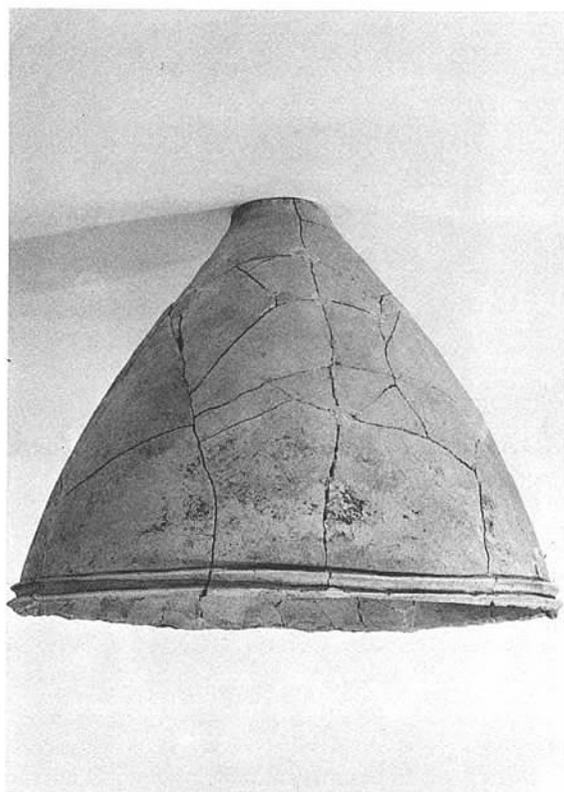
(2) 1 号 祭 祀



(1) 1号竖穴住居跡（南西より）

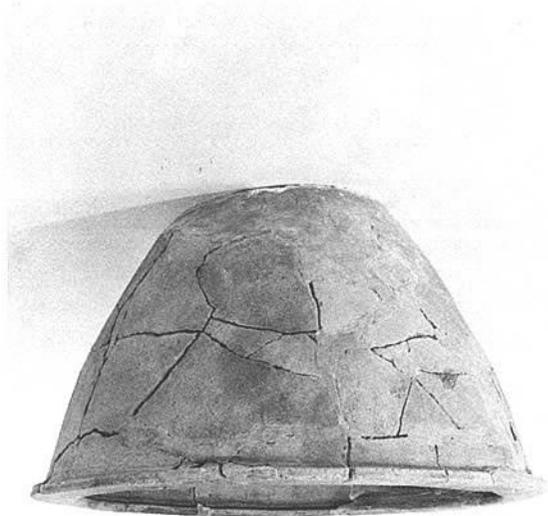


(2) 2号竖穴住居跡（南東より）

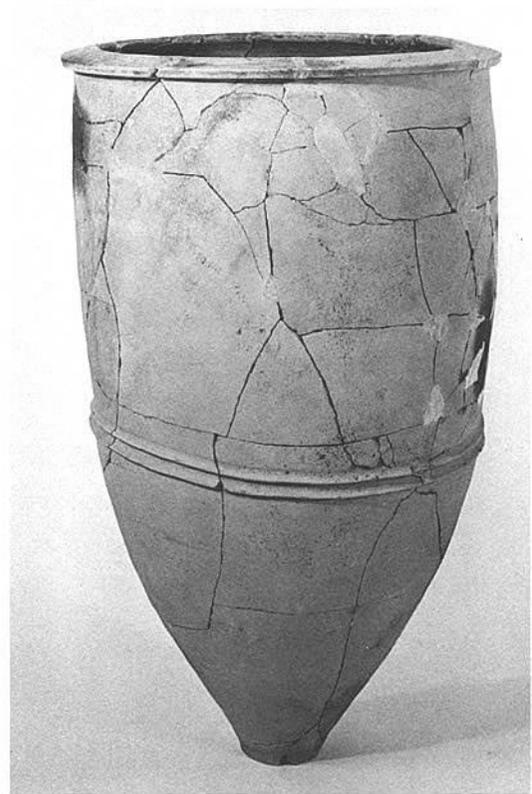


(1) 1 号 甕 棺

(2) 4 号 甕 棺



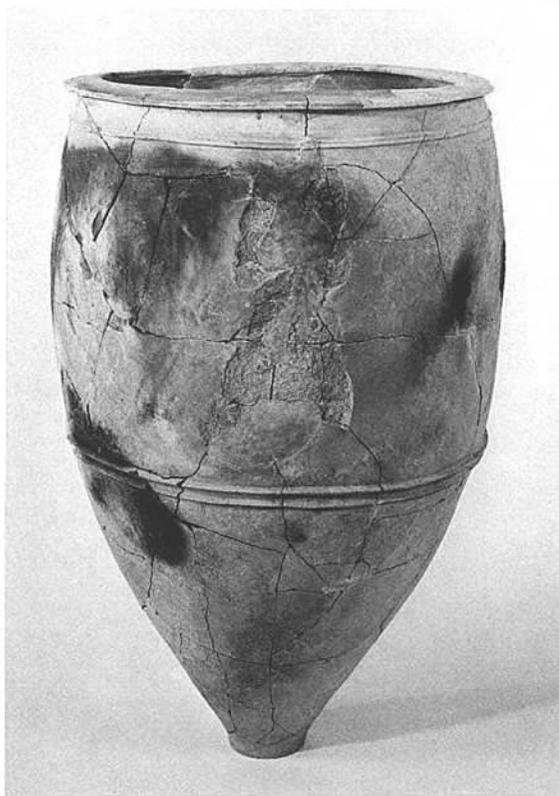
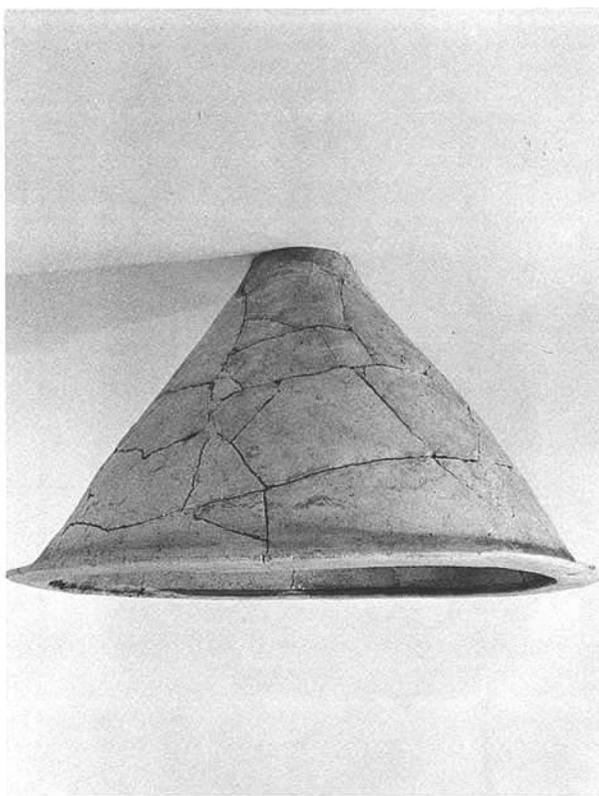
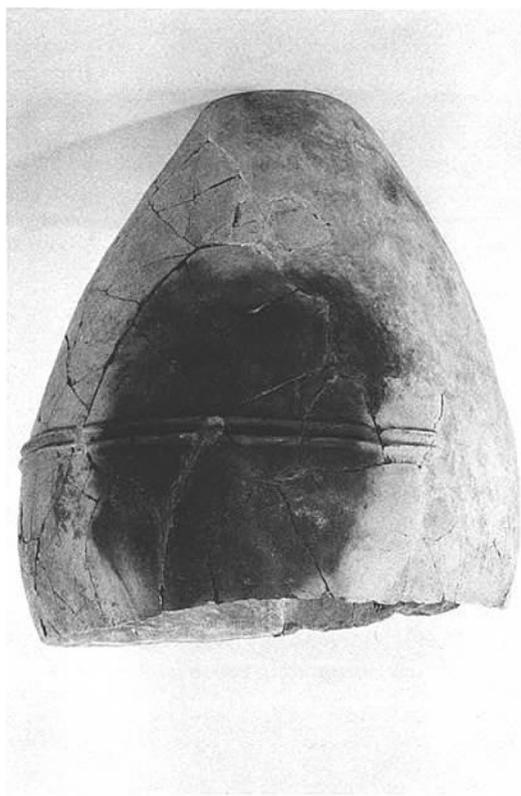
(2) 2 号 甗 棺 补 修



(1) 2 号 甗 棺



(3) 7 号 甗 棺 补 修



(1) 7 号 甗 棺

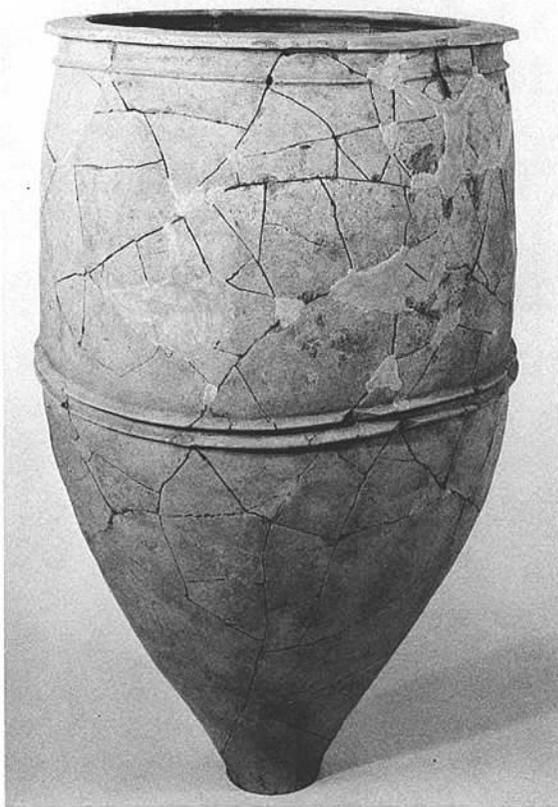
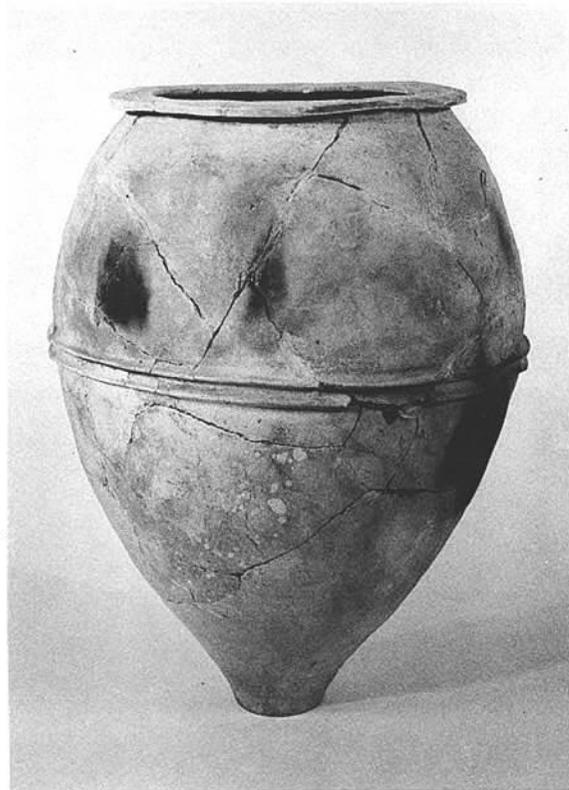
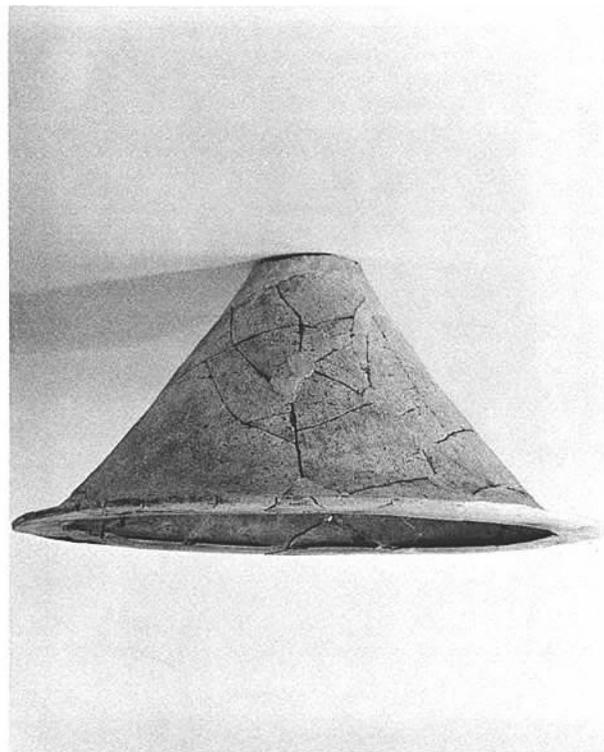
(2) 9 号 甗 棺



(1) 11 号 甗 棺

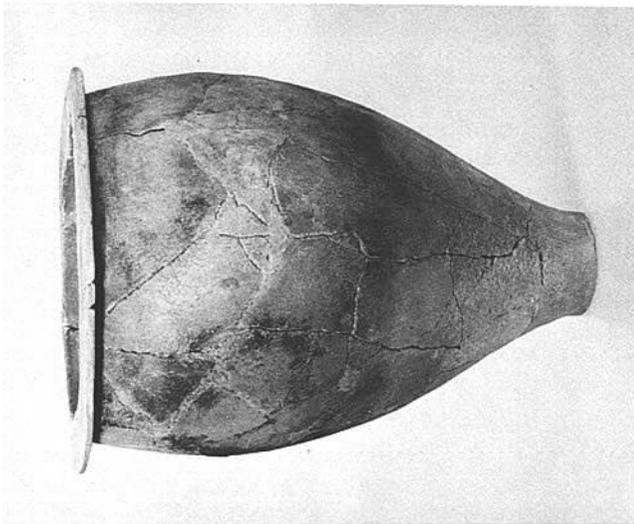
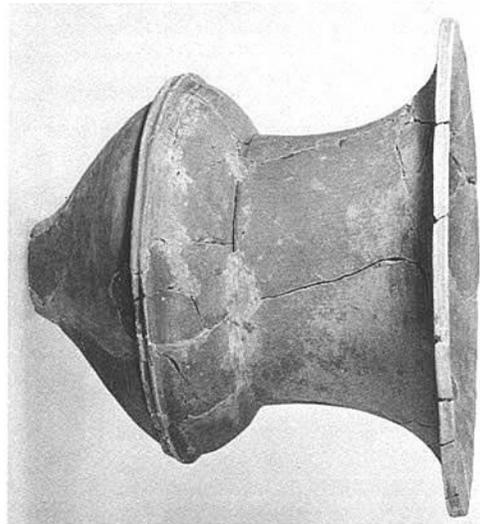


(2) 13 号 甗 棺

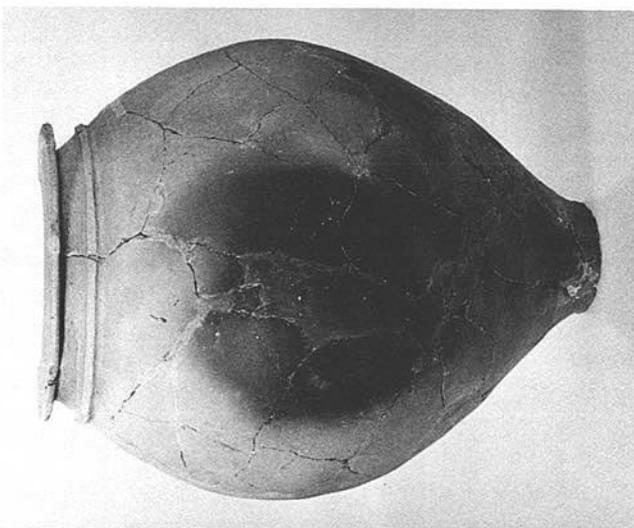
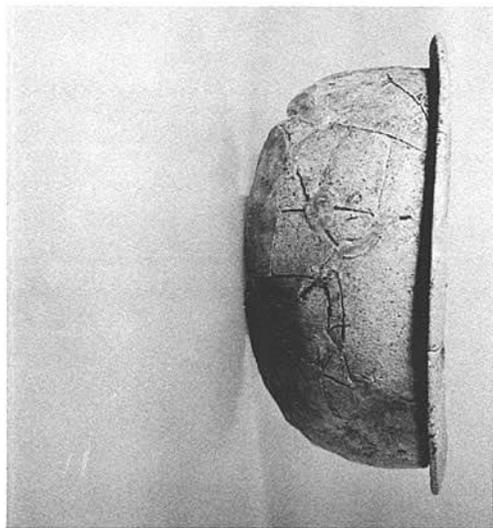


(1) 14 号 甗 棺

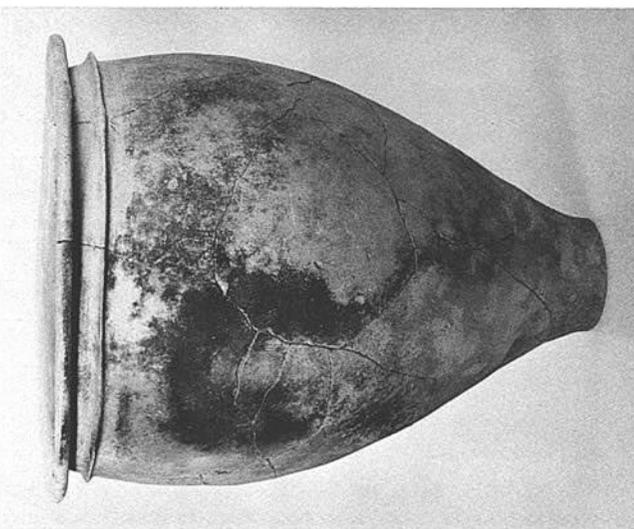
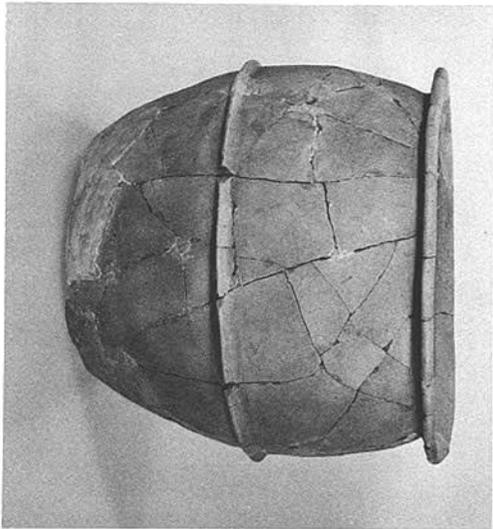
(2) 16 号 甗 棺



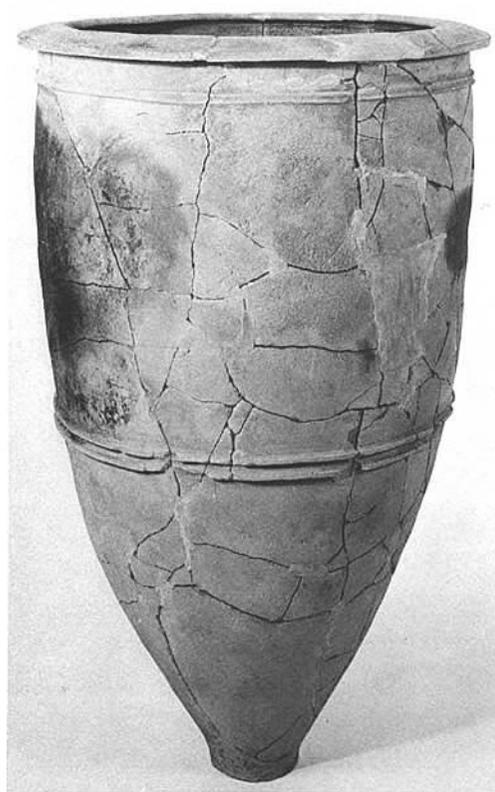
(3) 27号 甗 棺



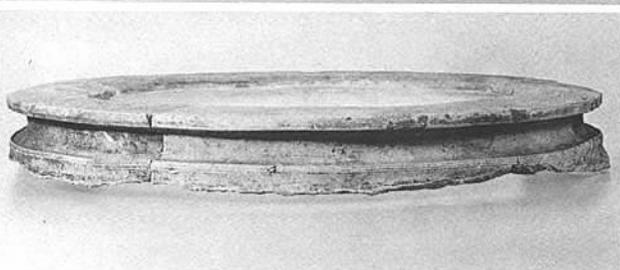
(2) 12号 甗 棺



(1) 8号 甗 棺



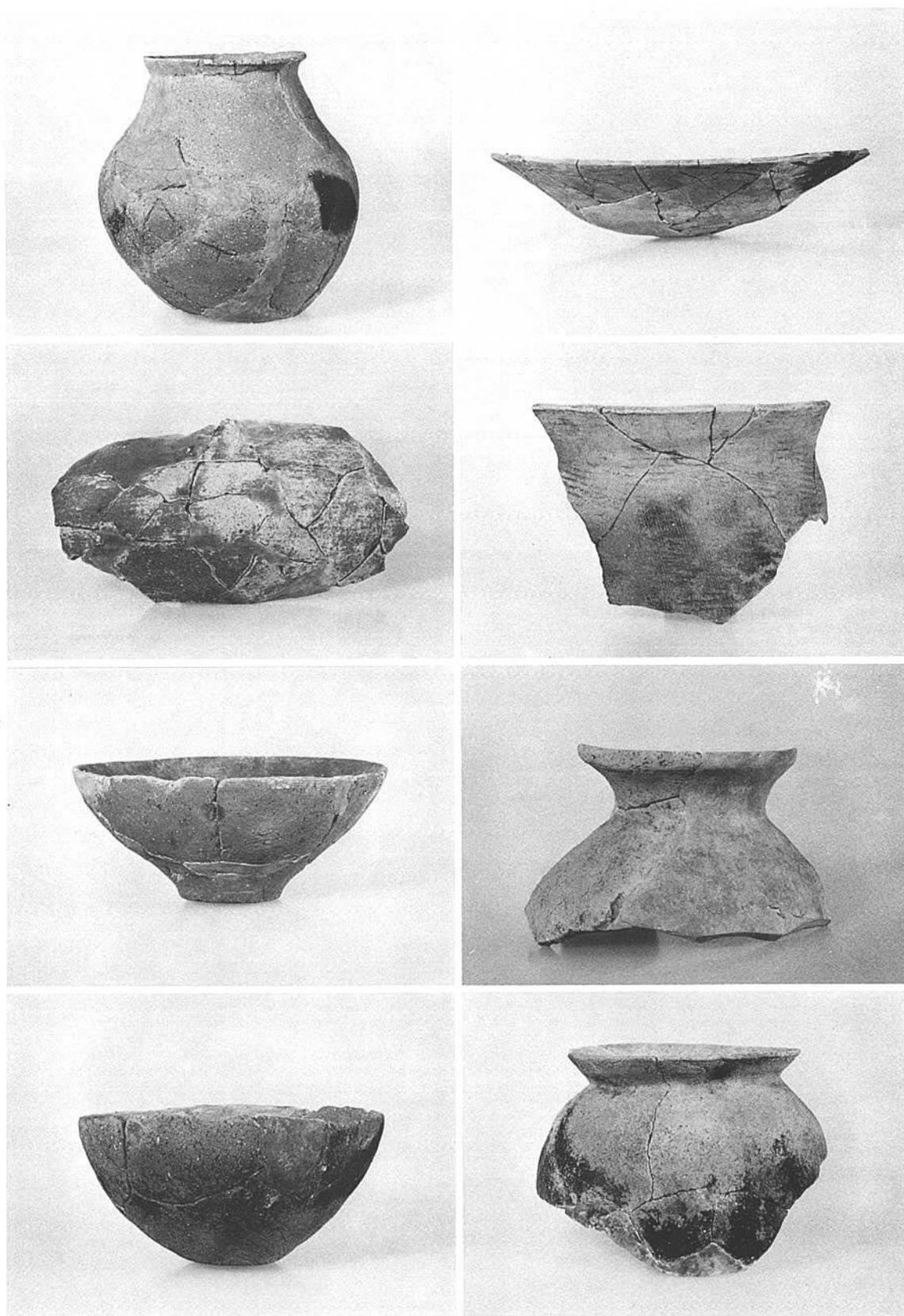
(1) 28号 甕 棺



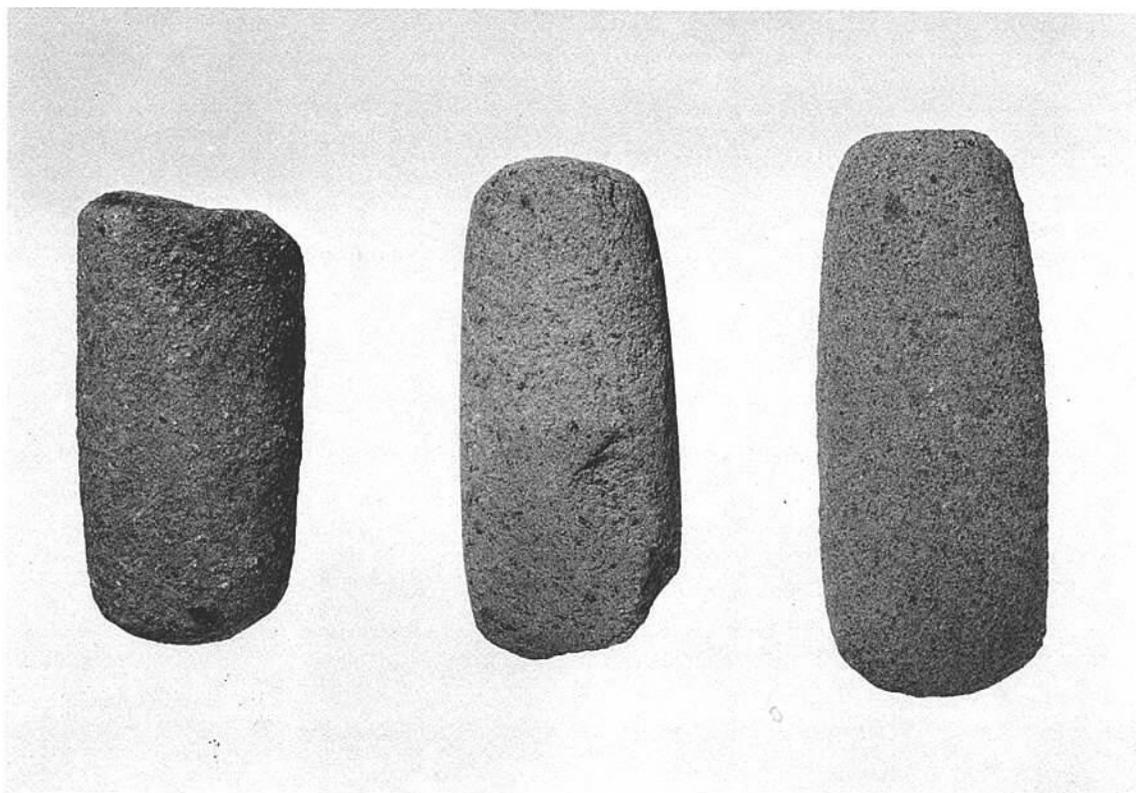
(2) 1号 祭祀 出土 土器



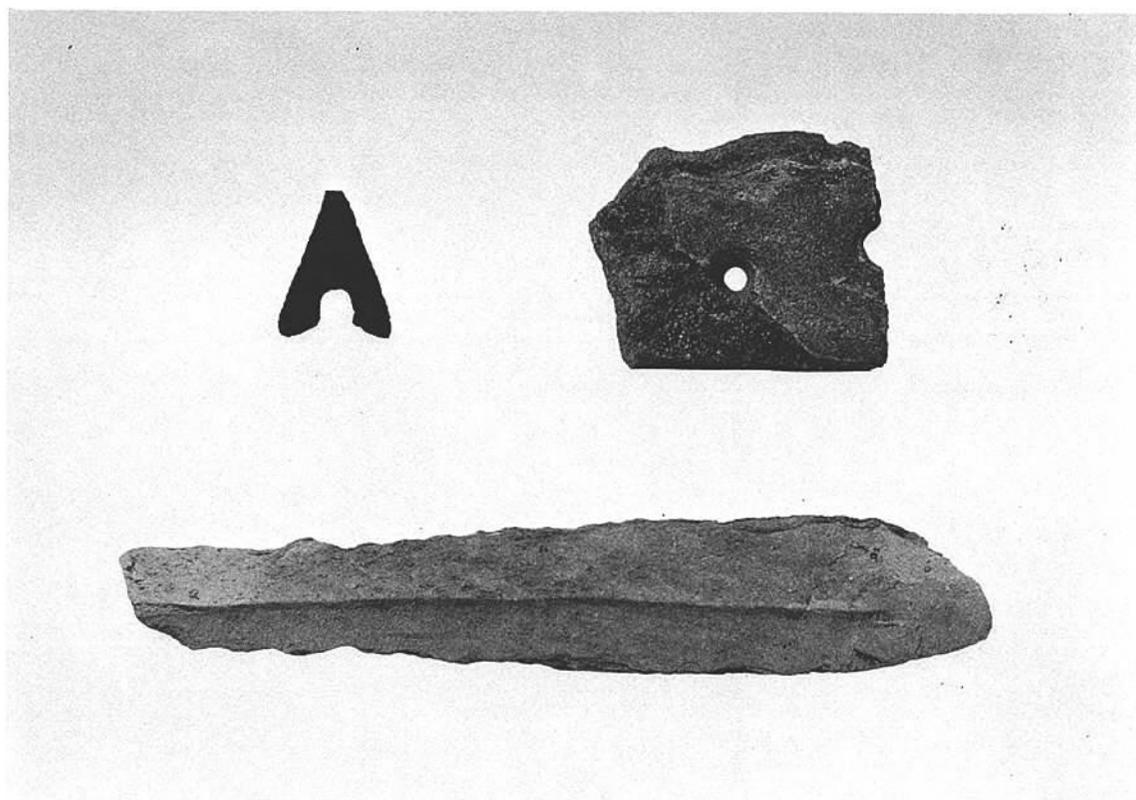
(3) 昭和2年前漢鏡・鉄戈出土地の現況（南から）



1 1号貯藏穴出土土器 2 21号葬棺墓埋土中出土土器
3, 7, 8 土器溜り出土土器 4, 5, 6 採集土器



(1) 採集石器



(2) 採集石器

III 発掘調査の記録

2 七板遺跡(F区)の調査

1 遺跡の概要

東小田・七板遺跡は、宝満川と合流する曾根田川、同じく宝満川に合流する草場川の両河川によって形成された河岸段丘上に立地する。その中には数本の谷が挟り込み小河川が南流している。遺跡の南側にもその内の1本の谷間が形成され、周辺的环境から生活場所としては適した立地条件を備えている。

昭和57年度には路線に隣接する両側で圃場整備に伴う事前の発掘調査が実施され（A～E地区）、数百軒にのぼる竪穴住居跡と甕棺墓、環濠等が確認できている。

今回の調査区は上記の遺跡と一連の遺跡であるが、道路敷地内の調査のため遺跡内容は断片的な把握しかできず、いずれ東側調査区の報告書が刊行されることによりその全容が判明するであろう。この項では広大な遺跡の一部ではあるが、その概要を説明しておく。

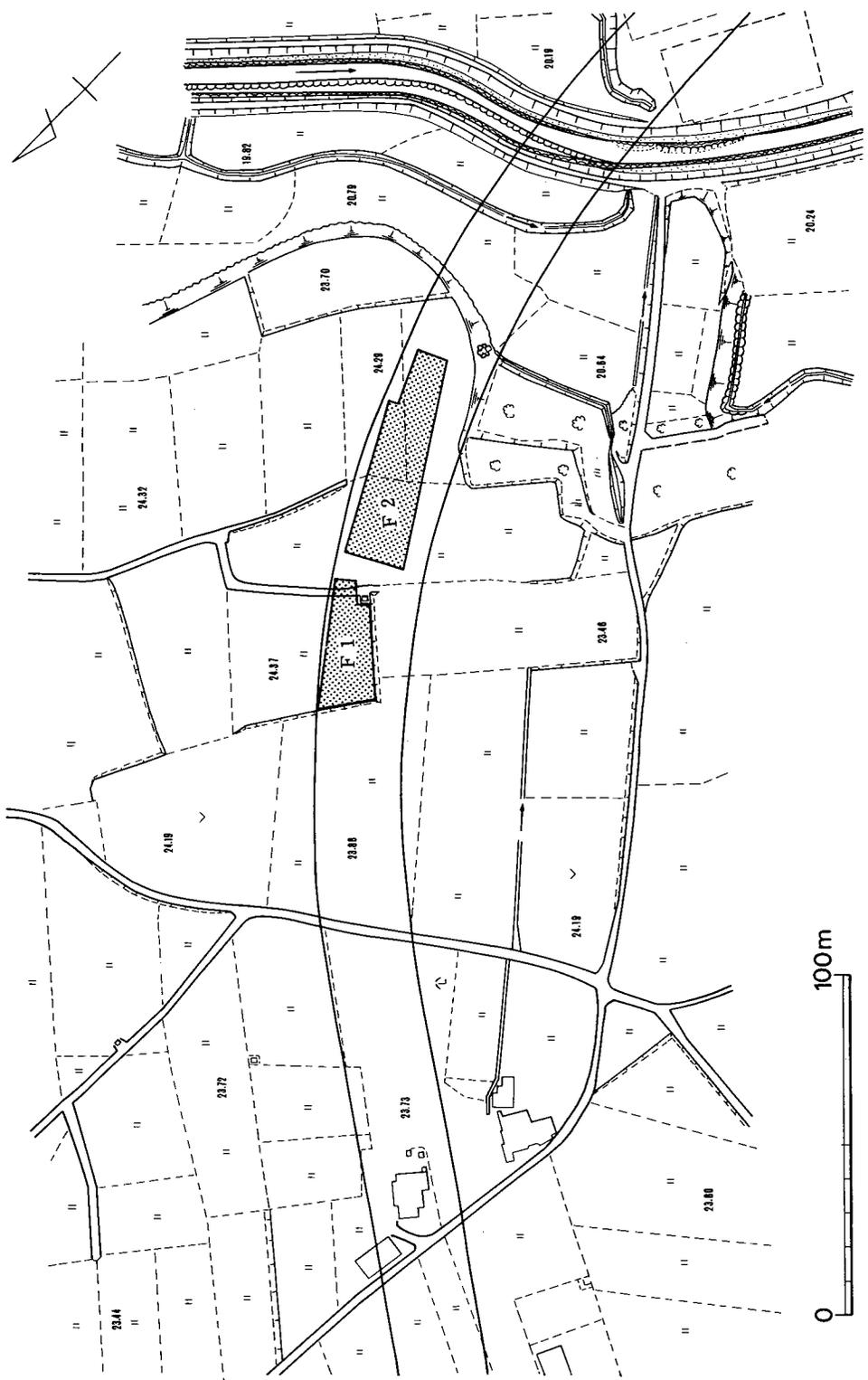
調査は便宜上F1区・2区に分けて実施した。台地上は黄褐色ロームの上層に阿蘇の火山灰が堆積していたが、F1区では田畑の耕作で削平を受け耕作土下は大半が黄褐色ロームであった。F1区の南側からF2区の北側にかけては、旧地形が浅い谷となっており、火山灰が一面に堆積していた。このため竪穴住居は設営されておらず、必然的に集落のグルーピングが可能となっている。しかもその空間には土壙群を配置し、日常什器を投棄した集落祭祀遺構が認められる。

F1区での内訳は弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居跡が8軒、古墳時代の竪穴住居跡が3軒、時期不明の住居が1軒、掘立柱建物1棟、時期不明の周溝状遺構1基、平安時代の土壙1基、弥生時代・古墳時代の溝状遺構を含め溝4条、その他柱穴群等を検出した。

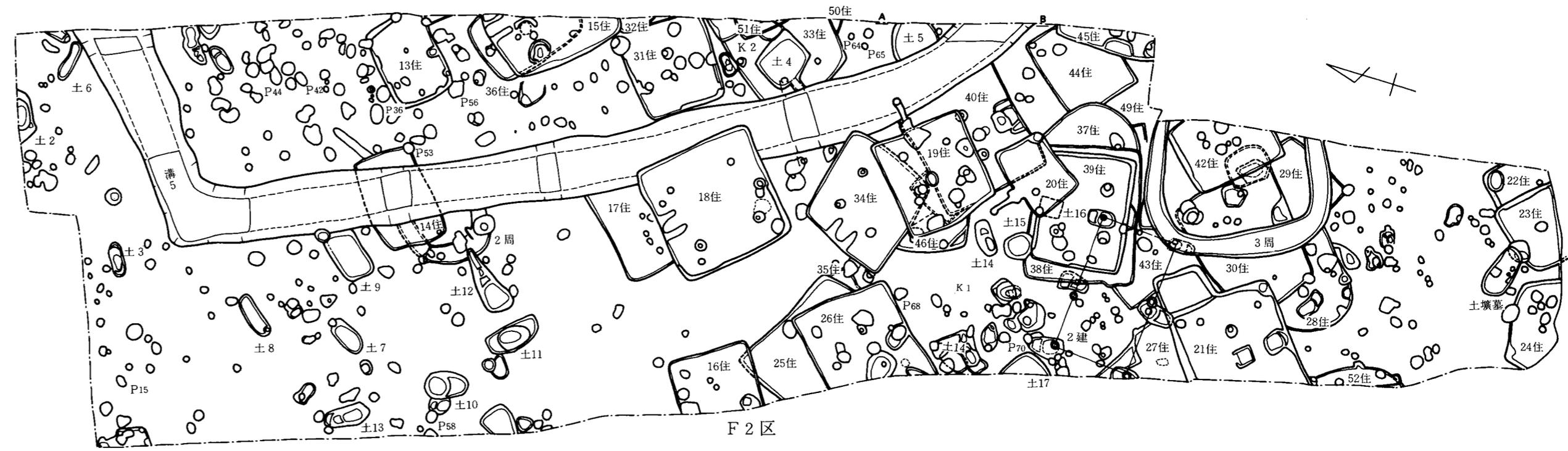
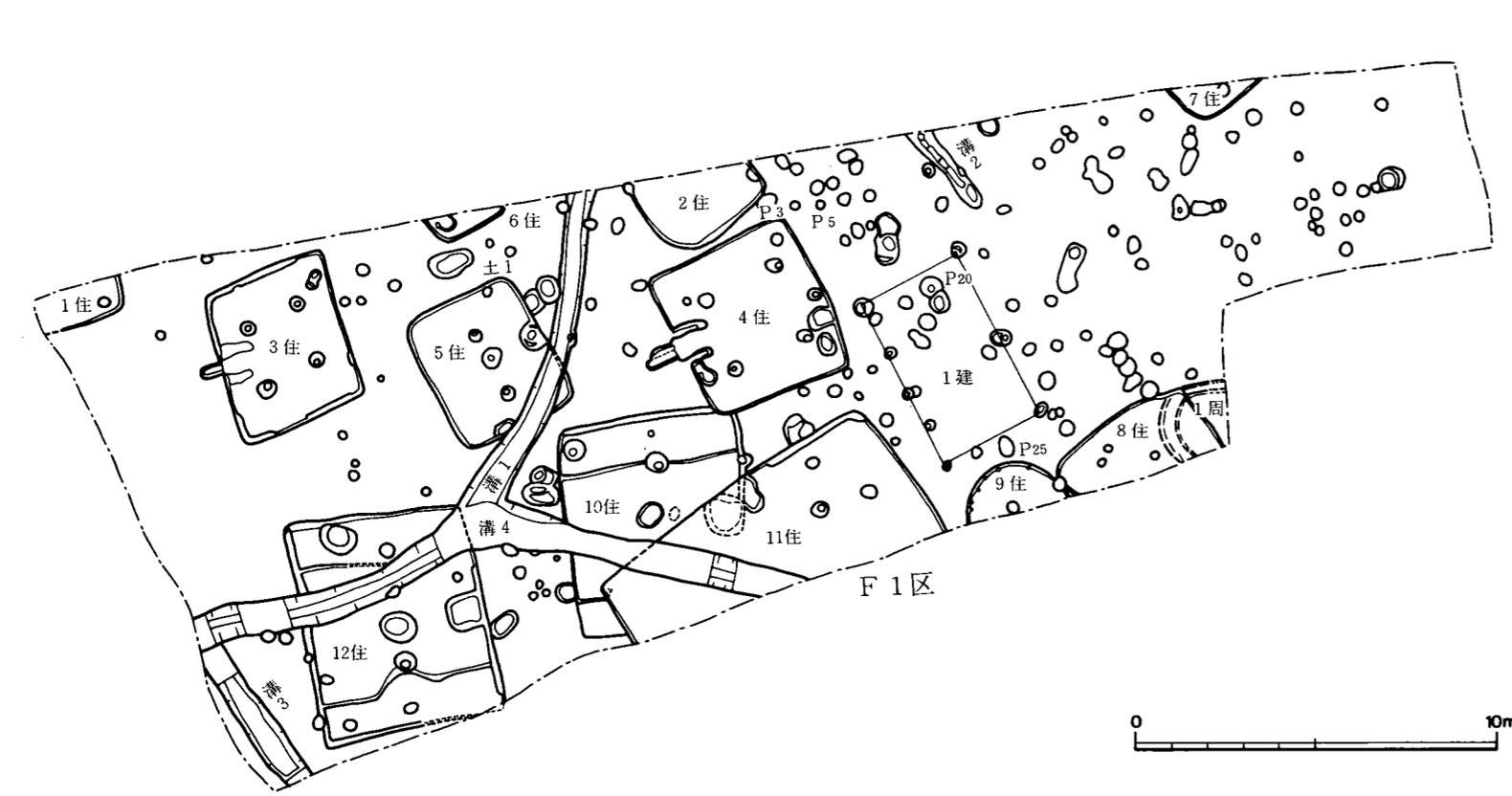
F2区では弥生時代中期の竪穴住居跡24軒、古墳時代の竪穴住居跡4軒、奈良時代の竪穴住居跡2軒、弥生時代の掘立柱建物1棟、時期不明の周溝状遺構2基、弥生時代の土壙17基、環濠1条、甕棺墓2基、歴史時代の土壙墓1基、その他柱穴多数を検出した。

F2区の環濠は昭和57年度の調査で確認された環濠に続くもので台地上の集落を広範囲に区画し環濠集落を構築している。しかし、今回の調査では環濠に伴う竪穴住居は明らかにできていない。環濠の外側では竪穴住居の重複が激しく、住居内容に不明瞭な点が多々存在したことはいかに当台地が居住条件に適していたかが判る。最初の集落は弥生時代中期前葉頃から営まれ始め、弥生時代後期、古墳時代中・後期、奈良時代へと若干の間欠性は認められるものの連続と集落が設営されていたのである。さらに、F2区では小児用甕棺墓を2基検出したが、周囲には甕棺墓は見当らず、調査区域外に墓地群の存在が推測できる。

以上遺跡の概要を述べたが、次の項では個別遺構を説明する。



第 46 図 七板遺跡周辺地形図 (1/2,000)



第 47 図 七板遺跡 F 1・2 区遺構配置図 (1/200)

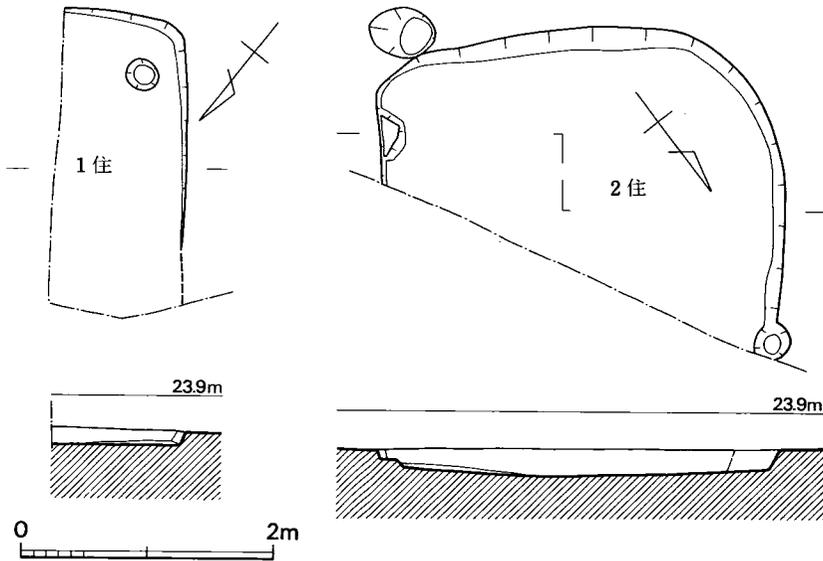
2 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第48図)

F1区の北東隅で検出した竪穴住居跡で一部を調査したに過ぎないため、全容は全く不明である。しかも、削平が著しく遺存状態も良くない。南東隅の床面から深さ約9.0cmの柱穴を1個検出したが、当該住居に伴うとは考えにくい。

出土遺物は少なく、図示可能な甕形土器が1点ある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期末頃である。



第 48 図 1号・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物

土器 (第49図)

甕形土器が1点ある。「く」字状に外反する口縁部を有し、肩部は僅かに張る。調整は外面がやや荒いハケ、内面はナデで仕上げる。口縁内面は荒い横ハケを施す。胎土は細砂粒多く、灰

色ばい褐色を呈する。外面には一部煤が付着する。復原口径20.6cmを測る。

2号竖穴住居跡 (第48図)

F1区の4号竖穴住居の東隣で検出した住居跡で約½は未調査である。平面形態は隅円長方形を呈すると考えられるが、全容は明らかでない。規模は南壁のみ計測可能で3.0m、壁高17.0cmを測る。住居の南東壁際には高さ6.0cmほどの小さなテラス状遺構を設けており、住居の出入口の痕跡とも考えられる。その他の施設は不明である。

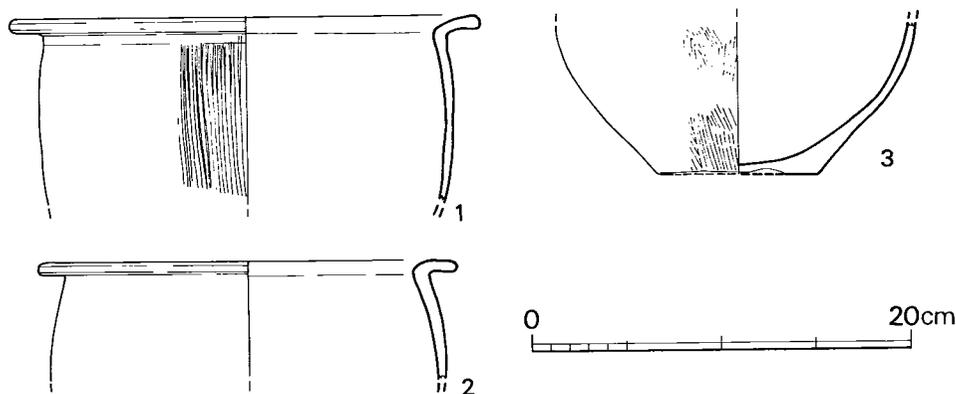
出土遺物は甕・鉢の他、石剣の未製品を再利用した不明石器が1点ある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期前葉頃である。

出土遺物

土器 (第50図)

1・2は甕形土器である。前者は平坦部が内傾する逆「L」字状の口縁を有し、頸部は僅かに内傾するが胴部の張りは鈍い。調整は外面が荒いハケ、内面はナデで仕上げ、外面には煤が付着する。褐色の色調をなし、復原口径25cmを測る。2は逆「L」字状の口縁に肩部が張り気味である。調整は外面が風化し不明瞭である。内面はナデ、外面には煤が付着。

3は鉢形土器の胴下半部であるが、前記の甕に比べて新しい形状を呈する。胴部は丸みを持つ。

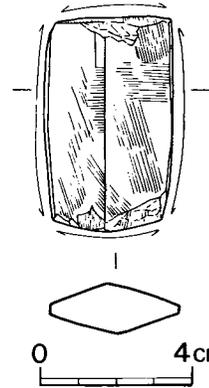


第50図 2号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

ち、安定した平底をなす。調整はハケとナデで仕上げる。内外面とも煤が付着す。褐色を呈し、底径が8.7cmを測る。

石器 (図版50, 第51図)

住居の埋土中から出土した輝緑片岩系の石器で、石剣を再利用している。現存部は基部近くであろう。両小口部を研磨している。中央部には鑄を残す。現存長5.7cm, 最大幅3.4cm, 厚さ1.3cmを測る。表裏面はよく研磨され平滑になっている。



3号竪穴住居跡 (図版28—1・2, 29—1, 第52図)

第51図 2号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

F1区の北側で検出したやや不整形のプランを有す竪穴住居跡で

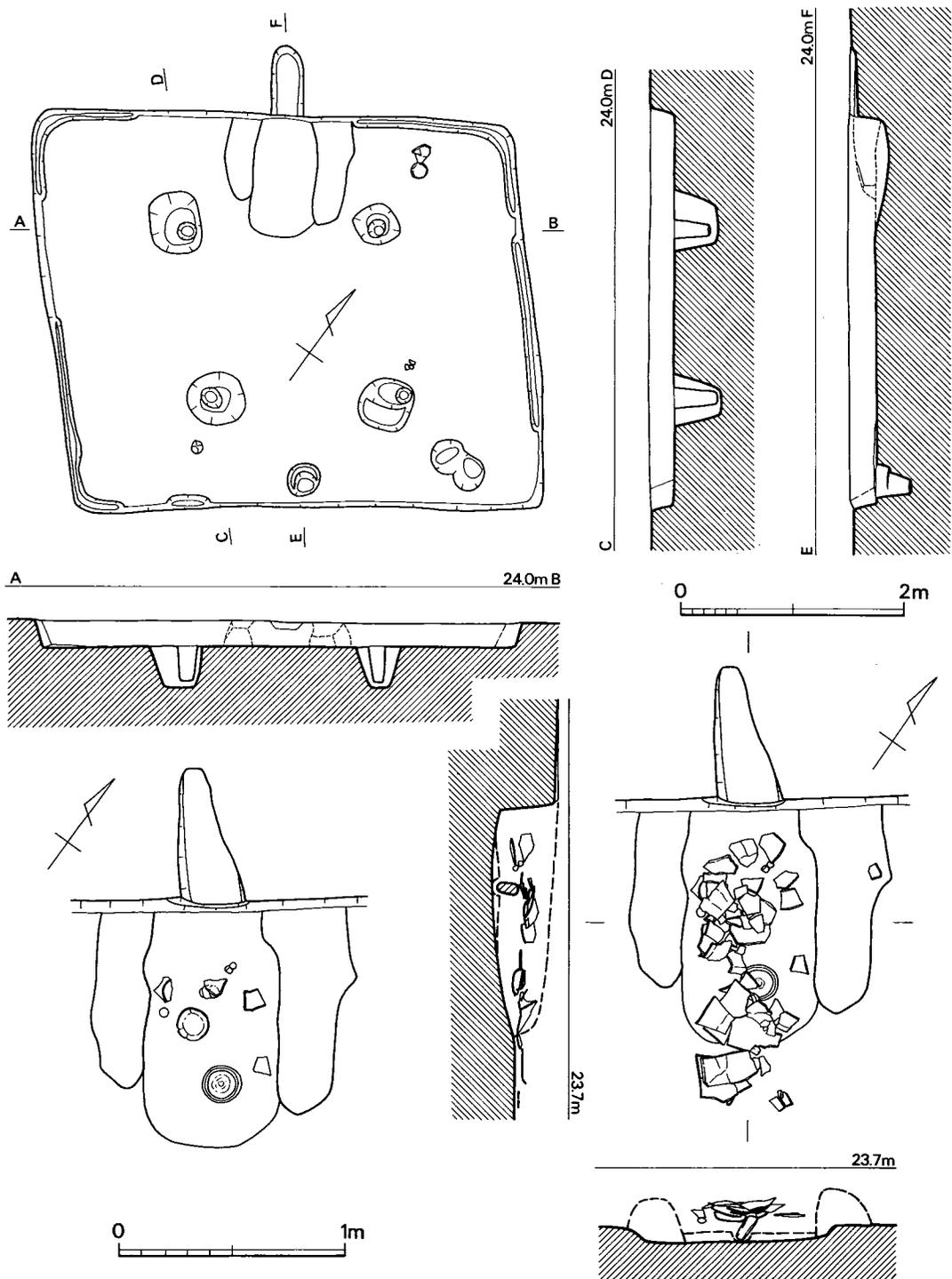
ある。竈の中心軸と支柱軸を比較すると全体的に西方向にずれている。住居の規模は東・西壁で3.45m・3.60m, 南北壁で4.18m・4.25m, 壁高20cm前後である。床面積は14㎡である。支柱は4本であるが、住居の平面形に沿って壁に平行に掘っている。さらに、竈に対峙する南壁際には深さ30cmの柱穴を検出した。柱間は東西間1.70m・1.73m, 南北間が1.50mを測り、各々の壁の長さ按比例している。北壁の中央部には「U」字状の竈を付設し、壁から60cmの長さで煙道を掘り込んでいる。竈の袖部は明瞭な粘土を使用していないため、調査時に掘り過ぎた感はない。竈の内部は自然石を支脚として利用し、その廻りには甕形土器、把手付甌、須恵器の大甕が散乱していた。さらに、その下層(火床)では須恵器の坏身、土師質の坏蓋、ミニチュア土器2個、土製模造鏡1面を置いた状態で出土した。これらの遺物は全て二次加熱を受けており、意味不明の須恵器の大甕片の他、上記の遺物が出土したことから、住居を廃棄する際に竈祭事を行ったと考えられる。周溝は部分的に認められ、幅は7.0cm前後、深さは5.0cm前後である。主軸方位は南北間の柱間軸を採用するとN45°Wを示す。遺物は竈内とその周辺から集中して出土している。

出土遺物は土師器の甕・壺・坏蓋・甌・ミニチュア土器、須恵器の坏身・大甕の他、土製模造鏡が2面ある。出土土器から住居の時期は古墳時代後期である。

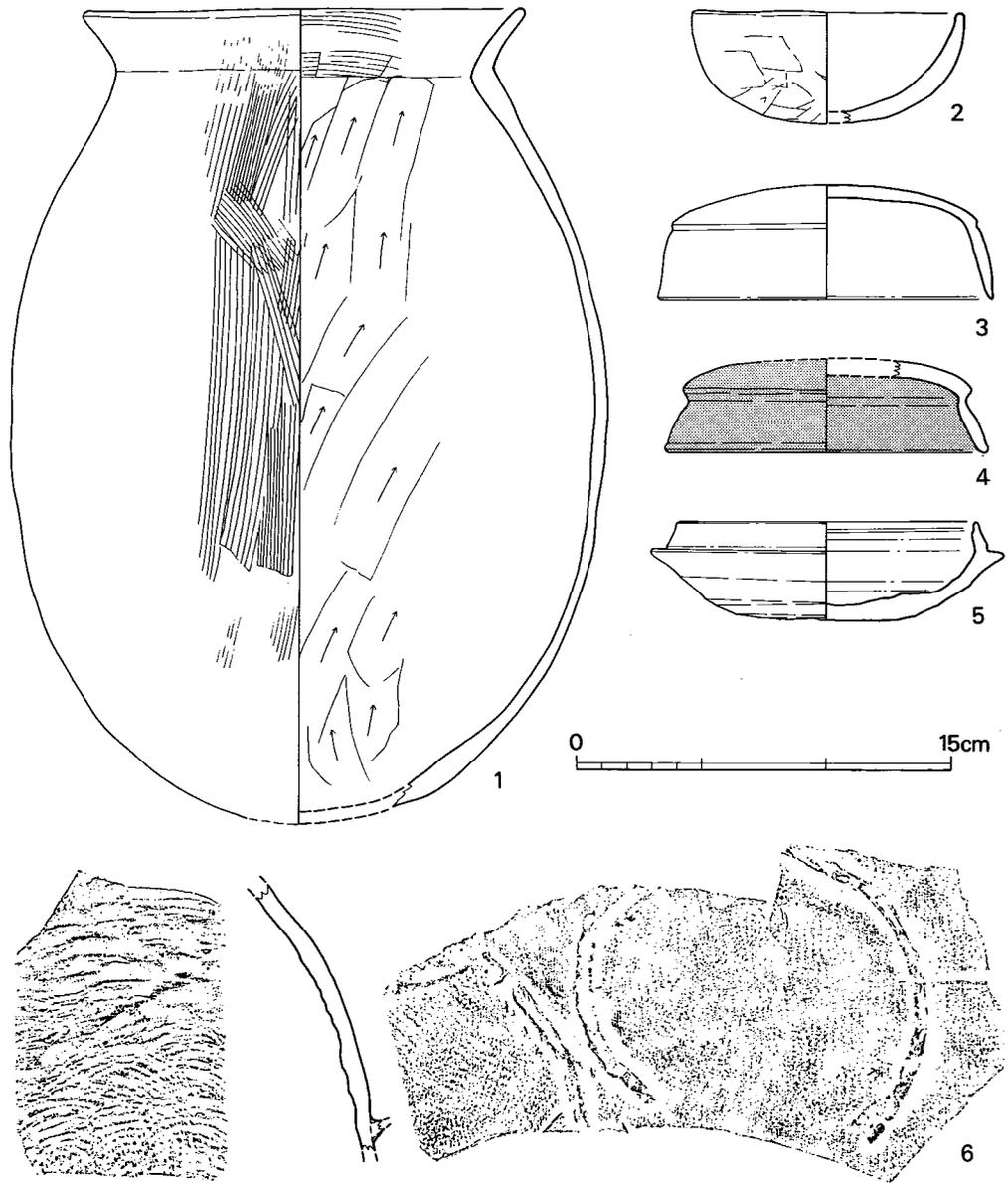
出土遺物

土器 (図版50, 第53, 54, 55図)

土師器 1は甕形土器である。竈内から出土した。「く」字状に外反する口縁部を有し、肩部から胴部の張りは鈍く長胴をなす。最大径は胴下半にある。調整は口縁内外面ともハケののち横ナデ、外面は荒いハケ、下半はハケをナデ消している。内面は下→上方向に荒く削る。茶褐色



第 52 図 3号竖穴住居跡・竈実測図 (1/60・1/30)

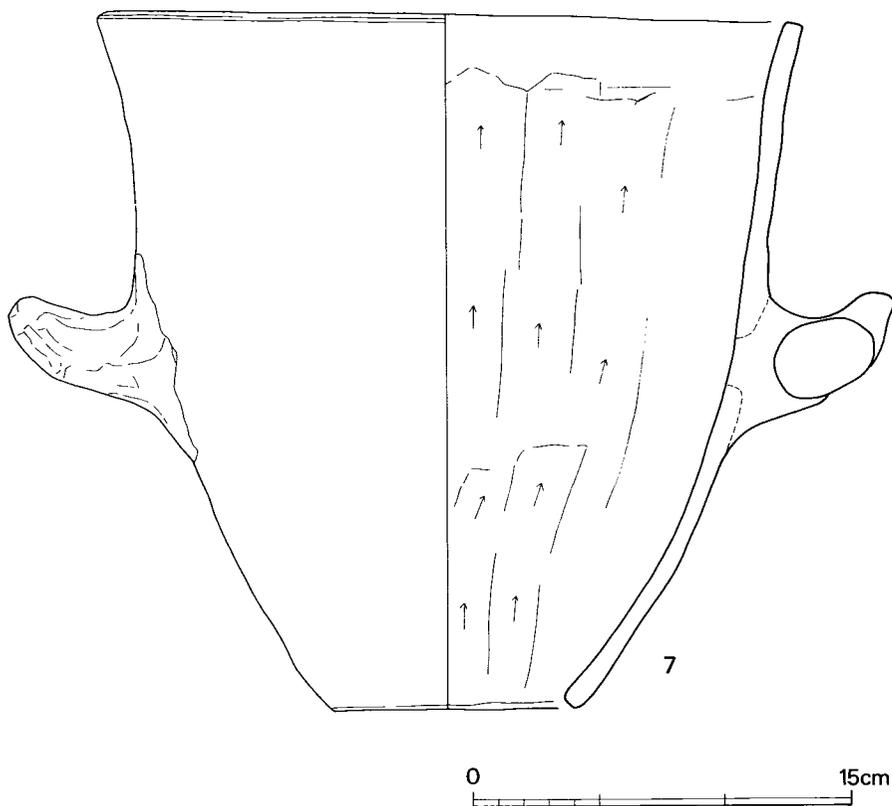


第 53 図 3号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/3)

の色調を持つ。器外面には煤が付着する。口径17.2cm，最大径23.7cm，復原器高32.7cmを測る。

2は碗形土器で，内面と口縁部はナデ，外面は篋削りで仕上げる。器壁を厚くつくっている。復原口径11.0cmを測る。

3・4は土師器の坏蓋で両者はタイプが異なる。3は竈の床面からの出土で内外面に二次加熱



第 54 図 3号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/3)

を受け器体がもろい。内面はナデ、外面は磨きで仕上げている。口径13.5cm, 器高4.6cmを測る。4は口縁部が外傾し、体部との屈折は明瞭である。器表面は研磨した後に黒漆を塗布している。頗るつくりの良い土器である。復原口径13.0cmを測る。

7は竈内から出土した甑である。非常に鈍く外反する口縁部を有し、張りの少ない胴部をなす。底部には10cm×8.3cmの楕円形の孔を穿っている。胴中央部には把手を体部に挿入する。調整は外面と口縁内面がナデ、内面は下→上方向に篋削りで仕上げる。茶褐色を呈し、器外面には煤が付着する。口径26.9cm, 器高27.7cmを測る。

10・11はミニチュア土器でいずれも竈の床面から出土した。器壁は厚くつくりは粗い。両者とも二次加熱を受けている。

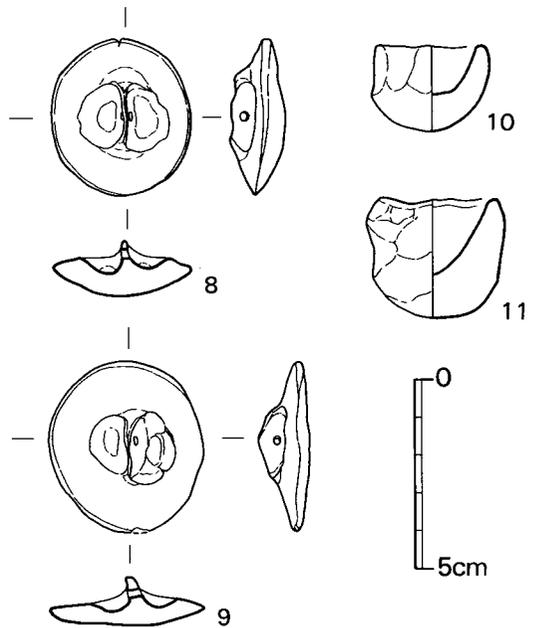
須恵器 5は坏身で竈の床面から出土した。完形品である。二次加熱を受け器面がくすんだ灰褐色を呈すると同時に煤も付着する。口径12.0cm, 器高4.0cmを測る。

6は大甕の破片で竈内からの出土である。器外面には格子状(疑格子)の叩きを施し、内面

は細い青海波が密に認められる。さらに器表面には径1.14cm前後の楕円形の他の土器片が付着しており、当初焼台と考えたが、出土した甕片は肩部と思われることから、何等かの器種の付着としか考えられない。その廻りには自然釉がかかっている。この土器も二次加熱を受けている。

土製品（図版50、第55図）

土製模造鏡が2面ある。8は竈の左袖の外側で出土し、9は竈内で鏡面を上に向けて出土した。両者とも精製された粘土でつくられ、明茶褐色を呈する。表裏に掌文が明瞭に残る。背面には指で鈕を細く摘み出し、小さな孔を穿っている。8の径は4.1cm×3.7cm、9は4.5cm×4.1cmを測る。両方とも二次加熱を受けている。

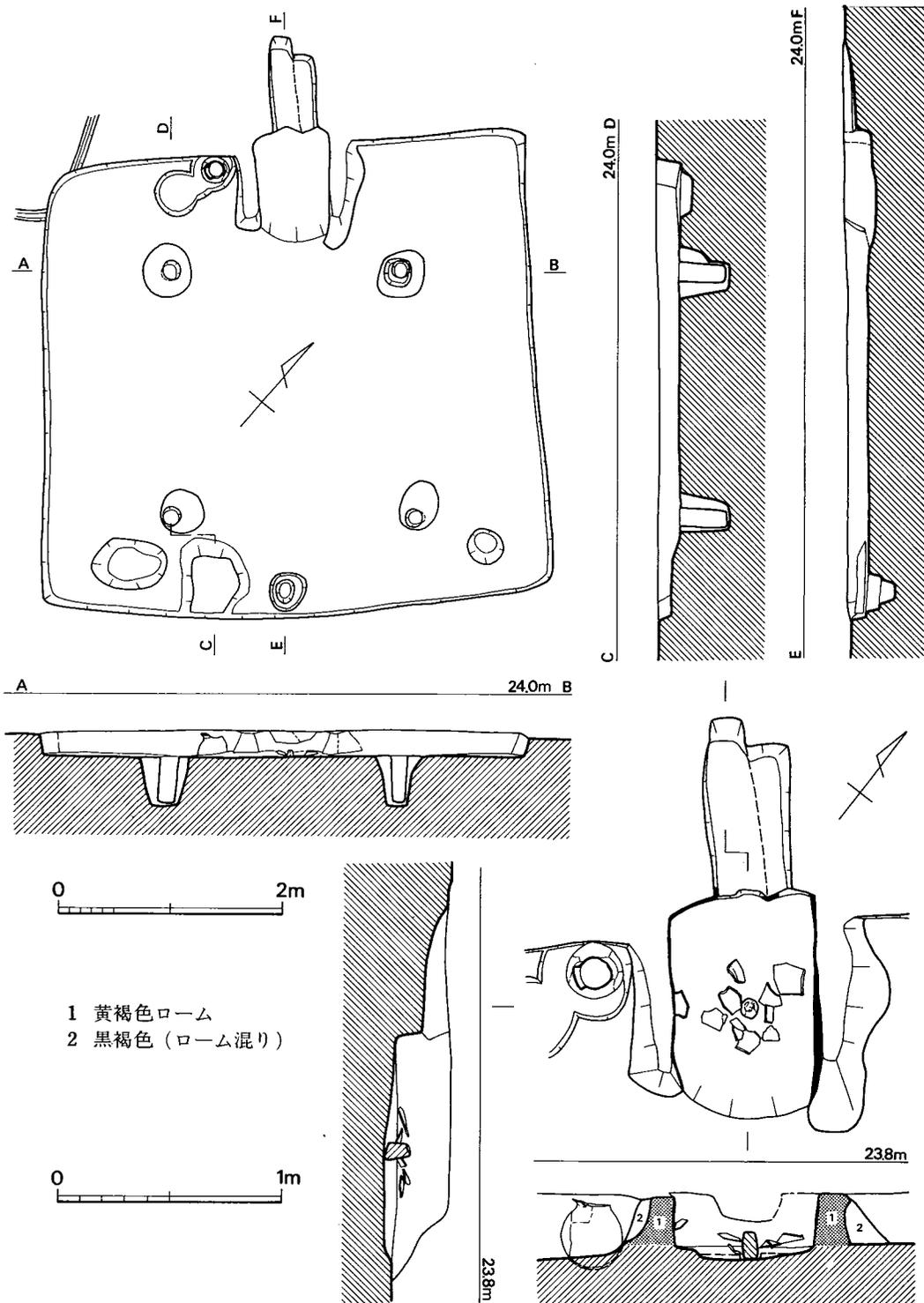


第55図 3号竈穴住居跡出土土器・土製品実測図 (1/2)

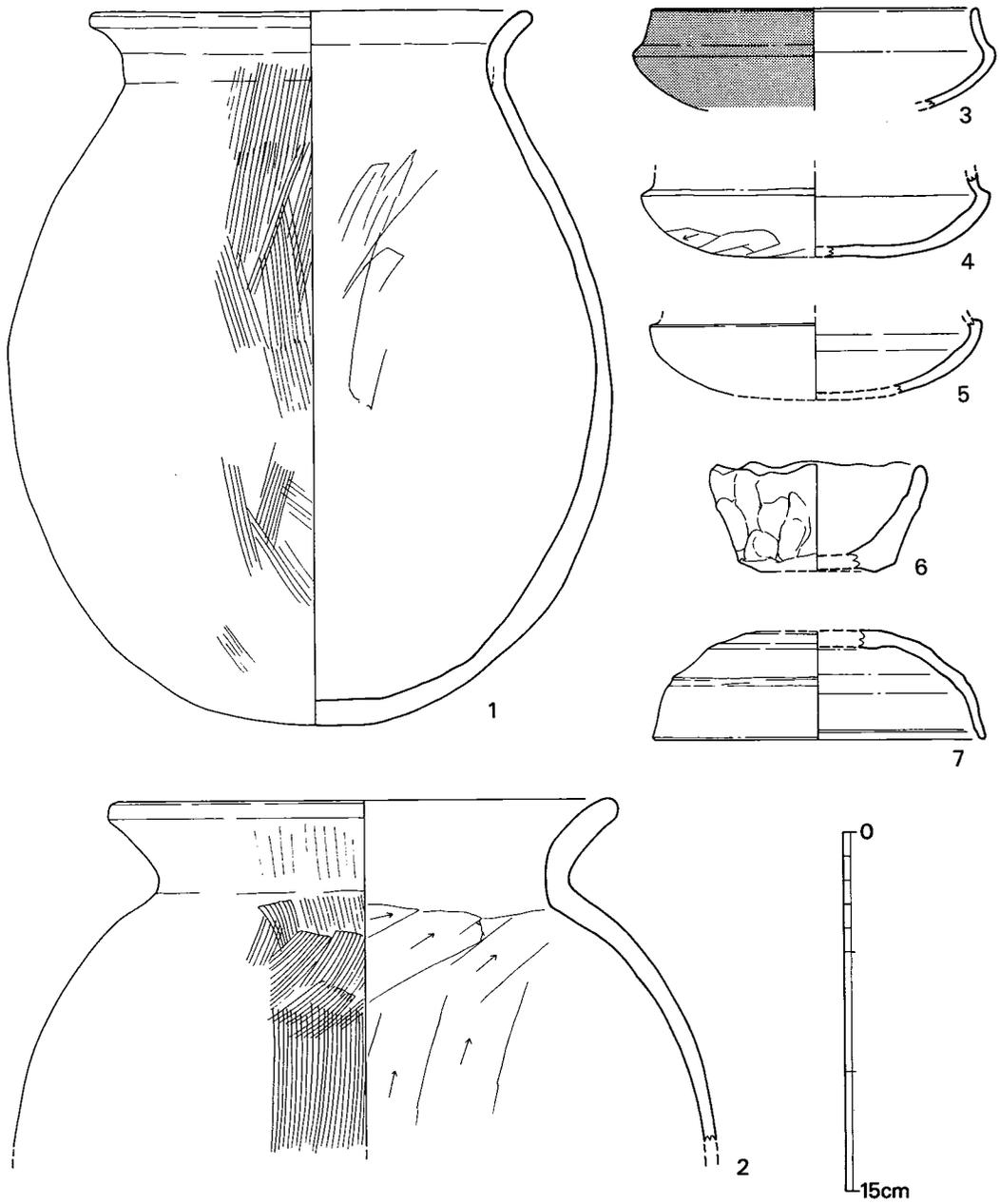
4号竈穴住居跡（図版29—2、30—1、第56図）

F1区の中央で検出し、10号住居の一部を切った状態で出土した竈穴住居跡である。平面形態は方形を呈し、規模は北西・南東壁が4.25・4.65m、北東・南西壁が4.15・3.95m、壁高は15から20cmを測る。床面積は竈部を加えると17.9m²である。主柱は規則的な4本柱で、深さは45cm前後を測る。3号住居と同様竈に対峙する壁沿いには深さ25cmの柱穴を掘っている。主柱の柱間は竈前面が2.10m、他の柱間は2.20mを測る。床面の南側隅には長軸60cm、短軸47cm、深さ18cmの屋内土壇を設けている。この中からはミニチュア土器が出土しており、弥生時代に普遍的に認められる屋内土壇（作業穴）とは設置場所も異り用途に相違がみられ、家内の祭祀を司るための土壇と理解した方が妥当であろう。さらに、屋内土壇の傍には壁に密着して高さ8.0cmのテラス状の遺構を設けており、住居の出入口と考えてよからう。

北西壁の中央部には削り出しの竈を設置しており、住居の外方向に長さ85cmの煙道を掘り込んでいるが、著しい削平を受けている。竈の袖は黄褐色のローム層を削り出し、その外側をロームを含む黒褐色土で補強している。両袖の内側は焼痕が著しく、床面（火床）は掻き出しのためかさほど焼痕はみられない。中央部に土製の支脚を立てており、支脚の掘り込みが認められないことから、支脚を竈の掘り込み面で置いた状態にし、その後に焼土（あるいは土）等で



第 56 図 4号竖穴住居跡・竈実測図 (1/60・1/30)



第 57 図 4 号竖穴住居跡出土土器実測図その 1 (1/3)

一定の深さまで埋め込んだと考えられる。支脚の廻りには甑片が散在していた。

竈の左袖の外側には瓢箪形のピットがあり、甕形土器を埋め込んでいた。水甕あるいは仮設の貯蔵用の用器として使用していたのであろう。住居の主軸方位は竈軸と同一方向の柱間軸を採用するとN40°Wを示す。

遺物は竈内及びその周辺と床面上から出土している。出土遺物は土師器の甕・坏身・手捏ね土器・ミニチュア土器、須恵器の坏蓋等がある。出土土器から住居の時期は古墳時代後期である。

出土遺物

土器（図版50・51，第57，58図）

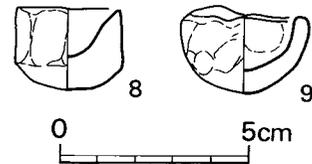
土師器 甕は1・2がある。1は鈍く外反する口縁部を有し、肩から胴部にかけての張りは鈍い。最大径を胴部下半に持ち、下膨れの安定感のある甕形土器である。竈の左袖傍で埋められた状態で出土した。調整は外面を荒いハケで仕上げ、底部付近は不明瞭で器面が剥落気味である。内面は篋で削った後をナデ消している。胎土は粗く淡黄橙色を呈する。口径18.0cm，胴部最大径25.2cm，器高30cmを測る。2は鋭く反り気味に外反する口縁部に肩の張る胴部を有す。器壁は厚くつくられ、器外面には荒いハケを施す。内面は下→右上方向に篋で削る。胎土は砂粒を多量に含み粗い。褐色に近い色調をなす。外面に煤が付着し、内外とも弱い二次加熱を受けている。口径20.5cmを測る。竈内からの出土である。

3～5は土師質の坏身である。3以外は口縁部を欠く。3の口縁は反り気味に内傾し、扁平な体部を有す。口縁と体部との境の屈折は明瞭でない。内外面とも漆塗りを施しており光沢がある。胎土は非常に精製されており緻密である。口径13.8cmを測る。4・5は3と同タイプの坏身であるが、黒漆は塗布していない。前者は内面がナデ、外面は篋削りののち横方向の磨きをかけている。5も同様な調整である。4は内外面とも二次加熱を受けている。この種の土器は胎土は精製され、焼成・調整とも良質である。全て床面直上からの出土である。

6は手捏ね土器で粗いつくりである。指でナデで仕上げている。

8・9はミニチュア土器である。8は床面直上から出土した。丁寧なつくりで胎土・焼成とも頗る良い。9は屋内土壌からの出土でつくりは雑である。両者とも指ナデで仕上げている。

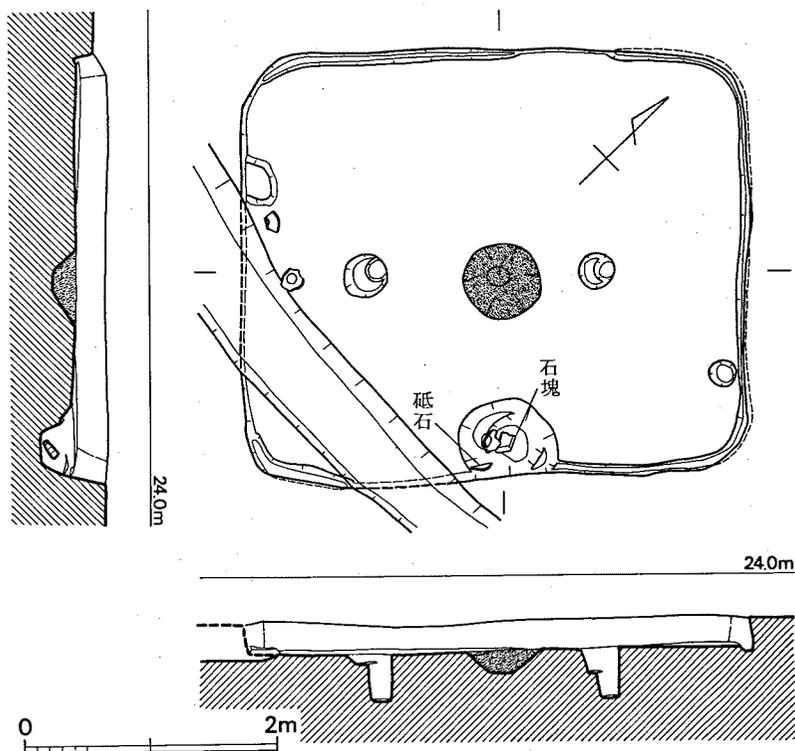
須恵器 7の坏蓋がある。内面口唇部には有段をなす。内面から外面にかけては横ナデ、天井部は回転篋削りである。口径14.0cm，復原器高4.5cmを測る。



第58図 4号竈穴住居跡出土土器
実測図その2（1/2）

5号竪穴住居跡 (図版30—2・31—1, 第59図)

F1区の略南北に延びる溝4から東方向に走る支流溝(溝1)に住居の隅を切られた状態で検出した竪穴住居である。平面形態は隅円長方形に近く、プランとしては均整のとれた住居である。規模は短辺が3.25・3.30m、長辺が3.95・3.90m、壁高25cm前後を測る。壁面は北東側でオーバーハング気味に掘っている。床面積は溝1に切られた部分を復原すると12.6㎡である。支柱は弥生



第59図 5号竪穴住居跡実測図 (1/60)

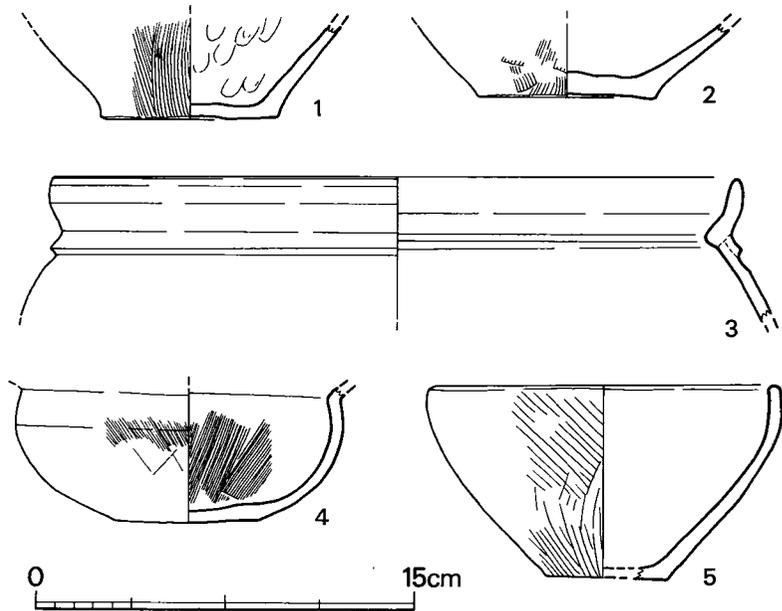
時代中期末から後期にかけて普遍的にみられる2本柱で、深さは35から40cmを測る。柱間は1.80mである。支柱間には径60cm、深さ20cm弱の摺鉢状をした炉が設けられ、中には灰が充満していた。南東壁の中央部には平面が円形に近い形状の屋内土壙(作業穴)を掘り、北壁から北東壁沿いを廻る周溝に直結している。土壙は二段掘りをなし、中から壺か鉢の底部と作業台と考えられる花崗岩が、土壙の肩口からは砥石(仕上げ砥石)を壁に立て掛けた状態で出土した。南東壁際には高さ4.0cmほどの小さなテラス状の高まりがあるが、これが住居の出入口か否かは遺存状態が悪いため明らかでない。住居の主軸方位は支柱軸を採用するとN45°Eを示す。

遺物は床面直上と屋内土壙から出土した。器種は壺・甕・鉢の他、砥石が1点出土している。出土土器から住居の時期は弥生時代中期末頃である。

出土遺物

土器 (図版51, 第60図)

1・2は壺としたが鉢の可能性も否定できない。太目の平底をなし、1の外面はハケ、内面は指頭ナデで仕上げている。外面に二次加熱を受けている。2の外面はハケのちナデ、内面もナデである。1の底径9.4cm、2の底径9.6cmを測る。



第60図 5号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

3は内湾気味に外反する口縁部を

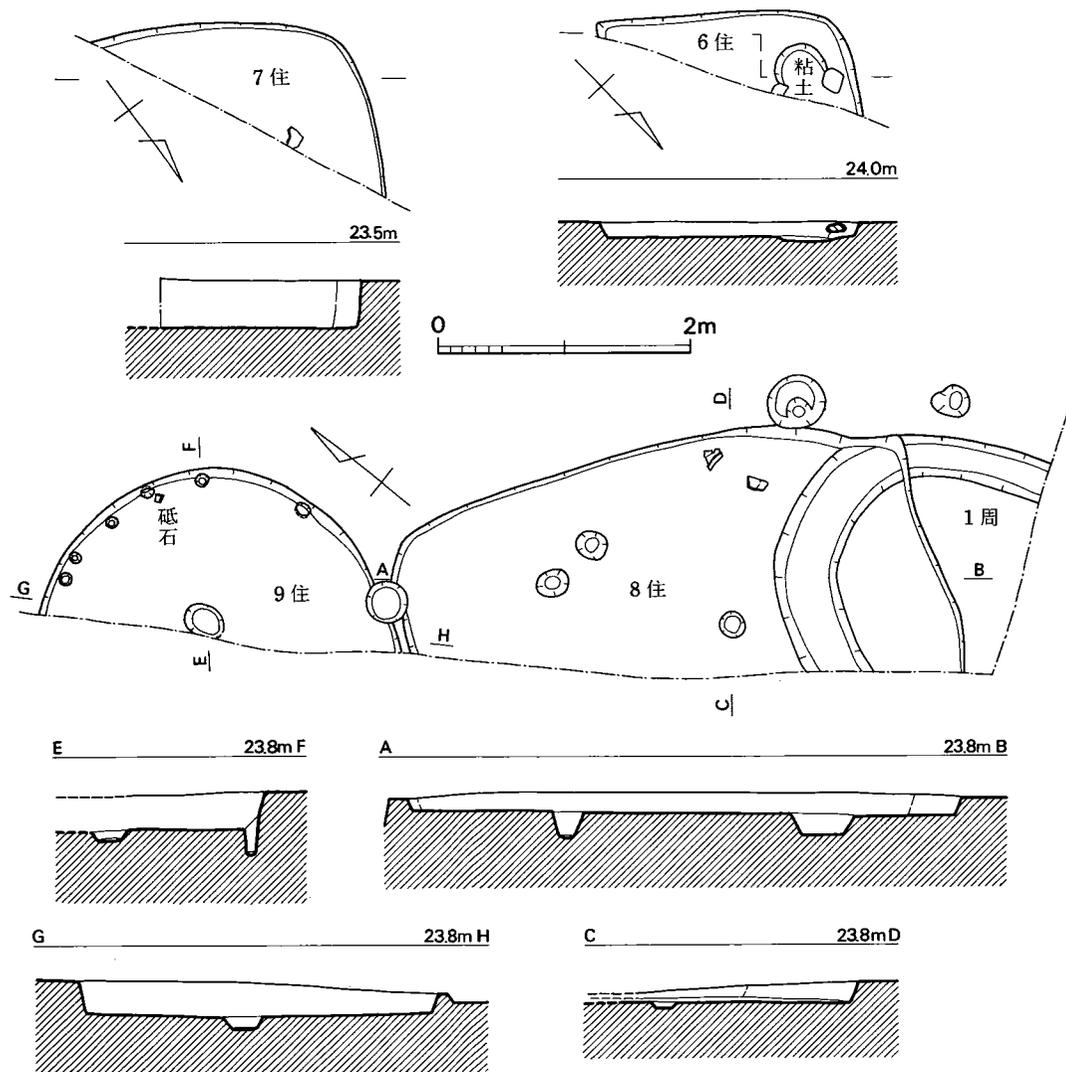
なし、頸部には三角凸帯を廻らす。肩部は張る。調整は風化し不明で表面がざらつく。橙色の色調を有す。復原口径36.6cmを測る。

4・5はタイプの異なる鉢形土器である。4は口縁を欠く。胴部は扁平で太目の平底をなす。調整は外面が細いハケの上からナデており、ハケが一部に残る。内面は細いハケを多用する。内外面に弱い二次加熱を受けている。5は張りの鈍い胴部に僅かに内湾する口縁を有す。底部は平底をなす。調整は外面が荒いハケ、内面はナデ仕上げある。胎土には砂粒が多く不良。口径18.9cm、底径6.50cm、器高10.2cmを測る。

6号竪穴住居跡 (第61図)

F1区の5号竪穴住居の東側に隣接した状態で検出した遺構で、一部を確認したに過ぎず規模も他の住居と比較して小形であることから土壌の可能性もあるが、一応住居として説明する。規模は南西壁と壁高のみ計測でき1.95mと10cm前後を測る。西側の隅には8.0cmほどの浅いピットがあり、傍から灰白色の粘土塊を検出した。その他詳細は明らかでない。

出土遺物は壺の小片があり、出土土器から遺構の時期は弥生時代中期前葉頃であろう。

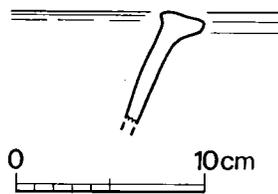


第 61 図 6号・7号・8号・9号竪穴住居跡，1号周溝状遺構実測図（1/60）

出土遺物

土器（第62図）

壺の口縁片がある。鋤先状の未発達な口縁部で平坦部は外傾する。胎土には砂粒が多く，赤色粒子も若干ではあるが含む。淡橙色をなす。



第 62 図 6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

7号竪穴住居跡 (第61図)

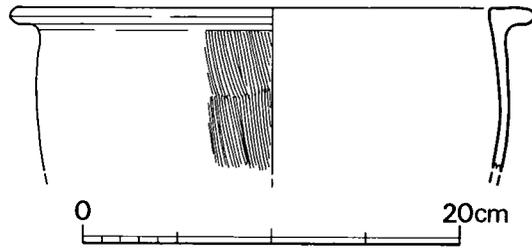
F1区の南東で遺構の一部を検出したが、6号と同様住居と判断する資料に乏しい。計測値としては壁高のみが得られ40cm弱を測り遺存状態は良好である。その他詳細は不明である。

遺物は甕形土器が床面に密着した状態で1点出土した。出土土器から遺構の時期は弥生時代中期前葉頃である。

出土遺物

土器 (第63図)

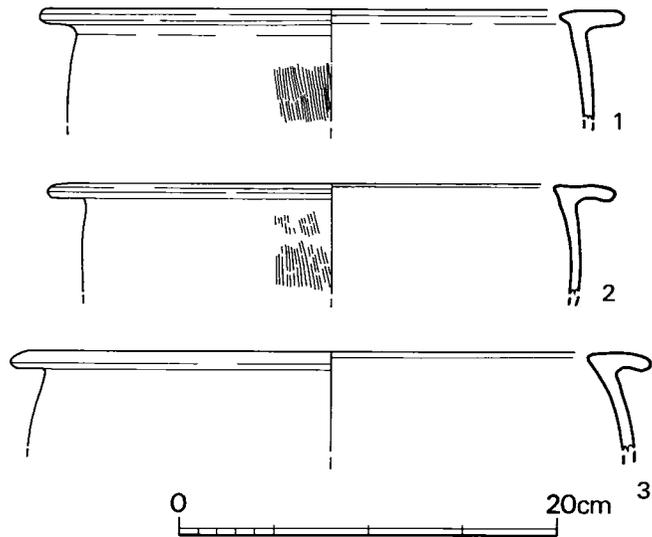
甕形土器が1点ある。逆「L」字状の口縁を有し、胴部の張りは鈍い。調整は外面がハケ、内面はナデで仕上げる。茶褐色の色調をなし、外面には煤が付着する。復原口径28cmを測る。



第63図 7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

8号竪穴住居跡 (図版31-2, 第61図)

F1区の南西側で検出した竪穴住居跡であるが西側が田畑の耕作で削平されているため、平面形態・規模等の詳細は明らかでない。住居の南側では1号周溝状遺構と重複関係にあり、遺構検出時では住居が新しいと判断したが、周溝状遺構からの出土遺物が皆無のため遺物からの新旧は明らかでない。しかし、今日までの周溝状遺構の出土例では弥生時代後期が主体を占め竪穴住居から出土した土器は弥生時代中期中葉から後葉であ



第64図 8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

ることから新旧関係に誤謬があるとも考えられる。北東壁の長さは4.10m、壁高は15cm前後を測る。その他住居の施設は明らかでない。

出土遺物は床面直上から甕形土器が出土しており、出土土器から住居の時期は弥生時代中期中葉～後葉頃である。

出土遺物

土器 (第64図)

1～3の甕がある。1は「T」字状に発達した口縁部を有し、調整は肩部外面はハケ、頸部から内面にかけてはナデで仕上げる。胎土には砂粒をかなり含み、橙褐色の色調をなす。口縁部には若干煤が付着する。復原口径31cm。2は逆「L」字状の発達した口縁を持ち、口縁上面は僅かに外傾する。調整はハケとナデで仕上げる。胎土には砂粒が多く、橙色を呈する。外面は煤が付着する。復原口径30cm。3は逆「L」字状の口縁部を有し、口縁上面は外傾する。頸部は内傾し、肩部は張り気味である。調整は現存では内外面ともナデで仕上げている。胎土は細砂粒をかなり含み、淡黄褐色の色調を呈する。復原口径34cmを測る。

9号竪穴住居跡 (図版32-1, 第61図)

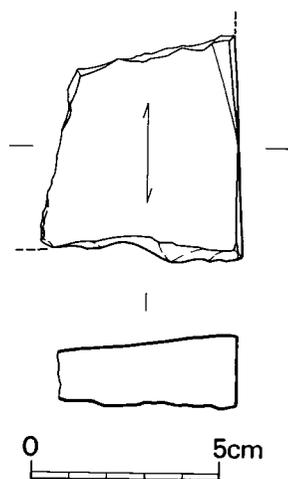
F1区の8号住居の北側に隣接した状態で検出した竪穴住居跡である。8号住居同様西側が田畑の耕作で削平され遺存していないため平面形態は把握し兼ねるが、現存では円形乃至楕円形を呈すると考えられる。現況でみると床面中央に柱穴を掘り、壁際には細い垂木状の副次柱を廻らしている。副次柱は40から75cmの間隔で検出できたが、南壁際では確認できていない。しかも1本を除いて全て垂直に掘っている。壁高は遺存状態の良好な所で30cmを測る。その他詳細は明らかでない。

遺物は砥石が1点床面から出土したが、土器は皆無のため住居の時期は不明である。

出土遺物

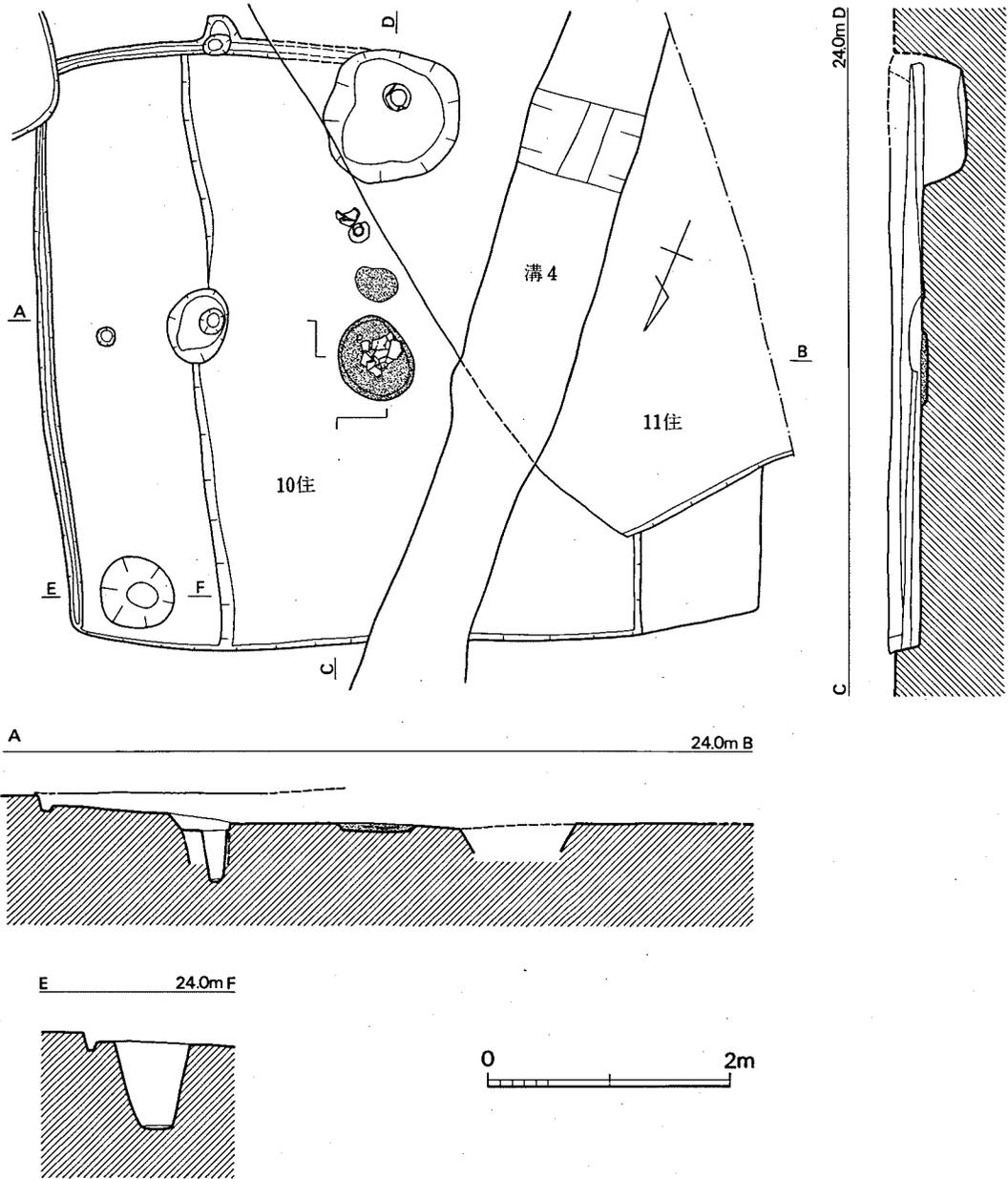
石器 (図版51, 第65図)

砂岩製の砥石片がある。床面に密着して出土した。砥ぎ面は2面で、小口部と裏面は自然面を残す。現存長6.0cmを測る。



第65図 9号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

10号竖穴住居跡 (図版32—2, 33—1, 第66図)



第 66 図 10号竖穴住居跡実測図 (1/60)

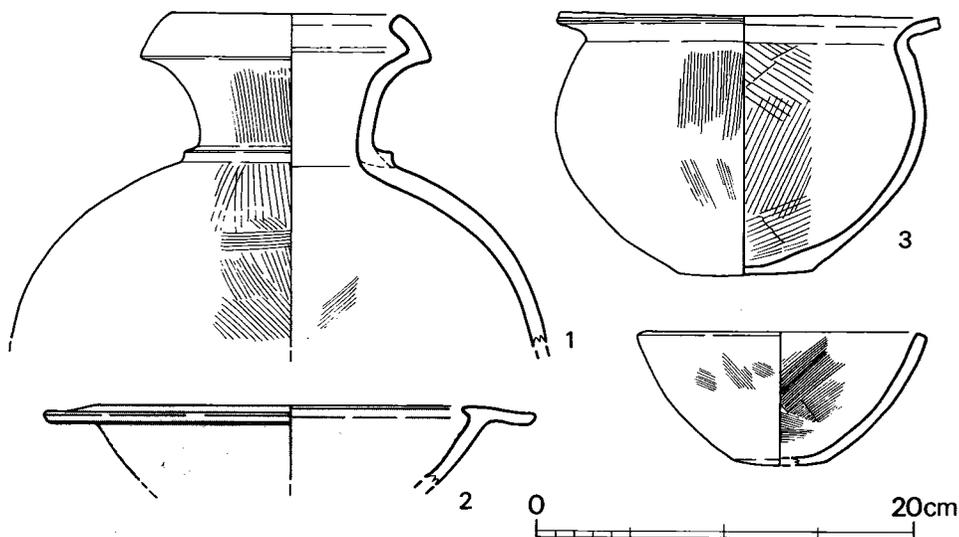
F1区で検出した竪穴住居で4号・11号・溝4に切られているが、内容は一定程度把握できる。平面プランは長方形を呈し、住居の規模は北壁と南壁が計測可能で5.75・4.80m、壁高は遺存状態の良好な所で20cmを測る。主柱の1本は溝4に切られ検出できていないが、住居の形状から2本柱である。東側の主柱穴の深さは47cmを測る。床面の中央には深さ5.0cmの不整円形の炉を掘り中からは灰と土器片（甕）が出土した。壁面には焼痕が僅かながら認められた。その南側傍でも床面が焼けていた。炉と主柱間は1.30mを測る。住居の南壁際には1.15×1.10m、深さ30cm強の屋内土壌（作業穴）を掘り、中からは完形に近い鉢形土器が出土している。東及び南壁には幅10cm強、深さ7.0cm前後の周溝が廻り、屋内土壌と直結している。東・西壁側には削り出しのベット状遺構を設け西側は11号住居に削平されているが、東側のベットは幅1.10mから1.30m、高さ5.0cm強を測る。さらに、北東隅のベット状遺構からは径60cm、深さ70cmの屋内貯蔵穴を検出した。

出土遺物は壺・高坏・鉢の他、石庖丁が1点ある。出土土器から住居の時期は弥生時代後期前葉頃に位置付けられる。

出土遺物

土器（図版51、第67図）

壺は1がある。胴下半部を欠損する袋状口縁壺で、短かく内湾する口縁部に細く締った頸部を有す。頸部には断面三角形の凸帯を廻らす。肩部から胴部にかけては大きく張る。調整は口



第 67 図 10号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

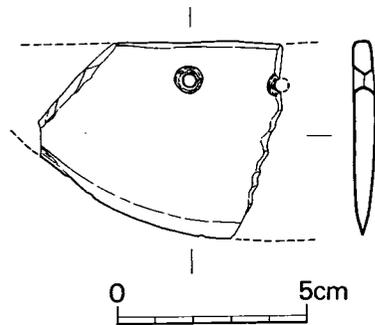
縁周辺が横ナデ、外面は荒いハケ、内面は風化し不明瞭であるが胴部にハケが若干残る。胎土には砂粒が多く、金雲母・赤色粒子が混在する。黄橙色の色調を有す。復原口径12.0cm。

2は高環の坏部片で復原実測である。鋤先口縁をなし、口縁は外側に発達し、上面は外傾する。調整は内外面とも丹塗り磨研でつくりの良質な高坏である。胎土・焼成とも丹塗り土器特有の良好なもので、復原口径26cmを測る。形態的に古相を示す。

鉢は3・4があるが、両者は系統の異なるもので4を小鉢とすべきであろう。3は中期にみられる鉢の系譜を引くタイプである。前者は鋭く外反する口縁に扁平な胴部を有すが、頸部内面は丸みをなす。底部は若干レンズ状を呈す。調整は口縁部付近が横ナデ、内外面は荒いハケで仕上げる。胎土は細砂粒を多量に含み、淡い灰褐色を呈する。口径20.1cm、底径7.2cm、器高13.9cmを測る。4は胴部が僅かに丸みを持ち、直線的に開く口縁を有す。底部は3と同様僅かにレンズ状を呈する。調整は外面がハケのちナデ、内面が細いハケで仕上げる。淡黄褐色を呈する。復原口径15.5cm。

石器 (図版51, 第68図)

住居跡の埋土中から出土した玄武岩質の石庖丁片がある。幅は5.2cmを測り、孔の径は3mmである。



第68図 10号竪穴住居跡出土
石器実測図 (1/2)

11号竪穴住居跡 (図版32-2, 第69図)

溝4に切られ10号住居を切った状態で検出した竪穴住居であるが、 $\frac{1}{2}$ を調査したに過ぎず完掘に至っていない。平面プランは明らかでないが、出土した土器の時期から推測すると方形であろう。規模は北東壁のみ

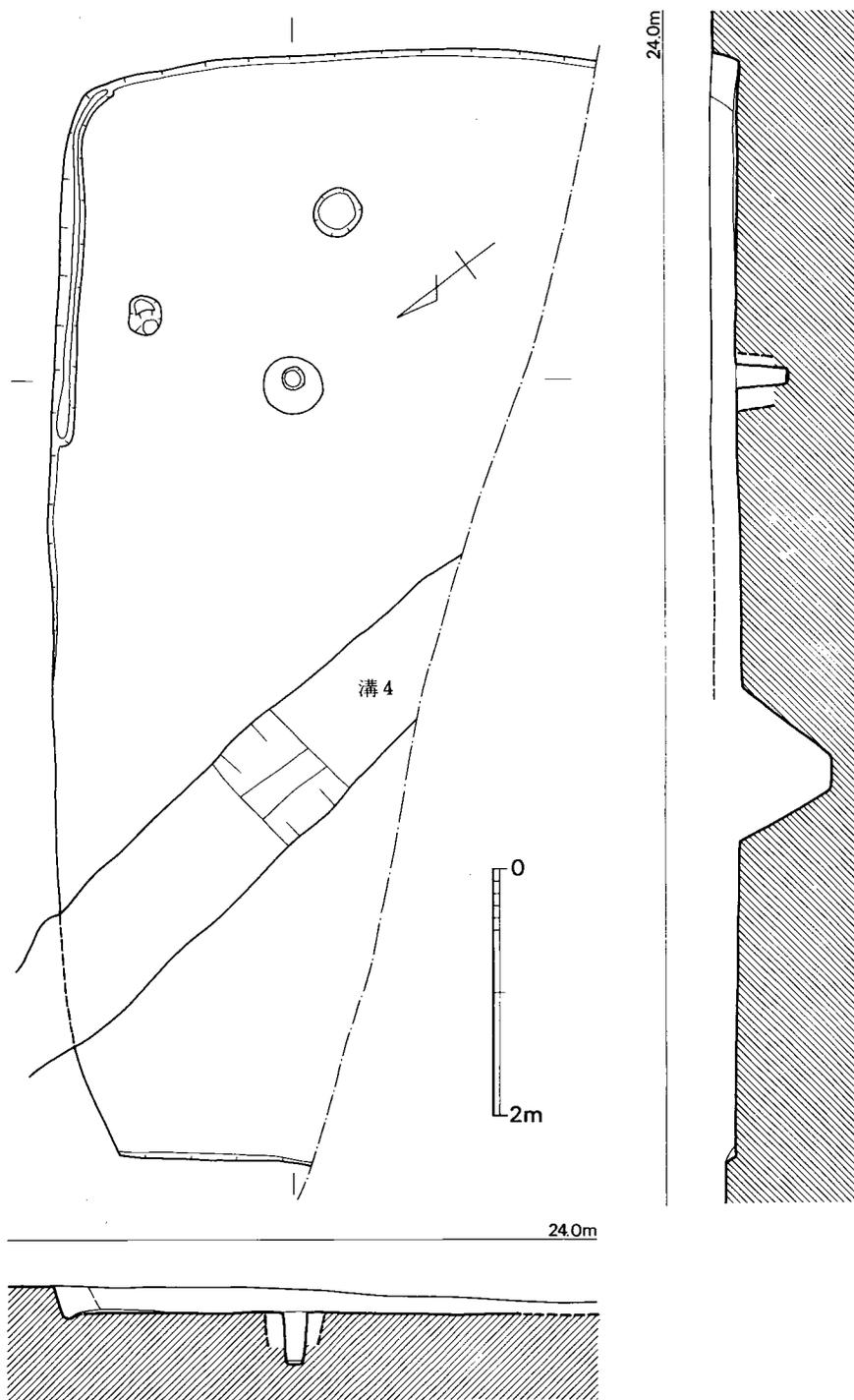
計測でき8.60m、壁高は遺存状況の良好な所で20cmを測り、大形の住居である。床面から主柱の1本を検出したが、本来は4本柱であろう。深さは40cmである。東壁の一部で浅い周溝を確認した他は不明な点が多く、出土土器から竈を付設していた可能性が強い。

出土遺物は壺・甕・埴・不明器種等がある。出土土器から住居の時期は古墳時代中期である。

出土遺物

土器 (図版52, 第70, 71図)

土師器 1は壺形土器の破片と思われる。頸部上半を欠損している。肩から胴部にかけての張りは顕著である。調整は外面と頸部内面が荒いハケ、内面は荒い左廻りの篋削りで仕上げているが風化し不明瞭である。肩部内面には指ナデ痕を残す。胎土には粗砂粒をかなり含み、橙



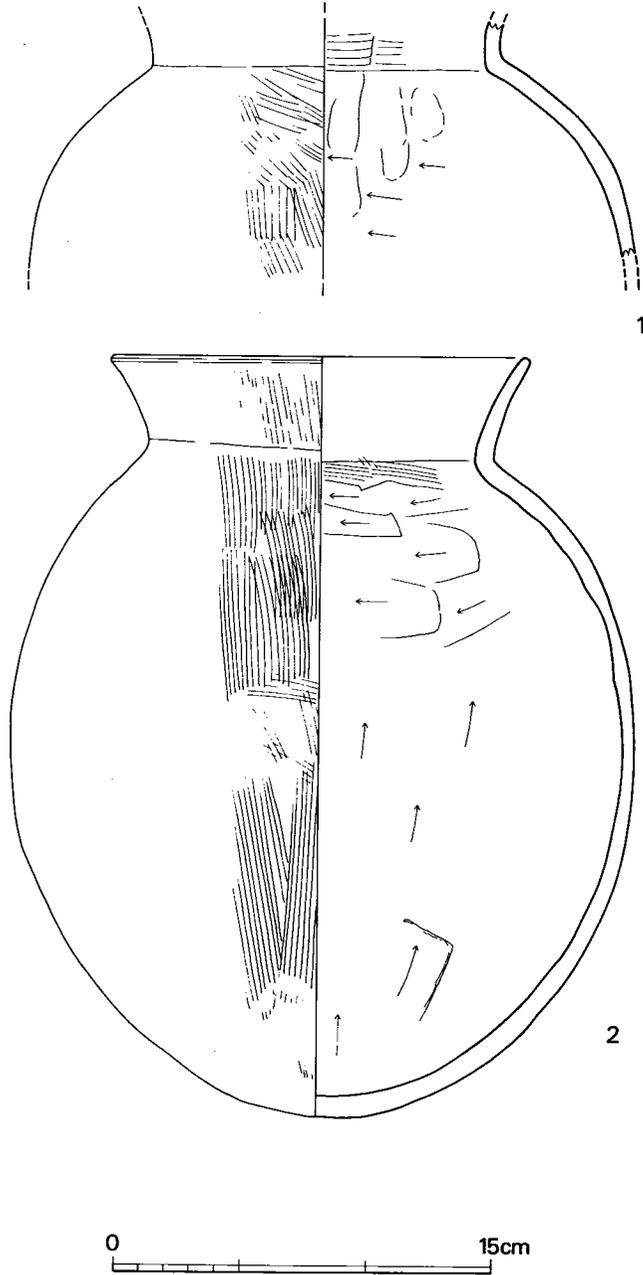
第 69 図 11号竖穴住居跡実測図 (1/60)

褐色を呈する。

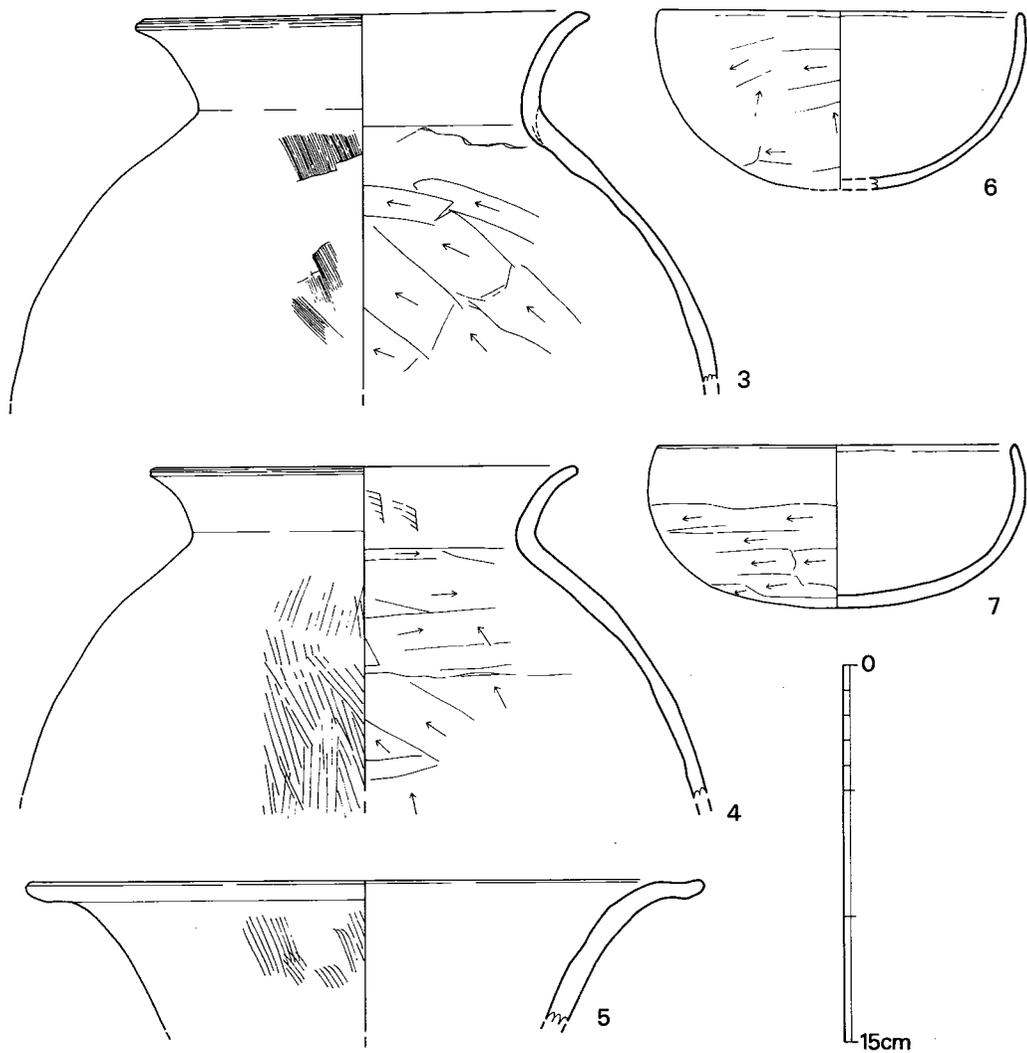
2～4は甕形土器であるが、2は形状から壺にはすべきかも知れない。2は頸部から「く」字状に外反し口縁部は直線的に開く。胴部はやや長球形を呈し、全体的に器壁は厚い。調整は外面が荒いハケ、内面は下→上方向と左廻りの荒い篋削りで仕上げているが、頸部直下にはハケ目が認められる。外面には煤が付着し、内外面とも強い二次加熱を受けている。口径16.3cm、胴部最大径は24.8cm、器高30.5cmを測る。3・4は同タイプの甕で反り気味に外反する口縁部を有し、口唇部は浅い沈線を廻らす。肩部は2に比べてナデ肩である。調整は3の外面が細いハケの上からナデ、内面は荒い左廻りの篋削りで仕上げている。胎土は大きめの砂粒が多く、茶褐色を呈する。外面には煤が付着する。口径17.2cmを測る。4の調整は外面が荒いハケ、内面が下→上と右廻りの荒い篋削りで仕上げる。胎土は砂粒が多く、明黄褐色を呈す。口径17.0cmを測る。

5は頸部から口縁部にかけて

緩い曲線を描き乍ら外反する土器であるが、器種は明らかでない。口唇部は僅かに内湾す



第70図 11号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/3)

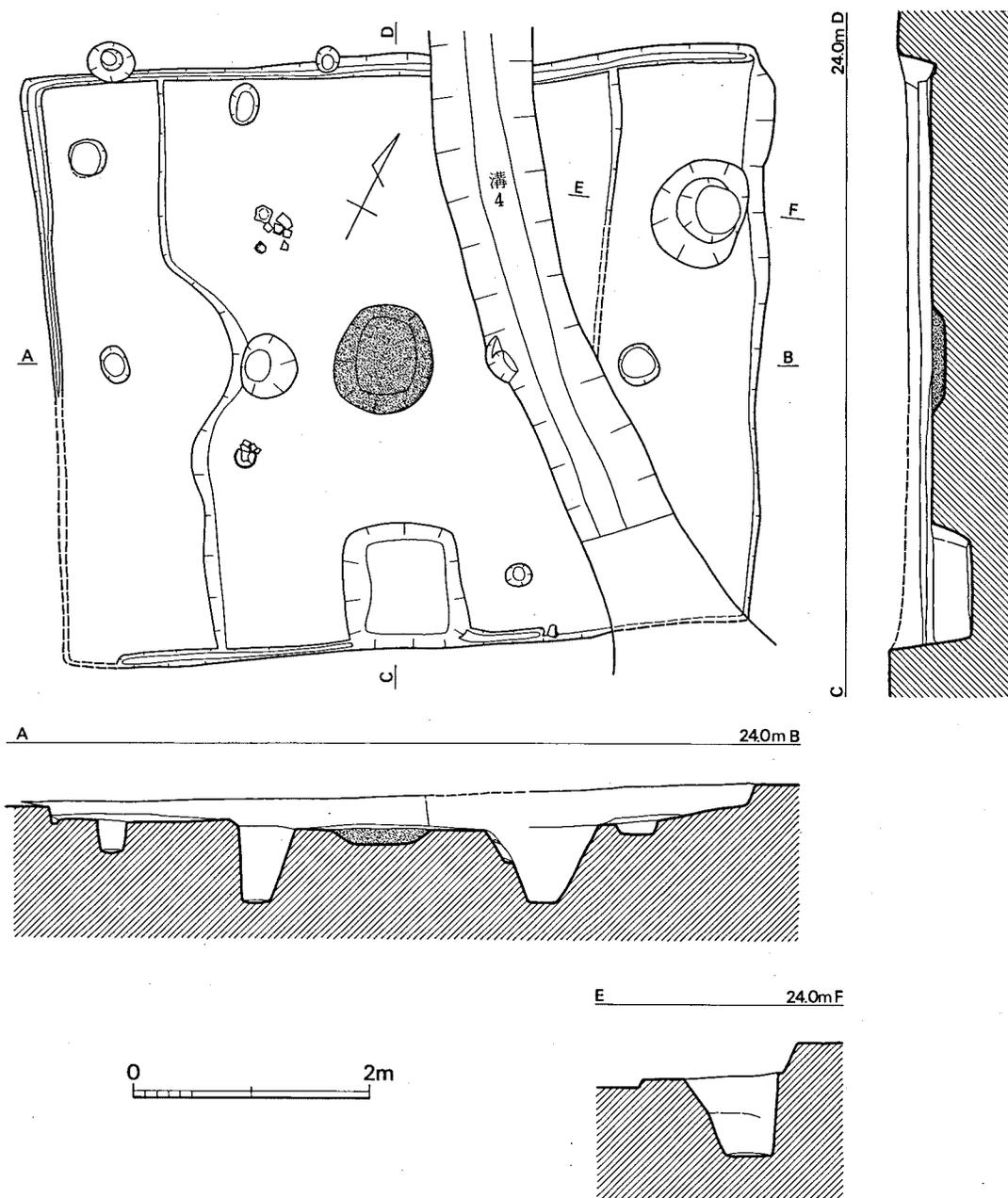


第 71 図 11号竖穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/3)

る。調整は外面がハケのちナデ、内面はナデで仕上げる。外面の一部に煤が付着する。復原口径27cmを測る。

6・7は埴で前者は半球形を呈する。調整は外面が丁寧な篋削り、内面はナデで仕上げる。内外面には弱い二次加熱を受ける。胎土は緻密で茶褐色を呈する。復原口径は14.8cmを測る。7は口縁部が内湾するタイプの埴で、口縁部付近と内面がナデ、外面は丁寧な篋削りで仕上げている。胎土は精製され緻密で、橙色がかった茶褐色を呈する。口径14.4cm, 器高6.5cmを測る。

12号竖穴住居跡 (図版33—2, 34—1)



第 72 図 12号竖穴住居跡实测图 (1/60)

F1区の10号住居の北側で検出した竪穴住居跡である。溝4に切られており、南東壁は田畑の耕作で削平されている。平面形態は長方形を呈する。住居の規模は東・西壁4.85m・5.00m、南・北壁5.80m(復原)・6.25m、壁高は40cm前後を測り、遺存状況は良好である。復原した床面積は27.8㎡である。主柱は2本柱であるが、東側の1本は溝4に切られ僅かに痕跡を留めている。

2本柱の延長線のベット上には副次的な浅い柱穴を掘っている。西側の主柱の深さは65cmを測る。主柱間は2.20mである。主柱と副次柱の柱間は東側で1.00m、西側で1.20mを測る。主柱間には深さ15cmの円形の炉を掘り、中には灰・炭化物が充満していた。南壁の中央部には1.05×1.00m、深さ35cmの屋内土壇(作業穴)を付設している。東・西側には幅90cmから1.45m、高さ5.0cmから8.0cmの削り出しのベットを設け、西側のベット中央部は張り出している。さらに、10号住居と同様東側のベット上には80cm×1.40m、深さ70cmの屋内貯蔵穴を付設している。南・北壁と西壁には周溝が廻り、西壁側は削平を受けているが本来は南壁の周溝と繋っていたと考えられる。南壁では周溝と屋内土壇は直結する。主軸方位は主柱軸を採用するとN63°Eを示す。

出土遺物は壺・甕・高坏・鉢の他、石鑿1がある。出土土器から住居の時期は弥生時代後期前葉から中葉頃である。

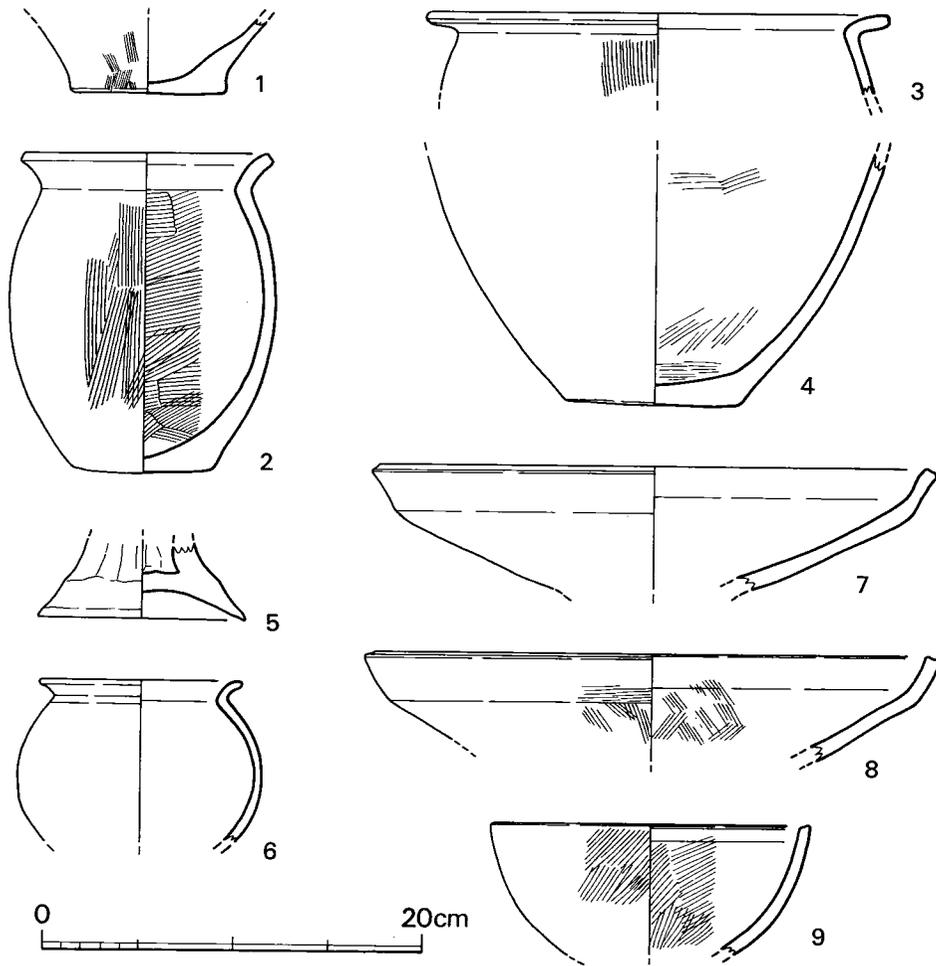
出土遺物

土器 (図版52, 第73図)

壺は1の底部片がある。完全な平底をなし、外面には細いハケを残す。内面はナデで仕上げている。淡黄褐色を呈し、底径9.2cmを測る。

甕は2～6がある。2・6は小型の甕で、前者は「く」字状に外反する口縁部を有し、最大径が胴中央部にある。底部は平底に近い。口縁付近以外は内外面ともハケ調整を主体とする。胎土には砂粒を多く含み、金雲母が若干混在する。色調は褐色を呈する。口径12.8cm、底径7.4cm、器高17cmを測る。3は大きく外反する口縁で上面は内傾する。肩部は張り気味である。形状は共伴する土器に比べて古相を呈する。外面がハケ、内面はナデ仕上げである。4は丸味のある胴下半部で、底部は平底を呈する。内外面ともナデで仕上げ、内面は僅かにハケが残る。淡黄橙色の色調をなす。底径9.3cm。5の器種は明確にできないが一応甕形土器の脚台とした。しかし底面を粘土で覆っていることから一種の器台とした方が妥当とも思える。調整は外面が工具による擦過、他はナデで仕上げている。内面には絞り痕を残す。6は反り気味にしかも「く」字状に外反する口縁部を有し、胴部は大きく張る。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は緻密で焼成も堅固である。淡い茶褐色を呈する。

高坏は7・8がある。いずれも坏部片で胴部から口縁部にかけては屈折し、口唇部は僅かに肥厚させている。両者とも調整はハケののちナデで仕上げ、8はハケが多く残る。7は内面



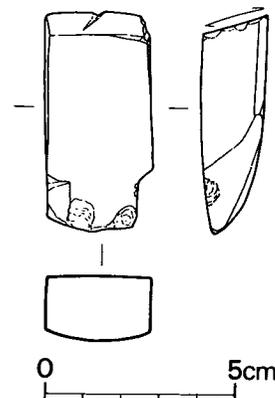
第73図 12号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

に二次加熱を受けている。色調は両方ともはだ色を呈する。復原口径は7が29.2cm, 8は29cmである。

9は鉢である。半球形を呈する。口縁内面には極細の沈線を廻らす。調整は内外面にハケを多用するが、外面下半はハケをナデ消している。黒色～灰色に近い色調を持つ。復原径17cmを測る。

石器 (図版52, 第74図)

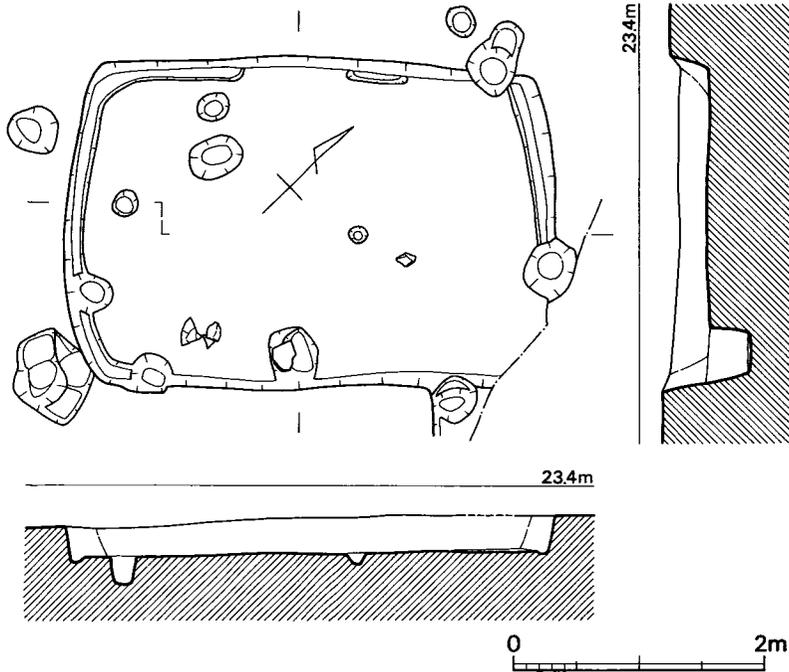
頁岩製の石鑿がある。刃部を一部欠失する。表面は風化が進行しざらつくが、上面は良く研磨している。全身5.7cm, 幅2.8



第74図 12号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

cm, 厚さ1.7cmを測り, つくりの精巧なものである。

13号竪穴住居跡 (図版34-2, 第75図)



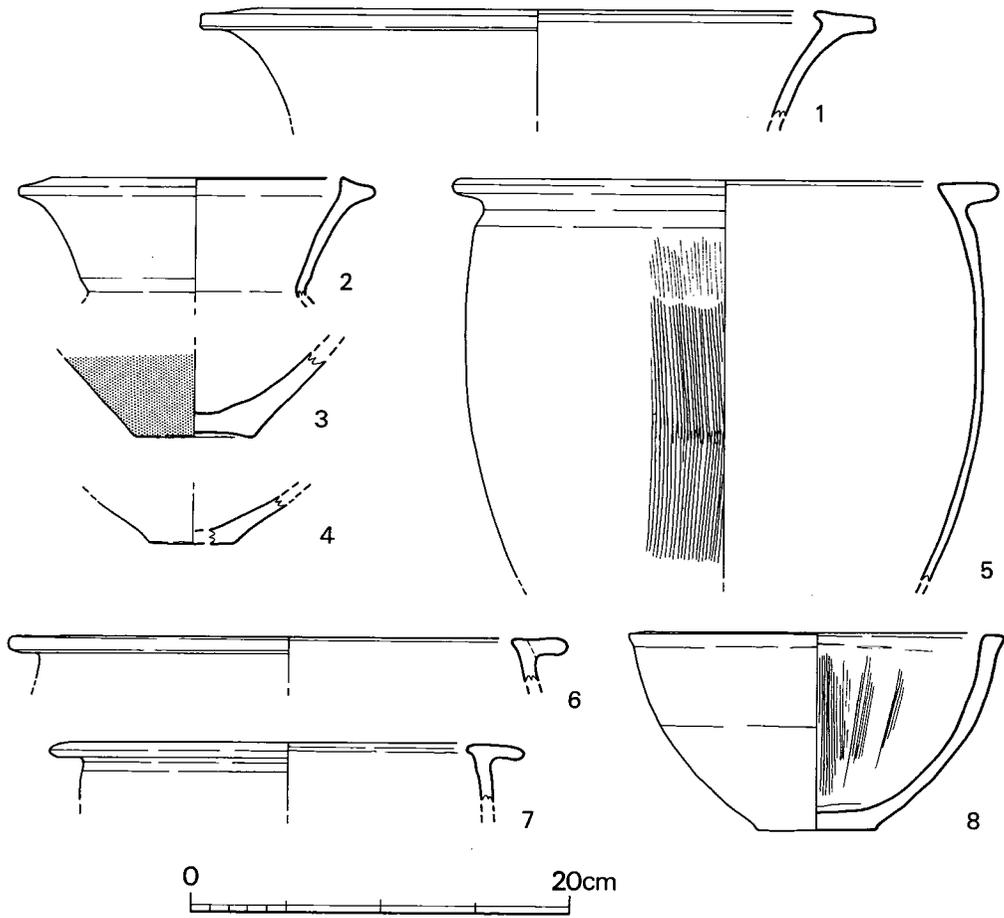
第 75 図 13号竪穴住居跡実測図 (1/60)

F 2 区の環濠 (溝 5) の内側で検出した竪穴住居跡であるが, 環濠から出土した土器とは時期を異にする。平面形態は短辺胴張りの長方形を呈する。住居の規模は長辺3.50m, 短辺2.55m, 壁高30cm前後を測る。床面積は東隅を復原すると8.3㎡となる。床面上で4本の柱穴を検出したが, 南東壁沿いの柱穴を除くと主柱とはなり得ない。概ね2本柱であろう。南西壁際には不整形の屋内土壌があり, 中から作業台とおぼしき石塊が出土している。炉は見当らず, 短辺壁際に幅10cm, 深さ5cmの周溝が廻る。

出土遺物は壺・甕・鉢・蓋形土器の他, 石庖丁が1点ある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期中葉から後葉にかけてであるが, 鉢形土器が新しい様相を呈している。

出土遺物

土 器 (図版52, 第76図)



第 76 図 13号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

壺は 1～4 がある。1 は鋤先口縁壺で上面は外傾する。調整はナデ。黄橙色を呈し復原口径 36cm を測る。2 も鋤先状を呈するが 1 程顕著ではない。形状では 1 よりも新しいと考えられる。調整は磨耗して不明。黄褐色を呈する。復原口径 18.7cm を測る。3・4 は壺の底部で前者は上げ底で外面に黒色顔料を塗布する。内面はナデで仕上げている。3 の底径 6.0cm, 4 は小さく 4.7cm を測る。

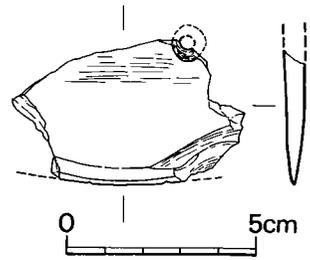
甕は 5～7 がある。5 は「T」字状に近い口縁を有し、頸部は内傾する。胴部は張り気味である。調整は外面ハケ、内面ナデで仕上げ、外面全体に煤が付着する。復原口径 29.0cm を測る。6・7 は発達した「T」字状の口縁で後者は平坦部が外傾する。復原口径は 6 が 29.5cm, 7 が 29.0cm を測る。

8 の鉢は口縁部を僅かに外反させ、口唇部は肥厚する。体部は丸みを持ち小き目の底部に続

く。調整は外面がナデ、内面はハケののちナデで仕上げる。
 淡茶褐色を呈し、内外面とも煤が付着する。口径20cm、底
 径6.4cm、器高10.5cmを測る。

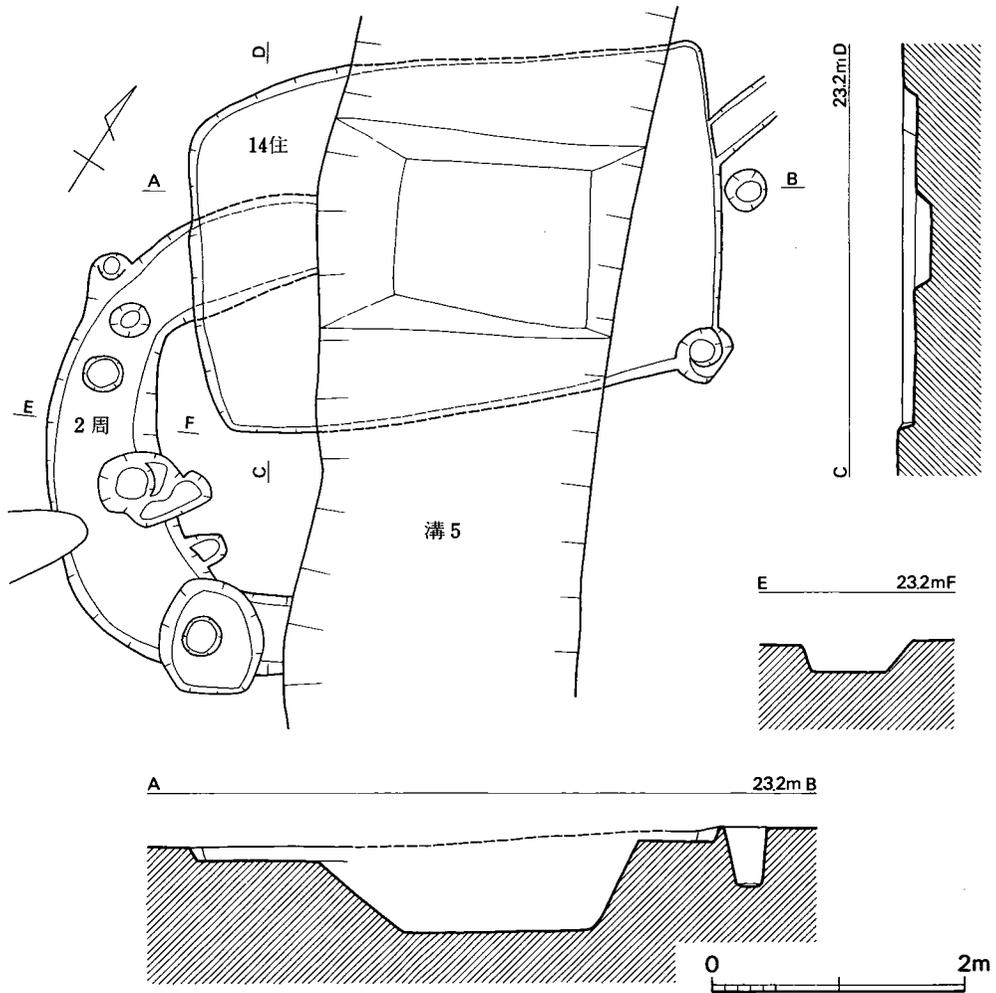
石器 (図版52, 第77図)

粘板岩製の石庖丁片がある。刃部と孔を僅かに残すのみ
 である。刃部は鋭く研いでおり、片面は2個所に稜をなす。
 表面は良く研磨され灰黒色の光沢がある。



第77図 13号竪穴住居跡出土
 石器実測図 (1/2)

14号竪穴住居跡 (第78図)



第78図 14号竪穴住居跡・2号周溝状遺構実測図 (1/60)

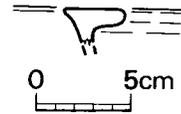
F2区の溝5に近くを切られた状態で検出したため、全容は殆んど判らない。さらに、2号周溝状遺構とも重複しており、8号住居同様新旧関係は不明瞭であるが、周溝状遺構が新しいことも考えられる。住居の平面プランは両短辺壁が残っていることで長方形と判る。規模は長辺4.00m・4.10m、短辺2.50m・2.60m、壁高は15cm弱である。その他詳細は不明である。

遺物は土器片が僅かにあるが、図示可能な甕が1点ある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期中葉頃である。

出土遺物

土器 (第79図)

甕の口縁部で小片である。「T」字状に発達した口縁部を有す。胎土は砂粒をかなり含み、黄褐色の色調をなす。全体に煤が付着している。



第79図 14号竪穴住居跡
出土土器実測図
(1/4)

15号竪穴住居跡 (図版35—1・2, 第80図)

環濠(溝5)の内側の31号・32号・36号住居を切った形で検出した竪穴住居である。1/2強が調査区域外のため完掘に至っていない。平面形態は方形であろう。規模は明らかでないが、一辺のみ計測でき4.75m、壁高25cm前後である。支柱は1本のみを確認したが4本柱であろう。

北東壁の中央には「U」字状の竈を付設しており、袖部には明瞭な黄褐色粘土を使用していた。竈内は赤変した火床が認められ、掻き出していない。中央部には自然石を支脚に利用し、支脚の廻りは床面を粘土で客土し埋め込んだ後、粘土で固定していた。その廻りには甕形土器が散乱し、竈上部に置いたと考えられる小型甕が内部に落ち込んでいた。竈の奥壁側は火床より一段深く掘っており煙道の痕跡と考えられる。右袖の傍には完形の甕形土器が横転していた。

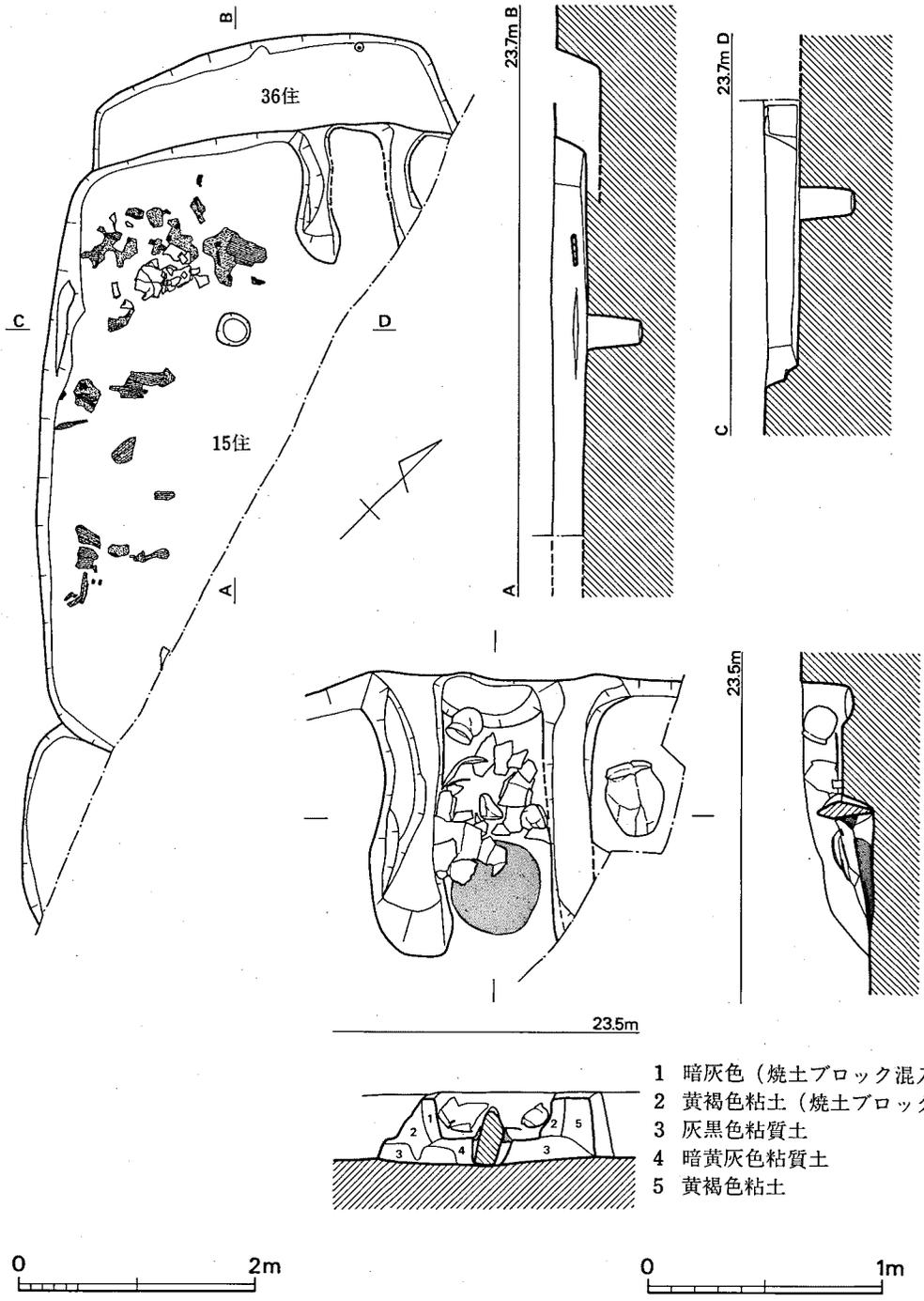
さらに、床面上には焼土と炭化材が散在し、その中には板状の炭化材を確認した。当核住居は火災に遭遇し当時の状況そのまま急遽廃棄したと考えられる。遺物は竈とその周辺から多く出土した。

出土遺物は壺・甕・高坏・埴がある。出土土器から住居の時期は古墳時代中期である。

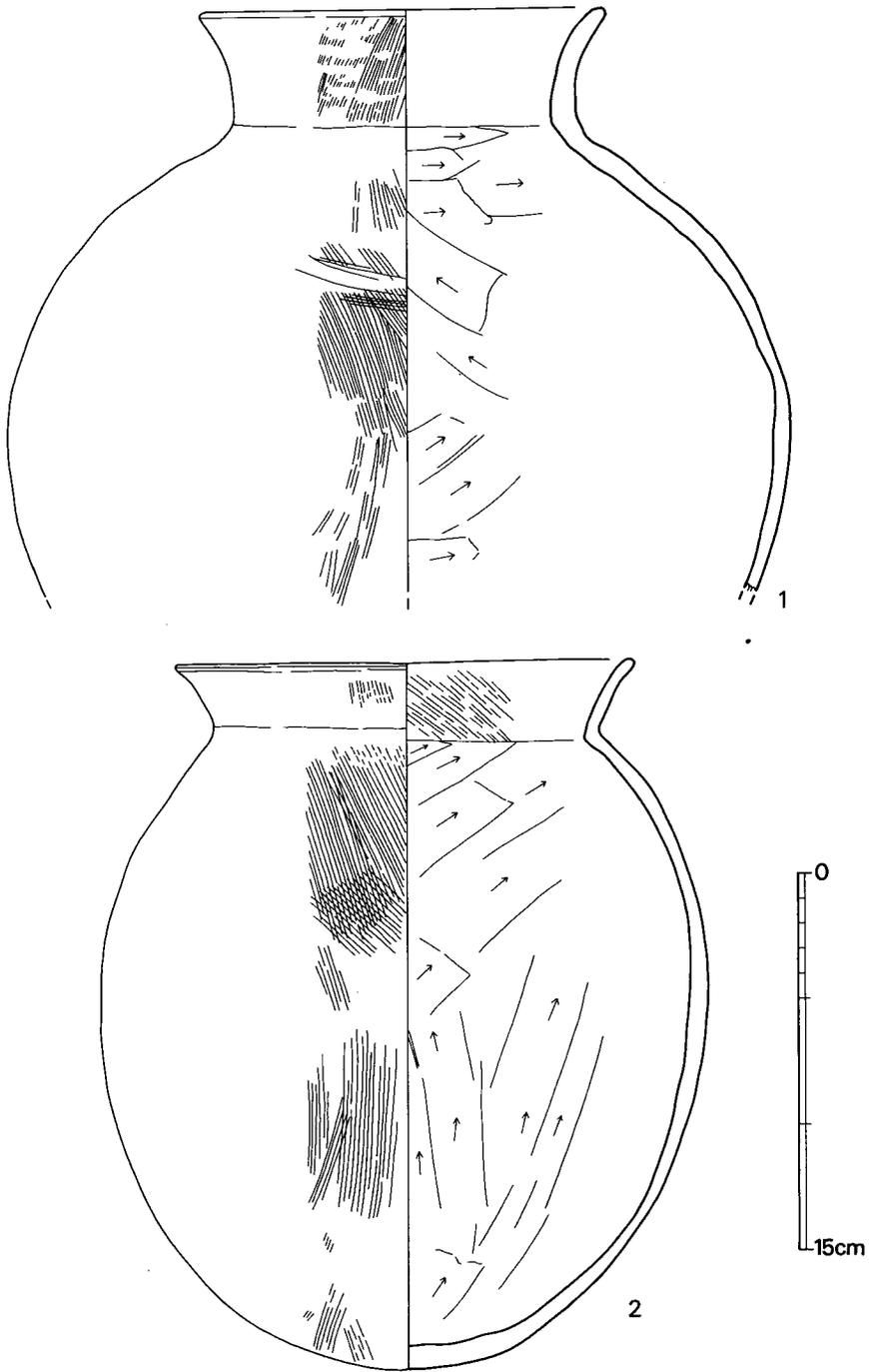
出土遺物

土器 (図版52・53, 第81, 82, 83図)

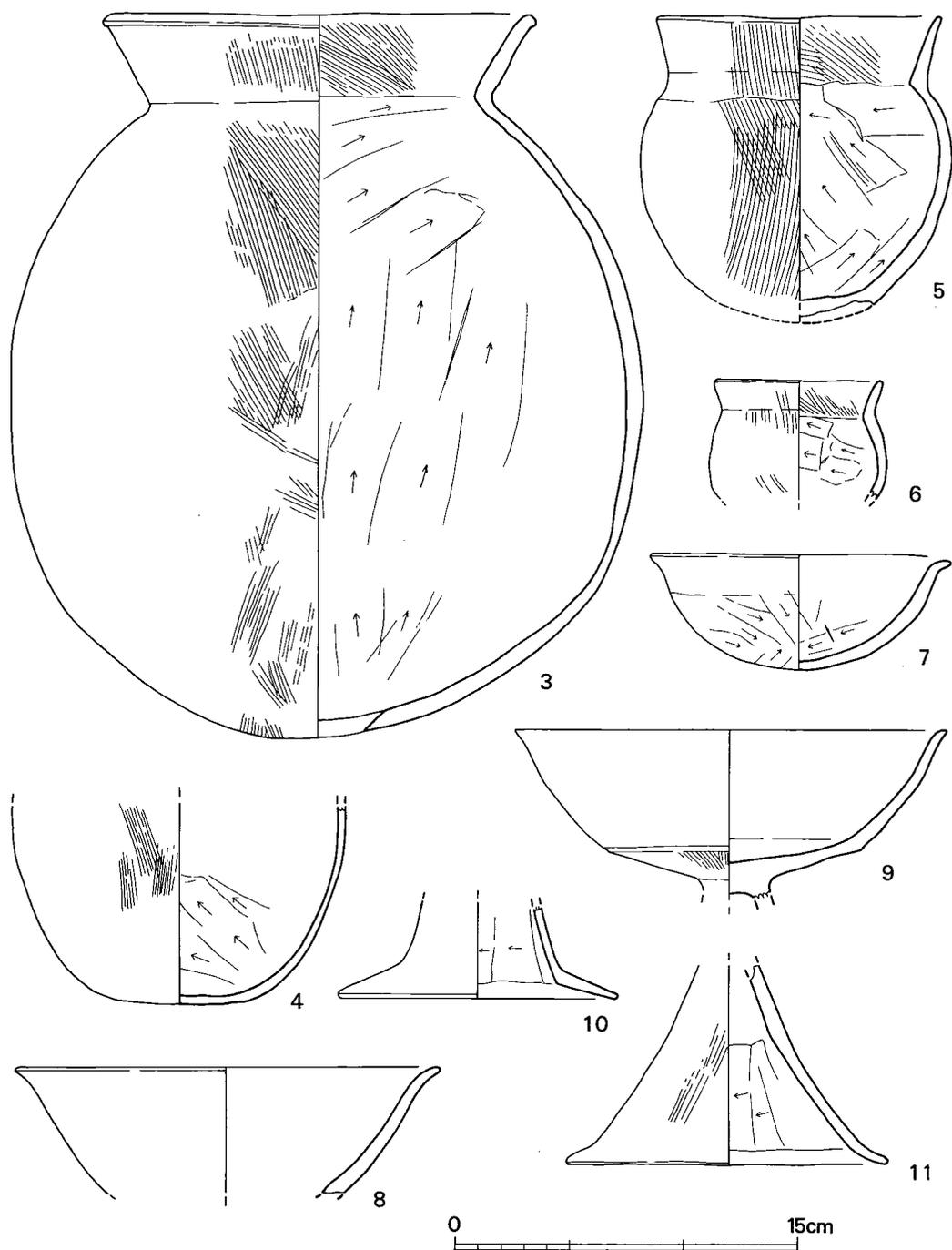
1は壺形土器で胴下半を欠損している。頸部から反り気味に長く外反する口縁部を有し、肩から胴部にかけての張りは著しい。調整は外面が荒いハケで仕上げ、口縁部は部分的にナデ消す。胴部は摩耗する。内面はやや荒い篋削りで仕上げている。胎土は細砂粒を多量に含み、黄



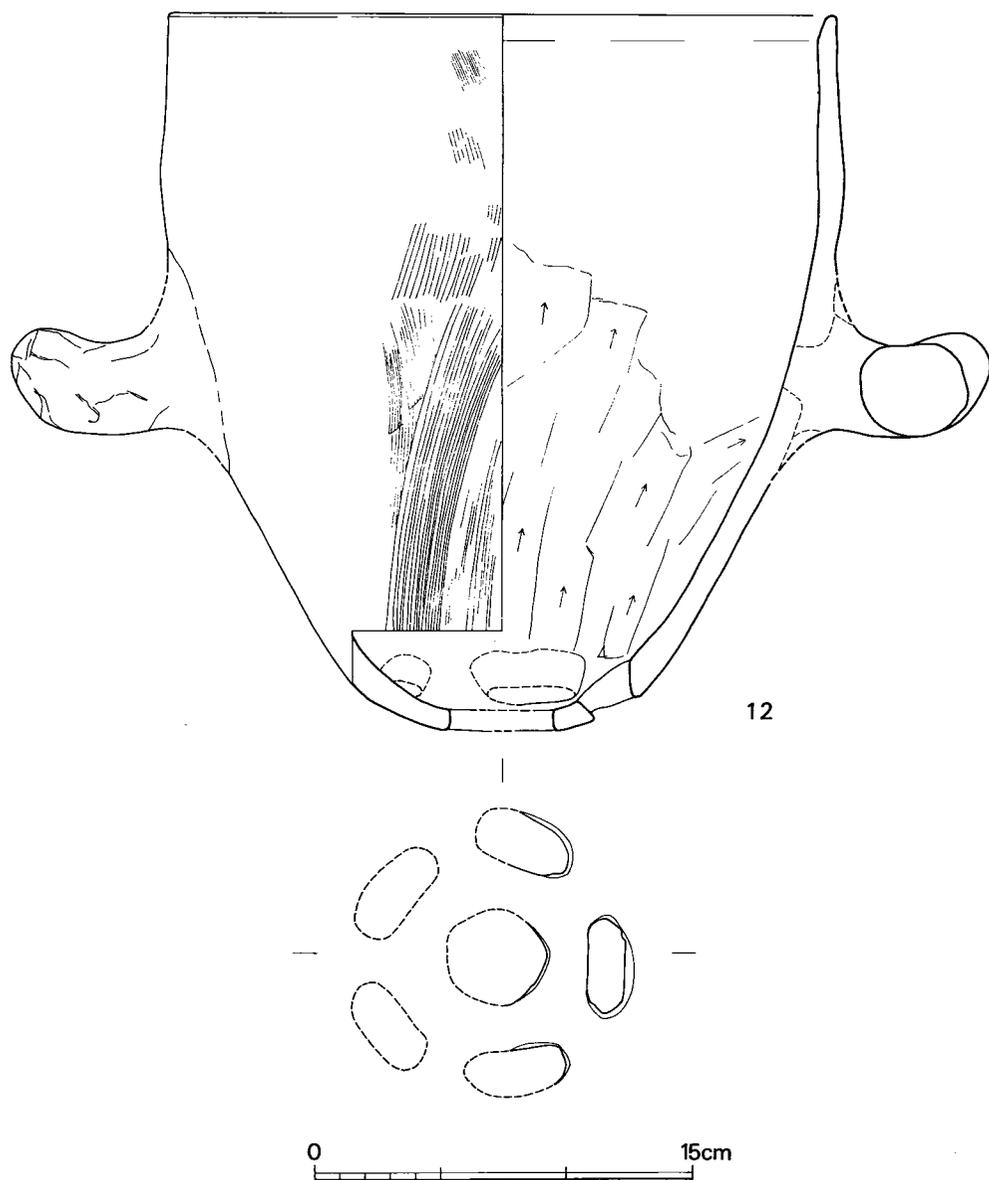
第 80 図 15号竖穴住居跡・竈実測図 (1/60・1/30)



第 81 図 15号竖穴住居跡出土土器実測図その 1 (1/3)



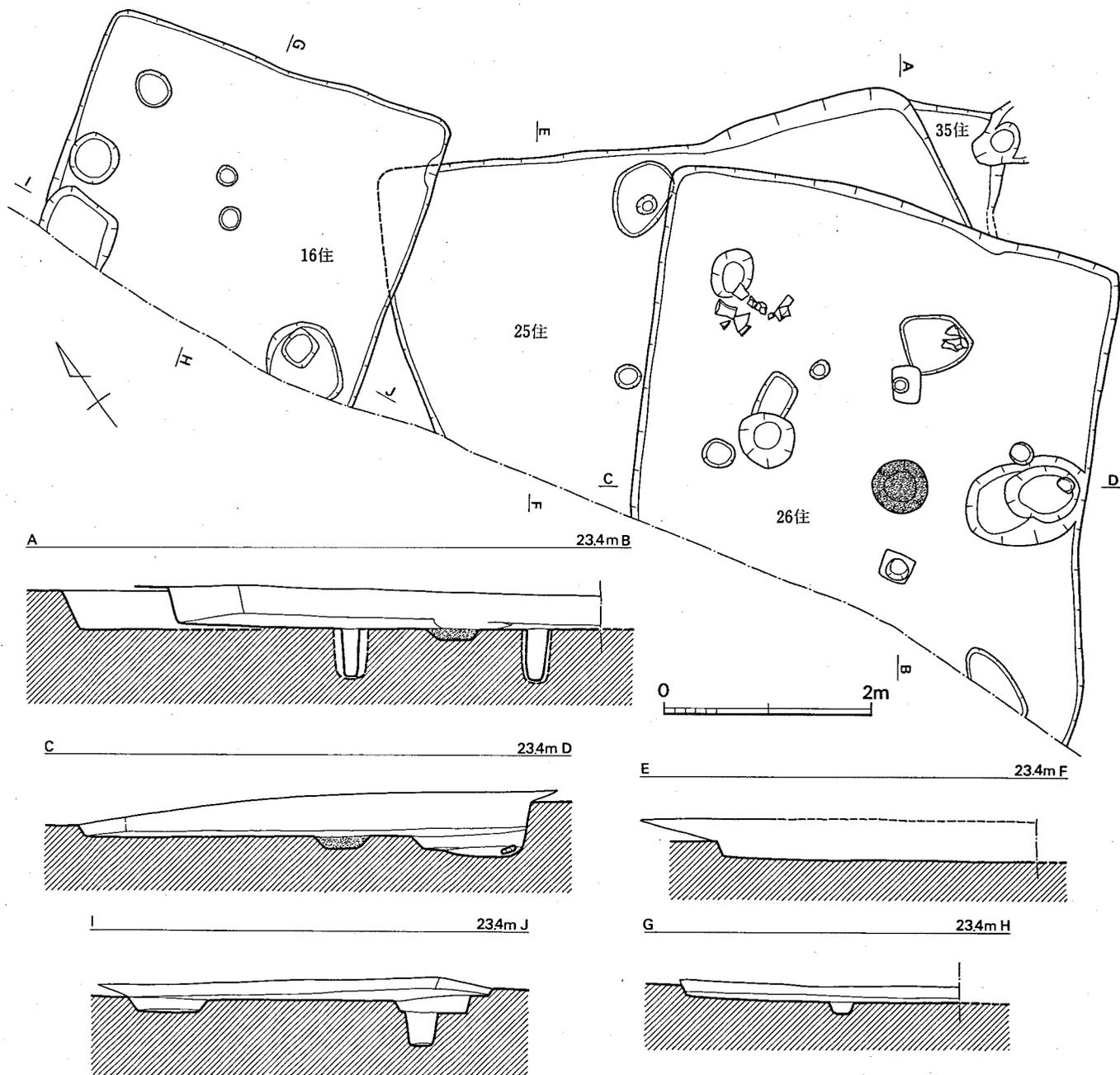
第 82 図 15号竪穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/3)



第 83 図 15号竪穴住居跡出土土器実測図その 3 (1/3)

褐色を呈する。住居の埋土中からの出土で、口径16.2cmを測る。

甕は2～6がある。2・3は完形品である。2は「く」字状に鋭く外反する口縁をなし、肩部から胴部にかけては張り気味で、やや長胴を呈する。底部は丸底である。調整は口縁内外面ともハケのちナデ、体部外面はやや荒いハケを施すが摩耗している。内面は下→上の荒い篋削り



第 84 图 16号・25号・26号・35号竖穴住居跡实测图 (1/60)

で仕上げている。色調は茶褐色を呈し、外面には強い二次加熱を受け煤の付着が著しい。竈の右袖の傍に横転していた。口径18.4cm、胴部最大径24.3cm、器高28.4cmを測る。3は「く」字状に外反する口縁部を有し、口唇部は外側に肥厚させる。肩の張りは鈍く、胴部は球形を呈す。最大径が胴下半部にあり土器に安定感がある。底部には焼成後の穿孔があり甑として使用している。調整は2の甕と同様である。胎土は砂粒をかなり含み茶褐色の色調をなす。外面は弱い二次加熱を受け煤が付着する。竈内から出土した。口径18.3cm、胴部最大径は27.8cm、器高31.7cmを測る。4は小型の甕で底部は平底気味である。外面はハケののちナデ、内面の底部は篋削り、上部はそれをナデ消している。外面に二次加熱を受けている。5は頸部から上方に外反し、肩部から胴部にかけては球形を呈する。口縁内面と外面は荒いハケ、内面は篋削りで仕上げる。外面全体に強い二次加熱を受け器面が部分的に剝落している。口径12.2cmを測る。竈内からの出土である。6は小型の甕で口縁部は鈍く外反する。口縁内面と外面は荒いハケが摩滅し、体部内面は篋で削る。橙色を呈し、口径7.4cmを測る。

7は塊形土器で口縁部を僅かに外反させる。体部は扁平球を呈する。調整は内面の擦過をナデ消す。口縁周辺は横ナデ、外面は丁寧な篋削りで仕上げる。口径13.3cm、器高5.1cmを測る。埋土中からの出土である。

高坏は8～11がある。8の坏部は深く屈折部の接合面以下が欠失する。口縁部は緩く外反する。調整は横ナデで仕上げている。黄橙色の色調を有す。復原口径18.6cmを測る。9は坏部が浅く屈折部が明瞭である。体部は僅かに丸みをなす。内面から体部外面は横ナデ、底部外面はハケを施す。茶褐色ばい色調を有し、口径19.0cmを測る。覆土中からの出土である。10は脚部片で裾部は鋭く開く。内面は横方向の篋削り、その他はナデで仕上げる。黄橙色を呈する。11はスカート状に開く脚部である。外面と裾部内面はナデで仕上げるが、外面にハケが若干残る。内面は横方向の篋削りを施す。胎土は緻密で黄橙色を呈する。裾部の径が14.0cmを測る。通常では8の坏部に11の脚が、9の坏部に10の脚部が接合されるが、出土した高坏はすべて同一個体ではない。

12は把手付の多孔式甑である。口縁部は直線的で、胴中央部には太目の把手を体部に挿入する。底部は丸底で復原すると5孔を穿つ。調整は外面上半がハケの上をナデる。下半は荒いハケを施す。内面上半が篋削りをナデ消し、下半は下→上方向に荒く削る。胎土には細砂粒を多く含み、黄橙色から茶褐色を呈する。外面には二次加熱を受けている。復原口径26.7cmを測る。床面直上からの出土である。

16号竪穴住居跡 (図版36—1, 第84図)

F2区の東側で検出した竪穴住居跡で25号住居を切っている。1/3程度が調査区域外のため完

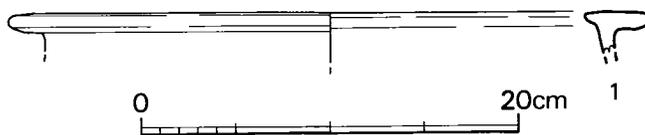
掘に至っていない。平面プラン、規模等も明らかでないが、北東壁のみ計測でき3.45m、壁高は10cm強を測り遺存状態は良くない。支柱穴は床面中央付近で2本検出したが、いずれも10cm強の深さで支柱穴にしては浅い。北西壁際には屋内土壙と考えられる掘り込みがある。

出土遺物は図示可能な甕形土器が1点あるが、中期中葉頃の25号住居に切られており、図示した甕が25号住居と同一時期が与えられることからこの土器は混入の可能性が強い。したがって当該住居の時期は弥生時代中期中葉以前となる。

出土遺物

土器（第85図）

図示可能な土器は甕が1点ある。「T」字状に発達した口縁部を有す甕である。焼成は良好で、胎土は砂粒をかなり含む。色調は黄橙色を呈する。復原口径34.1cmを測る。



第85図 16号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

17号竪穴住居跡（図版36—2、第86図）

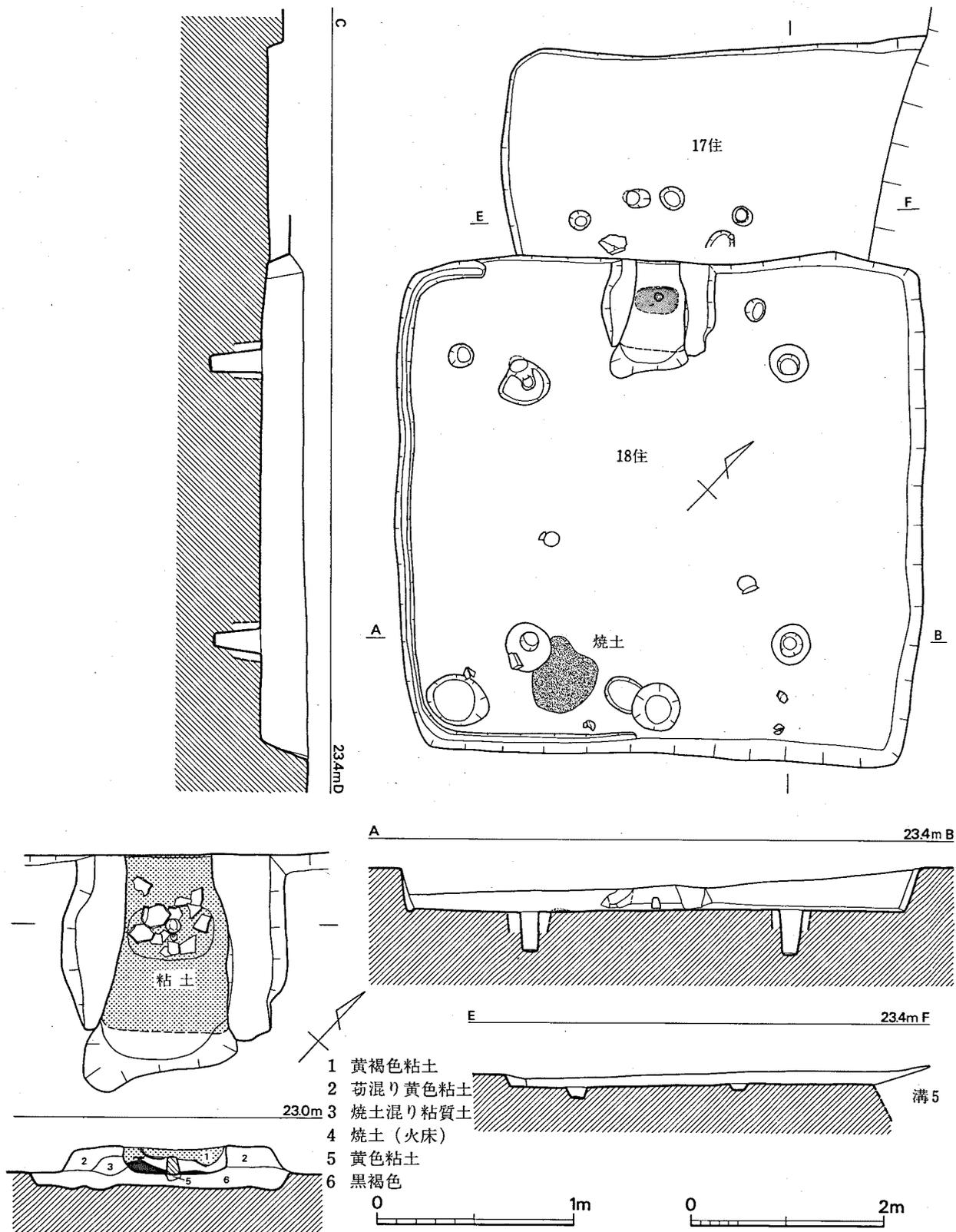
18号住居と環濠（溝5）に切られた状態で検出した竪穴住居跡である。平面形態は明らかでないが、長方形乃至方形であろう。規模は不明である。図示した2本の柱穴も浅く支柱穴か否かは疑わしい。その他詳細は不明な点が多い。

図示可能な出土遺物は甕と蓋形土器があるが、総数としては少ない。出土土器から住居の時期は弥生時代中期前葉でも古期に相当する。

出土遺物

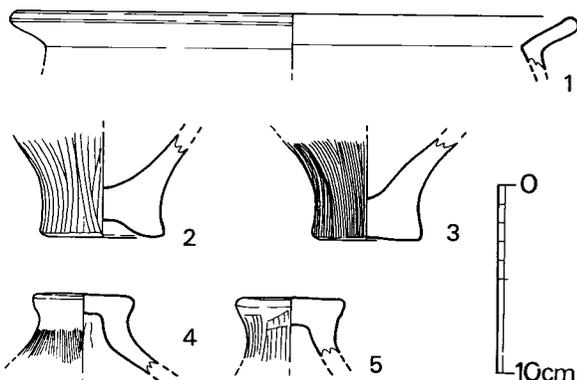
土器（第87図）

甕は1～3がある。1は鋭く外反する口縁を有す甕であるが、後期のそれとは異なる。むしろ遠賀川系統の甕に近いが、口唇部の跳上げや肥厚がみられない。2・3は同様の細みの底部であるが、2は上げ底を呈する。調整は前者が荒いハケ、後者は細いハケを施す。内面は両者ともナデで仕上げる。胎土には砂粒を多く含む、金雲母が若干混在する。2が茶褐色、3は黄橙色を呈する。底径は6.7cm、5.9cmを測る。



第 86 图 17号・18号竖穴住居跡・竈実測図 (1/60・1/30)

4・5は蓋形土器の摘み部である。天井部周辺はナデ、外面は4が細かいハケ、5は荒いハケ仕上げである。4の内面には絞り痕を残す。両者とも黄橙色を呈する。



18号竪穴住居跡 (図版36-2・37-1, 第86図)

第 87 図 17号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

環濠(溝5)と17号住居を切った状況で確認した竪穴住居跡である。

平面形態は方形を呈する。住居の規模は北東・南西壁5.15m・4.95m, 北西・南東壁5.25m・4.90m, 壁高は遺存状態の良好な所で45cmを測る。床面積は竈を加えて24.3㎡である。主柱は規則的な4本柱で、竈と対峙する壁沿いにも1本の柱穴を確認した。柱間は上記の壁に沿って2.85m・2.85m, 2.80m・2.65mで、南東側の2本の柱と壁際にある柱穴との柱間は両方とも1.50mと同値で頗る規則性を持たせている。柱穴の深さは40cmから55cmを測る。

北西壁の中央部には「U」字状の竈を付設している。竈は築造時に住居の床面よりやや深く掘り込んだ後、黒褐色土で埋土し苧混りの黄色粘土で両袖を構築している。竈の中央には土製の支脚を黄色粘土で下部と廻りを固定しており、その周辺の床面は焼痕が著しく固く締っていた。支脚の廻りには甗が散在し、支脚の傍(手前)にはミニチュア土器を倒立させて置いていた。さらに、住居を廃棄する時点で竈の内部を別の黄褐色粘土を用いて充填していた。これは竈がその役割を終了した際に「火おとし」の祭事を取り行つたと考えられ、家内で何らかの災難に遭遇したことから、竈神=家の神を封束する意味あいの行為として理解できよう。

住居の南側隅には4号住居と同様の楕円形の屋内土壇(弥生時代の屋内土壇とは用途が異ると考えている)を付設している。中からの出土遺物は無い。土壇の深さは24.0cmを測る。周溝は北西壁から南東壁沿いに廻らしている。主軸方位は竈軸と平行の柱間軸を採用するとN44°Wを示す。

さらに、調査時に気付いたことであるが、当該住居跡は南東側から別の竪穴住居を掘削したと考えられる排土(焼土と黄褐色粘土混り)で意識的に埋めており、前述した竈の封束と相俟って住居自体も封じ込める意思が働いたものと考えられる。

遺物の出土状態は埋土中及び床面直上・竈とその周辺から出土しており、器種は土師器の壺・高坏・鉢・甗・埴・坏蓋・坏身・ミニチュア土器、須恵器の坏蓋・高坏・甗の他、土製支脚、鉄器があり数が多い。出土土器から住居の時期は古墳時代後期である。

出土遺物

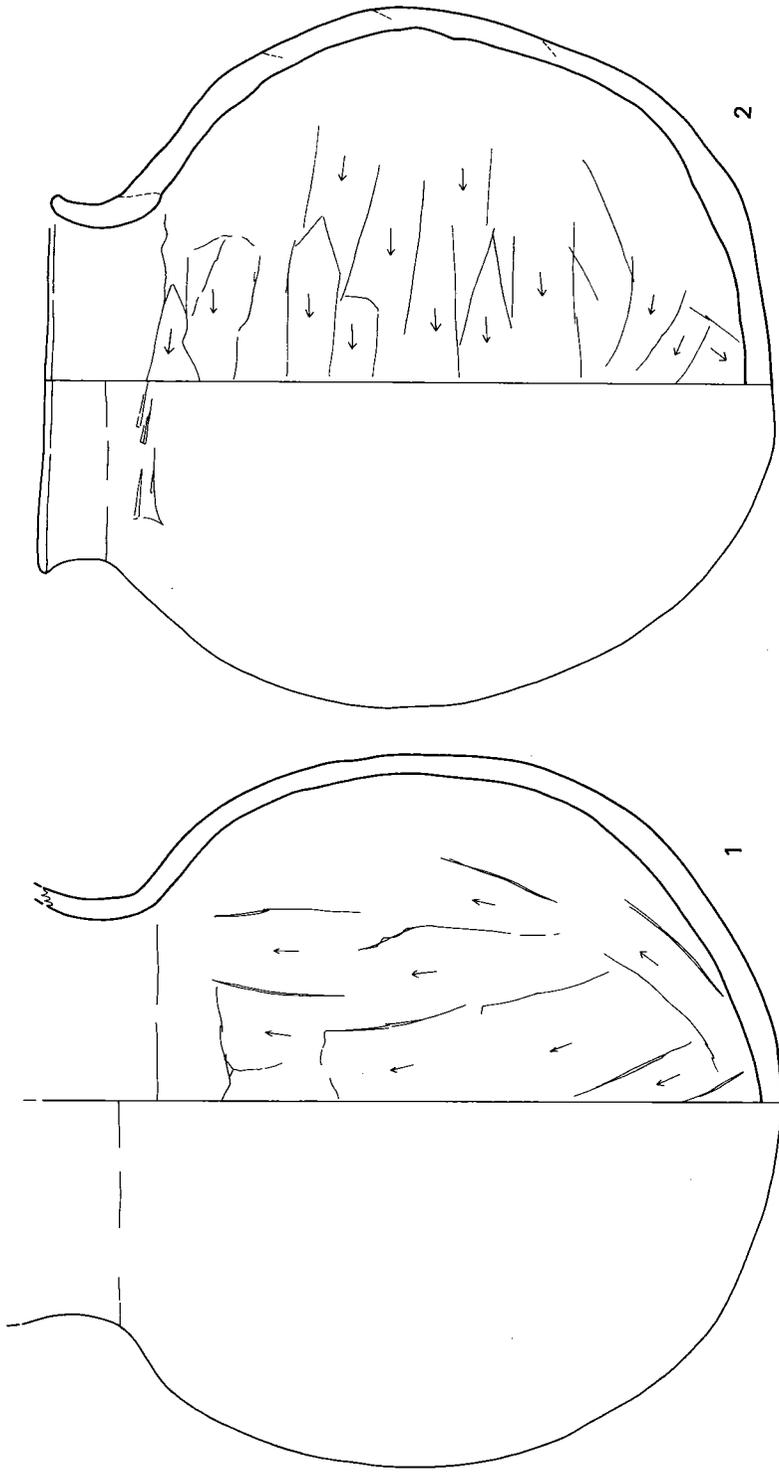
土器 (図版53・54, 第88, 89, 90, 91図)

土師器 壺は1～3がある。1は口縁部を欠くが、頸部は反り気味に上方に開く。肩から胴部は球形状を呈する。頸部内面から外面にかけてはナデで仕上げ、内面の肩部以下は荒いへら削りを施す。胎土は細砂粒を多量に含む。色調は淡黄橙色から褐色を呈する。外面底部付近は強い二次加熱を受け赤変する。上半部も弱い二次加熱を受けている。胴部最大径は28.4cmを測る。住居の埋土中からの出土である。2は短い頸部を反り気味に外反させ、口唇部はさらに外反する。体部は2と同様球形を呈する。器壁は厚く、調整は外面がハケを完全にナデ消している。内面は左廻りの荒いへら削りで仕上げている。胎土は粗い砂粒を多く含む。橙褐色の色調を有す。外面は全体に二次加熱を受けている。口径15.1cm, 胴部最大径27.9cm, 器高29.0cmを測る。覆土中からの出土である。3は小型の壺で口縁部が緩く外反する。頸部はやや長く、肩部の張りは強い。胴下半部も僅かに屈折する。調整は頸部から口縁部内外面ともナデ、胴部外面は擦過の上からナデ、内面は丁寧な篋削りをナデ消す。胎土には砂粒を多く含みくすんだ橙色を呈する。内外面は弱い二次加熱を受けている。復原口径11.0cm, 器高14.7cmを測る。

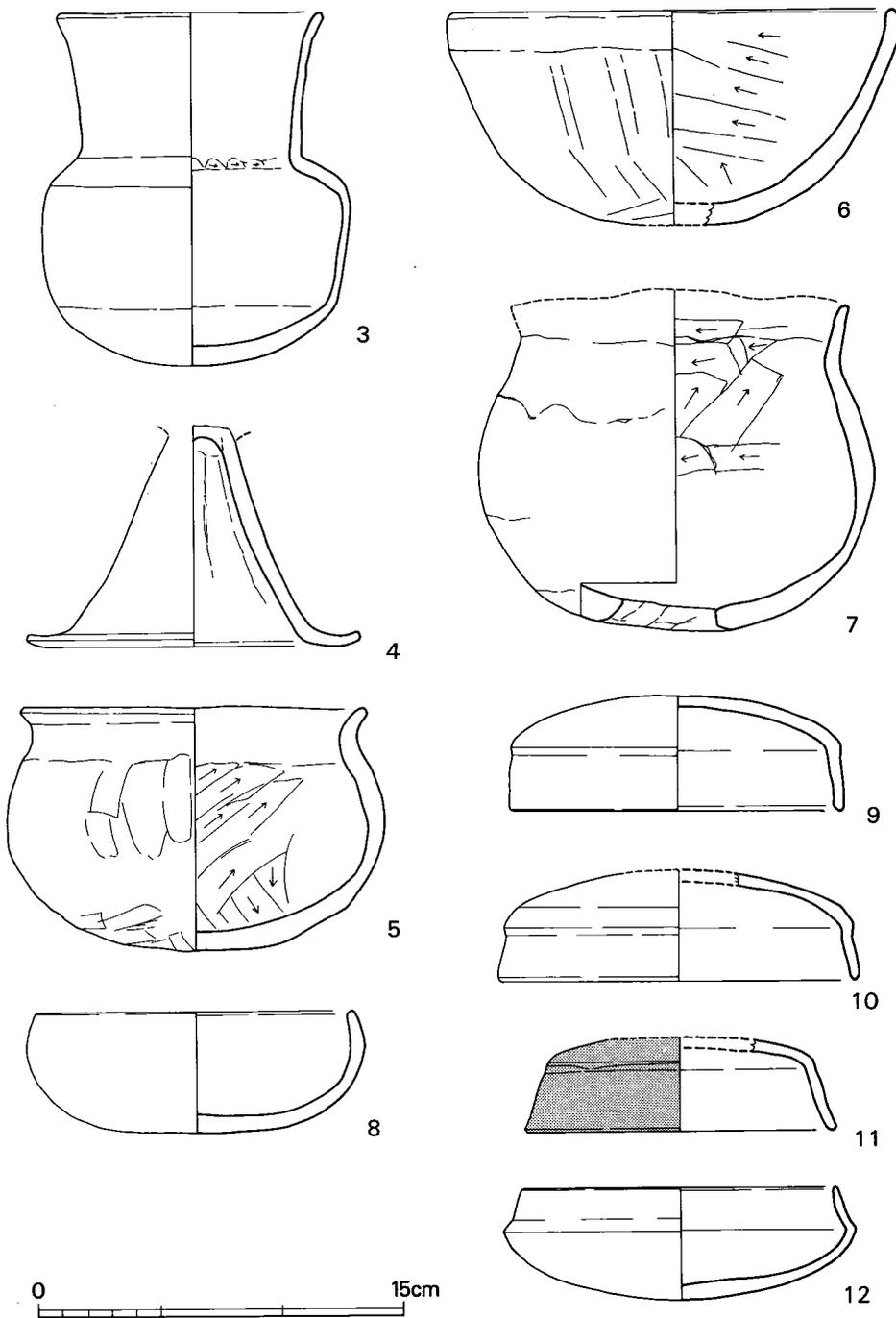
高坏は4の脚部がある。スカート状に開き、裾部でさらに開き端部は反り上る。調整は外面と裾部内面がナデ、内面は横方向の篋削りで仕上げる。橙色を呈し、裾部径13.7cmを測る。埋土中から出土した。

鉢は5～7がある。5は鋭く反り気味に外反する口縁部に体部は張り、扁平球状を呈する。調整は口縁内面から体部外面にかけてはナデ、底部は篋削りをナデ消す。内面は荒い篋削りで仕上げる。胎土は砂粒が多く、橙色～褐色の色調を持つ。復原口径13.9cm, 器高10.1cmを測る。覆土中からの出土である。6は口唇部が僅かに内湾する半扁平球状を呈する鉢である。調整は内面が篋削り、外面は荒い擦過状のハケで仕上げる。外面には二次加熱を受ける。胎土は粗雑で橙褐色を呈する。復原口径19.0cm, 器高8.95cmを測る。埋土中からの出土である。7は鈍い「く」字状に外反する口縁を有し、胴下半部が張る。底部には焼成後に径4cm強の孔を内側から穿って甑として使用している。調整は外面が粗いナデ、内面は下半が篋削りののちナデ、上半は口縁近くまで削っている。胎土は粗く、色調は褐色を呈する。外面には二次加熱が認められる。復原口径14.0cm, 器高14.1cmを測る。床面からの出土である。

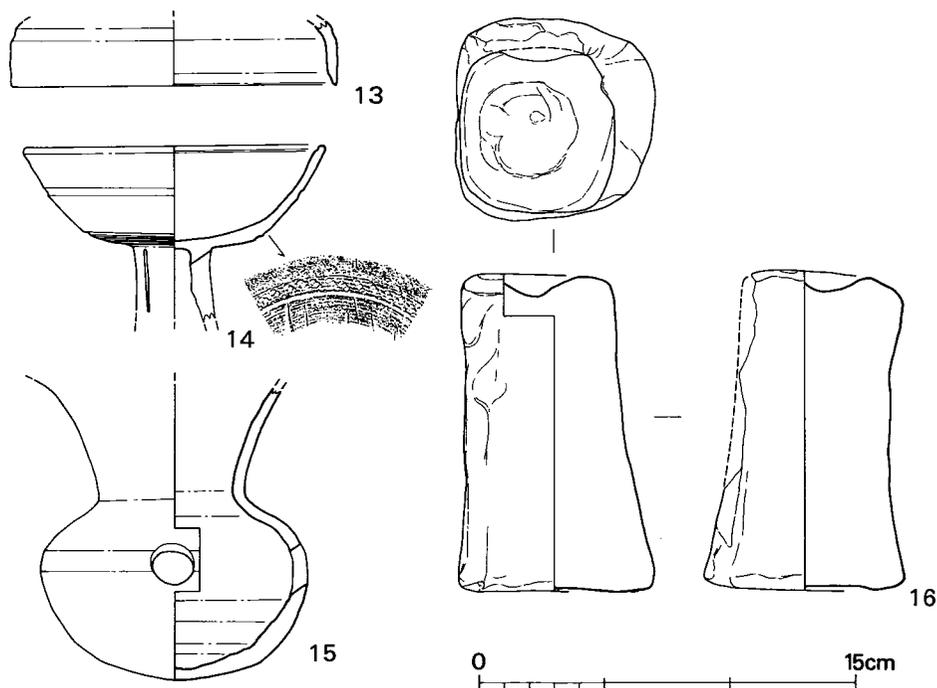
9～11は土師質の坏蓋である。9は天井部から口縁にかけて鋭く直角に近い状態で屈折する。調整は天井部外面が丁寧な篋削りののちナデ、口縁部内外面とも横方向の磨き、内面は丁寧なナデで仕上げている。胎土は緻密で橙色をなす。復原口径13.9cm, 器高4.80cmを測る。10は口縁部が僅かに外傾するタイプで天井部と口縁部の境は屈曲する。胎土は頗る緻密で褐色を呈する。復原口径15.0cmを測る。11は口縁部が外傾するタイプで内外面とも漆を塗布し研磨してい



第 88 図 18号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/3)



第 89 図 18号竖穴住居跡出土土器実測図その2 (1/3)



第 90 図 18号竪穴住居跡出土土器実測図その 3 (1/3)

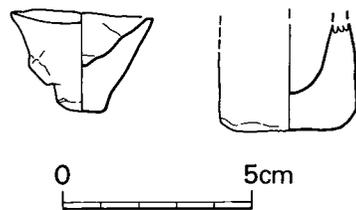
る。胎土は非常に緻密で、焼成も堅固である。復原口径13.0cmを測る。竈内からの出土である。

12は土師質の坏身である。口縁部は反り気味に内傾し、口縁部と体部境の屈折は著しい。色調は黄褐色を呈し、調整は摩耗が激しく不明。復原口径13.1cm、器高4.70cmを測る。

17・18は竈内から出土したミニチュア土器である。17は完形品で胎土は砂粒が少なく緻密である。橙褐色を呈する。18は雑なつくりで口縁部を欠く。

須恵器 13は坏蓋で口唇部は有段をなす。調整は横ナデで仕上げる。青灰色の色調を呈する。復原口径13.0cm。

14は高坏で脚裾部を欠く。坏部は直線的に開く口縁部を有し、体部には浅い凹線を廻らす。底部には細い沈線を廻らしその直上には板の小口部の刺突文を密に配する。調整は横ナデと底部にはカキ目を施している。脚部は細い透しを3個所に穿つ。全面に灰が被り、部分的に自然釉が付着する。暗灰色の色調を有す。坏部の口径12.0cm、高さ4.0cmを測る。



第 91 図 18号竪穴住居跡出土土器実測図その 4 (1/2)

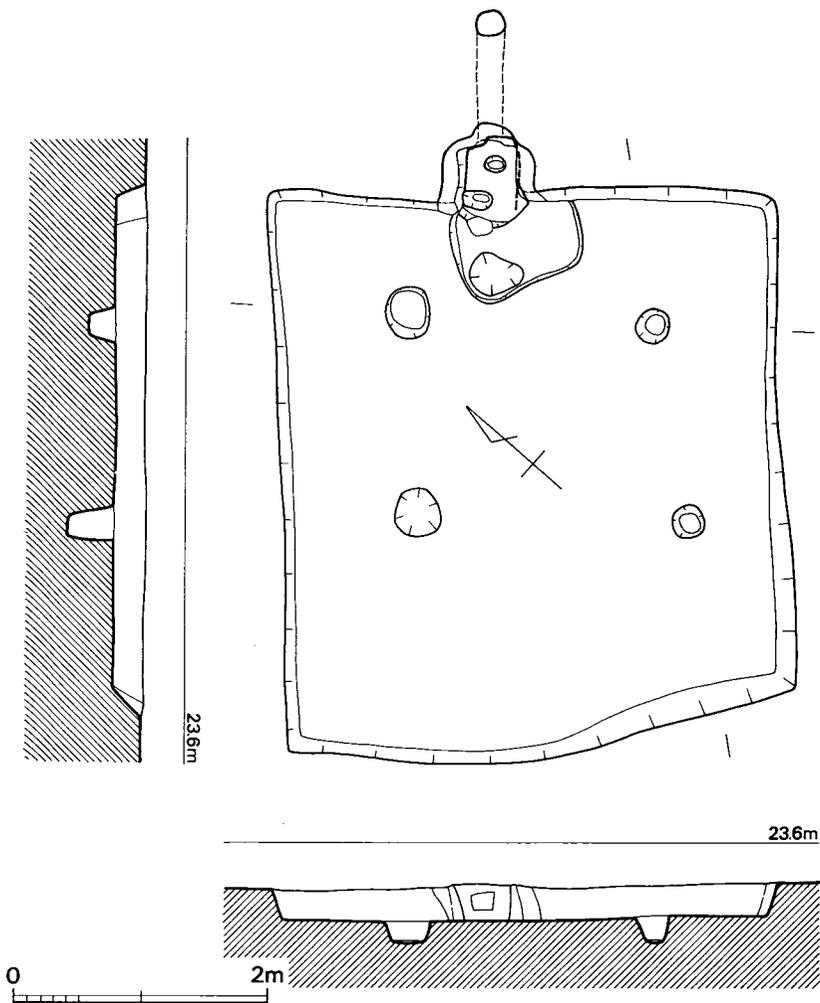
15は甕で口縁部を欠損する。頸部は長く上方に開く。肩部は張り扁平球状の体部を有す。胴中央には斜めに径1.60cmの孔を穿っている。調整は内外面ともナデ、底部付近は回転篋削りの上か

らナデている。青灰色の色調をなす。埋土中からの出土である。胴部最大径10.6cmを測る。

土製品（図版54，第90図）

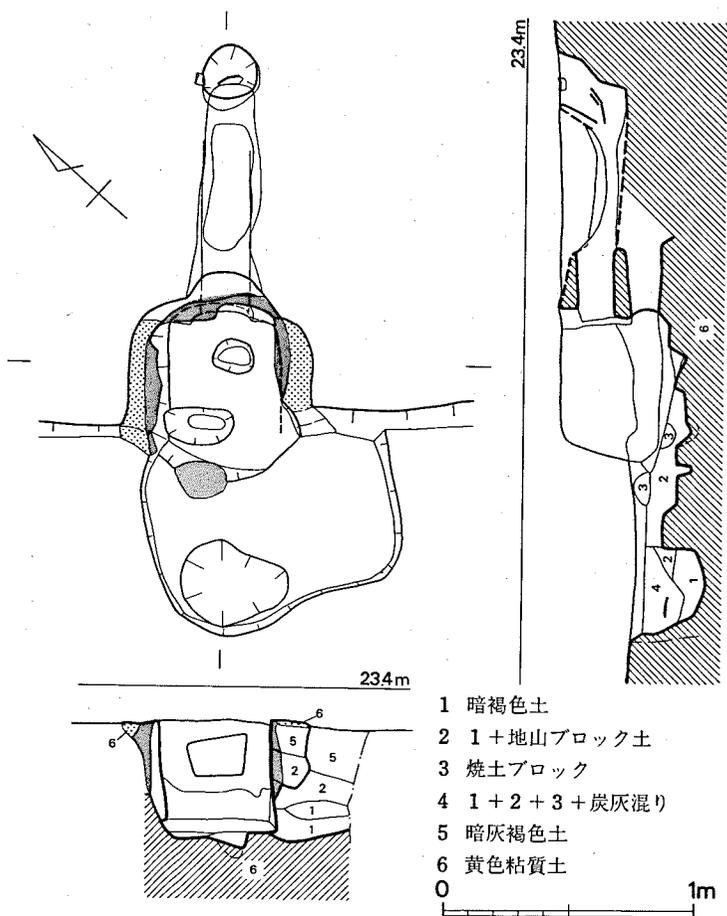
16の土製支脚がある。上面平坦部には径3.8cm、深さ9mmの窪みをつくる。器表面は強い二次加熱を受け剥落する。調整はナデで仕上げ，橙色を呈する。長面径6.0cm，裾部径7.9cm，器高12.7cmを測る。住居の埋土中からの出土である。

19号竖穴住居跡（図版37—2，38—1）



第 92 図 19号竖穴住居跡実測図（1/60）

F2区の19号住居の周辺は非常に重複関係が著しく、重複する全ての遺構を切った状態で検出した竪穴住居跡である。平面形態は長方形に近い形状を呈する。規模は東北・西南辺が4.05m・4.08m、西北・東南辺が4.45m・3.95m、壁高は25cm前後を測りやや歪である。住居の床面積は16.2㎡である。主柱は構造状4本と考えられるが、北方向の2本は明瞭ではなく、調査時に何度も検出を試みたが明確な柱穴は認められない。柱間は東南辺側

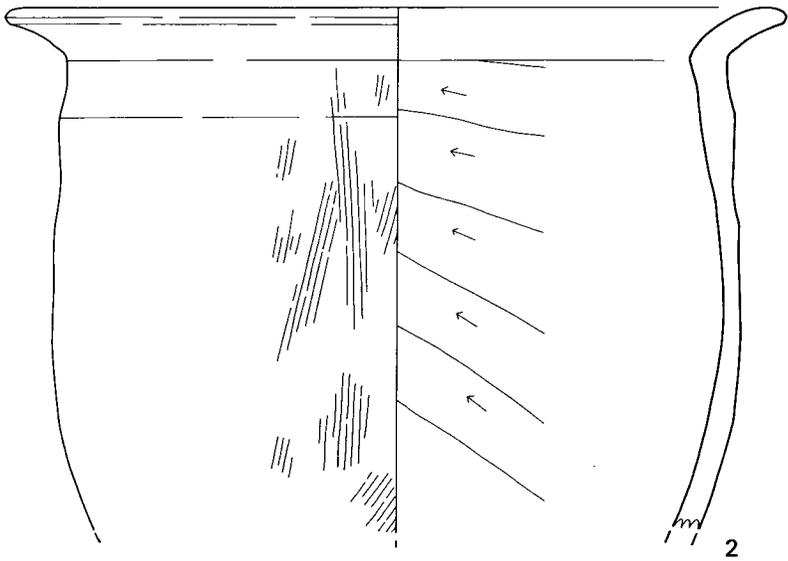
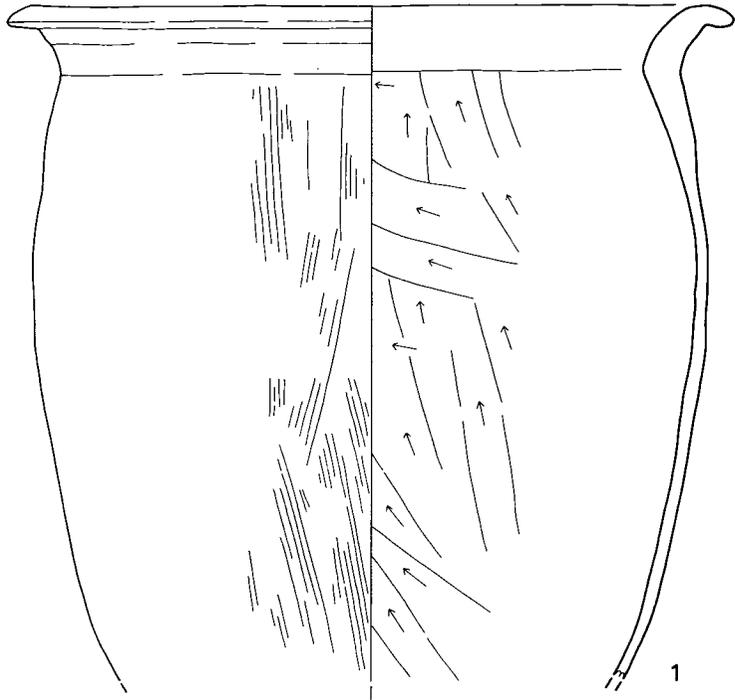


第93図 19号竪穴住居跡竈実測図(1/30)

が1.60m、東北辺側2.00mが計測できる。

東北壁のやや北寄りには造り出しの竈を設けているが、上部構造は崩壊している。竈は奥行50cm、幅72cmの造り出し部を掘り、その壁面に12cmから15cmの黄褐色粘土を平面形が「U」字状になる形状で貼付けている。さらに、奥壁には床面から20cm強の所から断面が長方形の煙道を掘り抜いており、その長さは1.20mを測る。煙道端部には円形のピットを掘り、ピット内からは甕の破片が出土したことから煙突状の施設を備えていたと考えられる。竈の床面には2個のピットを掘っているが、支脚の抜去穴と考えるには位置的に疑問が残る。底面から15cm上部の壁面は焼痕が著しく、煙道入口部も強く焼けていた。竈の前面は大きく掘り込み、正面はさらに深く掘っている。

住居の主軸方位は東南側の柱間軸と竈軸とでは9°の摩れがあり、柱間軸は壁に平行でないことから竈軸を採用するとN48°50'Eを示す。



0 15cm

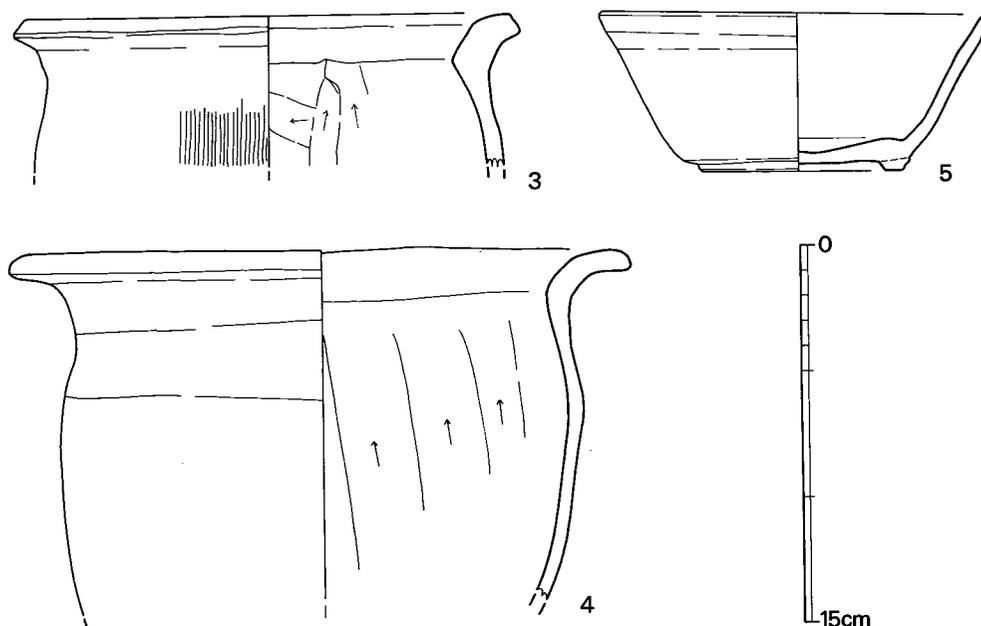
第 94 図 19号竖穴住居跡出土土器実測図その1 (1/3)

出土遺物は土師器の甕、須恵器の高台付埴があるが、総数としては少ない。出土土器から住居の時期は奈良時代後半から平安時代初頭頃である。

出土遺物

土器 (図版54, 第94, 95図)

土師器 1～4は甕形土器である。全て床面近くの埋土中から出土した。1は口縁部を鈍く「く」字状に外反させ、口唇部はさらに外反する。肩から胴部の張りは鈍く長胴をなす。器壁は厚くつくられている。口縁部付近は横ナデ、外面は荒いハケが摩耗し、内面は荒い篋削りで仕上げている。胎土は細砂粒が多く淡い橙色を呈する。復原口径29.0cmを測る。2は「く」字状に反り気味に外反する口縁を有し、体部の張りも鈍い。器壁は非常に厚くつくられている。調整・胎土・色調とも1に酷似する。復原口径30.0cmを測る。3・4は前2者に比べて小型の甕で、3の口縁部は頗る厚く外反度は鈍い。口縁の内外面とも横ナデ、外面は荒いハケ、内面は荒い篋削り等の調整が施されている。口縁部から胴部外面には著しく煤が付着している。胎土には砂粒が少なく緻密で橙色を呈する。甕内からの出土である。復原口径19.2cmを測る。4は頸部を内傾させ、口縁部は曲線を描き乍ら外反する。胴部の張りは鈍い。調整は内面の篋削りのみ観察でき、他は風化し不明である。外面に弱い二次加熱を受けている。覆土中からの出土であ



第 95 図 19号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/3)

る。復原口径24.6cm。

須恵器 5の高台付塚がある。底部の縁には低い高台を貼付け、屈折して直線的な体部と口縁部に続く。調整は横ナデであるが焼成が軟質のため器表面が磨耗している。色調はうすい灰褐色を呈し、口径15.6cm、底径8.5cm、器高6.35cmを測る。住居の埋土中から出土した。

20号竪穴住居跡 (図版38-2・39-1, 第96図)

19号住居の南側に隣接した状態で検出した竪穴住居跡で、19号住居と主軸を略直交させている。平面形態は長方形を呈する。規模は長辺3.35m・2.90m、短辺2.10m・2.25m、壁高40cm前後を測り遺存状態は良好である。床面積は竈を含めて6.5㎡である。主柱は数度確認を試みたが明らかにできなかった。概ね4本柱と考えられる。

住居の長辺である北西壁の南寄りには19号住居と同タイプの造り出しの竈を備えている。上部構造は崩壊している。竈は平面形状が「コ」字状を呈し、壁面はオーバーハング気味で下部の遺存状態は良好である。土層断面で観察すると掘削時に左右の袖部に一段テラスを造り、その上層に黒褐色粘質土と黄色粘土を交互に置き壁体を構築している。竈の奥壁には床面から13cm上部の所に煙道を掘り抜いている。煙道の長さは1.11mを測る。煙道の天井部は完全に削平されている。端部は円形のピットを穿っている。床面下には25cm×28cm、深さ7.0cmのピットを掘り、その上部は円形状に焼痕が残っていた。壁面の内側は強く焼け、両壁端部には袖石を立ていたと考えられその抜去痕を確認した。その部分の壁面は焼けた痕跡はない。住居の主軸方位は竈軸を採用するとN53°Wを示す。

出土遺物は土師器の甕、須恵器の坏身・高台付塚があるが数は少ない。出土土器から住居の時期は奈良時代後半頃である。

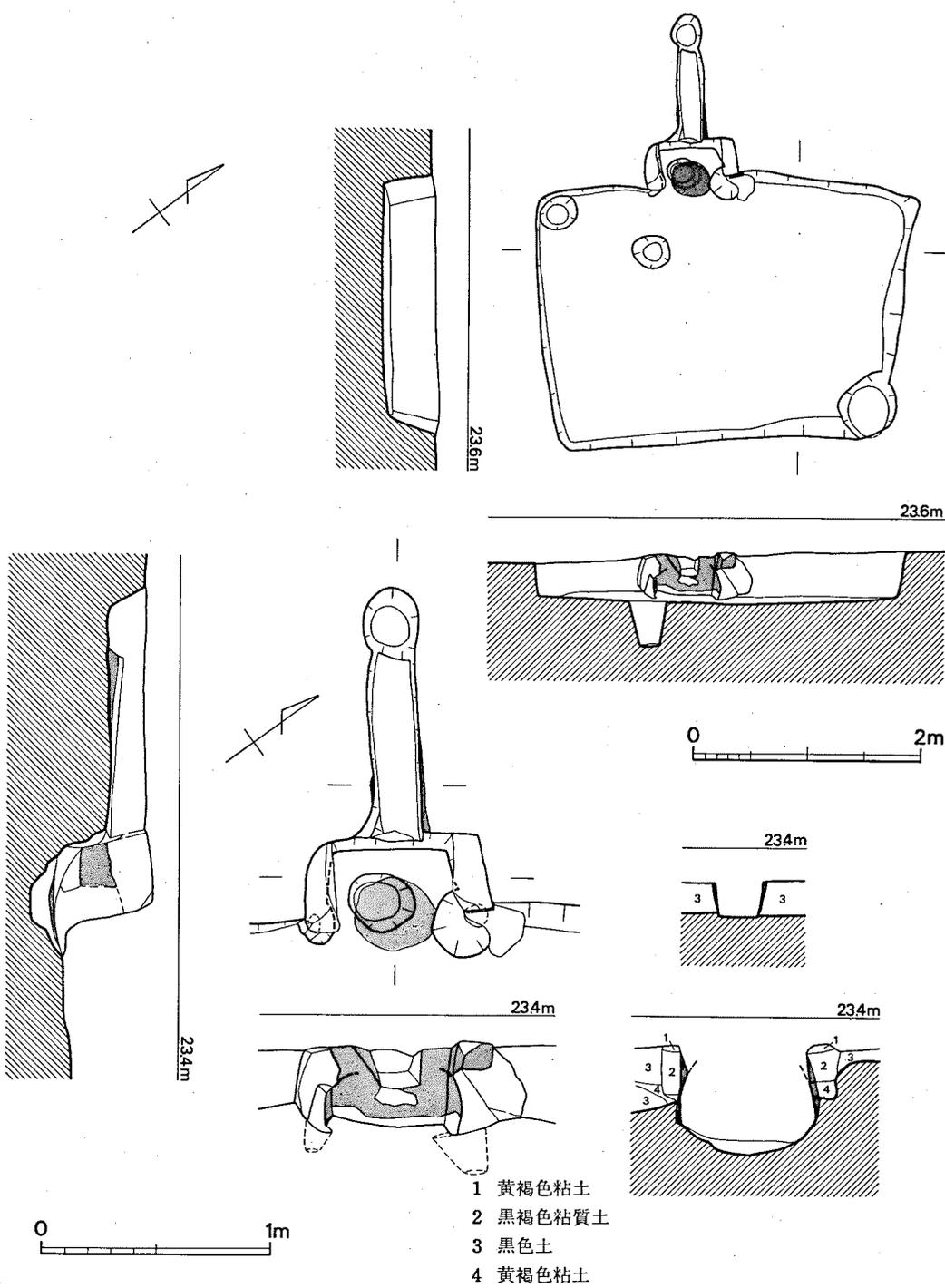
出土遺物

土器 (第97図)

土師器 1の甕が1点あるが、これは重複する39号竪穴住居に伴う土器であろう。口縁部は鈍く外反し、肩部の張りも鈍い。器壁は頗る厚くつくっている。調整は内面が荒い篋削り以外はナデで仕上げている。橙色を呈し、復原口径16.2cmを測る。

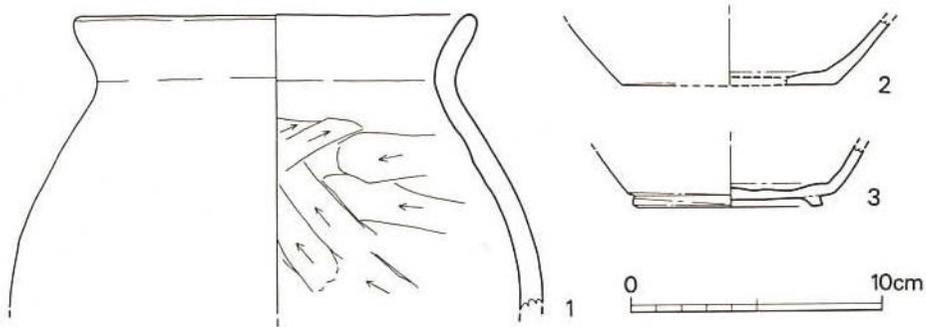
須恵器 2は坏身の破片で体部内外面とも横ナデ、底部は篋切り痕を残す。焼成は軟質で胎土は砂粒を殆んど含まず緻密。青灰色の色調を有す。復原底径8.80cmを測る。

3は高台付塚で体部から底にかけての屈折は明瞭である。底部には低い高台を貼付けている。調整は横ナデが主体で、底部外面には巻き上げ痕を残す。胎土には細砂粒をやや含み、青灰色



第 96 图 20号竖穴住居跡実測图 (1/60)

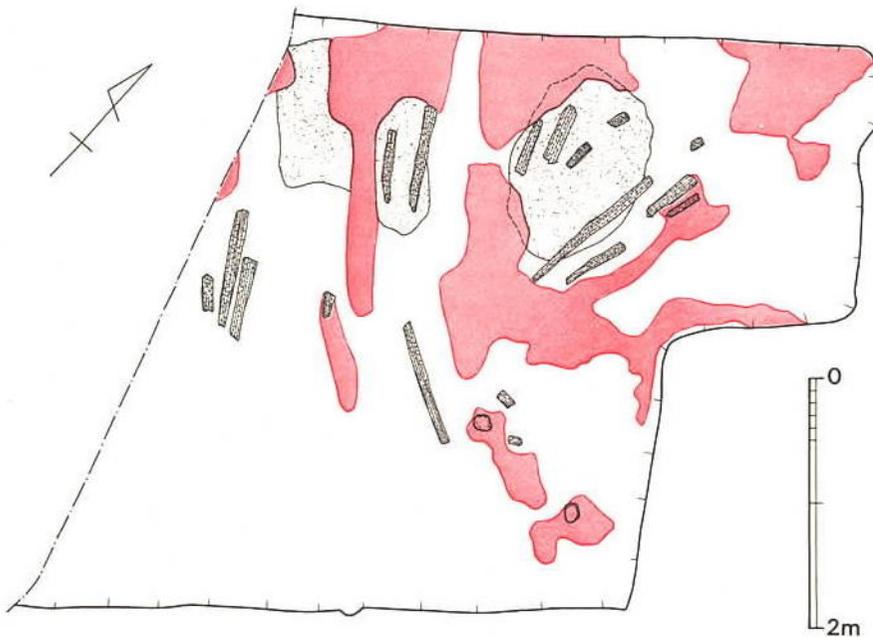
の色調をなす。焼成は軟質である。底径7.6cmを測る。



第 97 図 20号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

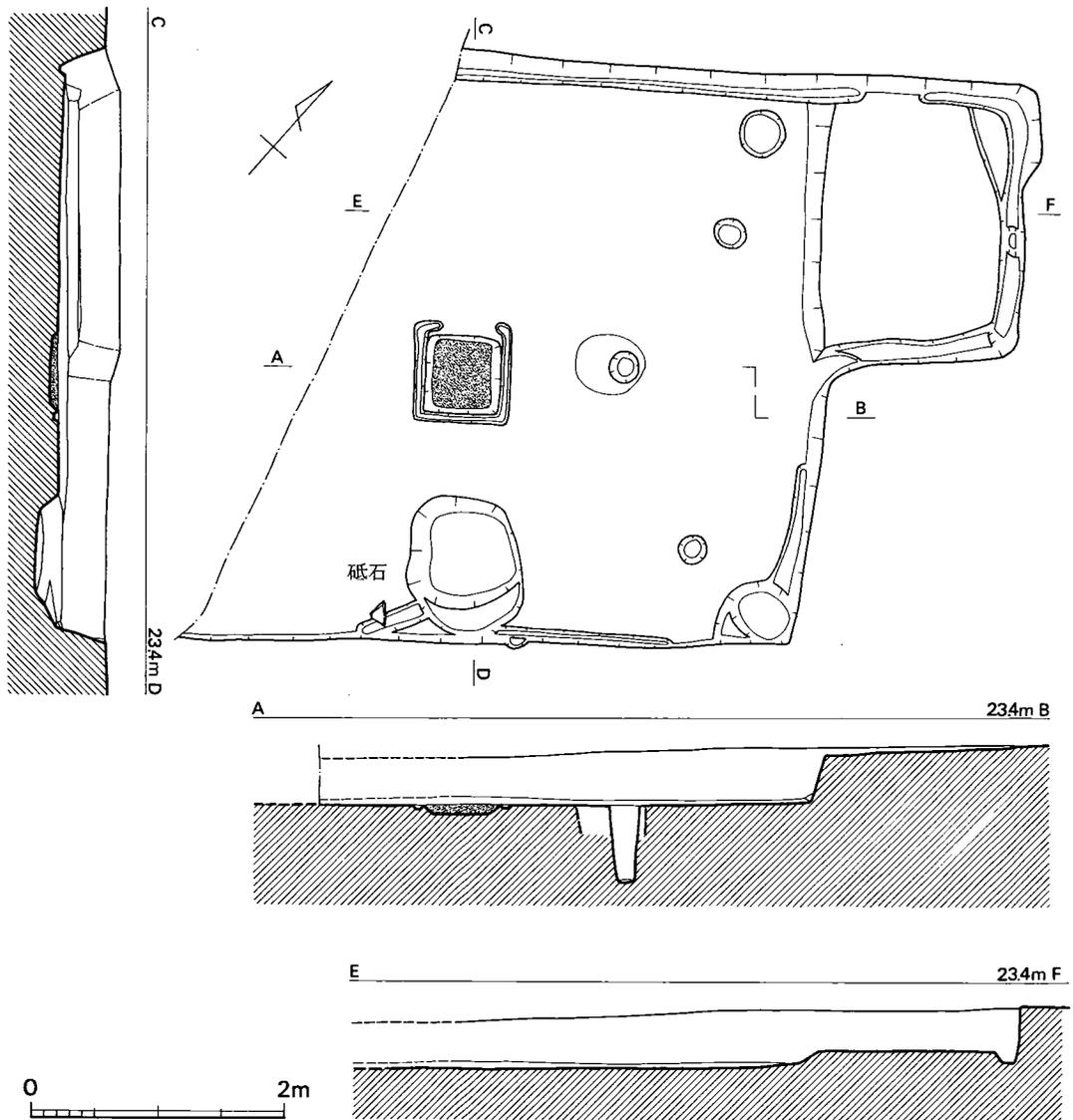
21号竪穴住居跡(図版39-2・40-1・2, 第98, 99図)

27号・28号・30号・43号・52号住居と2号掘立柱建物を切った状態で検出した竪穴住居であるが、 $\frac{1}{3}$ が調査区域外のため完掘に至っていない。平面プランは長方形であろう。規模は明らかでないが、北東壁は4.55m、壁高35cmを測り遺存状態の良好な住居である。北東側には奥行



第 98 図 21号竪穴住居跡炭化材・焼土出土状態実測図 (1/60)

1.55m、幅2.20mの造り出し部を付設し、床面は住居の床面よりも9.0cm高い。主柱穴は調査区内で2本の内の1本を確認した。深さは60cmを測る。南壁の略中央部には1.10m×90cm、深さ20cmの二段掘りの屋内土壇を設けており、土壇は壁沿いの周溝と直結している。中からは壺が出土し、肩口からは砥石が出土している。床面の東側隅には周溝に直結する深さ6.0cmのピットを掘っているが用途は不明である。周溝は北壁と造り出し部にも廻る。床面の中央には方形の炉を備え、中は灰と炭の細粉で埋まっていた。炉の周囲には接するように「□」字状の浅く細い



第 99 図 21号竪穴住居跡実測図 (1/60)

溝が廻り、炉と床面との間に何等かの仕切りを施していたと考えられる。

さらに、当該住居は火災に遭遇しており、炭化材・焼土等が夥しく出土した。焼土は北壁側から中央方向に流れた状況で堆積し、炭化材は放射状に散在していた。炭化材と焼土の下層からは炭化した藁が床面に密着して出土したことから床面に藁を敷いていたことが判る。

出土遺物は壺・甕・高坏・鉢・甑の他、不明鉄片1、石庖丁1、砥石1がある。出土土器から住居の時期は弥生時代後期初頭に比定できる。

出土遺物

土器 (図版55, 第100, 101図)

壺は1～3がある。この内の3は鉢の可能性はあるが、一応壺として説明する。1は頸部上半が欠損する。残存する頸部には断面三角凸帯を付し、大きく肩の張った平扁な胴部を有す。底部はやや大き目で上げ底である。調整は強い二次加熱を受け、器面が磨耗しているため外面は不明瞭である。内面はナデで仕上げる。肩部内面には粘土紐の接合部を残す。胎土には砂粒を多く含み、赤色粒子も若干ではあるが混在している。明茶褐色の色調をなす。胴部最大径26.3cm、底径10.9cmを測る。2の底径は9.3cmで、調整は不明である。黄橙色の色調を有す。3は丸みのある胴下半部で僅かに上げ底を呈する。外面にはハケが若干残り、内面は指ナデ仕上げである。底径9.2cmを測る。屋内土壌出土である。

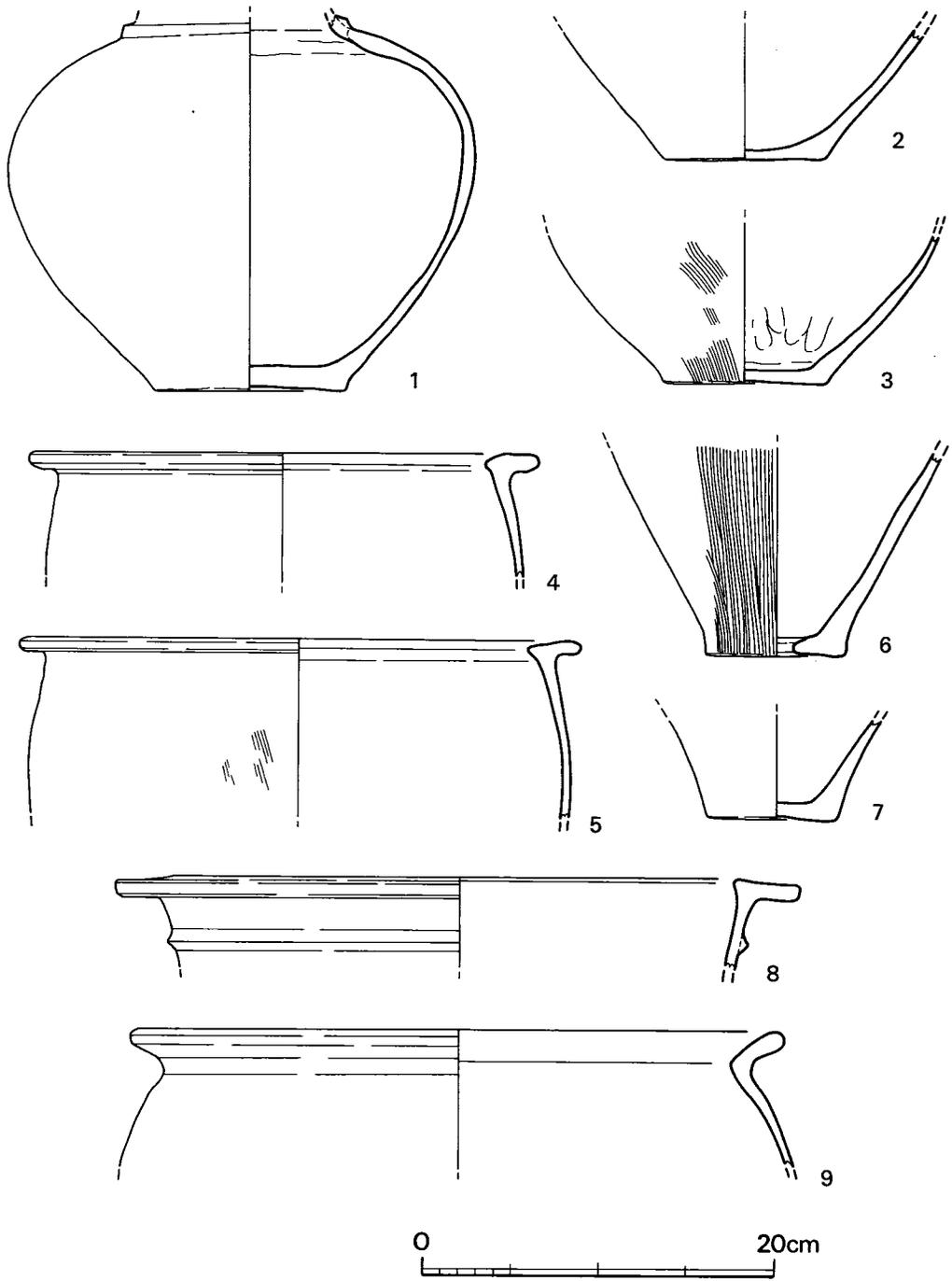
甕は4～11がある。4・5は内傾する逆「L」字状口縁を有し、9～11の口縁形態よりも先出するものである。出土状況も上層の埋土であることから混入遺物と考えられる。6・7は底部片で、前者は焼成後に外側から穿孔し甑として使用している。8は発達した口縁部を有し、口縁下には三角形の凸帯を付している。復原口径39cmを測る。住居の埋土下層からの出土である。9～11は「く」字状に外反する口縁を有し、肩の張りは鋭い。すべて埋土の下層からの出土である。調整は磨耗し不明瞭である。総じて砂粒を多く含み胎土は良くない。橙褐色系統の色調を有す。復原口径は9が37cm、10が28.1cm、11が30cmを測る。10は二次加熱を受けている。

高坏は12の脚部がある。埋土の下層からの出土である。脚は短く、緩い曲線を描きながら開く。器面は強い二次加熱を受け赤変しているため調整は不明。裾部の径は14.8cmである。胎土には砂粒殆んど含まず緻密である。

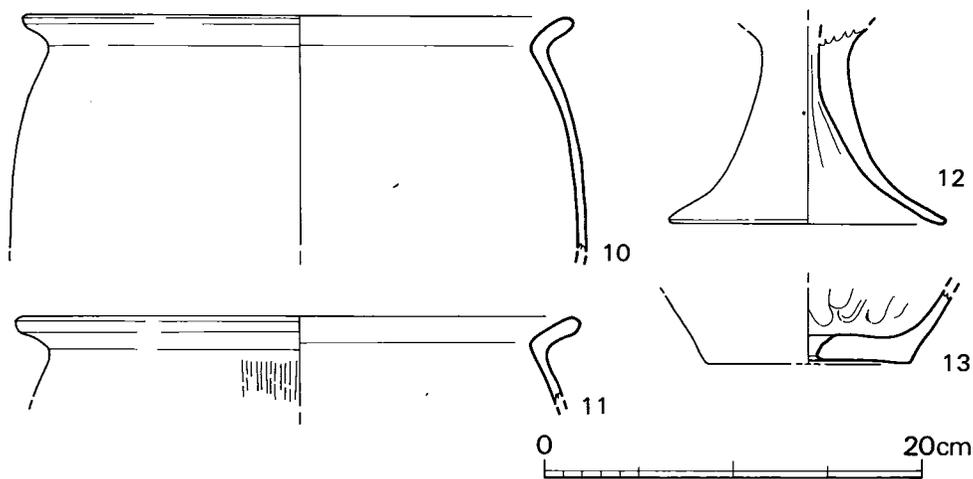
13は甑で鉢形土器を再利用したと推測され、焼成後に外側から穿孔している。内面底部付近は指圧痕が明瞭に残る。底径11.0cmを測る。

石器 (図版55, 第102図)

輝緑凝灰岩製の石庖丁で小豆色を呈する。小片のため不明な点が多いが背部は面取りを緻密に行っている。現存の幅は5.0cmである。孔の径は4mmを測る。



第 100 図 21号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/4)

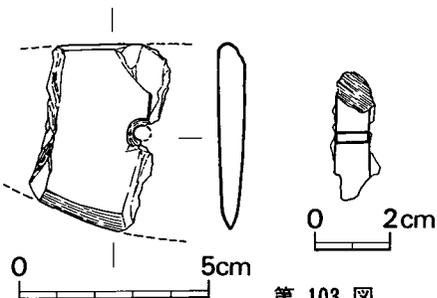


第 101 図 21号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/4)

砥石は粉失した。砂岩製のやや細かい中砥石と記憶しているが、詳細は明らかでない。

鉄器 (第103図)

覆土の下層から出土した鉄片である。木質が斜め方向に付着しているが、鉄片が何なのかは明らかでない。現存長3.3cm、幅9.0mmを測る。



第 102 図
21号竪穴住居跡出土石器
実測図 (1/2)

第 103 図
21号竪穴住居跡出土
鉄器実測図 (1/2)

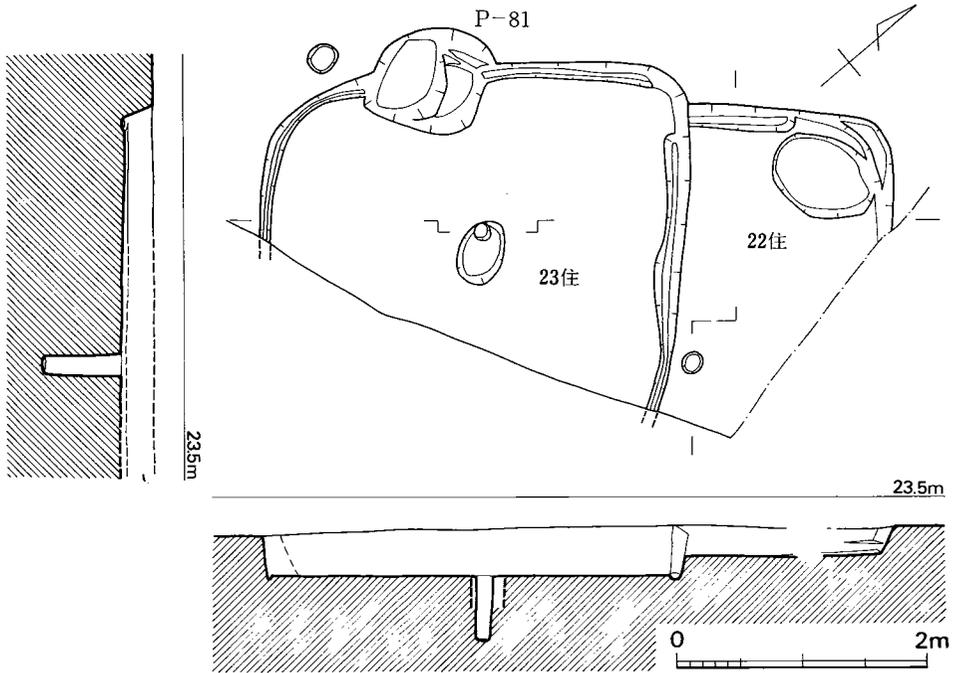
22号竪穴住居跡 (図版41, 第104図)

F 2 区の南端で検出した住居で23号住居に切られており、全容は殆んど把握できない。現存では1本の支柱穴を確認した。深さは62cmである。2本柱であろう。北側隅には深さ8.0cmの楕円形の土壇を掘っているが用途は不明である。北西壁には周溝が廻っている。住居の壁高は20cm強を測る。

出土遺物は少なく、石庖丁と僅かな土器片があるにすぎない。住居の時期は明らかでない。

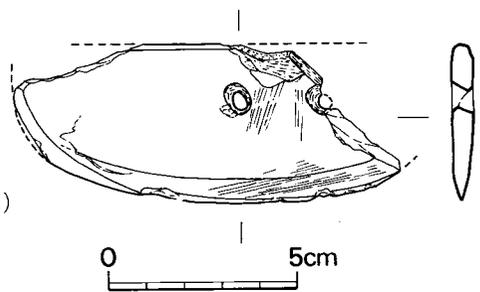
出土遺物

石器 (図版55, 第105図)



第 104 図 22号・23号竖穴住居跡実測図 (1/60)

粘板岩質の石庖丁がある。約 $\frac{1}{3}$ を欠失している。孔は両側から穿っているが、中心がややずれている。幅4.2cm、厚さ6mm。



第 105 図 22号竖穴住居跡出土石器実測図 (1/2)

23号竖穴住居跡 (図版41-1・2, 第104図)

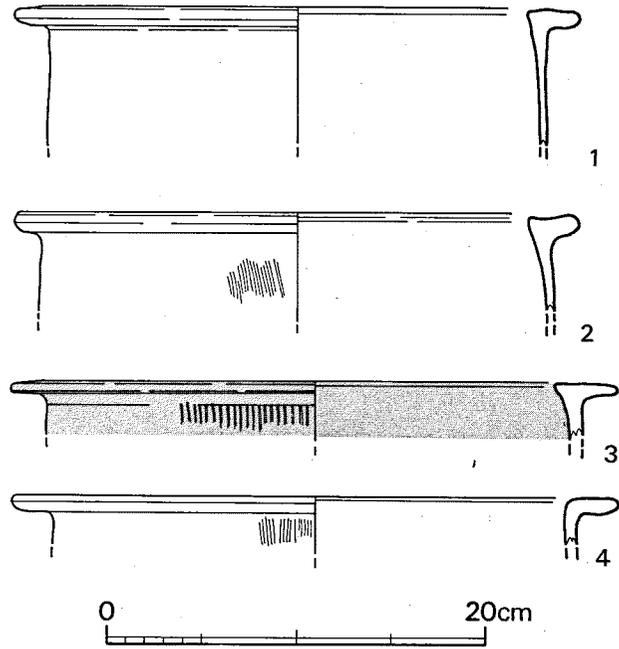
22号住居を切り土壇墓とP-81に切られた竖穴住居跡で $\frac{1}{2}$ は未掘である。平面形態は隅円長方形であろう。支柱穴は2本の内の1本を確認した。柱穴の深さは50cmである。壁高は32cmを測り遺存状態は良好である。周溝は北側隅を除いて廻らしている。その他詳細は不明である。出土遺物は少なく甕が若干ある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期中葉に近い時期である。

出土遺物

土器 (第106図)

1～4は甕形土器である。口縁部は全て逆「L」字状を呈し、3のみ口縁部が発達し他の甕に

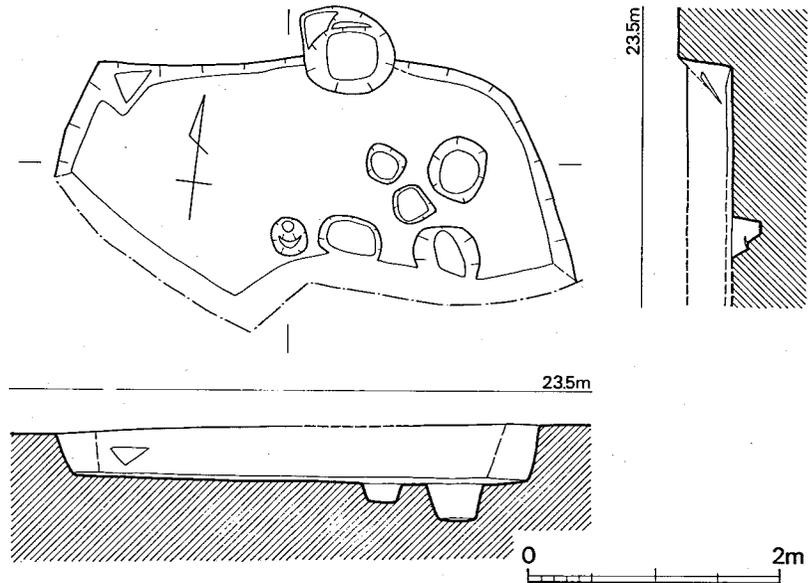
比べて新しい形状を呈する。2は平坦部が内傾する。調整は内面がナデ、外面は風化し不明瞭であるがハケを基調とする。1の胎土は砂粒をかなり含み、黄橙色を呈する。口縁には弱い二次加熱を受けている。復原口径29.9cmを測る。2も1と同様の胎土を有し、復原口径30cmである。3は現存する内外面とも丹塗り磨研で仕上げ、頸部に暗文を施す。復原口径32cm。胎土は丹塗り土器にしては良くない。4は復原口径32cm。



第 106 図 23号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

24号竖穴住居跡 (図版41-1, 第107図)

F 2 区の南端の23号住居の西側に隣接して掘られた竖穴住居で、 $\frac{1}{2}$ ほどを検出したに過ぎない。平面形態は不明であるが、住居の隅は鈍角であることから胴張りの形状を呈すると思われる。北壁の計測値は3.35m、壁高45cmで残りは良好である。支柱は2本と考え



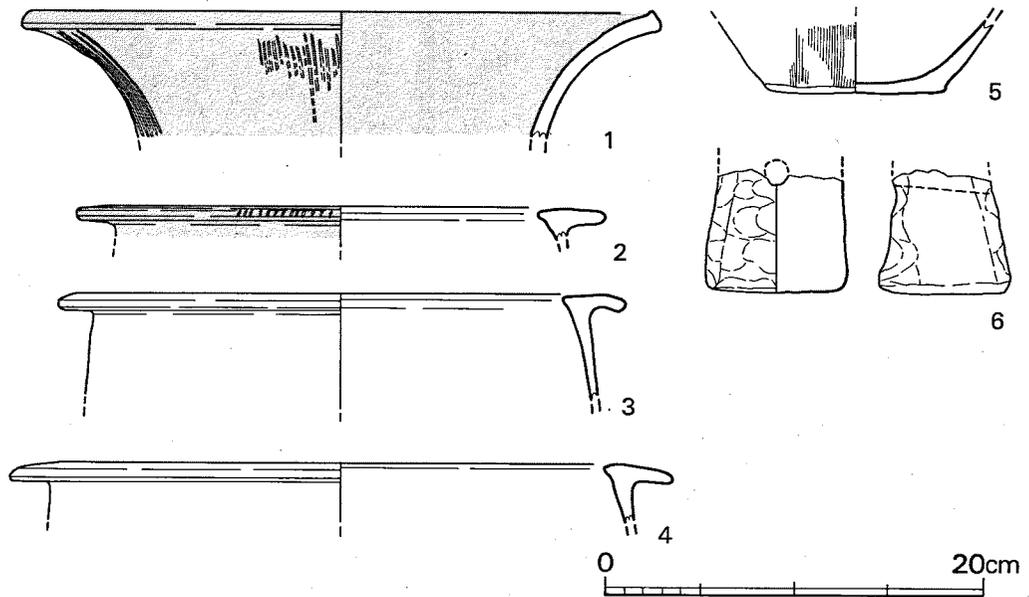
第 107 図 24号竖穴住居跡実測図 (1/60)

られ、その内の1本の深さは20cm強を測る。

出土遺物は壺・甕・支脚の他、石剣1、鉄鏃1があるが、鉄鏃は新しい形状を示すことから混入と考えられる。出土土器から住居の時期は弥生時代中期後半頃である。

出土遺物

土器 (図版55, 第108図)



第108図 24号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

壺は1の広口壺の口縁部がある。5も壺の底部の可能性もある。1は内外面とも丹塗り磨研で仕上げ、外面口縁下はヘラによる暗文を配しているが風化し不明瞭である。丹も殆んど剥落している。胎土は丹塗り特有の緻密さで焼成も非常に堅固である。復原口径33cmを測る。5の調整は外面ハケ、内面ナデで仕上げ、胎土には砂粒を多く含む。くすんだ黄褐色を呈する。

甕は2～4がある。発達した「T」字状の口縁をなし、口縁平坦部は総じて外傾する。2は口縁内側から外面にかけて丹塗り磨研で仕上げ、口唇部には篋による刻み目を配する。つくりの良質な土器である。復原口径28cmである。3は器面が荒れ調整が不明瞭である。胎土には細砂粒を多く含む、赤色粒子と金雲母も若干含む。淡い黄橙色を呈する。復原口径30cmを測る。4は2・3に比べて口縁平坦部の外傾度が強い。復原口径35cmを測る。

6は支脚片で上半部が欠失する。表面は指頭ナデで仕上げている。中央部には径1.2cmの孔

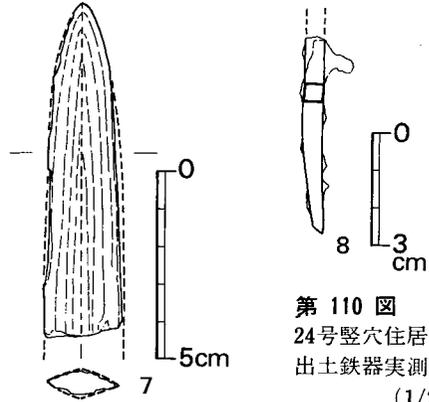
を穿つ。胎土は粗く、つくりは雑である。黄橙色の色調をなす。

石器 (図版55, 第109図)

床面より43cm上層の埋土中から出土した粘板岩製の石剣片でかなり上層から出土していることから、住居に伴わないと考えられる。風化が進み表面がざらつき鏝は観察しにくく、刃部も一部にのみ残存する。現存長8.9cm, 身幅は2.1cmである。

鉄器 (図版55, 第110図)

住居の床面から26cm上層の覆土中から出土した鉄鏝の基部である。現存長5.2cm, 断面形は方形を呈し、6mmを測る。



第109図 24号竖穴住居跡出土石器実測図 (1/2)

第110図 24号竖穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)

25号竖穴住居跡 (図版36-1, 第84図)

F2区の東側で16号・26号住居に切られ、35号住居を切った状態で検出した竖穴住居である。平面プランは長方形であろう。規模は不明で北東壁は歪んでいる。壁高のみ計測でき遺存状態の良好な所で35cmを測る。その他詳細は明らかでない。

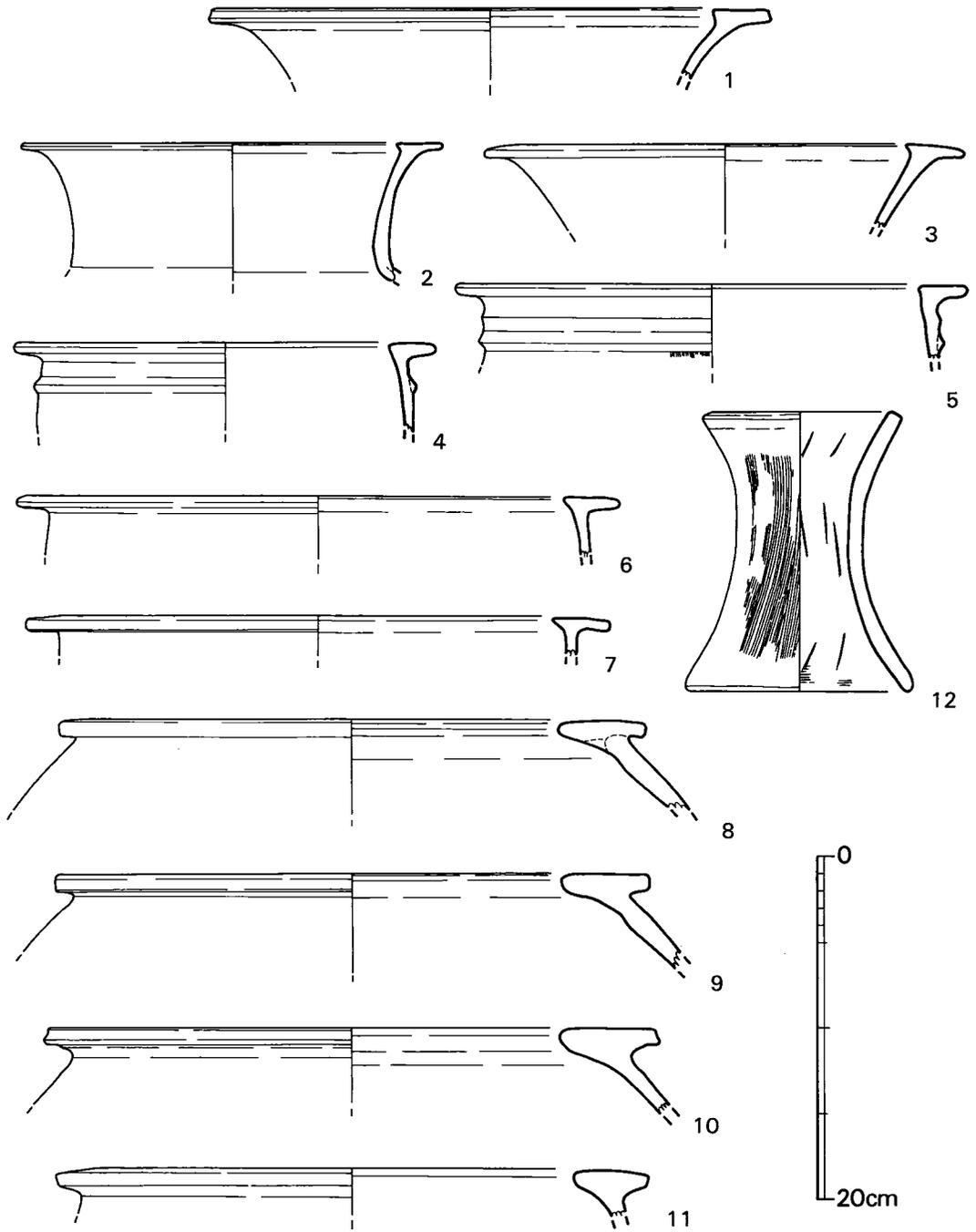
出土遺物は壺・甕・器台がある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期中葉である。

出土遺物

土器 (図版55, 第111図)

壺は1～3がある。いずれも鋤先口縁壺で3の口縁は平坦面が僅かに外傾する。2の頸部は太目である。調整はナデを基調とする。1は内外面にくすんだ化粧土を塗布しているが、殆んど剥落している。胎土は2が緻密で1・3は砂粒をかなり含む。色調は1が茶褐色、2・3が黄橙色を呈する。復原口径は1—33cm, 2—24.6cm, 3—28cmを測る。

甕は3タイプがある。発達した逆「L」字状口縁をなし、その下部に三角凸帯を廻らす4・5と「T」字状口縁を有す6・7, 通常甕棺等に使用される形状の内外に突出する口縁に頸部が著しく内傾する8～11とがある。4は内外面に強い二次加熱を受け赤変する。口径24.6cm。5は頸部を強く横ナデすることにより一見二条凸帯風にみてとれる。色調は淡黄橙色, 口径30cm。6の復原口径は35cm, 7は34cmを測る。8は砂粒を多量に含む。口径34.2cm。外面が黒灰色を呈し、黒色顔料を塗布していたことも考えられる。9は黄橙色を呈し, 口径34.5cm。10は口縁



第 111 图 25号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)

内面から現存する外面にかけて化粧土を塗布している。淡茶褐色の色調を有す。11は口径34.6cmである。

器台は12の完形品がある。埋土中からの出土である。口唇部は浅い沈線を廻らす。最小径は中央部にある。口縁部と裾部周辺は横ナデ、外面はハケ、内面はナデで仕上げる。裾部は内外面とも二次加熱を受けている。口径11.6cm、裾部径13.3cm、器高16.3cmを測る。

26号竪穴住居跡（図版36-1，第84図）

25号住居を切った竪穴住居で、平面プランが長方形を呈すると考えられるが、完掘に至っていないため明瞭でない。住居の平面形状は歪んでおり、北側の隅は僅かに鋭角をなす。北東壁の規模は4.40mを測り、壁高は35cm前後である。支柱は2本で深さは45cmと50cmを測る。柱の掘り方は弥生時代の住居には他には類例をみない長方形で、短辺25cm、長辺30cmである。柱間は1.75mで、柱間の中央には径50cm、深さ20cmの炉を設けている。中は灰と炭化物で埋まっていた。南東壁の東寄りには楕円形で二段掘りの屋内土壌を付設し、中からは径20cm強の扁平な石塊が出土している。住居の主軸方位は柱間軸でN36°Eを示す。

遺物は北側と東側で集中して出土し、殆んどが床面直上から出土している。出土遺物は壺・甕・鉢・器台・甌の他、不明石器1がある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期末から後期初頭頃である。

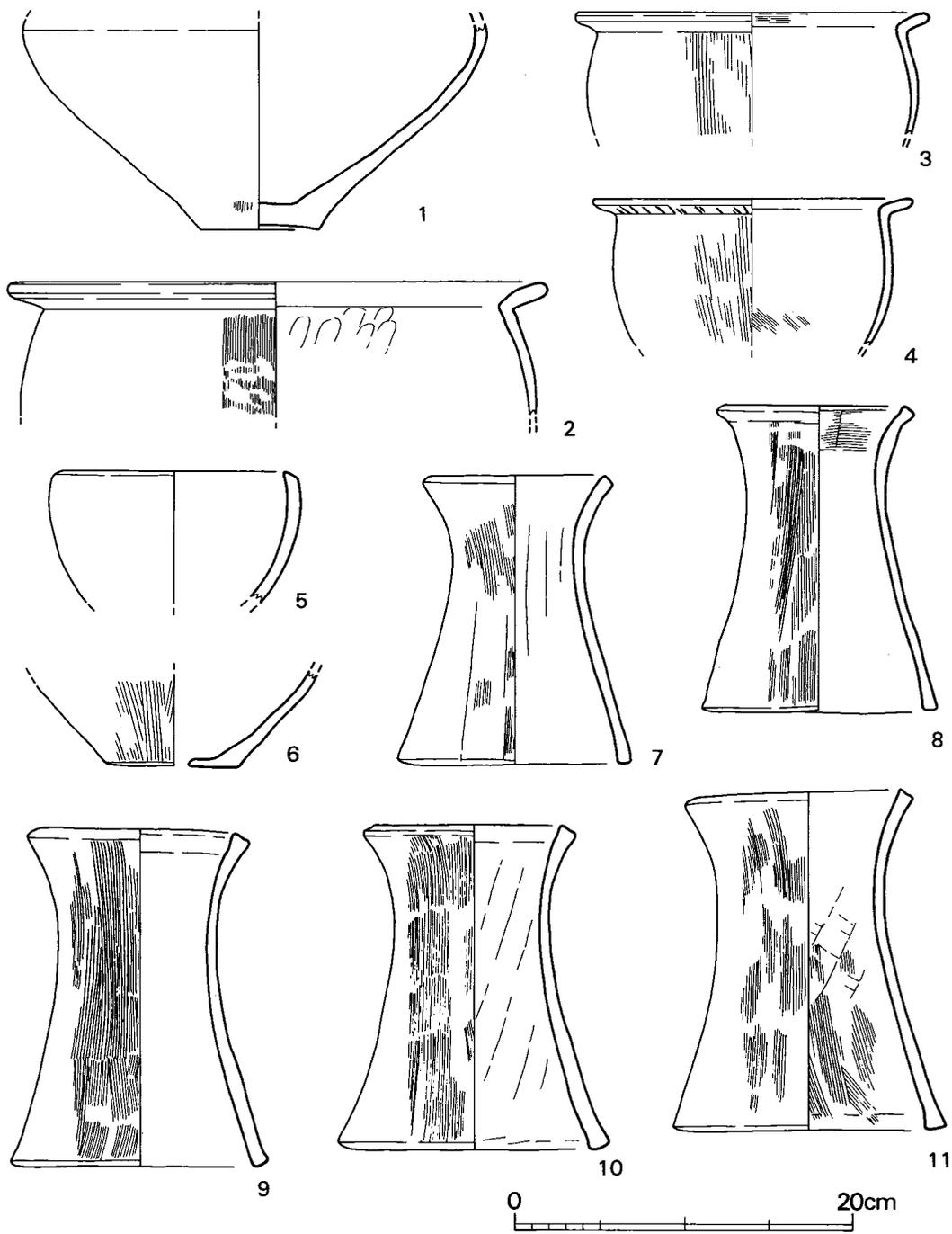
出土遺物

土器（図版56，第112図）

壺は1がある。胴上半部を欠失する。扁平の胴部をなし、欠損部は凸帯を廻らしていたと思われ、剥落した痕跡が僅かに残っている。胴下半は細まり乍ら、径7.0cmの小さな上げ底の底部をなす。調整は内面がナデ、外面は磨き仕上げである。色調はにぶい橙色である。

甕は2～4がある。3・4は小型品である。2は「く」字状に鋭く外反する口縁を持ち、頸部内面の稜は明瞭である。外面がハケ、内面はナデが主体で頸部内面には指圧痕を残す。復原口径31.7cmを測る。3・4は甕よりは鉢の方が妥当かも知れない。口縁は鋭く外反し、張りの鈍い胴部を有す。両者とも外面が荒いハケ、内面はナデで仕上げ、一部ハケを残す。後者の口縁下には篋による圧痕を配する。色調は3が黄灰色、4が淡い黄茶褐色を呈す。口径は3が20.8cm、4が19.0cmを測る。

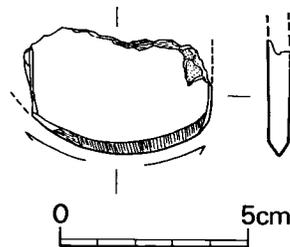
5は鉢で口縁部が僅かに内湾する。調整は内外ともナデで仕上げ、復原口径14.5cmを測る。にぶい橙色の色調である。



第 112 图 26号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

6は甌で鑿か鉢を使用し、焼成後に外側から穿孔している。外面はハケ、内面はナデで仕上げている。

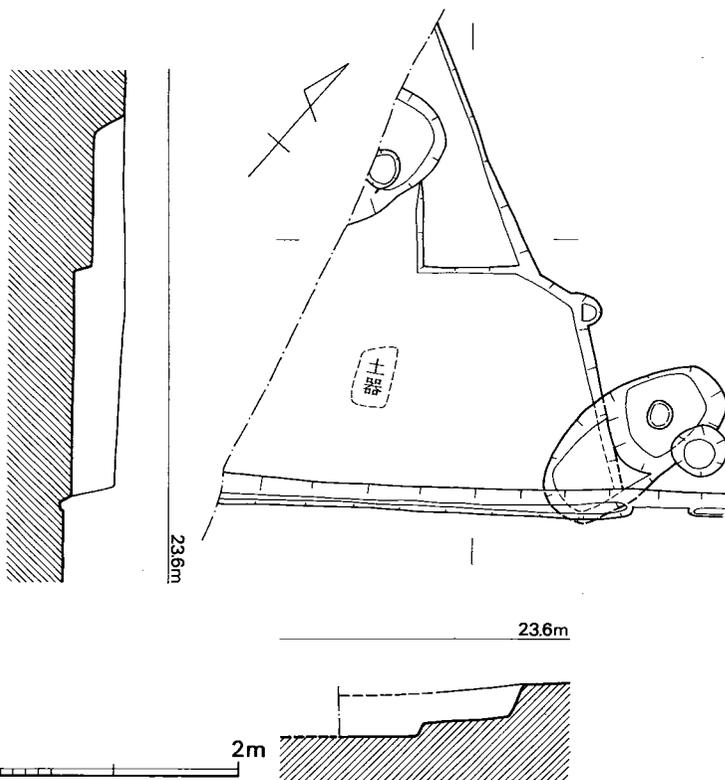
器台は7～11がある。全て同タイプの器台で最小径が上半部にあり、25号住居出土の器台よりも新しい特徴を示す。口縁部は7を除いて全て摘み上げ状に肥厚させる。11は裾部も肥厚する。8は口縁部の外反度が他に比べて強い。調整は総じてハケと指ナデを多用し、11は内面にもハケを残す。さらに7・8は口縁部と裾部に二次加熱を受け、9～11は裾部に二次加熱を受ける。7の口径11.3cm、裾部径13.8cm、器高17.05cm、8は口径11.7cm、裾部径14.0cm、器高18.15cm、9は口径13.1cm、裾部径15.2cm、器高20.0cm、10は口径12.55cm、裾部径16.0cm、器高19.4cm、11の口径は13.5cm、裾部径16.2cm、器高20.2cmを測る。



第113図 26号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

石器 (図版56, 第113図)

緑泥片岩製の不明石器がある。住居の埋土中から出土した。一方に角度をつけて研ぎ刃部としている。右側面は研磨し、表裏とも自然面のままである。上半は欠失し、現存長は5.0cm、厚さ5mm前後である。



27号竪穴住居跡 (第114図)

21号住居と2号掘立柱建物に切られた竪穴住居跡であるが、一部を調査したに過ぎず詳細は明らかでない。北壁には一部テラス状の高まりがあるが、ベット状遺構と考えるには疑問が

第114図 27号竪穴住居跡実測図(1/60)

残る。壁高40cmを測り残りは良好である。

出土遺物は壺・甕・蓋形土器の他、投弾1がある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期前葉である。

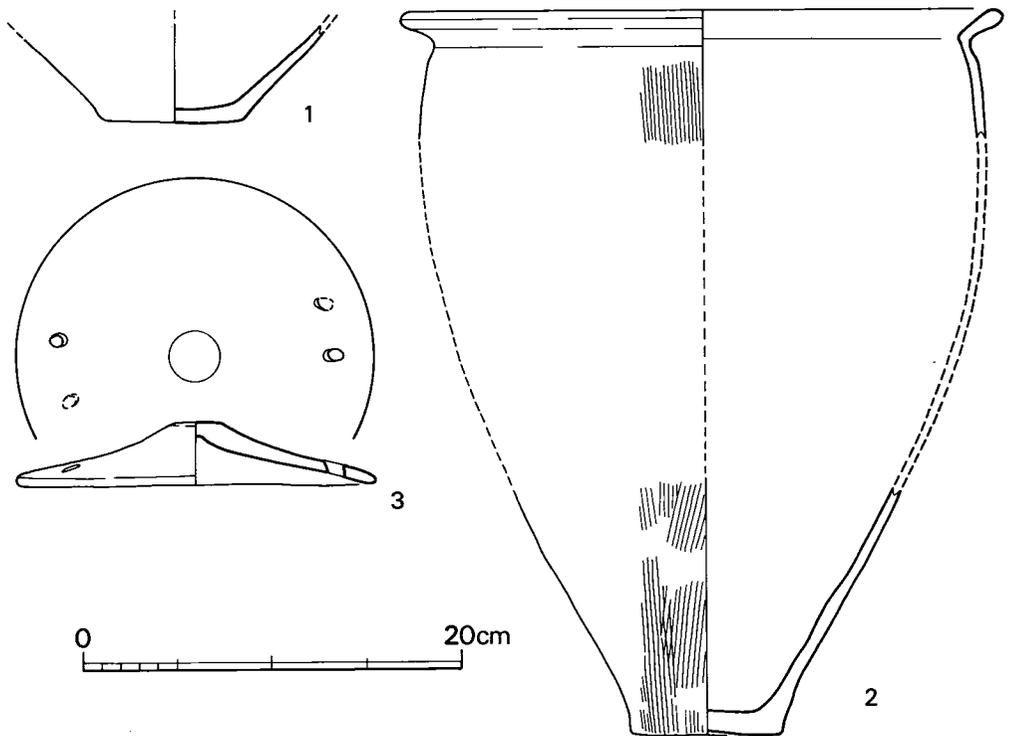
出土遺物

土器 (図版56, 第115図)

1は壺の底部である。調整は風化が激しく不明である。色調は淡黄橙色を呈する。底径は7.2cmを測る。

2は甕の口縁部片と底部片で胴部を欠損する。口縁部は「く」字状に外反するが肩部の張りが少ないことから後期の甕形土器の「く」字状口縁とは異なる。口唇部を僅かに肥厚させている。底部は細みでスマートである。調整は外面がハケ、内面がナデで仕上げる。外面には煤が付着する。復原口径31cm, 底径8.0cm, 器高38.5cm。

3は蓋形土器である。天井の平坦部を中心に対峙する個所に双孔をやや外方向に斜めに穿つ。

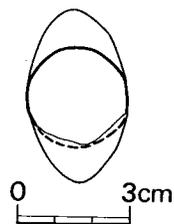


第 115 図 27号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

調整は風化が著しく不明である。裾部の径は19cm，器高は3.3cmを測る。

土製品（図版56，第116図）

住居の埋土中から出土した土製投弾である。ラクビー球状の形をなす。表面は二次加熱を受けているためざらついている。長さ5.0cm，径2.7cmを測り，重さは24.3gを量る。



第116図
27号竪穴住居跡出土
土製品実測図（1/2）

28号竪穴住居跡（第117図）

F2区の21号・30号住居と3号周溝状遺構に切られた竪穴住居跡でのみ遺存している。平面形態は小判形を呈すると考えられる。規模は明らかでないが壁高は10cmを測り，遺存状況は良くない。南東壁際には深さ10cmの不整形の土壌を掘っている。現存している床面には不整形の二段掘りの土壌を設けており，壺形土器が出土したが紛失してしまった。床面上には焼土が散在していることから焼失住居であろう。

出土土器が紛失して住居の時期決定は困難であるが，弥生時代中期中葉頃に比定できる30号住居に切られていることから中期中葉以前である。

29号竪穴住居跡（図版42-1，第117図）

F2区の南側で検出した竪穴住居跡であるが，42号住居と3号周溝状遺構に切られ，28号住居とも重複関係にあることで全容は全く不明である。

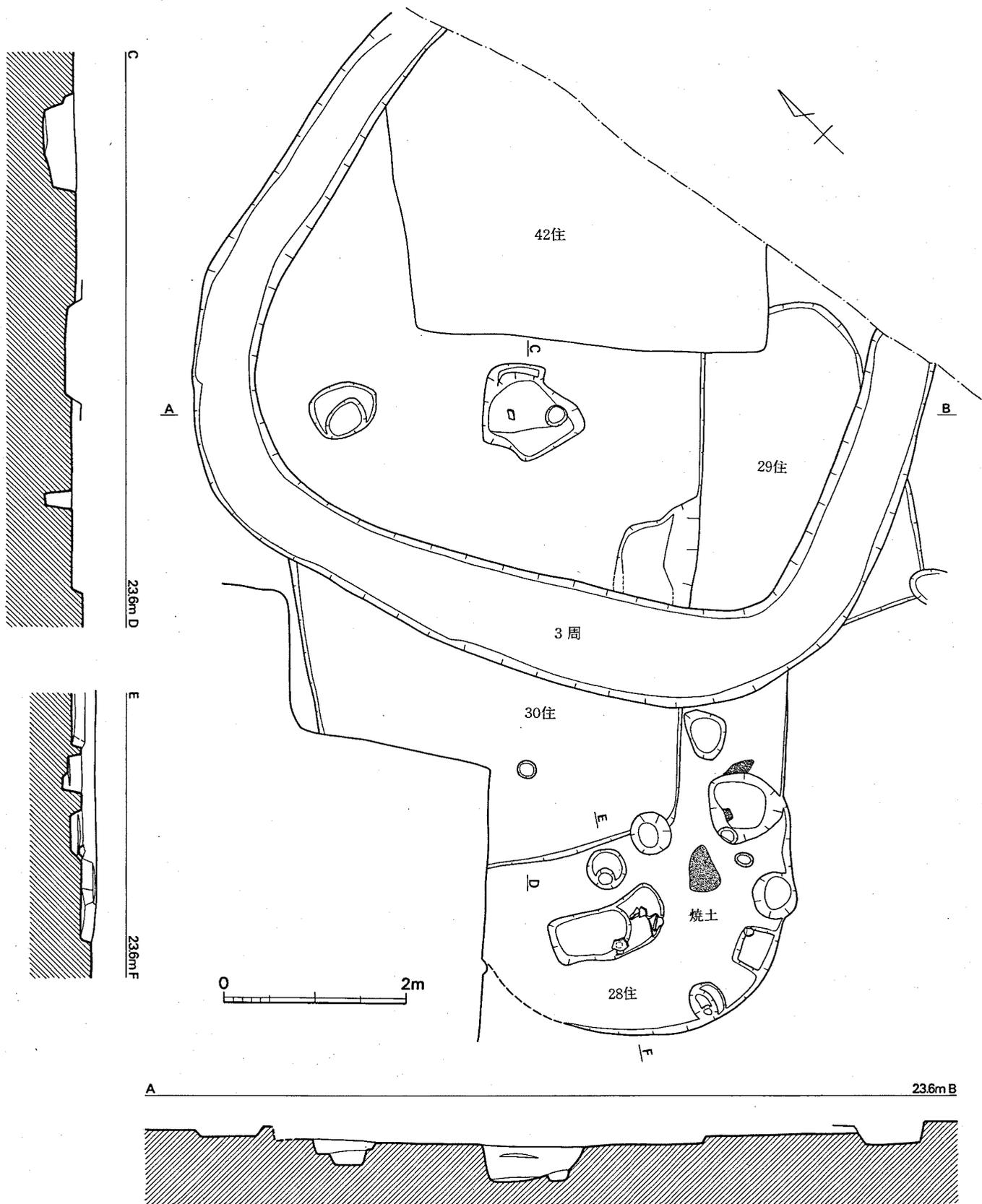
出土遺物も皆無で住居の時期決定も困難である。

30号竪穴住居跡（図版42-1，第117図）

F2区の21号・42号・3号周溝状遺構に切られ28号住居を切った状態で検出した竪穴住居跡である。平面形態は長方形であろう。規模は不明であるが，壁高は10cm前後で残りは悪い。支柱は2本と考えられ，その内の1本を確認した。深さは30cmを測る。南壁沿いの中央部には深さ16cmの不整形の屋内土壌を設けているが，中からの出土遺物は無い。その他詳細は不明である。

出土遺物は壺・甕の他，石庖丁2，投弾1がある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期中葉頃である。

出土遺物

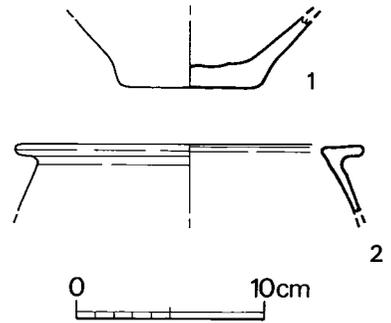


第 117 图 28号・29号・30号竖穴住居跡、3号周溝状遺構実測図 (1/60)

土器 (第118図)

壺1と甕2がある。1は底部片で内外面ともナデで仕上げている。底径7.2cmを測る。胎土には砂粒を多く含む。

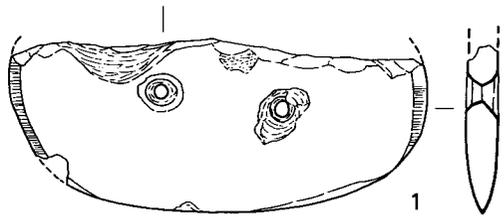
2の甕は逆「L」字状の口縁部をなし、頸部は内傾している。調整は不明瞭であり、胎土には微砂粒を多く、金雲母を若干含む。にぶい橙色の色調をなす。復原口径18.6cmを測る。



第118図 30号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

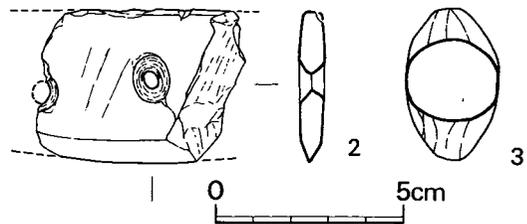
石器 (図版56・57, 第119図)

1・2とも住居の埋土中から出土した凝灰岩系の石庖丁で前者はうすい小豆色を呈し、後者はうすい灰紫色を呈する。背部は全面が欠損する。2つの孔のうちの右側は1は下部に穿っている。刃部は使い減りが著しい。全長は11.1cmを測る。2も同様な孔の穿ち方をしている。幅は4.0cmを測る。



土製品 (図版56, 第119図)

3は楕円形の土製投弾である。2次加熱を受け表面はざらついている。胎土には砂粒が多くつくりが粗い。長さは4.0cm, 最大径2.4cm, 重さは15gを量る。



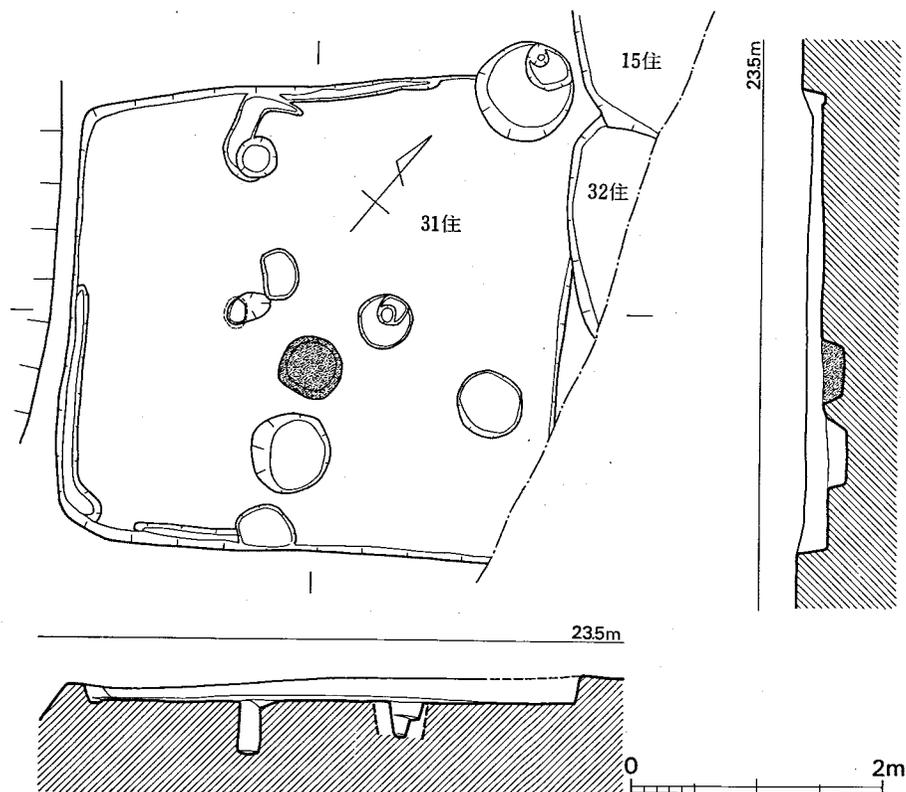
第119図 30号竪穴住居跡出土石器・土製品実測図(1/2)

31号竪穴住居跡 (図版42-2, 第120図)

溝5に接する状態で検出した竪穴住居跡で32号住居に切られている。東側の一部は未掘である。平面状態は方形に近い形状を呈する。壁辺は西壁のみ計測でき3.30m, 壁高は遺存状態が良好な所で20cm強を測る。支柱は2本で、柱間は1.20mと短い。支柱軸から南東に寄った所には径50cm, 深さ15cmの炉を備えており、中からは灰・炭化物の細片を検出した。周溝は3辺の壁に部分的に廻らしている。主軸方位はN50°Eを示す。

出土遺物は壺, 甕がある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期後半から末頃である。

出土遺物

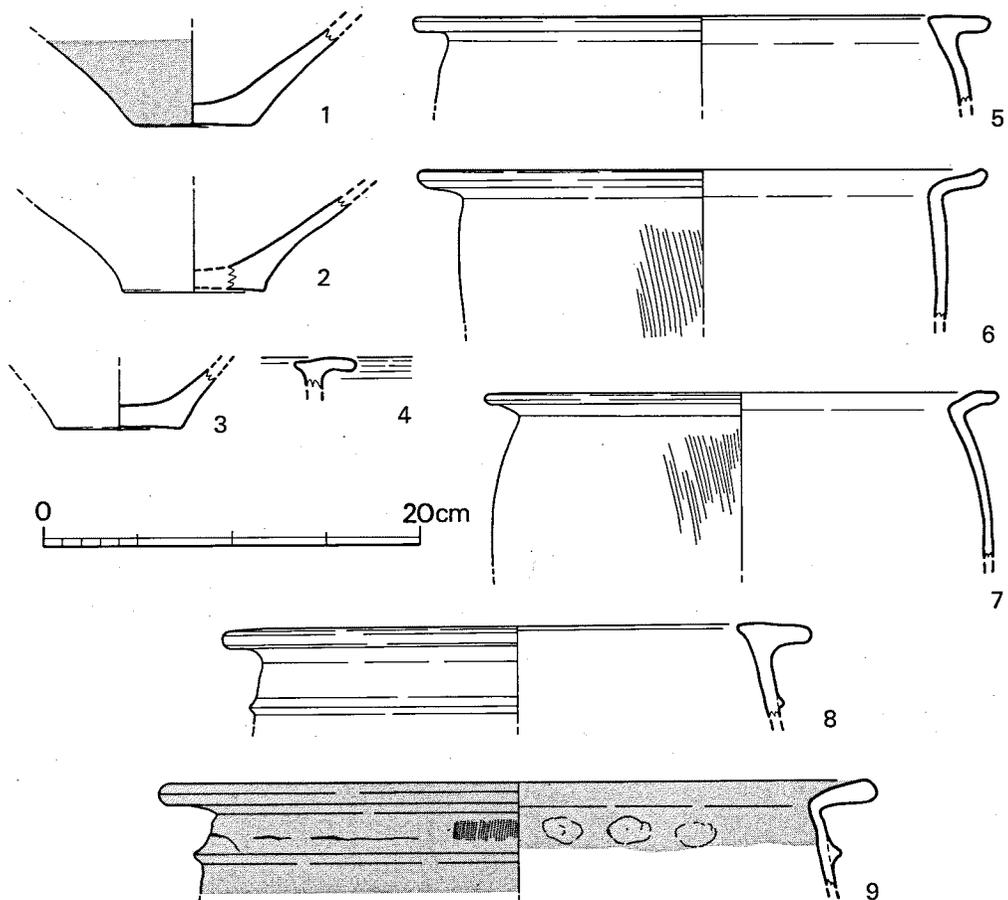


第 120 図 31号・32号竪穴住居跡実測図 (1/60)

土 器 (第121図)

壺は 1～3 の底部がある。全て僅かな上げ底を呈する。1 は丹塗り研磨されているが丹は殆んど剥落している。復原口径6.7cmを測る。2 の調整は外面が磨きと思われるが風化し不明瞭。内面はナデで仕上げる。復原口径7.6cm。3 は底径6.7cmの小片でナデで仕上げている。総じて黄橙色の色調を有す。

甕は 4～9 がある。発達した逆「L」字状の口縁を呈する 5, 「T」字状を呈する 4・8, 「く」字状に外反する 7・9, 口唇部が跳ね上状の 6 等がある。この内の 8・9 は頸部に一条の三角凸帯を廻らす。調整は総じてハケとナデを基調とするが、9 はその上から丹を塗布しており、内面に指圧痕を残す。7 は外面に煤が付着する。復原口径は 5—30.4cm, 6—30.0cm, 7—27.3cm, 8—31.2cm, 9—38.0cmを測る。



第 121 図 31号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

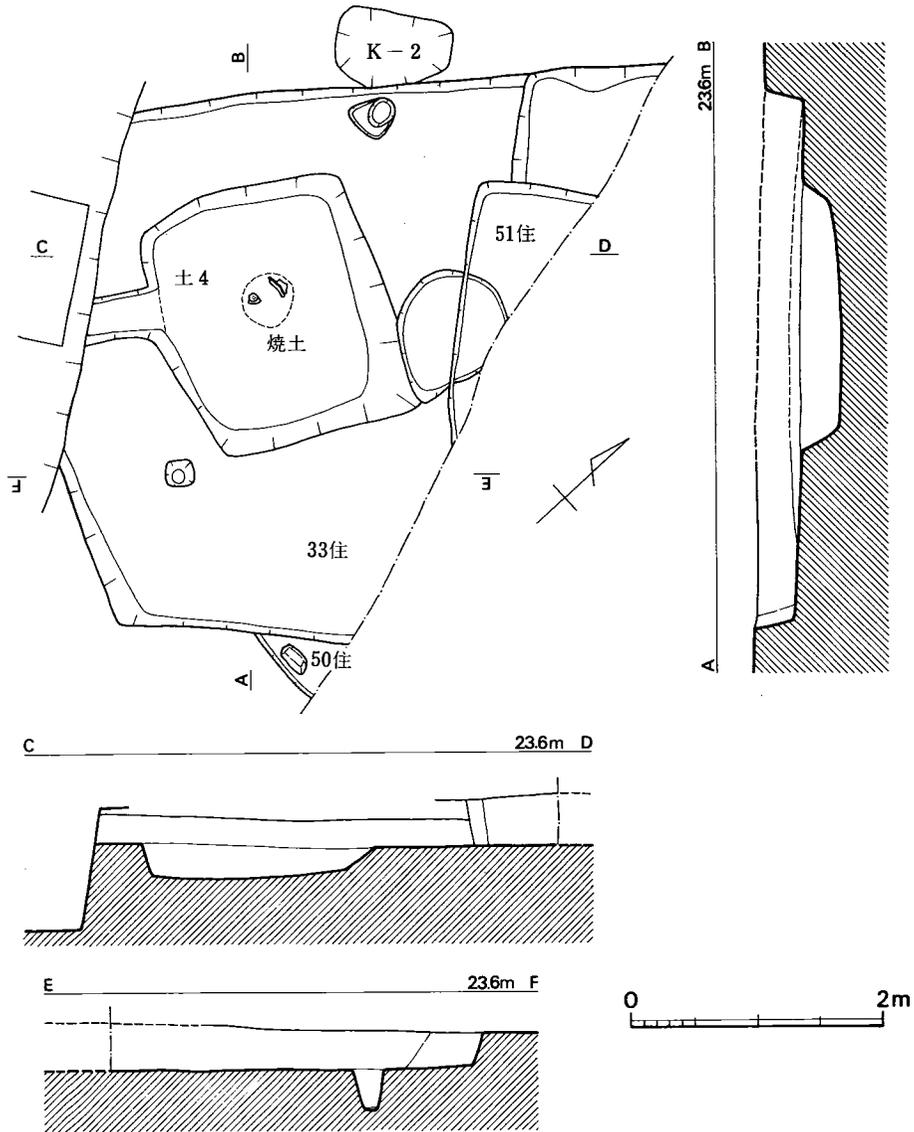
32号竖穴住居跡 (第120図)

15号住居に切られ、31号住居を切った遺構であるが、遺構の一部を検出したに過ぎず、竖穴住居跡か否かは不明である。

出土遺物も皆無で時期決定も困難である。

33号竖穴住居跡 (図版42-2, 第122図)

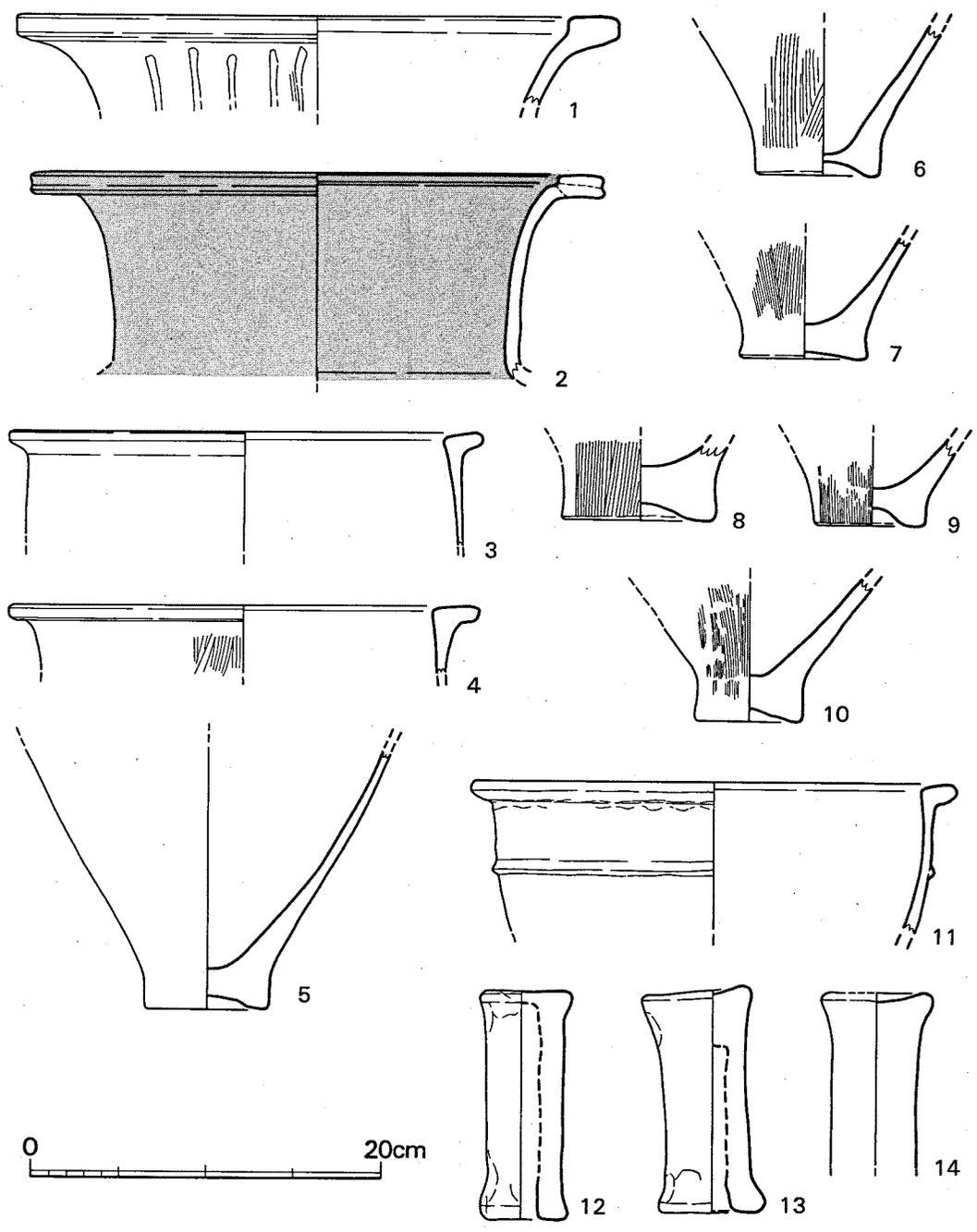
F 2 区の31号竖穴住居の南側に隣接して確認した竖穴住居跡である。溝 5, 4号土壇, 2号甕棺墓と51号住居に切られ、50号住居を切っている。重複関係が著しいのと未掘部分があるこ



第 122 図 33号・50号・51号竪穴住居跡，4号土坑実測図（1/60）

とから住居の内容は殆んど把握できない。南西側の壁は南東側の壁に対して鈍角を呈しやや歪である。壁高は25cm前後を測る。主柱は明らかでないが、住居の南側の床面に深さ30cm強の柱穴があり、この配置からすると4本柱になる。その他詳細は不明である。

出土遺物は壺・甕・鉢・支脚の他、石剣2，鑄造鉄斧2，鉈等がある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期前葉の古期である。



第 123 图 33号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)

出土遺物

土器 (図版57, 第123図)

壺は1・2がある。両者とも口縁部に粘土帯を貼付けており、やや古相を呈する。1の外面はナデの上から暗文を荒く配する。内面もナデで仕上げる。口径34.4cm。2の頸部は太目である。現存する内外面には丹を塗布しているが、二次加熱を受けたためかくすんでいる。口径35cmを測る。

甕は3~10がある。3・4とも未発達逆「L」字状口縁を有し、3の上面は内傾する。調整は風化し不明。口径27cmを測る。4は外面がハケ、内面はナデで仕上げる。橙褐色の色調を有す。復原口径27cm。5~10は甕の底部で8以外は細みで古相の形状を残す。すべて上げ底をなす。5は強い二次加熱を受け、調整は不明で器面が剥落している。底径7.3cmを測る。7を除く全ての内外面に強い二次加熱を受けている。調整は総じて外面ハケ、内面はナデで仕上げています。各々の底径は6—7.2cm, 7—7.4cm, 8—8.8cm, 9—6.4cm, 10—6.4cmを測り、9・10が特に細い。

11は甕と同タイプの逆「L」字状口縁をなす鉢形土器である。口縁直下には指圧痕が明瞭に残る。胴上半部には三角凸帯を貼付ける。胎土は粗く、強い二次加熱を受け赤変している。復原口径28.0cmを測る。

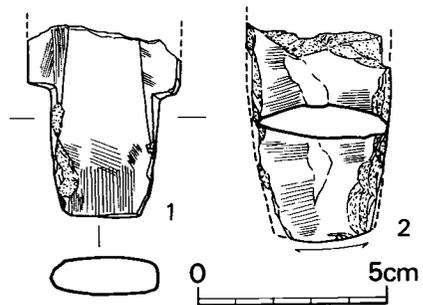
12~14は支脚形土器である。全て同タイプであるが、柱状部の内部が空中の12と $\frac{1}{3}$ が空中の13と充填された14との違いがある。さらに12の上面は平坦、13・14は凹面となる。調整はナデで仕上げ、全てに強い二次加熱を受けている。これらは3本が一对となって使用されたと考えられる。

石器 (図版57, 第124図)

1・2は砂岩製の石剣の破片である。埋土中から出土した。1は石剣の茎部で両側を整美に研ぎ出している。茎の基部は細まる。両面とも研磨され平滑となる。現存での身幅4.0cm, 茎部の長さ3.4cm, 厚さ1.0cmである。2は石剣の未製品で製作中に破損したと考えられる。表面は部分的に研磨しているが、裏面は自然面を残す。幅3.6cm, 厚さ9mmを測る。

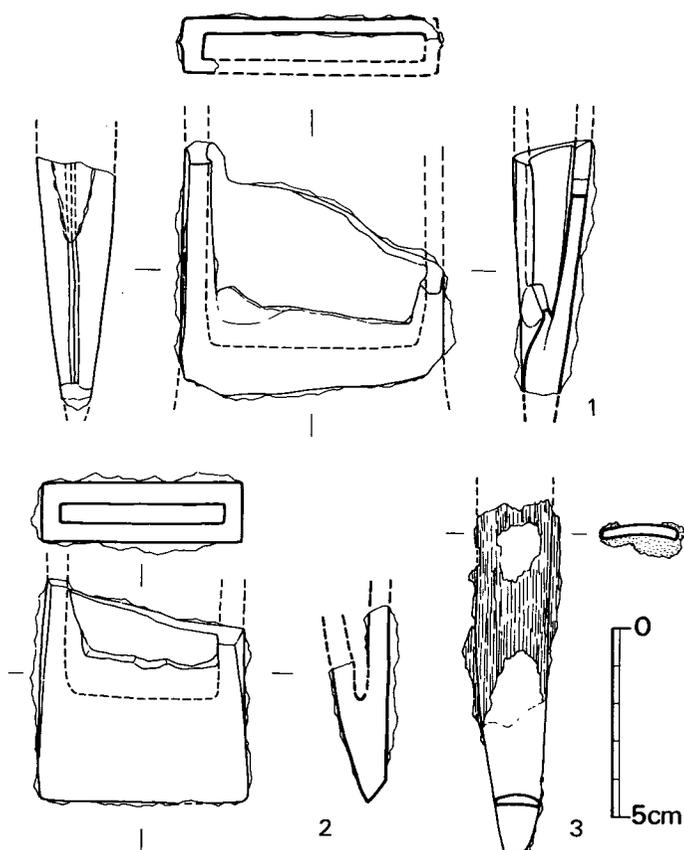
鉄器 (図版57, 第125図)

1・2は住居の埋土中から出土した鑄造鉄斧である。両者とも袋部の上半が欠損、1は刃部も欠失している。1の側面には低い凸帯が認められる。現存での袋部幅は7.0cm, 最大厚2.0cm, 内部長5.9cm, 幅1.1cmを測る。袋部と刃部の境付近



第124図 33号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

から幅が広まることから刃部は撥状の形をなすと考えられる。2は1に比較して小型の鉄斧で刃部の遺存状態は良い。刃部は断面で観察できるように片刃となっている。現存での袋部の長さは5.2cm、幅は1.5cm、内部長4.3cm、幅5mmで刃部幅5.5cmを測る。刃部は1のように撥形ではないが袋部幅に対して刃部幅が広くつくられている。両者とも欠損箇所が似ており、1は欠損した端部が内側に折れ曲っている。志摩町の御床松原遺跡から出土した鑄造鉄斧にも同じ個所に亀裂が生じたり欠失した例があり、報文中で述べている様に亀裂部分が鑄造時の接合面である可能性が強いと言える。

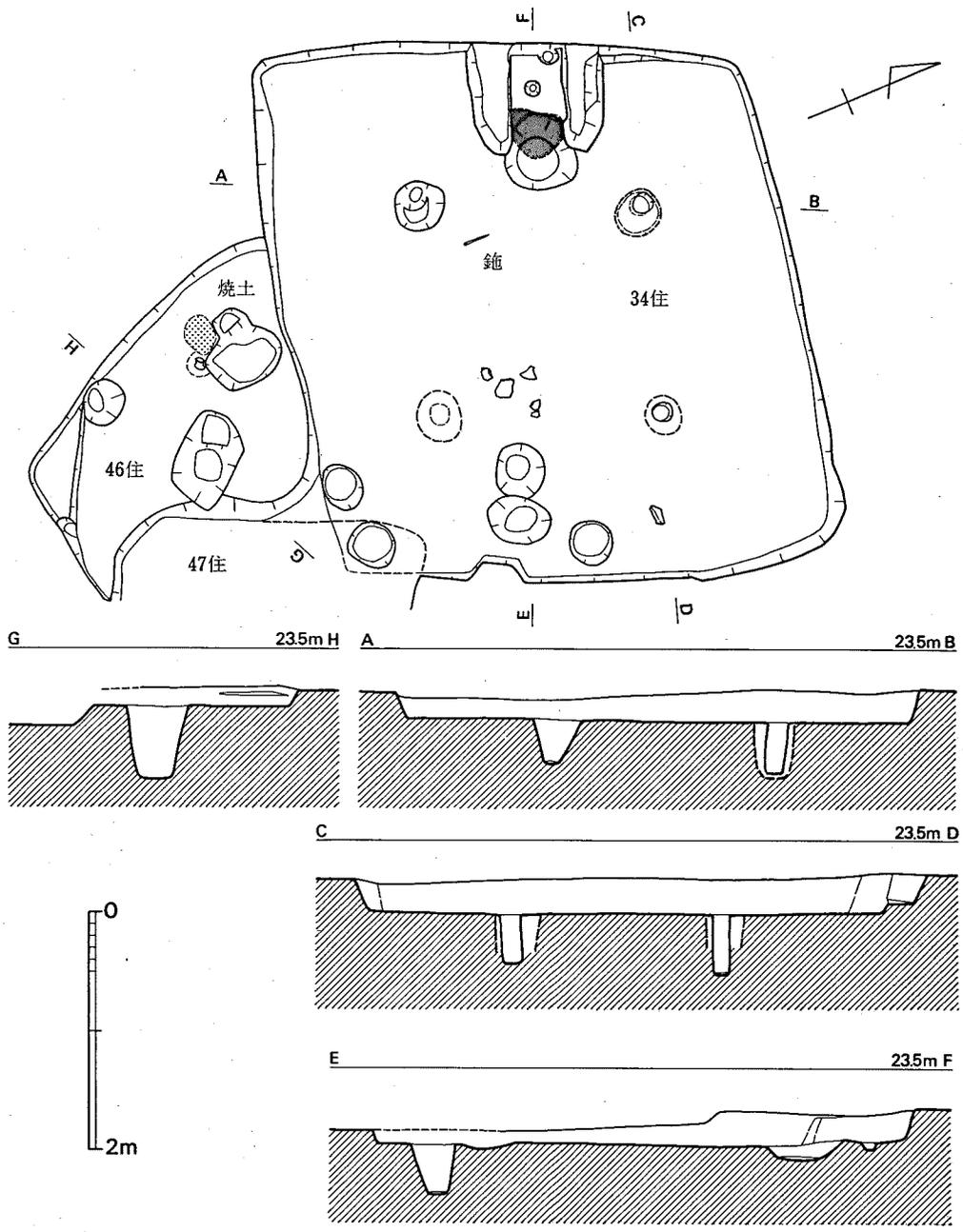


第 125 図 33号竪穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)

3は器種が明らかでないが、断面が弧状を呈することから鉤の可能性が高い。1/2以上を欠損し刃部は明らかでない。現存する1/2ほどに木質が錆着するが基部にはみられない。現存長9.3cm、身幅2.0cm、基部幅6mmを測り、全体的に幅広につくられており古い形状の鉤であることから当該住居に伴うと考えられる。

34号竪穴住居跡 (図版43-1, 第126, 127図)

F2区の19号住居に切れ、溝5, 46号住居を切った状況で検出した竪穴住居跡である。平面形態は方形を呈するが、やや歪である。住居の規模は南・北壁が4.35m・4.10m, 東西壁4.25m・4.05m, 壁高25cm前後を測る。床面積は竈を含め17.7㎡である。主柱は4本で壁に対して必ずしも平行でなく、竈軸に対して4°Wにずれている。柱穴の深さは40cmから50cmを測る。柱間は



第 126 图 34号・46号竖穴住居跡実测图 (1/60)

東西間1.75m・1.85m,南北間1.85mである。また、竈軸の延長線上にも深さ40cmの柱穴を掘っている。

西壁の中央部には「U」字状の竈を付設している。竈の袖は黄褐色の粘土で築造し、右袖の外側は現存の床面より深く掘り下げている。床面中央には径15cm,深さ15cmの支脚抜去穴があり、焚口部分の床面は掻き出しのため大きく抉れ、火床は焼けて赤色に変色していた。奥壁傍には小さなピットがあるが煙道とは無関係である。竈中からは高坏片が若干出土している。住居の主軸方位は東西間の柱間軸を採用するとN71°Wを示す。

出土遺物は甕・高坏の他、砂岩製の砥石1,鉈が1点ある。出土土器から住居の時期は古墳時代中期である。

出土遺物

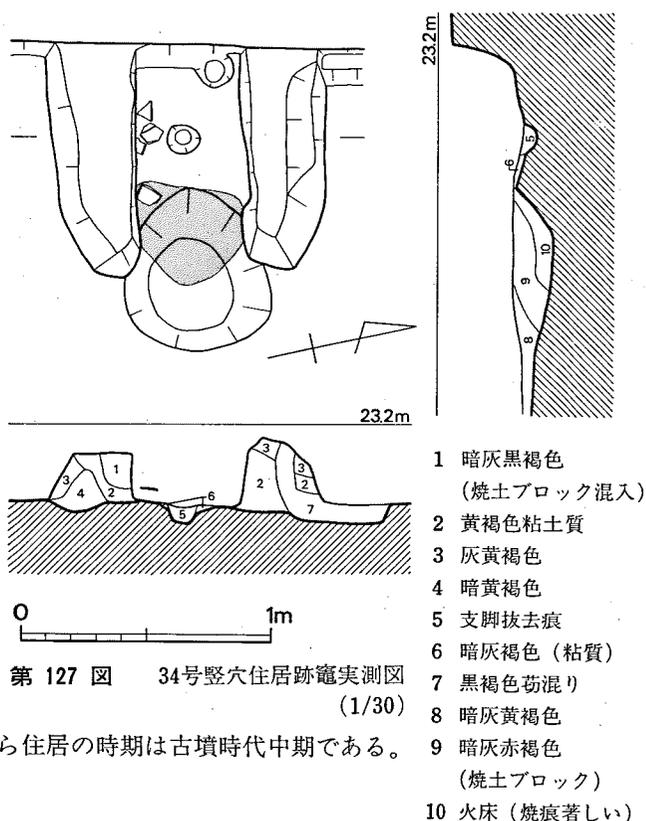
土器 (図版57, 第128図)

1・2は甕形土器で、1は反り気味に鋭く外反する口縁部をなし、肩部は著しく張る。調整は口縁内外面とも横ナデ、内面頸部下は左廻りの荒い篋削りで仕上げている。器壁は厚く、胎土には砂粒を多く含む。復原口径18.8cm。2は小振りの甕で埋土中からの出土である。口縁部は反り気味に鈍く外反する。体部は球形状を呈する。調整は口縁内面から外面にかけてナデで仕上げ、体部内面は左廻りの篋削りで仕上げている。胎土は細砂粒を多く含み、くすんだ橙色をなす。復原口径13.6cmを測る。

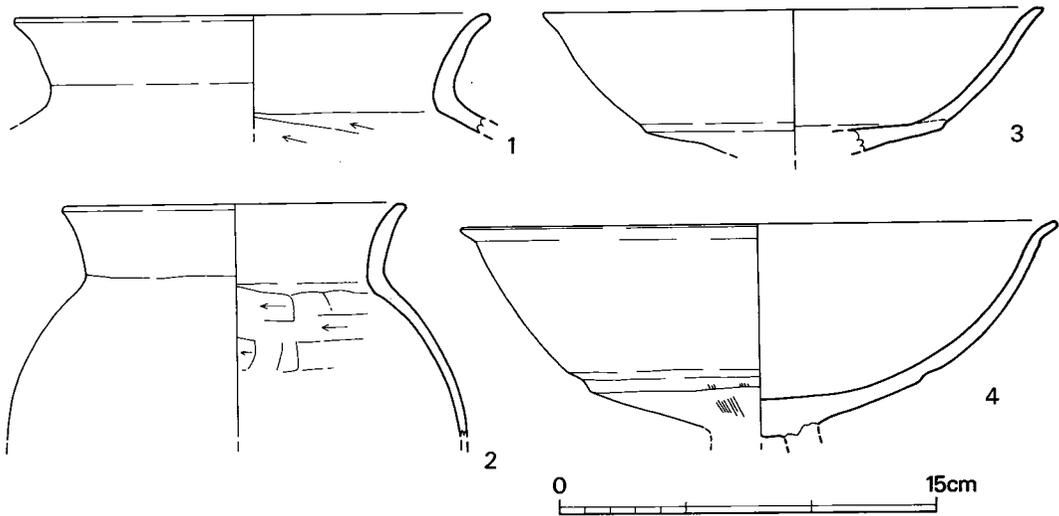
3・4は高坏の坏部で、3は坏部の屈折が明瞭で体部からの口縁部にかけては直線的である。4の屈折部は不明瞭あり、体部は丸みを持ち乍ら短く外反する口縁部に続く。両者とも調整は風化が進み不明瞭であるが、ナデ仕上げであろう。4の胎土は緻密である。後者は内外面とも強い二次加熱を受けている。3の復原口径20.0cm,4は23.8cmを測る。

鉄器 (図版58, 第129図)

両端に刃部を有す鉈が住居の覆土中から出土している。両刃とも切っ先を欠損している。図



第127図 34号竪穴住居跡竈実測図 (1/30)



第 128 図 34号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

示した上端の刃部は中央に稜をつけ刃部を研ぎ出している。下端の刃部は平造状に刃磨きを施しており、茎と関部との境いが屈折している。現存長は17.3cm、幅1.05cm、厚さ5mmを測る。

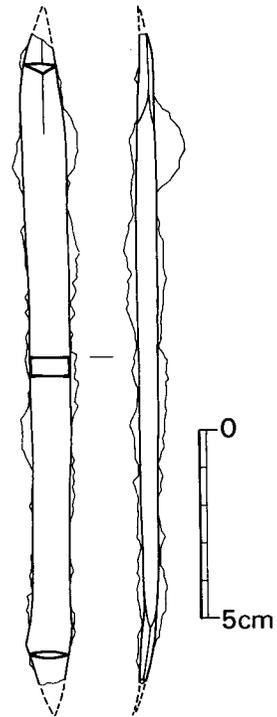
35号竪穴住居跡 (第84図)

25号住居に切られた遺構であるが、竪穴住居か否かは明らかでない。壁高は12cmと浅い。その他詳細は不明である。

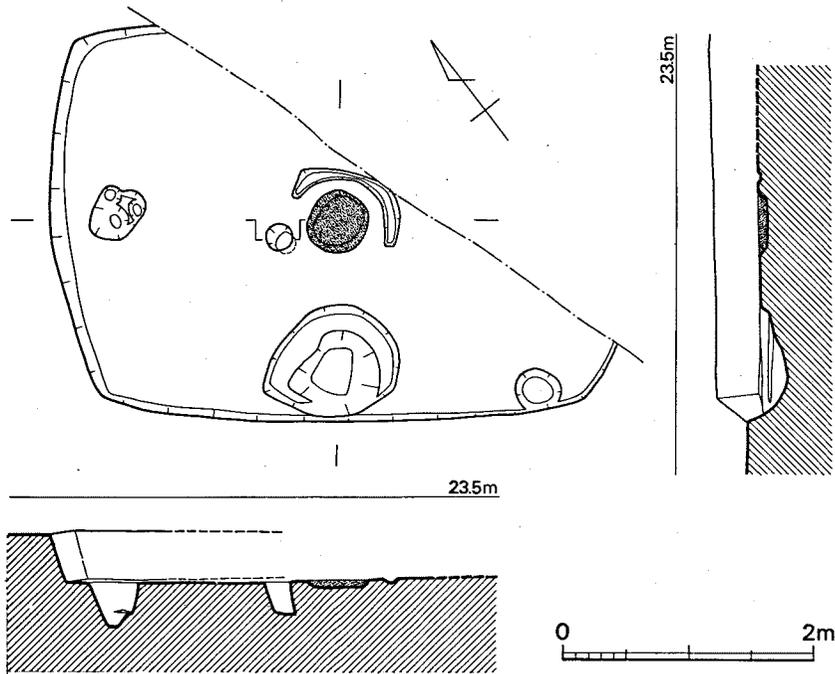
出土遺物は皆無で時期決定は困難である。

36号竪穴住居跡 (図版44-1, 第130図)

F2区の環濠(溝5)の内側で検出した竪穴住居跡で15号住居に切られているが、36号住居が深く掘られているため床面は遺存していた。平面形態は隅円長方形であろう。規模は約 $\frac{1}{2}$ が未掘のため明らかではないが、短辺が2.85m、南側の長辺が4.15m、壁高は遺存状態が良く40cm弱を測る。支柱は住居の長軸線上に2本確認でき、炉を狭んでさらに2本あると推察できることから2本の支柱とそれに付随する副次柱を伴うと考えられる。炉の傍の柱は外に傾斜する。



第 129 図 34号竪穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)



第 130 図 36号竪穴住居跡実測図 (1/60)

現存する柱穴の深さは外側が35cm，内側が25cmを測る。西側の2本の柱間は1.35mである。南側の長壁中央部には径1.05m×85cm，深さ20cmの二段掘りの屋内土壇（作業穴）を備えている。床面の中央には径50cm，深さ7.0cmの炉を設けており，中は炭の細粉で埋っていた。炉の廻りには三ヶ月状に細い溝を廻らしていた。

出土遺物は壺・甕・高坏の他，砥石（砂岩製）1がある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期中葉頃である。

出土遺物

土器 (第131図)

壺は1・2がある。2点とも鋤先口縁壺で2が1に比べて上面が外傾する。調整は磨滅して不明。1が茶褐色，2が橙色を呈する。復原口径は前者が30.0cm，後者が33.0cmを測る。

甕は3～8がある。「T」字状に発達した口縁を有す3～5，7・8と，逆「L」字状に近い6とがある。3・4の平坦部は凹面をなし，6・7・8は僅かに外傾する。調整は現存部では全てナデで仕上げる。復原口径3—31.0cm，4—29.8cm，5—32.0cm，6—32.0cm，7—31.0cm，8—32.0cmを測る。

9は高坏の坏部片で内外面とも丹塗り磨研である。鋤先口縁を有し，体部の張りは鈍い。口

径30.0cmを測る。

37号竪穴住居跡

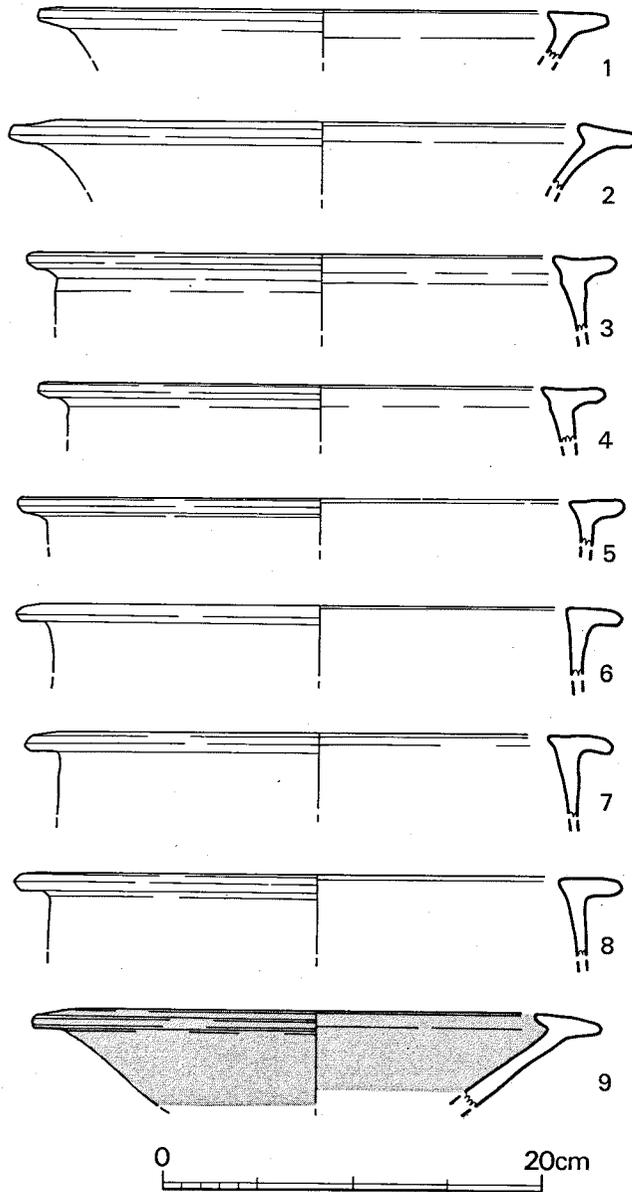
(図版44-2, 第132図)

49号住居を切っている
他は重複する全ての住居
に切られた竪穴住居跡で
ある。平面プランは28号
住居と同タイプの小判形
を呈すると考えられる。
規模は明らかでなく、壁
高は20cm弱である。床面
上には主柱の1本と考え
られる柱穴を検出した他
は見当たらない。確認した
柱穴の深さは18cmを測る。
その他詳細は不明である。

出土遺物は壺・甕があ
るが数は少ない。出土土
器の中には弥生時代中期
末頃の甕形土器があるが、
この甕は混入の可能性が
強く28号住居と同一乃至
近い時期が与えられよう。

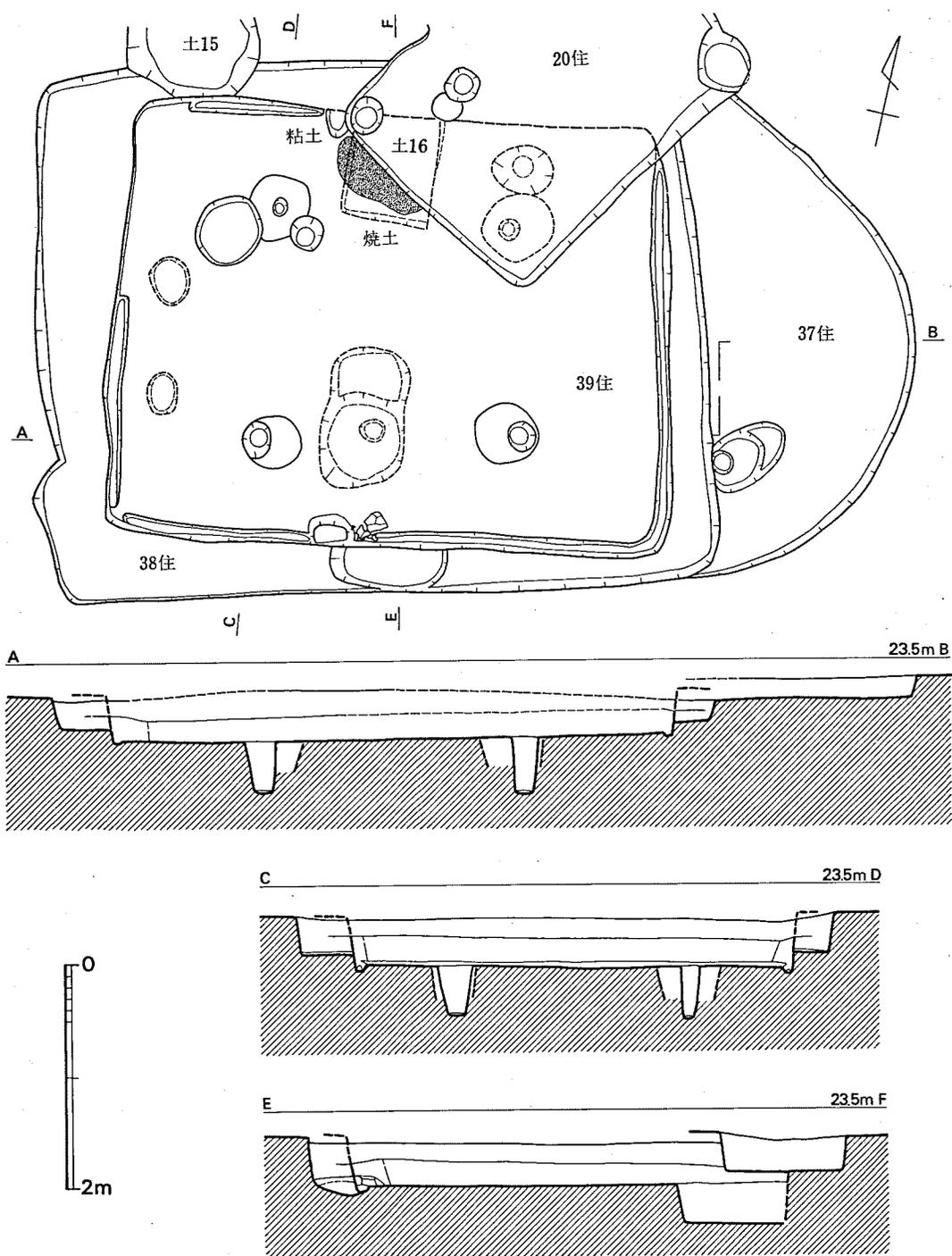
出土遺物

土 器 (第133図)

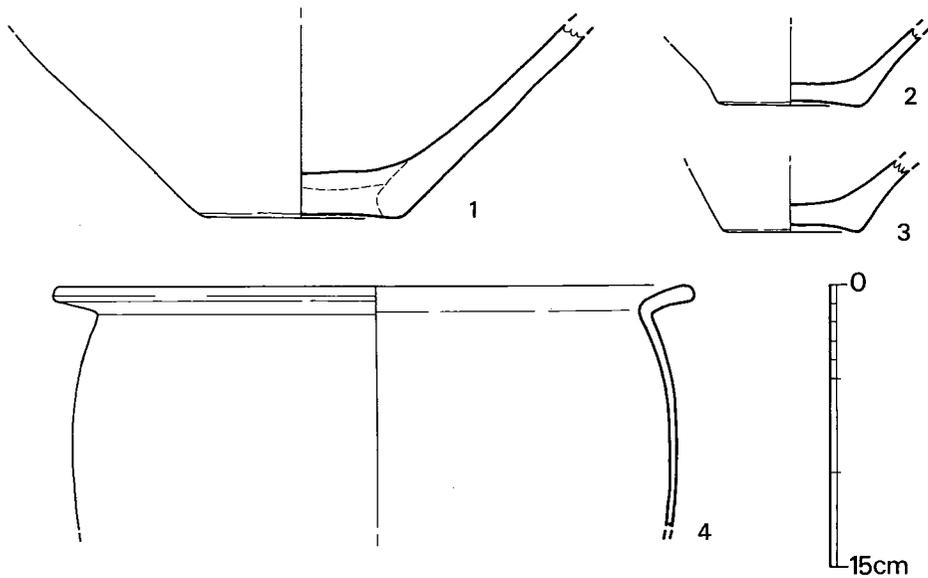


第131図 36号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

壺は1~3がある。すべて細味の底部片で1は大型の壺である。調整は3個体とも器面の風化が進み不明瞭であるが、内面がナデ、外面が磨きかナデであろう。すべて上げ底を呈する。底径は1—11cm, 2—7.8cm, 3—7.0cmである。胎土は細かい砂粒が多く、焼成は良い。色調は茶褐色か褐色系である。2は内外面に強い二次加熱を受け赤変する。



第 132 图 37号·38号·39号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第 133 図 37号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

甕は4がある。「く」字状に鋭く外反する口縁と張り気味の肩部を有す。頸部内面の稜は明瞭ではない。調整は器面が風化しており不明である。復原口径は34cmである。胎土には細砂粒と金雲母を含み、淡黄橙色の色調を持つ。

38号竪穴住居跡 (図版44-2, 第132図)

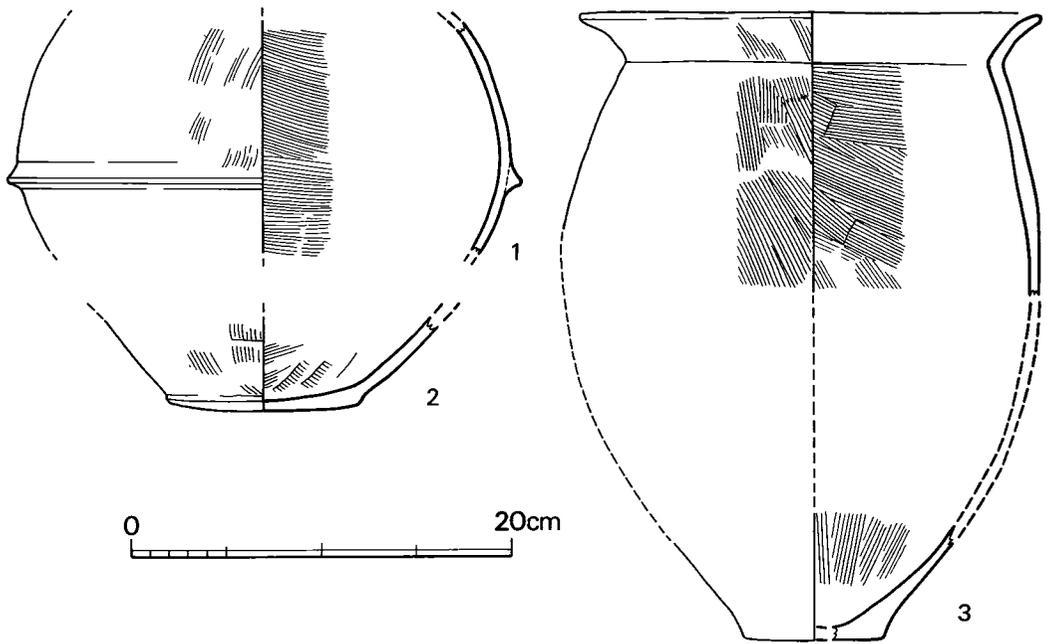
20号・39号住居と15号土壇に切られ、37号・43号住居、2号掘立柱建物、16号土壇を切った状態で検出した竪穴住居跡である。39号住居とは完全に重複している。平面形態は長方形を呈する。規模は南壁と西壁が計測でき、前者が5.85m、後者が4.65m、壁高30cm弱を測る。支柱は明らかでない。南壁際の中央部には深さ13cmの屋内土壇を設けている。土壇内からは甕形土器が出土している。その他詳細は不明である。

出土遺物は壺・甕の他、鉄鎌1がある。出土土器から住居の時期は弥生時代後期中葉～後葉である。

出土遺物

土器 (図版58, 第134図)

壺は1・2がある。1は球形に近い胴部片で胴部最大径には下り気味の台形状の凸帯を1条付している。調整は器外面が風化しハケが僅かに残る。内面は荒いハケで仕上げている。淡黄



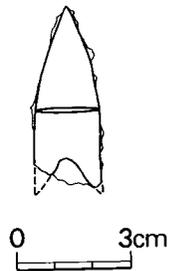
第 134 図 38号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

褐色の色調をなす。2の底部はレンズ状をなし、内外面ともハケ仕上げであるが風化し不明瞭である。底径4.9cmである。

甕は3がある。屋内土壌からの出土である。胴下半部を欠損する。「く」字状にしかも反り気味に外反する口縁部に、張りの鈍い胴部を有す。底部は完全な平底をなす。調整は内外面とも荒いハケで仕上げるが、下半部は磨耗している。胎土は細砂粒が多く荒い。器表面は燻したような黒色を呈する。復原口径は24.5cmを測る。

鉄 器 (図版58, 第135図)

住居跡の埋土から出土した無茎長三角形の脇挟りのある鉄鏃で断面平造りである。両方の逆刺部が欠損しているが全長は復原可能で5.0cm, 身幅1.75cmを測る。矢柄は残存していないが、孔を穿って装着すると思われるが、孔は観察不可能である。



第 135 図 38号竪穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)

39号竪穴住居跡 (図版44-2, 第132図)

38号住居のプラン内に納まる形で重複した竪穴住居跡で38号住居を調査している時点で重複に気付いた。平面形態は長方形に近い形状を呈する。規模

は東・西壁が3.80m・3.85m, 南・北壁が5.00m・4.60m, 壁高は現存では40cmを測る。床面積は20号住居との切り合い個所を復原すると17.5㎡になる。主柱は規則的な4本柱であり、深さは45cmから50cmである。柱間は南北間で2.05m・1.85m, 東西間で2.05m, 2.30mを測る。南壁際の西寄りには高さ7.0cmの高まりがあり出入口の残痕とも考えられる。北壁の中央には竈を付設していたと察せられ、僅かに左袖が残っていた。その周囲には焼土が堆積していたが、殆んど20号住居によって破壊されていた。周溝は北・西壁の一部と南・東壁に廻っている。住居の主軸方位は南北間の柱間軸でN70°Wを示す。

出土遺物は土師器の壺・甕・鉢・碗・坏身, 須恵器の壺・坏身・坏蓋・高坏の他, 鎌と考えられる鉄器が1点ある。出土土器から住居の時期は古墳時代後期である。

出土遺物

土器 (図版58, 第136図)

土師器 甕は1～3がある。1は反り気味に短く外反する口縁部を有し、肩部は僅かに張る。調整は口縁内外面が横ナデ, 頸部外面は板の小口による横ナデ, 内面は左廻りの筥削りで仕上げる。外面には弱い二次加熱を受ける。復原口径18.0cmを測る。2の口縁部は長く鈍い外反度を示す。肩から胴部にかけての張りも鈍い。口縁周辺は横ナデ, 体部外面は荒いハケを施すが殆んど残らない。内面は下→上方向に荒い削りを施す。外面は強い二次加熱を受けている。竈左袖横からの出土である。復原口径16.4cmを測る。3は反り乍ら外反する長い口縁部を有す。口縁の調整は横ナデ, 外面は荒いハケ, 内面は荒い左廻りの筥削りで仕上がる。復原口径20.6cm。

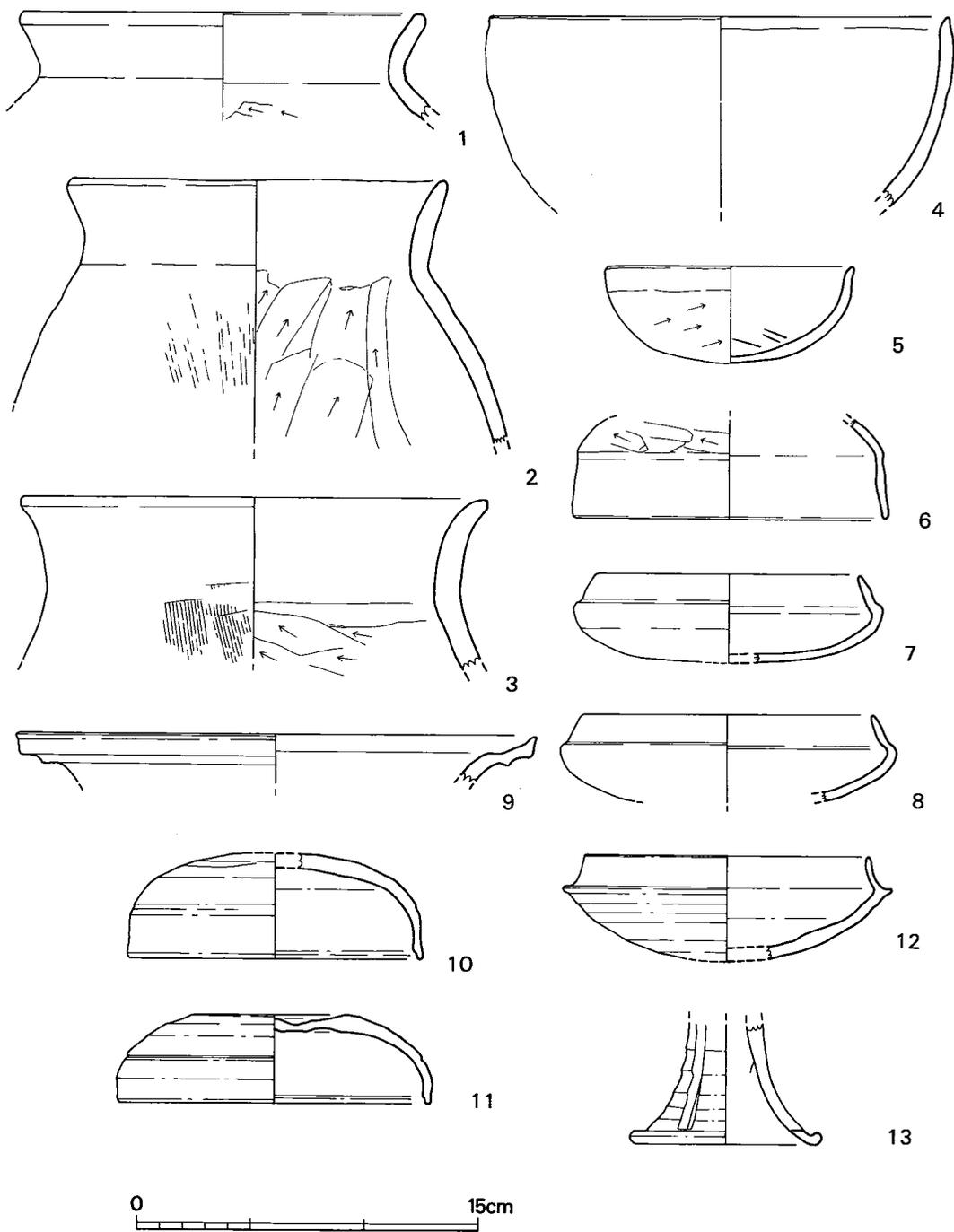
4は大型の半球形の鉢形土器である。口唇部は尖る。最終調整は横ナデであるが、外面体部下半には筥削り痕を残す。橙褐色を呈し、復原口径20.5cmを測る。

5は口縁部が僅かに外反する碗で、体部はやや扁平球状をなす。内面はハケのちナデ, 外面は筥削り痕が残る。色調は明茶褐色。口径11.1cm, 器高4.35cmを測る。

6は3号住居の竈内から出土した土師質の坏蓋と同タイプのもので、床面直上からの出土である。内面は口縁が横ナデ, 体部が横磨きで天井部は丁寧な筥削りを施している。復原口径14.1cmを測る。つくりの良質な土器である。

7・8は同タイプの坏身である。口縁部は内傾し、体部は大きく張り扁平な球状を呈する。両者とも器面の荒れが激しく調整は不明である。復原口径は7—11.8cm, 8—13.0cmを測る。7の器高は4.0cmを測る。

須恵器 9は壺の口縁部片で口唇部は摘み上げ状に尖る。床面直上から出土した。口縁直下には1条の凸帯を貼付ける。調整は横ナデで仕上げ、胎土は砂粒を殆んど含まず、灰色を呈する。復原口径23.0cmを測る。



第 136 图 39号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

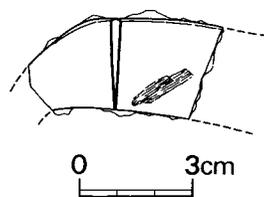
10・11は坏蓋で、10の方が体部に丸みを有す。11は天井部に焼歪みがあり凹面をなす。さらに天井部外面には「/」状の篋記号を刻んでいる。10の胎土は精製され、焼成も堅固である。灰褐色をなす。11は青灰色の色調を持ち、焼成はやや軟質である。前者の口径は13.0cm、器高4.7cm、後者は口径13.9cm、器高3.9cmを測る。

12は坏身片で床面に密着して出土した。調整は内面から外面上半にかけては横ナデ、底部は左廻りの回転篋削りで仕上げる。胎土には砂粒を多く含むが焼成は頗る堅固である。色調は黒灰色を呈する。復原口径12.7cmを測る。

13は高坏の脚部片で3個所に長三角形の透しを穿つ。胎土は緻密で焼成は堅固である。暗灰色の色調を有す。内外面とも横ナデで仕上げる。裾部径8.6cmを測る。

鉄器 (図版58, 第137図)

弧状を描く鉄器片で刃部を有すことから鎌の破片と思われる。表面には藁が錆着する。現存での幅は2.5cm、背幅は3mmである。



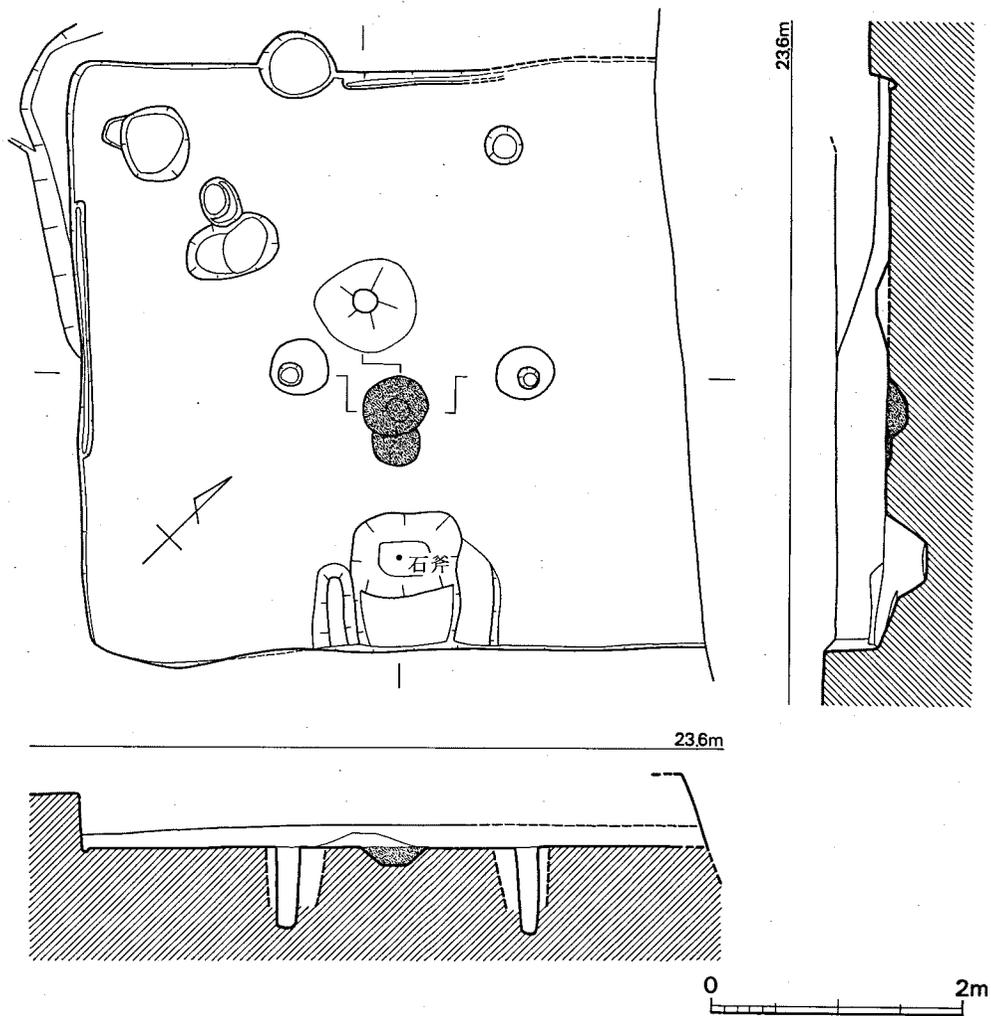
第137図 39号竖穴
住居跡出土鉄器実測図
(1/2)

40号竖穴住居跡 (図版44-2・45-1・2, 第138図)

19号・20号住居、環濠(溝5)に切られた状態で検出した竖穴住居跡である。平面形態は北東側の壁を溝5によって切られ不明であるが、南西側の壁と1本の支柱間の距離が、対峙する壁ともう1本の支柱間のそれと近似する値と仮定すれば方形に近い形状を呈する。規模も上記の数値から主軸長が5.25m、現存する南東壁は4.75m、壁高は遺存状態の良好な所で40cmを測る。支柱は前述したように2本柱で、深さは65cm前後を測る。柱間は1.90mである。柱間間には主軸からややずれて径50cm、深さ15cmの炉を掘っている。南東壁際には左右に高さ10cm前後の細い土手で狭むような形で屋内土壌(作業穴)を設けている。屋内土壌は長方形を呈し、二段掘りである。長軸1.05m、短軸80cm、深さ30cm強を測る。中からは若干の土器片の他、縦割れした石斧が出土している。炉の北東傍には砂混りの黄褐色粘土で断面台形状の高まりを床面に貼付けていた。この遺構は住人が座る場としての用途が考えられる。周溝は南西壁と北西壁沿いの一部に掘り込んでいる。主軸方位はN45°Eを示す。

さらに、当該住居は廃棄した時点で黄褐色ブロックが混在した黒色土系の土で完全に埋められていた。これは何を意味するかは定かでないが、家内で何等かの災難が生じたことから家屋そのものを封じ込めたためか、あるいは他の住居を掘削する際の排土場所としたことが考えられる。

出土遺物は甕・手捏ね土器の他、投弾1、石剣1、石包丁1、蛤刃石斧1がある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期中葉頃である。



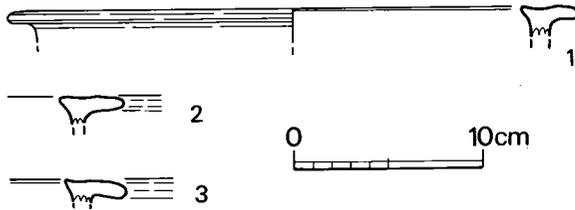
第 138 図 40号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物

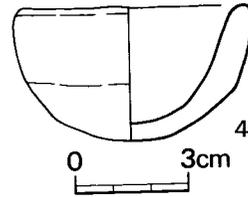
土 器(第139, 140図)

1～3は「T」字状に発達した甕の口縁部である。覆土中からの出土である。3は口縁平坦部が外傾している。1の復原口径は30cmを測る。

4は埋土中から出土した手捏ね土器で、完形品である。胎土は砂粒を多く含み粗い。黄味をおびた茶褐色を呈する。口径6.4cm、器高3.6cmを測る。



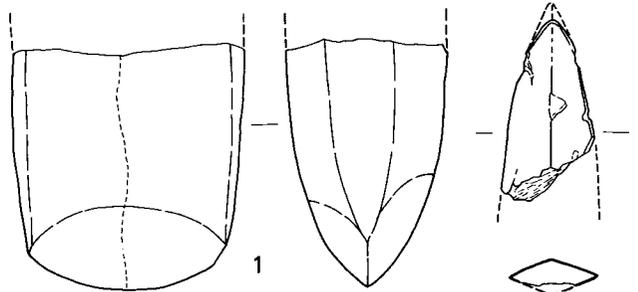
第 139 図 40号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/4)



第 140 図 40号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/2)

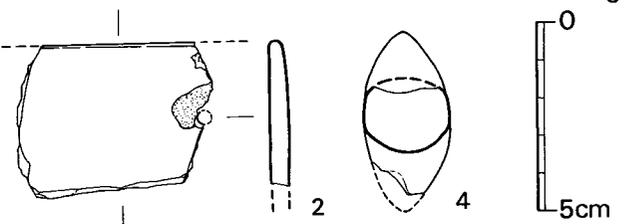
石器 (図版58・59, 第141図)

1は屋内土壌内の底部に密着した火成岩系の石材を使用した蛤刃石斧である。基部を欠損しており、しかも中央部で縦に割れていた。表面は風化が進行しざらついている。現存長6.4cm, 刃部幅5.2cmを測る。



2は床面に密着して出土した砂岩製の石庖丁片で刃部は欠失する。背部は整美な面取りをしている。厚さは5mmである。

3は石剣の切先片で端部は磨耗しており、錆は不明瞭となる。表面は研磨し平滑である。現存長4.9cmを測り、粘板岩製である。



土製品 (図版59, 第141図)

4は土製投弾でラクビー球状を呈する。約 $\frac{1}{2}$ が欠損しており、二次加熱を受けている。胎土は頗る緻密で表面は光沢がある。径は2.3cm。

第 141 図 40号竪穴住居跡出土石器, 土製品実測図 (1/2)

41号竪穴住居跡 (第47図)

19号・34号住居内にその片鱗をみせたが、全く内容は明らかでない。出土遺物も無く住居の時期も不明である。

42号竪穴住居跡 (図版46-1, 第142図)

F2区 の 3号周溝状遺構に囲まれた状態で検出した竪穴住居である。30号住居と不明土壌を切っている。 $\frac{1}{2}$ が未掘のため平面プランは明らかにできない。住居の規模は西壁のみ計測可能

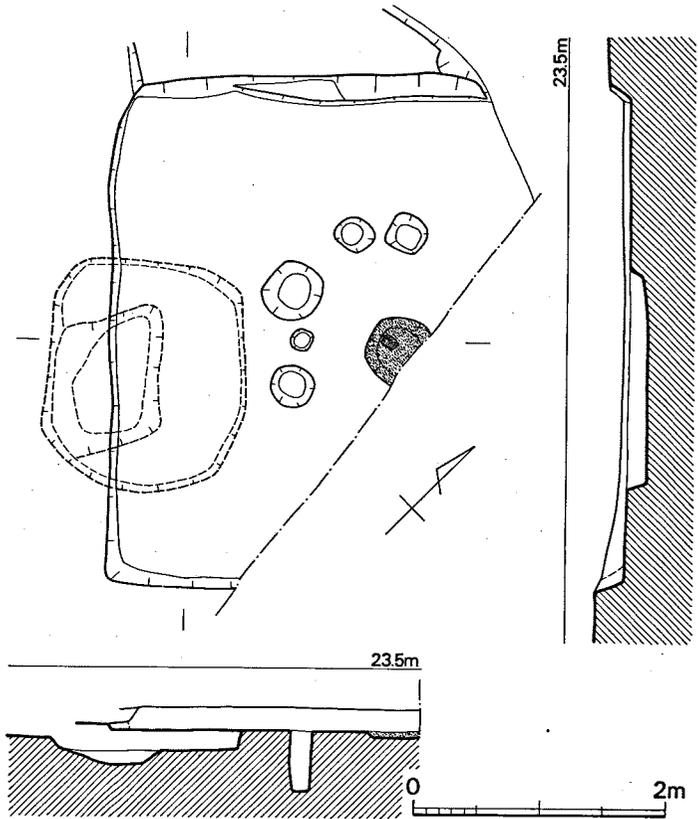
で3.95m、壁高は最高所で25cmを測る。床面の略中央には径50cm、深さ6.0cmの炉を設け、その南西側に深さ50cm弱の主柱穴を掘っている。形状から2本柱であろう。その他詳細は不明である。

出土遺物は甕の小片があるに過ぎない。出土土器から住居の時期は弥生時代中期後半頃である。

出土遺物

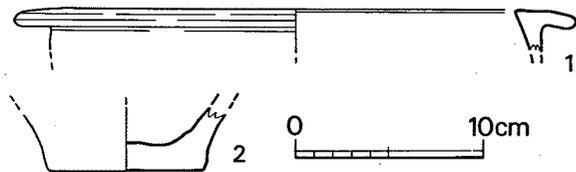
土器(第143図)

1・2の甕片がある。1は発達した逆「L」字状の口縁を有し、口縁平坦部は若干外傾する。色調は淡橙褐色を呈し、復原口径29.6cmを測る。2は底部片である。底径8.2cmである。



第 142 図 42号竪穴住居跡実測図 (1/60)

43号竪穴住居跡 (第47図)



第 143 図 42号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

F 2 区の21号・38号住居に切られた竪穴住居跡であるが、重複関係が著しいのと、遺存状態が悪いため壁は殆んど遺存していない。僅かに炉と主柱穴2本が残存しており、柱間は1.10mを測る。主柱間には50cm×60cm、深さ14cmの炉を掘り込んでいる。その他詳細は明らかでない。

出土遺物は皆無で住居の時期は決定できない。

44号竪穴住居跡 (第144図)

F 2 区 の 37 号 ・ 45 号 住 居 に 切 ら れ た 状 態 で 検 出 し た 豎 穴 住 居 跡 で ， 現 存 で み る 限 り 平 面 形 態 は 長 方 形 で あ る 。 壁 が 完 全 に 残 存 し て い る 所 が な い た め 規 模 は 明 ら か で な い が ， 長 軸 3.95m ， 短 軸 3.35m ， 壁 高 8.0cm を 測 る 。 床 面 上 に は 主 柱 穴 は 見 当 ら ず ， 北 側 に 柱 穴 は あ る が 主 柱 と は な り 得 な い 。 そ の 他 詳 細 は 不 明 で あ る 。

出 土 遺 物 は 甕 ・ 器 台 の 小 片 が あ る 。 出 土 土 器 か ら 住 居 の 時 期 は 弥 生 時 代 中 期 前 葉 頃 に 比 定 で き る 。

出 土 遺 物

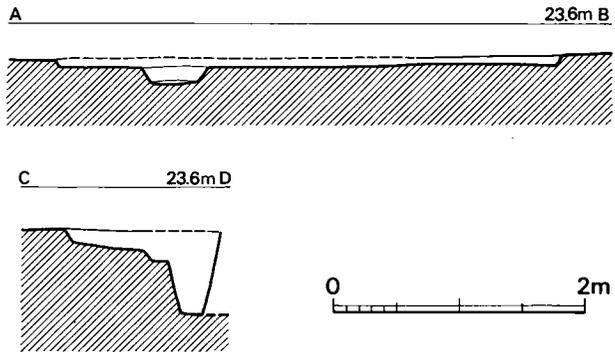
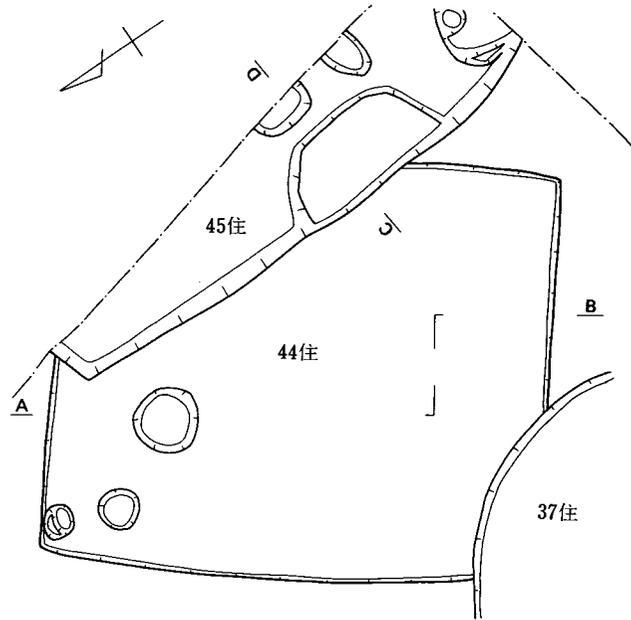
土 器 (第 145 図)

甕 は 1 ～ 4 が あ る 。 全 て 未 発 達 の 逆 「 L 」 字 状 口 縁 を 有 す 甕 で 1 ・ 2 は 頸 部 が 内 傾 す る 。 3 は 特 に 短 い 逆 「 L 」 字 状 口 縁 を な す 。 色 調 は 黄 褐 色 か 橙 褐 色 を 呈 す 。 復 原 口 径 は 1 が 29cm ， 2 が 26cm で あ る 。 4 は 上 げ 底 の 細 み の 底 部 で ハ ケ と ナ デ で 仕 上 げ る 。 底 径 6.5cm 。

4 は 器 台 形 土 器 で ， 調 整 は 風 化 が 進 み 磨 耗 し て い る 。 全 体 的 に 細 み で 古 い タ イ プ で あ る 。 復 原 底 径 9.0cm を 測 る 。

45 号 豎 穴 住 居 跡 (第 144 図)

44 号 住 居 を 切 っ た 豎 穴 住 居 で あ る が ， 一 部 を 調 査 し た に 過 ぎ ず 全 容 は 全 く 判 ら な い 。 壁 高 は 25cm を 測 る 。 西 壁 の 略 中 央 部 と 考 え ら れ る 所 に は 高 さ 10cm か ら 15cm の テ ラ ス 状 の 遺 構 を 設 け て お り ， 住 居 の 出 入 口 の 可 能 性 が 考 え ら れ る 。



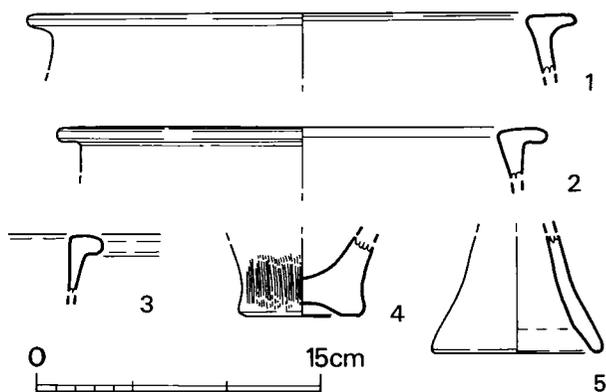
第 144 図 44 号 ・ 45 号 豎 穴 住 居 跡 実 測 図 (1/60)

出土遺物は甕がある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期中葉に近い時期であろう。

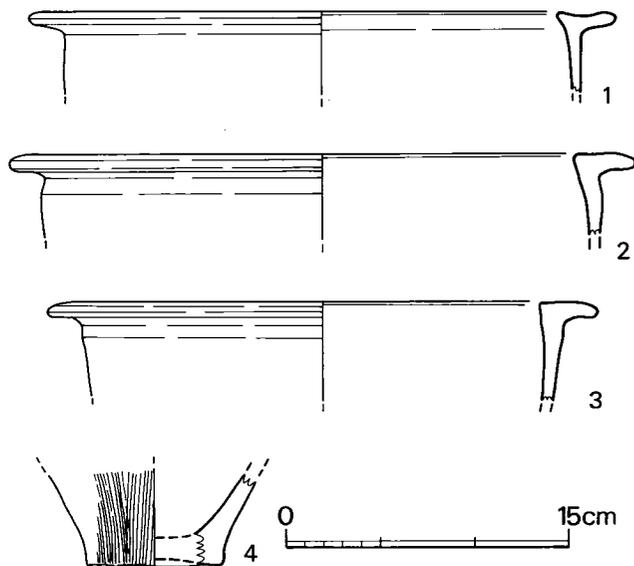
出土遺物

土器(第146図)

出土した土器は全て甕形土器片である。1は「T」字状に発達した口縁を有し、調整は磨滅して不明。黄橙色の色調をなす。復原口径31.1cmを測る。2は発達した逆「L」字状の口縁部を持つ甕で、現存部の調整はナデである。復原口径33.1cmを測る。3も逆「L」字口縁の甕で、調整は風化し不明。橙褐色を呈す。復原口径29cm。4は甕の底部片で上げ底を呈する。外面は荒いハケ、内面はナデで仕上げる。底径7.2cm。



第 145 図 44号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



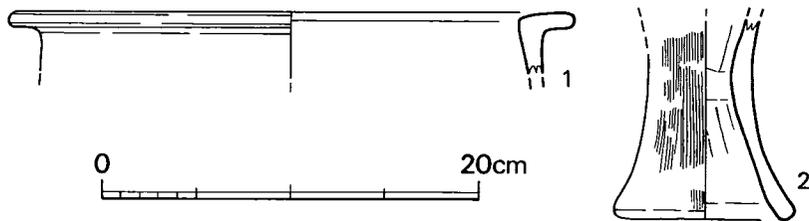
第 146 図 45号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

46号竪穴住居跡(第126図)

19号・34号住居に切られた竪穴住居で壁と床面の一部が残存するに過ぎない。壁高は15cmを測る。主柱は2本と考えられるが、その内の1本を検出した。柱穴の深さは60cmと深い。西壁の傍からは焼土を若干確認したが、焼失住居ではないようだ。その他詳細は明らかでない。

出土遺物は甕・器台があり、出土土器から住居の時期は弥生時代中期前葉頃の所産である。

出土遺物



第 147 図 46号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

土 器 (図版59, 第147図)

1の甕と2の器台がある。甕は未発達逆「L」字状口縁を有す小片である。現存での調整はナデで仕上げている。細砂粒を含み、黄橙色の色調を持つ。復原口径30cm。

2の器台は上部を欠損する。全体的に細みで古い形状をなす。調整は外面がやや荒いハケ、内面はナデで仕上げ、絞り痕を残す。裾部には内外面とも二次加熱を受けている。裾部径は9.7cmを測る。

47号竖穴住居跡 (第126図)

19号・37号の床面下から検出した竖穴住居であるが、殆んど遺存しておらず住居が存在していた事実のみを確認した。

出土遺物も無く詳細は全く不明である。なお、48号竖穴住居は欠番である。

49号竖穴住居跡 (第47図)

37号・38号住居と3号周溝状遺構に切られた住居跡の隅を検出したに過ぎず、住居の内容は不明である。

出土遺物は甕が1点ある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期前葉の古期である。

出土遺物

土 器 (第148図)

外方に鋭く外反する口縁部を有す甕形土器で上面は内傾する。頸部は直線的である。調整は横ナデの他ハケが僅かに認められる。淡橙色の色調をなす。復原口径25cmを測る。



第 148 図 49号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

50号竪穴住居跡 (第122図)

F2区の東側で検出した33号住居に切られており、僅かに壁を確認したが、住居跡である確証はない。

出土遺物も皆無である。

51号竪穴住居跡 (第122図)

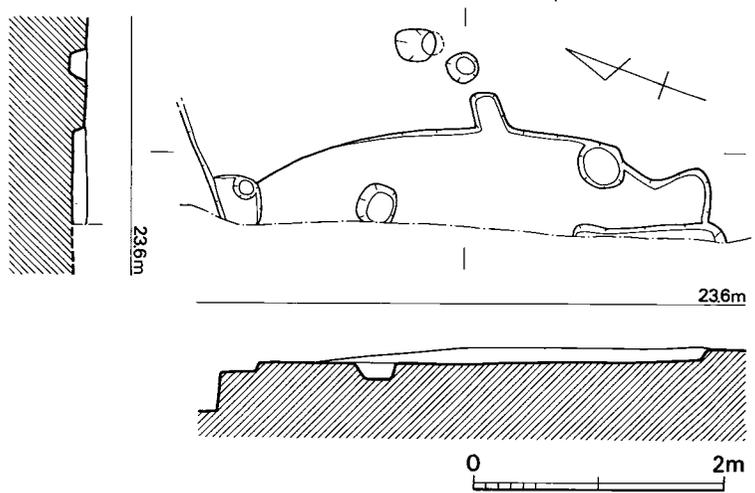
33号竪穴住居を切った竪穴住居跡であるが、大半が調査区外のため一部を調査したに過ぎない。壁高は35cmを測る。その他詳細は不明である。

出土遺物は皆無である。

52号竪穴住居跡 (第149図)

F2区の南西側で検出した竪穴住居跡で21号住居に切られている。一部を調査したのみで大半が未掘である。平面形状をみると僅かに弧を描いていることから小判形を呈すると考えられる。壁高は10cm前後を測るが、北側は削平され消滅している。床面上には1本の柱穴を確認したが主柱になり得るか否かは不明である。

出土遺物は皆無である。

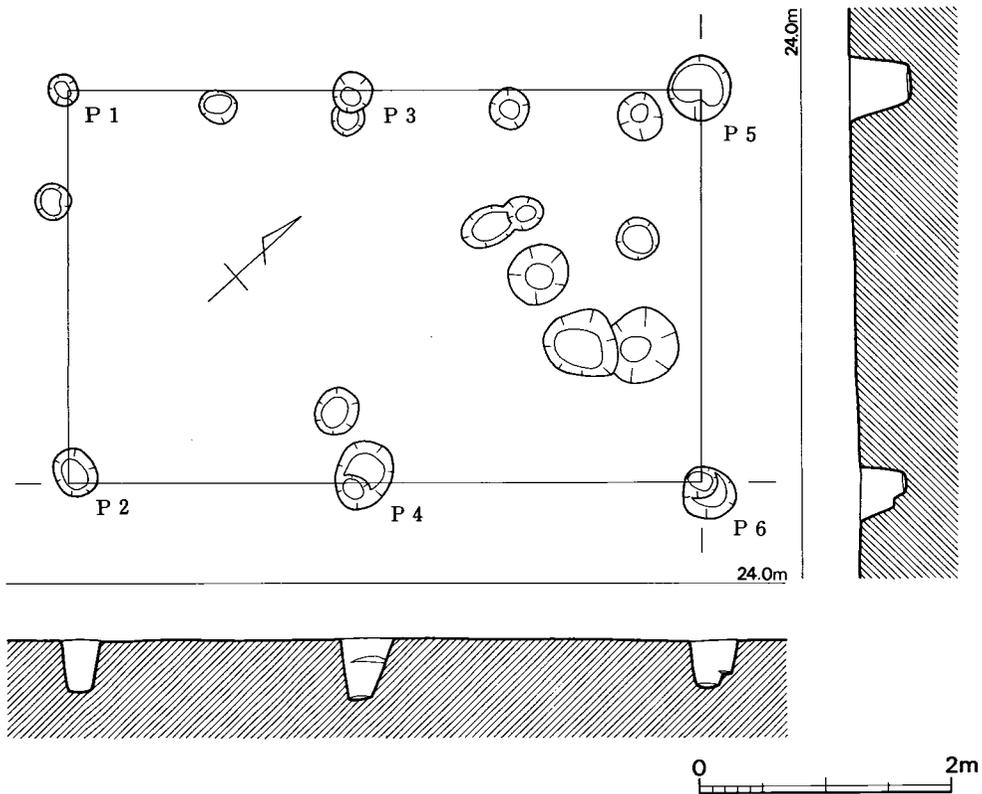


第 149 図 52号竪穴住居跡実測図 (1/60)

(2) 掘立柱建物

1号掘立柱建物 (第150図)

F1区の4号・11号竪穴住居跡の南に隣接する状態で検出した1間×2間の掘立柱建物である。他の遺構との重複はない。柱穴の深さはP₁-35cm, P₂-40cm, P₃-50cm, P₄-49cm, P₅-48cm, P₆-36cmを測る。P₂とP₄からは弥生時代中期前葉の甕形土器の小片（図示不可能）が出土しており、建物の上限期が弥生時代中期前葉であることが判る。主軸方位はN42°Eを示す。

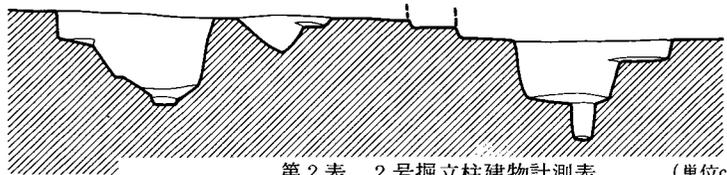
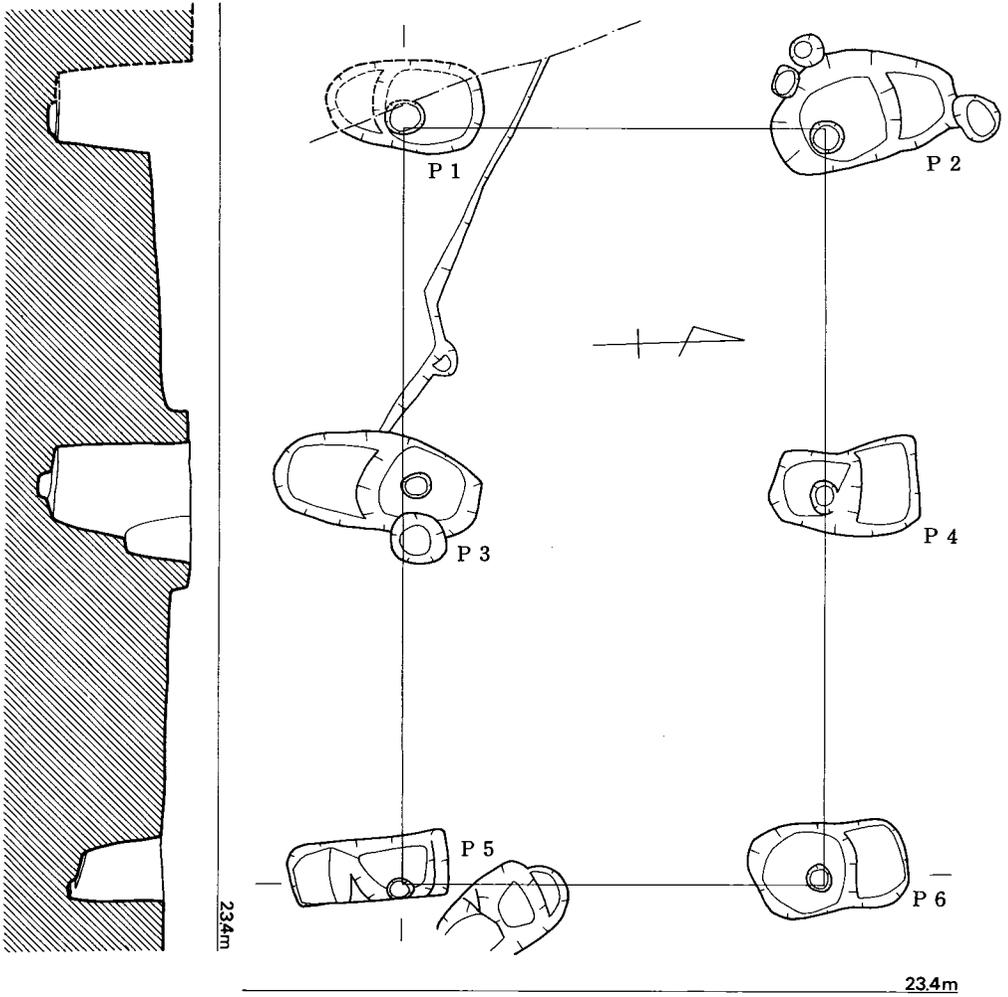


第150図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

第1表 1号掘立柱建物計測表 (単位cm)

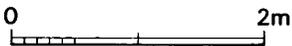
梁 間 間		桁 行 柱 間		桁行間
P ₁ -P ₂	P ₃ -P ₄	P ₁ -P ₃	P ₃ -P ₅	P ₁ -P ₅
305	310	225	280	505
	P ₅ -P ₆	P ₂ -P ₄	P ₄ -P ₆	P ₂ -P ₆
	315	220	275	497

2号掘立柱建物(第151図)



第2表 2号掘立柱建物計測表 (単位cm)

梁間間		桁行柱間		
P ₁ -P ₂ 335	P ₃ -P ₄ 325	P ₁ -P ₃ 295	P ₃ -P ₅ 320	P ₁ -P ₅ 615
	P ₅ -P ₆ 335	P ₂ -P ₄ 285	P ₄ -P ₆ 305	P ₂ -P ₆ 590



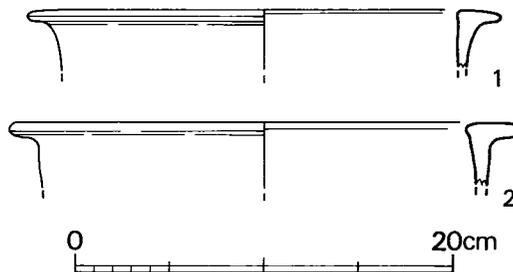
第151図 2号掘立柱建物実測図(1/60)

重複関係にある27号住居と43号住居を除く（43号住居との切り合いは不明）全ての遺構に切られた1間×2間の均整のとれた掘立柱建物である。調査時に柱穴の掘り方の規模が大きいため土壌として捉えていたが、途中で掘立柱建物であることに気付いた。P₁は $\frac{1}{2}$ が未掘である。掘り方はP₄・P₅以外は全て楕円形を呈し、二段掘りである。しかも全てに柱痕を残し、掘り方よりも柱を深く埋めている。掘り方の上面での規模はP₂-1.50m×90cm, P₃-1.65m×75cm, P₄-1.20m×70cm, P₅-1.25m×50cm, P₆-1.25m×73cmを測る。深さはP₂とP₃が住居との重複がなく、切り込み面のレベルをそれに適応させるとP₁-1.13m, P₂-1.15m, P₃-1.20m, P₄-1.14m, P₅-1.08m, P₆-1.23mを測り、掘立柱建物としては非常に深い。P₃とP₄の掘り方の中から弥生時代中期前葉の甕形土器の小片が出土している。建物が弥生時代中期前葉の27号住居を切り、しかも弥生時代後期初頭頃に位置付けられる21号住居に切られていることから、建物の時期が弥生時代中期前葉以降から中期末頃までの間に設営されたことが判る。主軸方位はN87°Wを示し、略東西方向に建てられている。

出土遺物

土器(第152図)

甕が2点ある。いずれも柱穴の掘り方内からの出土で1がP₁、2がP₃から出土した。2点とも未発達逆「L」字状口縁を有し、胎土には砂粒をかなり含む。淡橙褐色の色調をなす。前者の復原口径は25cm、後者は27cmを測る。



第152図 2号掘立柱建物出土土器実測図(1/4)

(3) 周溝状遺構

1号周溝状遺構(図版31-2, 第61図)

F1区の南端で検出した周溝状遺構で約 $\frac{1}{2}$ はポンプ小屋が建っていたため未掘である。8号竪穴住居と重複しており、住居に切られた状態で検出した。しかし、今までの実例から周溝状遺構の存在は弥生時代後期が主体を占めており、8号住居よりも新しい可能性を秘めている。規模は溝幅50cm、深さ20cmを測る。その他詳細は不明である。

出土遺物は皆無で時期決定は不可能であるが、管見での出土例から弥生時代後期の範疇であろう。

2号周溝状遺構(第47図)

溝5(環濠)及び14号住居と重複関係にあり、溝5には明らかに切られているが、14号住居との新旧関係は明瞭でない。しかし、14号住居が弥生時代中期中葉頃であることから、1号周溝状遺構と同様2号も新しくなることが考えられる。現存での規模は周溝の内径2.25m、外径3.80m、溝の幅60cmから1.00m、深さ20cmを測る。

出土遺物は皆無であるが、1号周溝状遺構と同時期かそれに近似する時期であろう。

3号周溝状遺構(図版46-1, 第117図)

F2区の南側で検出した周溝状遺構で28号・29号・30号・49号住居跡と2号掘立柱建物を切っている。東側の約 $\frac{1}{3}$ が未掘であるため平面プランは明らかでないが、隅円方形乃至長方形であろう。規模は南北軸の外辺7.80m、内辺6.25m、溝の幅は狭い所で65cm、広い所で1.15m、深さは最深部で25cmを測る。溝の断面は逆台形を呈する。

出土遺物は皆無で時期も明らかでないが、弥生時代後期に属すると考えられる。

(4) 土 壙

1号土壙(第153図)

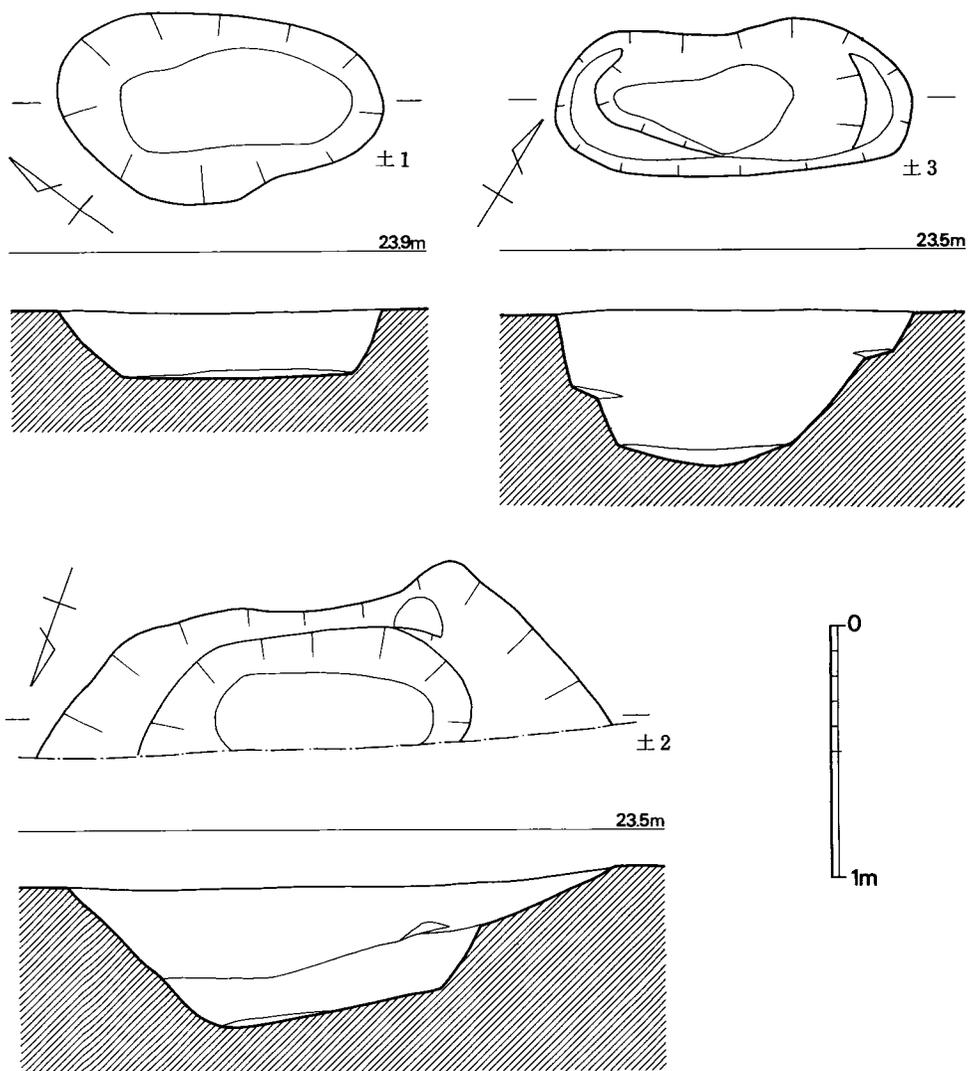
F1区の5号・6号住居の間で検出した平面プランが楕円形を呈する土壙である。規模は長軸1.28m、短軸は広い所で75cm、深さは25cmを測り、断面逆台形を呈する。床面は長軸90cm、短軸38cmである。主軸方位はN37°Wを示す。

出土遺物は土師器の鉢・高台付碗がある。出土土器から土壙の時期は平安時代前半頃である。

出土遺物

土 器(図版59, 第154図)

1はつくりの非常に粗い小鉢形土器で器壁も厚い。口縁部は内湾し、底部は不安定な平底に



第153図 1号・2号・3号土坑実測図(1/30)

近い。調整は内外面とも工具による磨き風の擦過で器面に光沢がある。胎土には砂粒を殆んど含まず緻密である。口径7.2cm。

2は土師器の高台付塚で直線的に開く口縁を有し、底部には高い高台を貼付ける。内面から外面にかけては丁寧な横ナデ、外面底部付近は回転篋削りの上からナデている。黄橙色の色調を有す。口径14.0cm、底径8.5cm、器高5.6cmを測る。内外面とも一部煤が付着する。

2号土壙(第153図)

F2区の北端で検出した土壙で $\frac{1}{2}$ は未調査である。現存では平面形態が楕円形を呈すると考えられる。西側壁は二段掘である。長軸の規模は2.27m、深さは最深部で55cmを測る。底面は東方向に緩い傾斜をなす。

出土遺物は無い。

3号土壙(第153図)

F2区の北側で検出した土壙である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長軸1.42m、短軸55cmから60cm、深さは63cmを測る。両小口壁部は狭いテラス状をなし二段掘りである。底面は舟底状を呈す。主軸方位はN58°Eを示す。

出土遺物は壺・甕・高坏・鉢・支脚等がある。出土土器から土壙の時期は弥生時代中期中葉頃である。

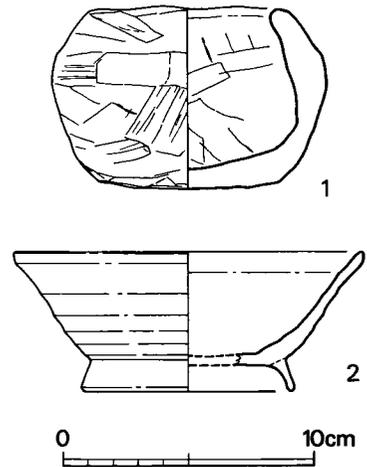
出土遺物

土器(図版59, 第155図)

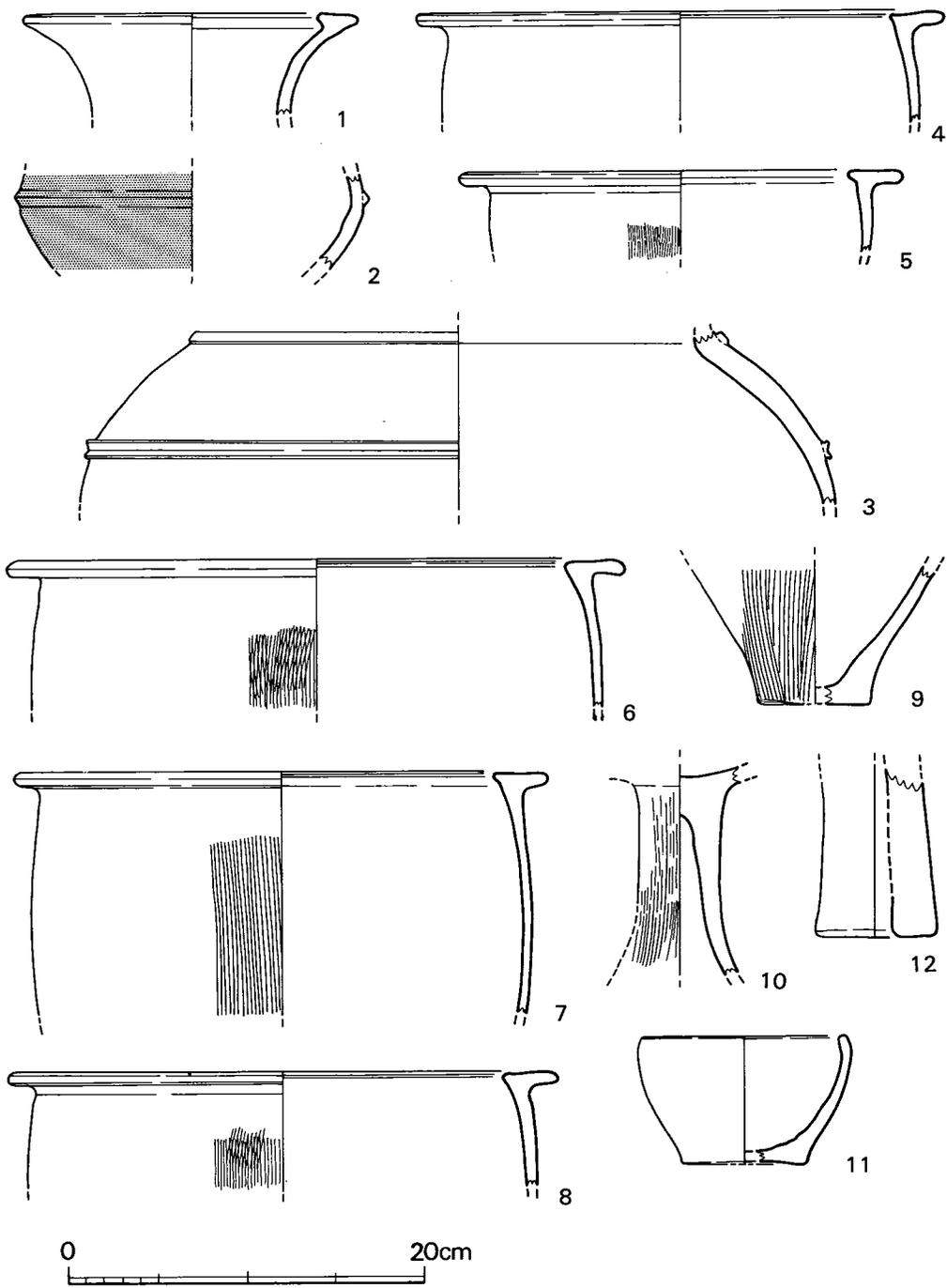
壺は1～3がある。1は鋤先口縁の壺で頸部は反り気味に細まる。調整は内外面ともナデで仕上げ、胎土は細砂粒をかなり含む。色調は黄褐色を呈する。復原口径18.9cm。2は胴部片で中央部に一条の三角凸帯を貼付ける。外面は黒塗りで仕上げ、内面はナデで仕上げる。3は大型壺の張りのある肩部片で断面台形状と「M」字状凸帯を貼付ける。調整は内外面ともナデで仕上げる。胎土には砂粒が少なく金雲を若干含む。黄褐色の色調を有す。外面には煤が付着する。

甕は4～9がある。総体的に発達した口縁をなし、逆「L」字状あるいは「T」字状の口縁を形づくる。調整は外面ハケ、内面ナデが基調である。胎土は総じて同様な傾向を示し、色調は黄褐色か橙褐色を呈する。5・8は二次加熱を受け煤が付着する。復原口径は4—29.9cm, 5—25cm, 6—35cm, 7—30.2cm, 8—31cmを測る。9はこれらに伴う細みの底部で調整は外面が粗いハケ、内面はナデ仕上げである。底部には孔があり、甑として使用したものか。褐色の色調をなし、外面には煤が付着する。

高坏は10がある。脚部片でスマートである。調整は外面がハケ、内面はナデで仕上げる。胎



第154図 1号土壙出土土器実測図
(1/3)



第 155 图 3号土坑出土土器实测图 (1/4)

土には砂粒をかなり含み、橙褐色の色調をなす。

11は鉢形土器で、口縁部は僅かに内湾する。底部は太目で上げ底を呈する。調整はナデを基調とする。淡い黄橙褐色を呈し、復原口径は11.6cm、底径は7.0cm、器高7.3cmを測る。

12は支脚片である。細みの形状をなし器壁は非常に厚手である。支脚内の空中部は断面が円形を呈することから、中に棒状の工具を通してつくと推測される。調整はナデで仕上げ、強い二次加熱を受けている。

4号土壙(図版42-2, 第122図)

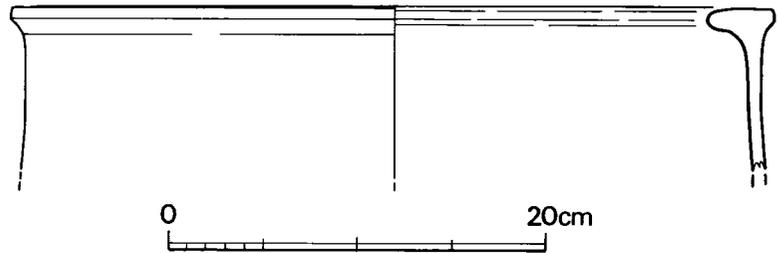
33号竪穴住居跡を切った状態で検出した土壙である。平面形状が方形を呈し、規模は1.95m×1.70m、深さは現存では30cmであるが、住居の壁高を加えると70cm前後となる。南西壁側には幅35cm、深さ25cmの細い溝が掘られているが、溝5(環濠)に切られ不明瞭である。床面の中央には焼土が円形状に堆積し、その上から大型の甕片が出土した。

出土土器から土壙の時期は弥生時代中期前葉である。

出土遺物

土器(第156図)

大型の甕の口縁片が出土している。通常甕棺に使用されるものである。口縁部は内側に突出し、逆「L」字状を呈する。口縁上面は平坦になり頸



第156図 4号土壙出土土器実測図(1/6)

部は僅かながら内傾する。焼成は良好で、胎土には2mm～9mmの砂粒を多く含む。にぶい橙色をなす。復原口径61.0cmを測る。

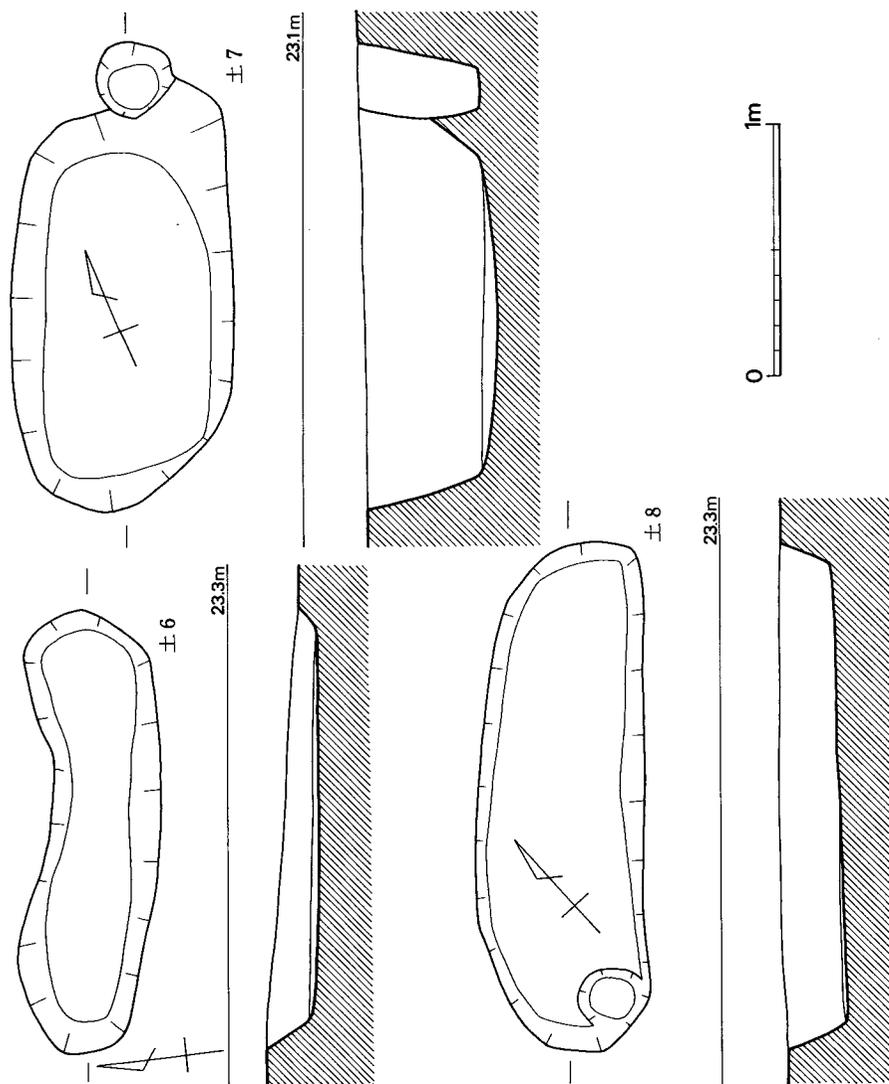
5号土壙(第47, 172図)

溝5(環濠)に切られた円形状の土壙であるが、重複が著しく不明な点が多い。土層断面で見ると黄褐色ロームブロック混りの黒褐色系の土で埋め戻されていることが判る。南側壁の一

部はオーバーハング状をなし、袋状竖穴（貯蔵穴）ではないかと推測される。深さは75cmを測る。

出土遺物は皆無である。

6号土壙（第157図）



第157図 6号・7号・8号土壙実測図（1/30）

F 2 区の北東側の溝 5 に接するような状態で検出した土壌である。平面プランは不整形の長楕円形を呈する。規模は長軸1.75m, 短軸45cm前後, 深さは遺存状況の良好な所で17cmを測る。主軸方位は N83°W を示し, 略東西方向に主軸を持つ。

遺物は土器片が少量出土した。3号土壌と同一時期である。

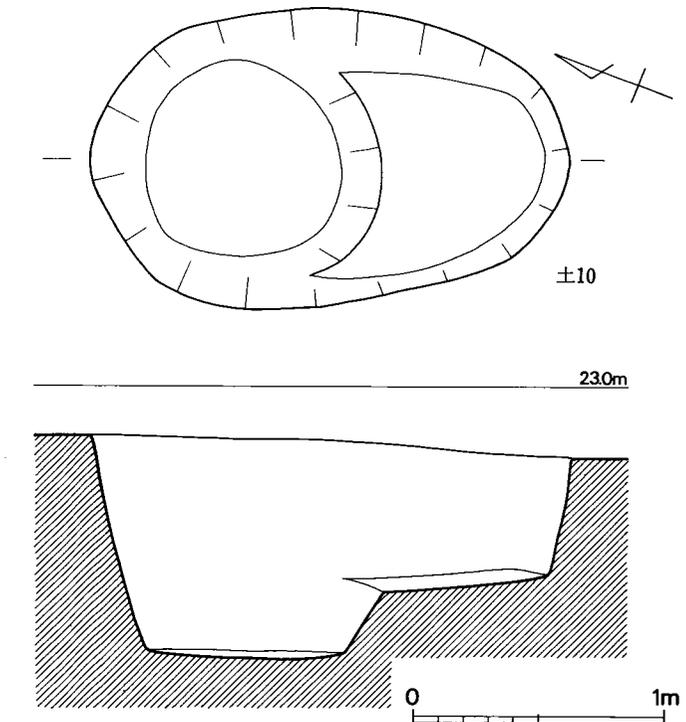
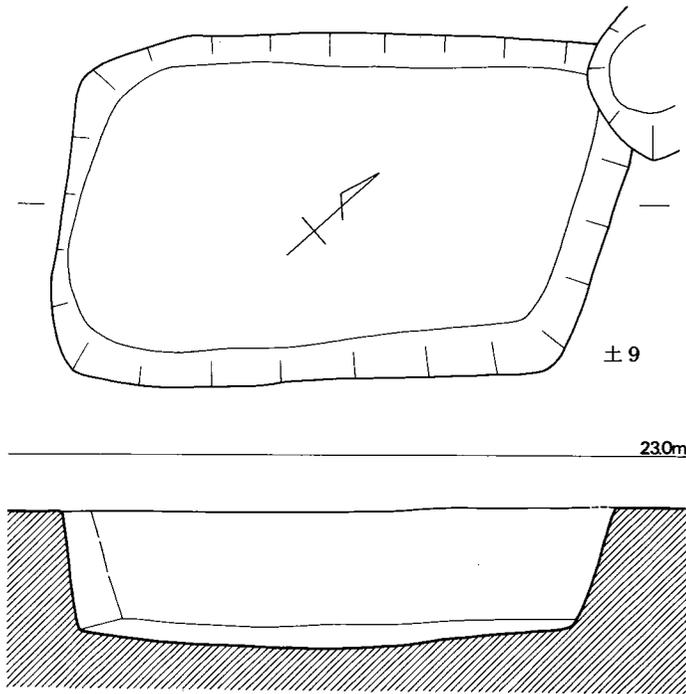
7号土壌(図版46-2, 第157図)

9号・13号土壌の間で検出した楕円形に近い形状の土壌である。規模は長軸1.60m, 短軸88cm, 深さ53cmを測り, 底面長軸1.25m, 短軸65cmである。底面は舟底状を呈する。主軸方位は N23°E を示す。

出土遺物は土器片が少量あるが, 図示不可能である。時期は3号土壌と同時期であろう。

8号土壌(第157図)

7号土壌の北側で検出した楕円形の土壌である。北



第 158 図 9号・10号土壌実測図(1/30)

壁は僅かに弧を描き不整形をなす。長軸2.00m、短軸68cm、深さは25cmを測り、底面は平坦である。

出土遺物は皆無で時期決定は不可能であるが、周辺の土壌と同一か近い時期が与えられよう。

9号土壌 (図版47-1, 第158図)

溝5の東側に接する状態で検出した長方形プランを有す土壌である。規模は長軸2.20m、短軸1.38m、深さ55cmを測る。断面は逆台形を呈する。底面の長軸は1.95m、短軸1.10mである。主軸方位はN42°Eを示す。

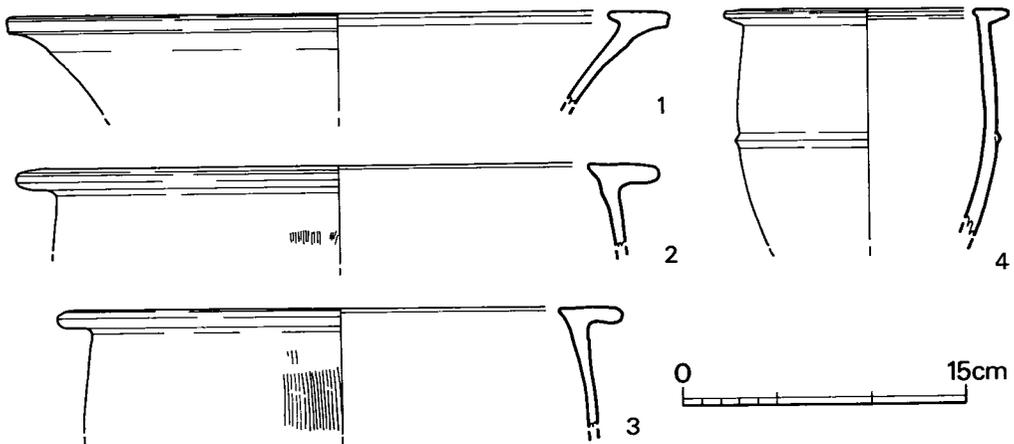
出土遺物は壺・甕の他、土製投弾1、炭化した櫛の実がある。出土土器から土壌の時期は弥生時代中期前葉から中葉に近い時期である。

出土遺物

土器 (図版59, 第159図)

壺は1の鋤先口縁がある。胎土には細砂粒をかなり含み、金雲母も若干混在する。黄褐色の色調をなす。復原口径34.4cm。

甕は2~4がある。2は発達した「T」字状の口縁部を有す。外面にハケが僅かに残る以外はナデで仕上げている。胎土は細砂粒を若干含むが緻密である。黄褐色の色調をなす。口縁部と外面には煤が付着する。復原口径34cm。3は逆「L」字状の口縁を持ち、頸部は僅か乍ら内傾する。細砂粒をかなり含み、橙色を呈す。外面にはくすんだ化粧土を塗布している。復原口径30



第159図 9号土壌出土土器実測図(1/4)

cm。4は小型のスマートな甕で逆「L」字状の短い口縁を有す。細みの胴部には断面三角形の凸帯を廻らす。総じて器壁は厚い。調整は内外面に強い二次加熱を受け器壁がもろく不明瞭。内面は横方向に磨きをかけている。焼成もあまく、熱変してくすんだ灰褐色を呈す。復原口径15.1cmを測る。

土製品(図版59, 第160図)

ラクビー球状の土製投弾がある。表面は欠損あるいは剥落が著しい。胎土は砂粒が少なく密であるが、焼成があまく全体に黒色の色調を有す。長さ5.0cm, 最大径2.6cm, 現存での重さは23gを量る。



第160図
9号土壌出土土製品
実測図(1/2)

10号土壌(図版47-2, 第158図)

F2区11号・13号土壌の間で検出した楕円形状の土壌である。南側ではかなり広いテラスをなし、底面は円形を呈す。規模は上面の長軸1.90m, 短軸1.17m, テラス状遺構までの深さ55cm, 最深部は87cmを測る。主軸方位はN20°Wを示す。

出土遺物は壺・甕・高坏等がある。出土土器は若干時期差があり、土壌の時期は弥生時代中期前葉～中葉頃である。

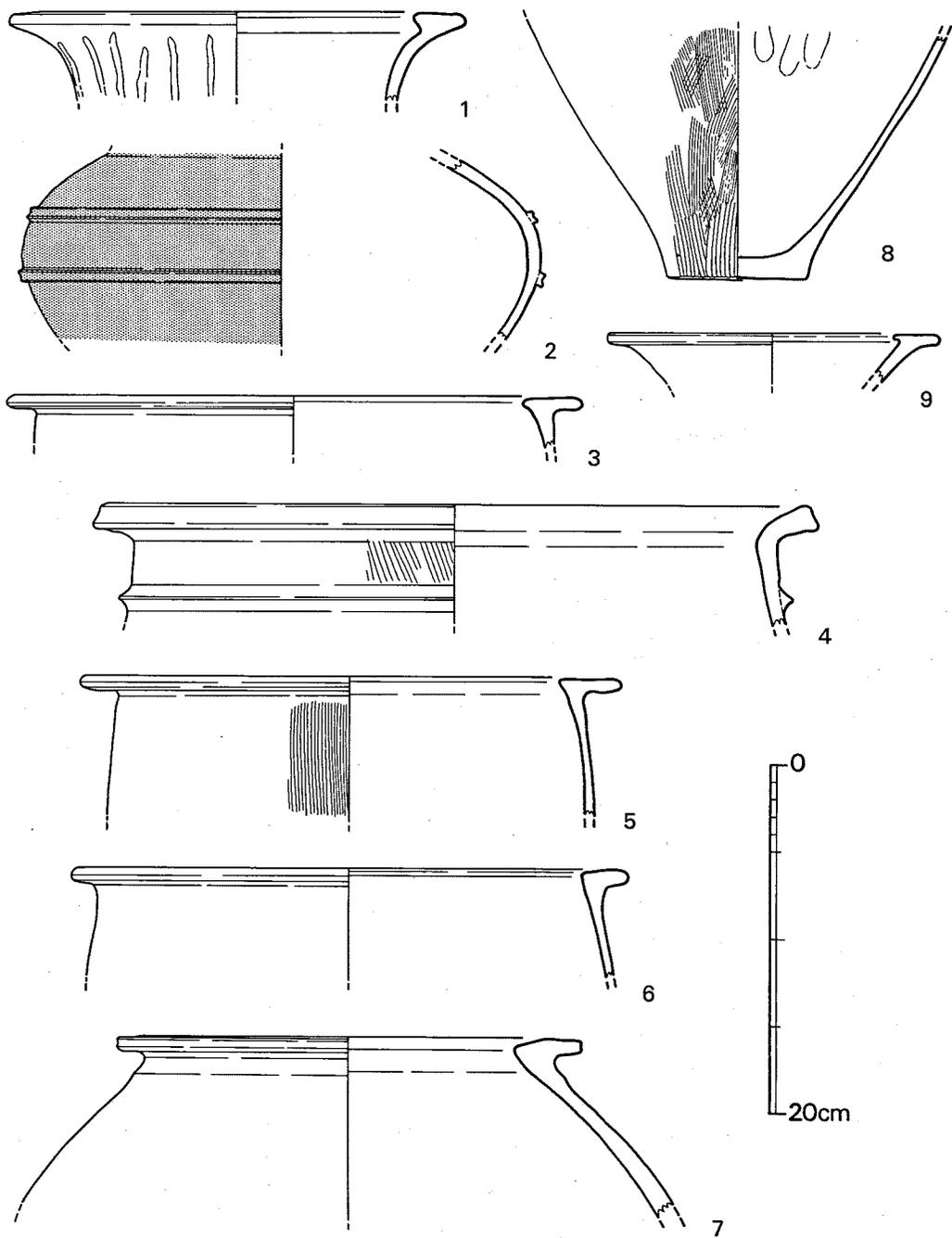
出土遺物

土器(図版59, 第161図)

壺は1・2がある。1は未発達な鋤先口縁をなし、外面には篋による暗文を粗く配する。細砂粒をかなり含み、黄褐色を呈する。復原口径26cmを測る。2は扁平な胴部片で復原実測である。肩から胴部にかけては「M」字状の凸帯を2条廻らす。調整は外面が丁寧なナデの上から黒色顔料を塗布する。内面もナデで仕上げる。つくりの良質な土器である。

甕は3～8がある。口縁部でみる限り逆「L」字状に発達した口縁を持つ3・5と大きく外反させ、口唇部を肥厚させる4, 未発達な逆「L」字状口縁を有す6, 口縁平坦部を内傾させ、頸部も内傾させ細まる7とがある。4は頸部に三角凸帯を廻らす。6は口縁形状からやや古相を示す。調整は総じて口縁部周辺はナデ、外面はハケ、内面はナデを基調とするが、6は風化し不明瞭。7は外面も丁寧なナデで仕上げている。復原口径は3—33cm, 4—40.5cm, 5—31cm, 6—32cm, 7—26.5cmを測る。8は胴下半部で、調整は前記の甕と同様である。外面には煤の付着が著しい。

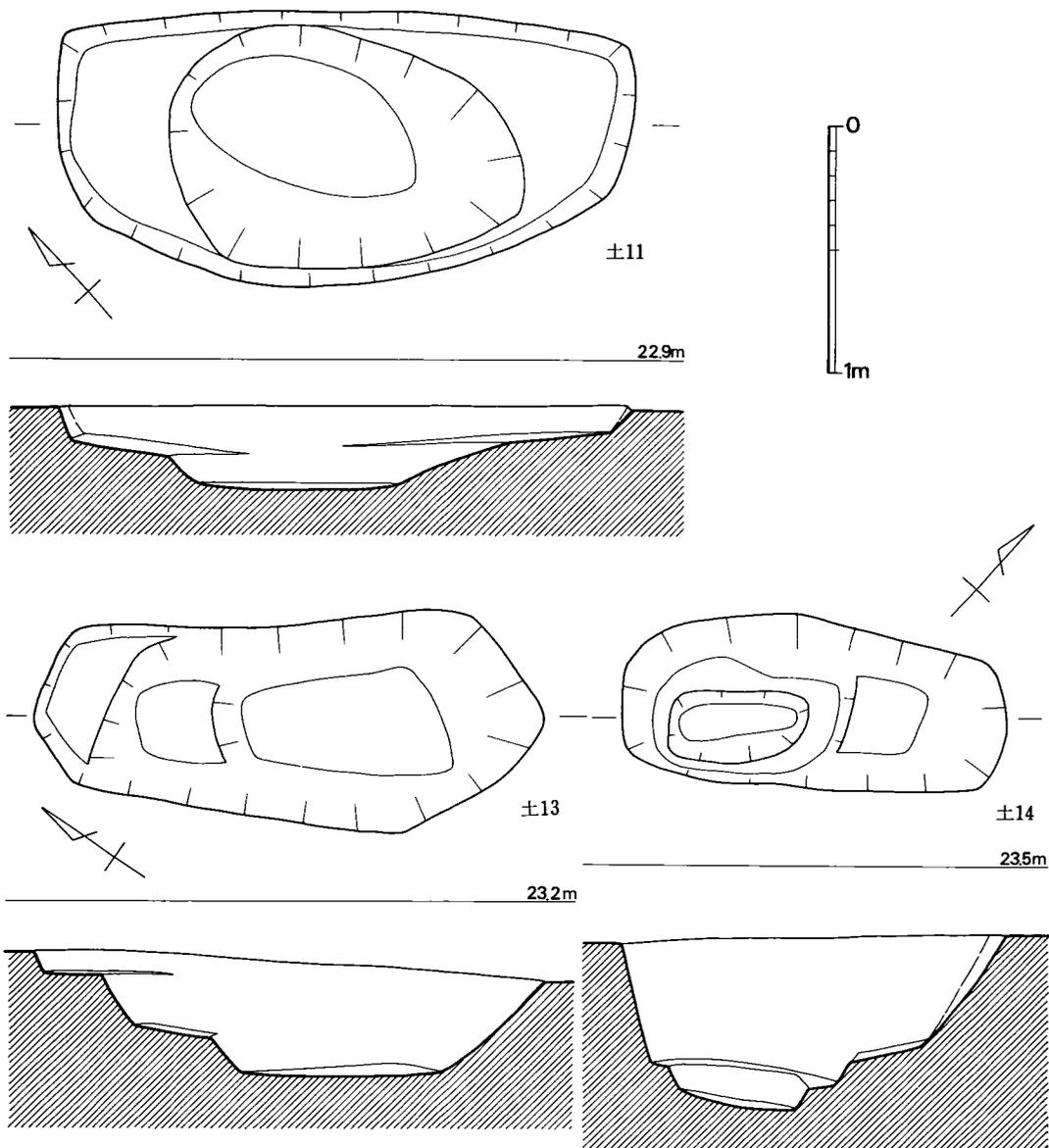
9は高坏の坏部片である。鋤先口縁を有し、上面は平坦をなす。調整は風化し不明。淡橙色の色調をなす。



第 161 图 10号土坑出土土器实测图 (1/4)

11号土壙 (図版48-1, 第162図)

12号土壙に主軸を直交する形で掘られた土壙である。南壁は弧状をなし、不整長方形に近い形状を呈する。規模は長軸2.30m, 短軸1.10m, 深さはテラス部で15cmから20cm, 最深部で35cmを測り, 総体的に浅い。両小口部はテラスを設け, 二段掘を呈する。主軸方位はN47°Wを示す。



第 162 図 11号・13号・14号土壙実測図 (1/30)

出土遺物は壺・甕があるが、壺は混入と考えられる。出土土器から土壙の時期は弥生時代中期前葉頃である。

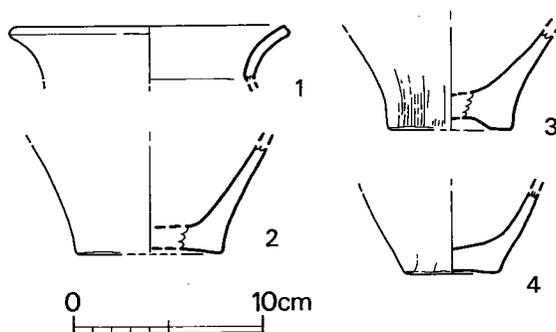
出土遺物

土 器(第163図)

1は壺であるが形状が他の土器と同
一時期が与えられないことから混入の
可能性が高い。横ナデで仕上げている。

2～4は甕形土器の底部片である。
2は上げ底を呈し、調整は磨耗して不
明瞭である。内外面とも強い二次加熱
を受けている。復原底径7.7cm。3は
細みの上げ底の底部片である。調整は
外面荒いハケ、内面はナデ仕上げであ

る。胎土には砂粒が多く、外面は強い二次加熱を受けくすんでいる。復原底径6.6cmを測る。4
は僅かに上げ底を呈し、調整はナデで仕上げる。外面に二次加熱を受けくすんだ桃色を呈する。
復原口径5.0cm。

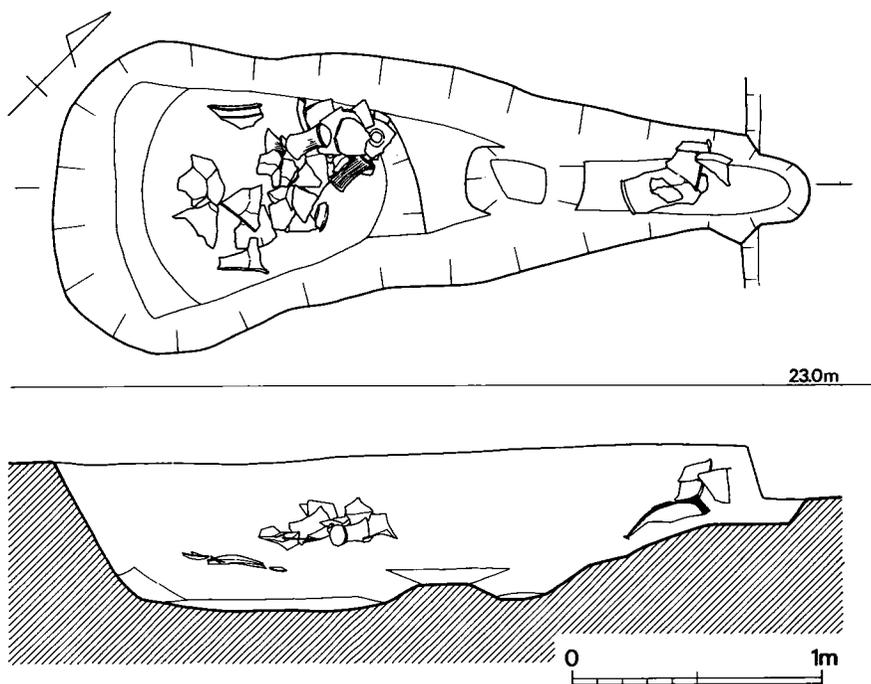


第 163 図 11号土壙出土土器実測図(1/4)

12号土壙(図版48-2, 第164図)

2号周溝状遺構と一部重複した土壙であるが、2号周溝に切られている。平面形態は不整長楕
円形を呈する。断面で見ると土壙の東から西方向に階段状に掘り、西側を最も深く掘削してい
る。規模は長軸3.00m、短軸は狭い所で40cm前後、広い個所で1.20m、最深部で60cmを測る。
遺物の出土状況を見ると2群に別れており、いずれも底面からは10cmから20cm前後上層で出土
している。このことは土壙を掘削して一定程度の期間が経過した後に投棄したことを物語るも
ので、出土した器種も日常什器が殆んどで著しく煤が付着している器種も多い。その中に1点
のみ丹塗りの壺形土器が混在していることから、土壙の用途は集落の祭祀の様相を窺わせる。
土器が投棄された状況は北方向から投げ込んだ様子が明瞭である。土壙の主軸方位はN45°Eを
示す。

出土遺物は多く、壺・甕・器台・傘蓋形土器の他、軽石1がある。出土土器から土壙の時期
は弥生時代中期前葉に比定できる。



第 164 図 12号土坑実測図 (1/30)

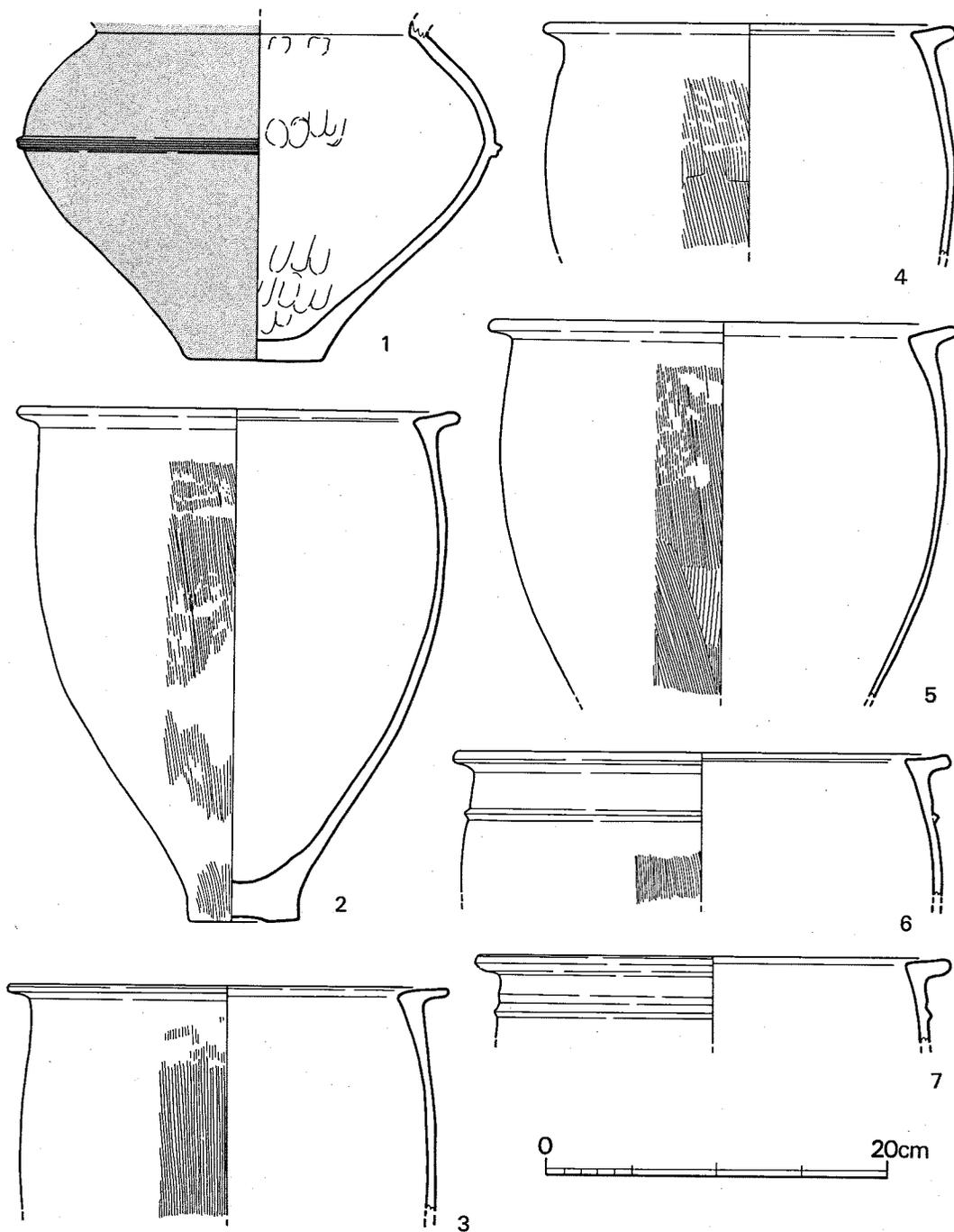
出土遺物

土 器 (図版59・60・61, 第165, 166図)

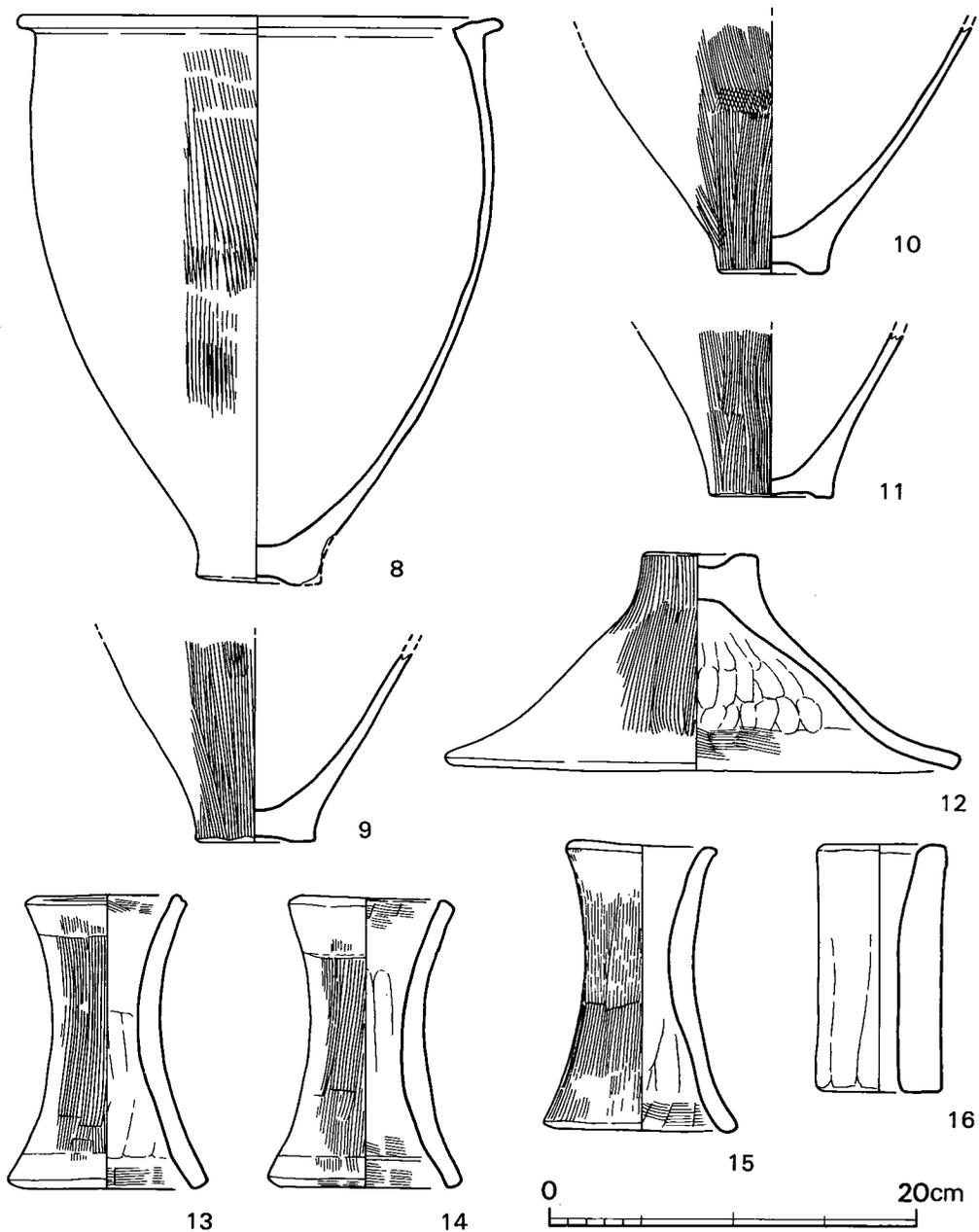
1は壺で鋤先口縁を有すと考えられるが、頸部上半を欠損する。肩から胴にかけての張りは著しく、胴部下半は細まり、径の小さな底部へ続く。胴中央部には1条の凸帯を廻らす。調整は外面が丹塗り磨研、内面はナデで仕上げ部分的に指圧痕を残す。胎土・焼成とも丹塗り特有の質の良好な土器である。

甕は2~11があり圧倒的に多い。2と8は完形である。総じて形状は同タイプで、口縁部は全て未発達逆「L」字状を呈し、平坦部は内傾する。頸部も内傾し、胴部上半が僅かに張る。胴下半は細まり上げ底の細い不安定な底部を有す。この内の6・7は頸部に1条の凸帯を廻らす。調整は口縁部周辺が横ナデ、外面はハケ、内面はナデを基調とする。全てが二次加熱を受け、煤が付着する。8の胴下半は特に強い加熱を受けている。2の口径26.2cm, 底径6.5cm, 器高33cm, 3の口径26cm, 4は24.2cm, 5は27.3cm, 6は29.1cm, 7は23.1cm, 8の口径26.5cm, 底径6.7cm, 器高31.0cmを測る。

12は傘蓋形土器で天井部は甕の底部と同様の形状を示す。胴部は僅かに丸みを持ち裾部は緩



第 165 図 12号土坑出土土器実測図その1 (1/4)



第 166 図 12号土壙出土土器実測図その2 (1/4)

い曲線を描く。調整は裾部周辺が横ナデ、外面はやや荒いハケ、内面は指ナデと一部ハケを施す。外面に弱い二次加熱を受け、内面は煤が付着する。摘み部の径6.3cm、裾部径28.4cm、器高11.9cmを測る。黄橙色の色調をなす。

器台は13～15の3点がある。全て同タイプの器台で、調整は両端部がハケののち横ナデ、外面が荒いハケ、内面はハケと指ナデで仕上げている。3個とも口縁部周辺と裾部周辺は二次加熱を受けている。色調は橙褐色系統を呈する。13の口径9.0cm、裾部径10.6cm、器高15.9cm、14は口径8.7cm、裾部径10.8cm、器高16.1cm、15の口径8.3cm、裾部径10.6cm、器高15.5cmを測り、3個とも略同一の計測値であることから、これらが3個一対として使用されたことを推測させる。

16は支脚形土器で上半は孔の径を広くしている。非常に器壁は厚いが、支脚としてはつくりが良好である。調整はナデで仕上げ、強い二次加熱を受けている。口径は7.0cm、裾部径6.7cm、器高13.5cmを測る。

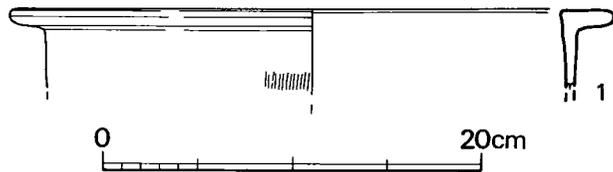
13号土壌(第162図)

F2区の北西側で検出した不整楕円形を呈する土壌である。北西側は二段のテラスを設け階段状をなす。規模は長軸2.05m、短軸80cm、最深部は45cmを測る。主軸方位はN34°Wを示す。出土遺物は甕形土器が1点あり、出土土器から土壌の時期は弥生時代中期前葉である。

出土遺物

土器(第167図)

甕形土器が1点ある。逆「L」字状の口縁部を有す。調整は口縁周辺と内面がナデ、外面には一部ハケが残る。胎土は細砂粒をかなり含み、橙褐色を呈する。復原口径32cmを測る。



第167図 13号土壌出土土器実測図(1/4)

14号土壌(図版44-2, 第162図)

1号甕棺墓の東側で検出した隅円長方形に近い形状をなす土壌である。土壌の東側は階段状のテラスを設けている。規模は長軸1.55m、短軸70cm、最深部で70cmを測る。底面は小さく長

軸48cm，短軸15cmである。主軸方位はN47°Eを示す。

出土遺物は甕・支脚の他，土製紡錘車があるが，紡錘車は紛失してしまった。出土土器から土壇の時期は弥生時代中期前葉である。

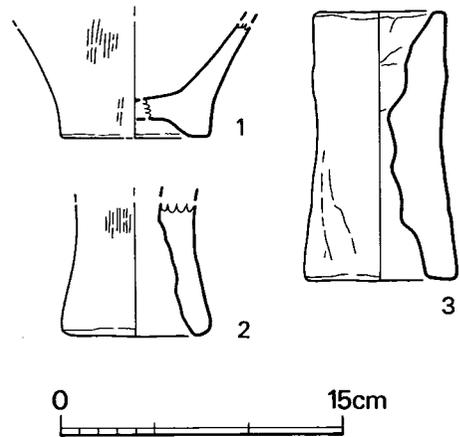
出土遺物

土器(第168図)

1は甕形土器の底部片である。細みで上げ底をなす。調整は外面がハケ，内面がナデで仕上げるが，外面は磨耗している。胎土は細砂粒を僅かに含み，橙色を呈する。復原底径8.0cm。

2・3は支脚形土器である。両者とも器壁が厚くつくりが粗い。調整は前者が部分的にハケを残すが，両方ともナデが主体である。

2・3とも二次加熱を受ける。2の復原底径8.0cm，3は口径7.0cm，底径8.0cm，高さ14.2cmを測る。色調は2が黄橙色，3が灰色がかった淡黄色を呈する。



第168図 14号土壇出土土器実測図(1/4)

15号土壇(図版44-2，第47図)

38号住居を切り，39号住居に切られた平面形状が円形を呈する土壇である。規模は径60cm，深さ70cmを測る。

出土遺物は無いが，下層からは炭化物と焼土が多量に堆積しており，しかも焼痕が認められないことからそれらを投棄したと考えられる。時期は弥生時代後期の38号住居を切っていることからそれ以降であることが判る。

16号土壇(第47図)

39号住居の床面下から検出した方形に近い形状を示す土壇である。住居により著しく削平を受け遺存状態は良くない。規模は90cm×75cm，現存での深さは30cmを測る。

遺物は弥生時代中期前葉の甕形土器(図示不可能)の小片が若干ではあるが出土している。

17号土壙 (第47図)

2号掘立柱建物の西隣で検出した土壙であるが $\frac{1}{2}$ が未掘である。現存での南北径2.00m、深さ45cmを測る。覆土は黄褐色土ブロックの混在した黒褐色系の土で人為的に埋められており、東側に小児用甕棺墓が存在することから成人用甕棺墓とも考えられる。中からの出土が皆無であることもその推測を補強することにもなる。

(5) 溝状遺構

1号溝状遺構 (第47図)

F1区を南北に走る溝4から派生する支流で、略東西方向に僅かに弧を描きながら延びる。検出した溝の中央部で5号住居を切っている。調査した総延長は9.30m、幅は西側で80cm、東側で60cmを測り東方向に延るに従って細くなる。溝の深さは溝4と直結する付近は22.5cm、中央付近は24.7cm、東側は26.0cmで底面が東方向に緩やかながら傾斜している。断面形状は逆台形を呈する。

溝内からの遺物は非常に少なく、漆を塗布した土師器坏片（図示不可能）と坏蓋片の他、石剣の未製品（混入）が出土しており、3号・4号竪穴住居と同一時期と考えられる。この溝は水路として機能していたと考えてよからう。

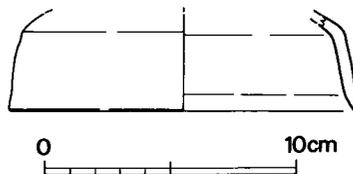
出土遺物

土器 (第169図)

土師質の坏蓋が出土している。3号竪穴住居の竈内から出土した坏蓋と同タイプのもので、内面から外面は横ナデ、天井部は篋削りののちナデで仕上げている。復原口径14cmを測る。この他土師質の坏片（小片）が出土しており外面には漆を塗布している。

石器 (図版61, 第170図)

砂岩質粘板岩の石剣の未製品が出土しているが、混入品である。製作時に破損したものであろう。刃部は研ぎ出していない。表面は研磨し平滑で鏝が明瞭である。幅は4.0cm、厚さ1.5cmを測る。

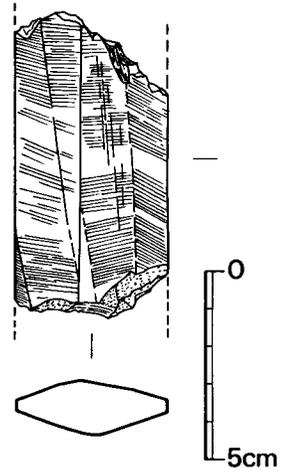


第169図 1号溝出土土器
実測図 (1/3)

2号溝状遺構(第47図)

F1区の東側で検出した細い溝で調査区内で完結している。確認した溝の延長は2.70m、幅は50cmから60cm、最深部で34cmを測る。溝の底面はテラス状に掘られ、50cmから60cm間隔でピットを掘っている。溝の用途は不明である。

出土遺物は皆無で掘削時期も明らかでない。



[第170図] 1号溝出土石器実測図(1/2)

3号溝状遺構(図版33-2, 第47図)

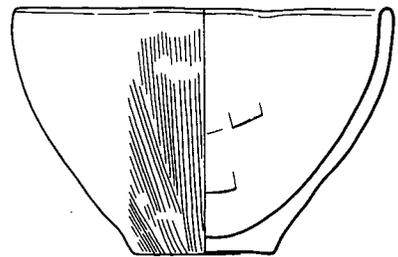
F1区の北西隅で検出した溝状遺構で4号溝に切られている。調査区内で確認した長さは4.45mである。幅は70cmから85cm、底面までの深さは西側が44cm、東側が40cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

遺物は底面近くから鉢形土器が1点出土している。出土土器から溝の時期は弥生時代後期前葉頃であろう。

出土遺物

土器(図版61, 第171図)

鉢形土器が1点出土した。略完形である。調整は外面が荒いハケ、内面はハケののちナデで仕上げる。淡黄橙色を呈する。口径20.1cm、底径7.4cm、器高13.0cmを測る。



4号溝状遺構(図版33-2, 第47図)

1号溝の本流で略南北に走る溝状遺構である。約1/2を完掘し他は未掘である。10号・11号・12号住居を切っている。確認した総延長は17.0mである。溝

の幅は狭い所で75cm、広い個所で1.00m、深さは90cmを測り、底面は殆んど比高差がない。

出土遺物は須恵器の甕片(図示していない)が若干出土しており、溝の時期は1号溝と同一時期で古墳時代後期である。

[第171図] 3号溝出土土器実測図(1/4)

5号溝状遺構(図版27-2, 第47, 172図)

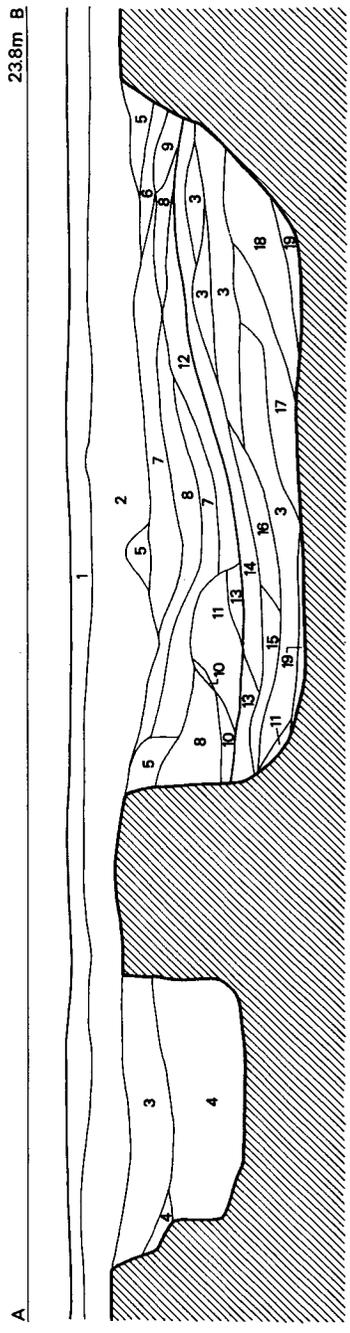
昭和57年度の圃場整備に係る事前の調査で確認された環濠の続きで濠の西側に相当する。隣接する東側調査区では濠は弧を描いており、F2区でもその片鱗が窺えるが、その中央部では直線的に掘削している。さらに、北側では「く」字状に大きく屈折し、東方向に直線的に延びている。本調査区で確認した環濠の総延長は44.0mである。濠の幅は広い所で3.00m、狭い場所でも2.30mを測り、我々が飛び越えるのに躊躇する幅の広さである。底面の幅は1.50mから1.70mで、深さは南側で95cm、西側の直線的に掘削している個所で76cm前後、北側の屈折部で80cm、北側の調査区の端で1.00mを測る。濠の断面は逆台形を呈する。

濠の堆積状況を2個所の土層断面図で観察すると、先ず南側(土層ポイントA-B)では19層の最下層で砂が薄く堆積しており、僅かながら水流の痕跡を留めている。18層・17層とその上に堆積した3層は、黄褐色系の粘土と黒褐色と黄色粘土塊の混在した土が環濠の外側から流れ込んだように堆積している。さらに、16層から14層は泥炭層に近い粘土と砂層が緩い傾斜で堆積している。この層で2度目の水流あるいは水溜りの痕跡が認められる。14層から上層は黒褐色系に黄色粘土が混在した土が累積しており、北側の5号土壙も同様な状態を示していた。

次に北側の土層断面(土層ポイントC-D)では最下層の16層・15層・10層は茶褐色系の粘土層が堆積し、南側の最下土層と相違をみせる。このことから濠は部分的に水溜まりは認められるものの基本的には空濠であることが判る。3層・4層以下の堆積状況を観ると濠の外側から砂混りの粘土が流れ込んだ様子が明瞭に観察でき、総体的に南側の土層断面と同様の状況を示している。3層から4層以下になると土器の出土は非常に少なく、土器の出土は濠の内側から堆積した土層中で認められた。9層で砂の堆積を確認したことは水溜りの証拠で、その上層は自然堆積を示している。

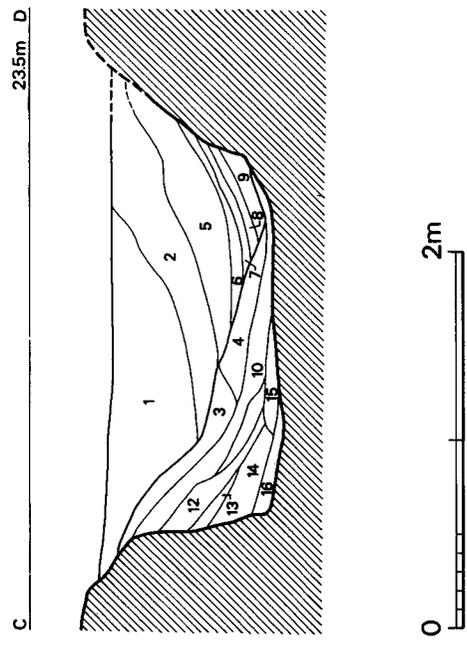
以上2個所の土層断面の観察から、濠の外側に砂混りの黄褐色・茶褐色の粘質土で土塁を構築していたことが判るとともに、土塁が崩壊し濠の機能を失った後、一定期間放置され水溜まりの状態になっていたと考えられる。その後、南側では人為的に埋め戻され、北側では自然に堆積した状況が観察できる。この段階で土器が多量に投棄されており、内側からの自然堆積で2層までの埋まり方がどの程度の期間を要したか定かでないが、環濠の掘削時期は多く出土した弥生時代後期中葉から後葉の土器よりも若干時間差を与えなくてはならないと考える。

濠内の遺物は土器が圧倒的に多く、しかも多量に出土している。器種は壺・甕・高坏・筒形器台・器台・鉢・支脚の他、鉄斧1があるが、時期差のある土器が出土しており、その中でも古い時期(弥生時代後期中葉頃)に比定される土器群が濠の機能していた時期に近いと考えられる。



- 1 表土
- 2 淡黒褐色
- 3 淡黒褐色ロームブロック若干
- 4 暗茶褐色ロームブロック多く混入 (人為的埋め戻し)
- 5 2にローム粒混入
- 6 淡黒褐色と黄色粘土混入
- 7 6に大きい黄色粘土ブロック混入
- 8 淡黒褐色に黄色粘土ブロック若干
- 9 黄色粘土
- 10 灰黄褐色粘土
- 11 淡黄褐色粘土
- 12 7と同じ
- 13 暗灰黄褐色砂質
- 14 暗灰褐色の砂質
- 15 暗灰褐色粘土 (泥炭層に近い)
- 16 暗灰褐色粘質土
- 17 暗黄褐色粘土
- 18 明黄褐色粘土
- 19 灰褐色砂層

- 1 暗黒茶褐色粘質土 (土器混入)
- 2 暗茶褐色砂質土 (土器混入)
- 3 淡黒灰褐色砂質土
- 4 茶褐色粘質土
- 5 暗茶褐色と淡黒灰色交り (土器混入)
- 6 暗黒灰褐色粘質土 (土器混入)
- 7 暗黒褐色灰白色粘質土 (砂交り)
- 8 黒灰褐色と茶褐色粘質土
- 9 暗黒灰褐色砂質土
- 10 暗茶褐色粘質土
- 11 黒灰褐色と暗茶褐色交り粘質土
- 12 暗黒灰褐色粘質土 (砂交り)
- 13 暗黒灰褐色と暗茶褐色粘質土
- 14 淡茶褐色粘質土
- 15 淡茶褐色と乳白褐色交り粘質土
- 16 淡黒褐色と暗茶褐色交り粘質土



第 172 図 5号溝土層断面図 (1/40)

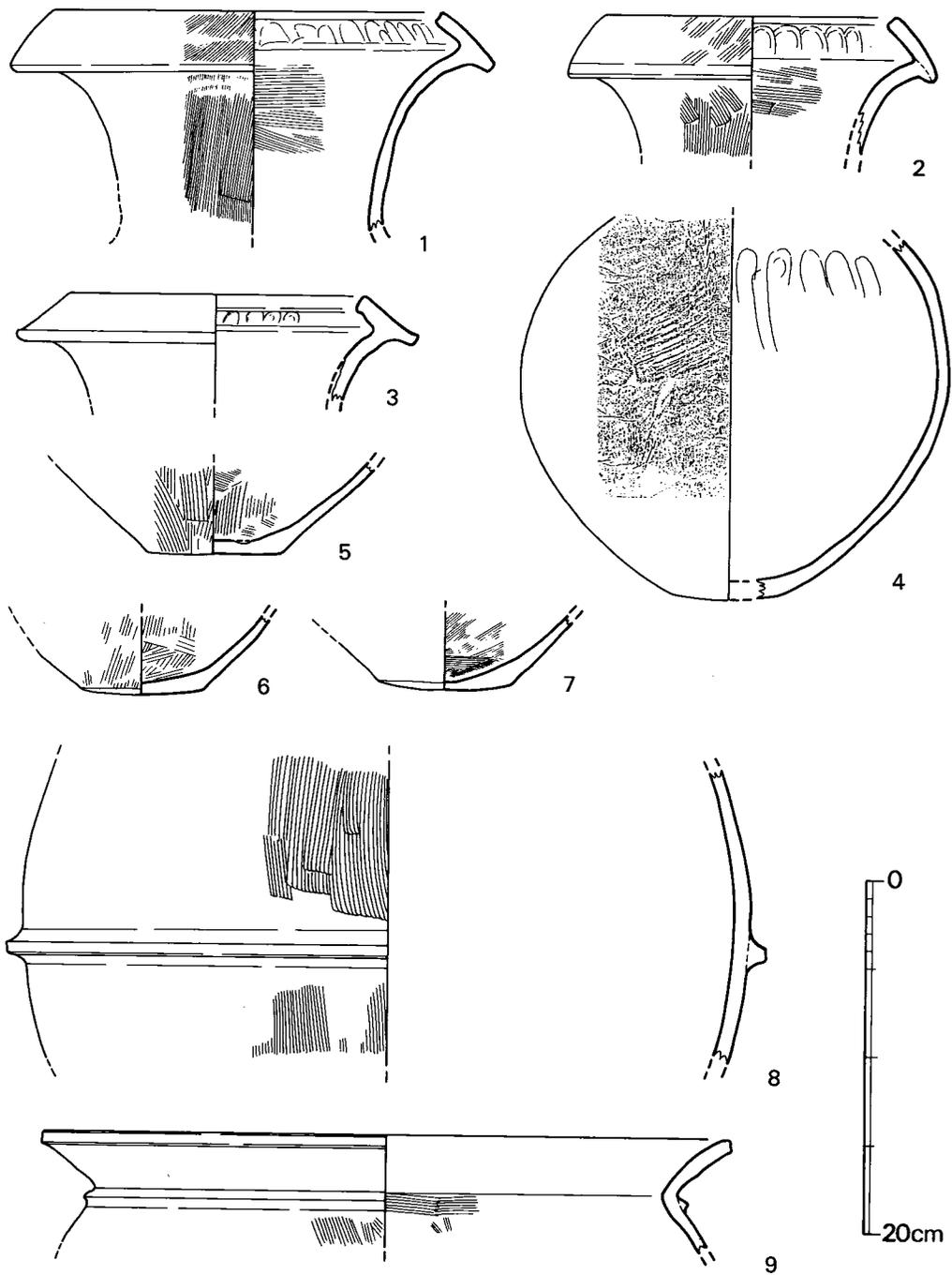
出土遺物

土器(図版61・62・63, 第173~177図)

壺は1~8がある。1~3は袋状口縁壺で1・2の口縁は内湾傾向を示す。調整は1・2の外表面と内面一部がハケ、頸部内面下はハケをナデ消す。1~3の口縁内面と外面接合部には指頭圧痕が残る。4は他の壺に対して新しい形状を呈し、体部は球形に近く底部は小さな平底を残す。外面には右上りの荒い叩きを施し、下半はナデ消す。内面はナデで仕上げ、上部は指ナデが顕著に残る。古墳時代初頭のものである。5~7は底部片で5は平底、6・7はレンズ状を呈する。8は胴部片で下半部に台形状の凸帯を1条廻らす。外面はハケ、内面はナデ仕上げである。1の胎土は砂粒が多く淡黄橙色を呈す。口径27.3cm。2の胎土は砂粒を多く含む。明茶褐色を呈し、口径16.5cm。3は細砂粒を多量に含む。くすんだ黄橙色で口径16.8cm。4は褐色を呈し、外面に煤が付着する。胴部最大径24.3cm。5の底径7.60cm, 6は7.0cm, 7は7.5cmを測る。

甕は9~24があり、他にも多量に出土している。9・10は「く」字状に外反する口縁部に口唇部を肥厚させる。頸部には1条の三角凸帯を貼付けている。10の肩部は張り長胴を呈する。底部は平底である。調整は内外面ともハケで仕上げるが外面は摩耗している。両者とも細砂粒を多量に含み、9が茶褐色、10はうすい橙褐色である。復原口径は9が38.8cm, 10は30cm, 底径9.0cm, 器高47.8cmを測る。11~13, 15・16も「く」字状口縁を有すが、13・16は頸部内面の稜は不明瞭である。15は短く外反度は鈍い。総じて肩部の張りは鈍く、長胴を呈すると考えられる。11の底部は僅かにレンズ状を呈する。調整は内外面ともハケで仕上げ、12の外面は叩きが残る、16を除いた土器の外面には煤が付着する。11の口径23.0cm, 底径7.8cm, 復原器高35.8cmを測る。他の口径は12—27.0cm, 13—26.9cm, 15—29.0cm, 16—31.0cmを測る。14・17~19・21・22・24は小振りの甕で17・21・24は特に小型である。全て「く」字状口縁を有する。18は口唇部を肥厚させ、21・24は口縁部が短かく、22は口唇部を跳ね上げている。調整は17の外面が右上りの荒い叩きを施す他は総じてハケとナデが基調である。復原口径は14—21.8cm, 17—15.0cm, 18—21.0cm, 19—18.9cm, 21—15.3cm, 22—19.9cm, 24—10.0cmを測り、24の器高は8.3cmを測る。20は僅かにレンズ状を呈する底部を有す。底部径8.0cm。外面に煤が付着する。23は脚台付甕の脚台部で調整は外面が板具による擦過、短い柱状部は叩き痕が僅かにみられ、他は横ナデを呈する。裾部径11.6cmを測る。中九州地方の甕である。

鉢は27・28がある。27は体部が丸みを有し、底部は若干レンズ状を呈する。内外ともハケで仕上げている。口径16.2cm, 器高8.0cmを測る。28は口縁が外方に屈折するタイプの鉢で体部は浅い。最終調整はナデであるが、内部にハケが残る。内外面に強い二次加熱を受けている。復原口径30.8cmを測る。



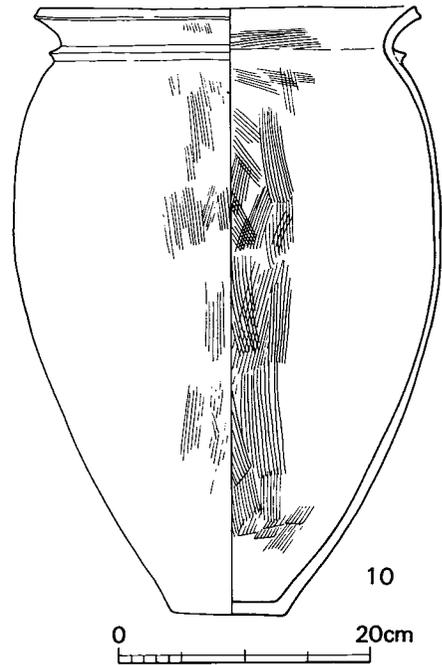
第 173 図 5号溝出土土器実測図その1 (1/4)

26・29～31は高坏で26・29は坏部である。前者は口縁が内湾し、後者は上方に僅かに屈折する。内外にハケが認められる。29の復原口径24.2cmを測る。30は短い脚部で裾部は緩い曲線を描く。裾部近くには浅い沈線が走るが一周しない。調整は外面がハケ、内面はナデで仕上げ、柱状部には絞り痕を残す。裾部径16.8cm。31は完形品の高坏で溝5の上層から出土した。坏の体部は屈折し、口縁部までが長く反り気味に外反する。脚部は短く、脚柱状部は充填され裾部は直線的に開く。開脚部には3個所に孔を穿つ。調整は脚部内面はハケのちナデ、他は篋磨きであるが坏部は摩耗して不明瞭である。口径20.4cm、裾部径12.7cm、高さ13.25cmを測る。

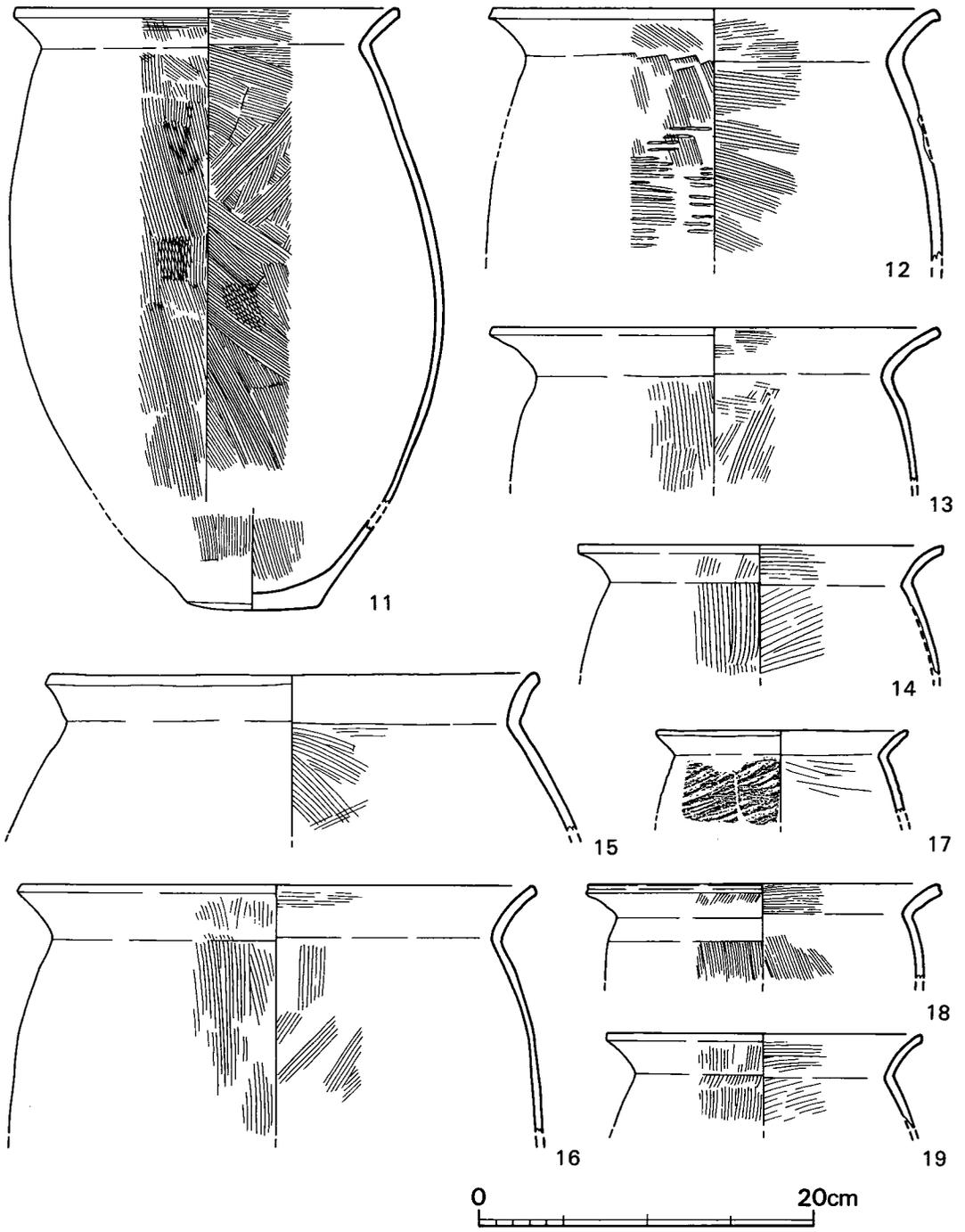
32～34は筒形器台の破片である。32は器台の鏝の部分で端部を肥厚させている。鏝の直下には4個所に長方形の透を穿っているが、破片のため不明瞭である。調整は内面が丁寧な横ナデ、外面が丹塗りの磨研であるが、鏝の上半部には不整いの篋による暗文を施している。鏝の径は18.3cmを測る。33・34は筒形器台の脚裾部である。両者とも裾端部を肥厚させるが、33が丸みを持ち34は角ばる。外面は丹塗り磨研で、内面は丁寧なナデで仕上げる。焼成・胎土とも丹塗り土器特有の良質なものである。33の裾部径39.7cm、34は37.7cmを測る。

35～41は器台形土器としたが、39・40は支脚として使用されたとも考えられる。35～37・41は略同一タイプで、口縁部は大きく外反し、最小径は上半部にある。その中において35・36の裾部は大きく開き35の端部は肥厚する。37・41の開脚度は鈍い。調整はハケと指ナデが基調で41のハケは他の3個体に比べて細いハケを使用している。38は細みの器台で両端部の外反度は鈍い。器壁も厚く、つくりも粗い。全体を指ナデで仕上げる。39・40は口縁部が内傾するタイプで、40は外面に左上りの叩きが若干残る。全てに二次加熱が認められる。35の口径13.3cm、裾部径17.2cm、器高17.8cm。36の口径13.0cm。37の口径13.3cm、裾部径15.1cm、器高16.5cm。38は口径9.0cm、裾部径12.1cm、器高16.5cmを測る。全て黄橙色から橙色の色調を有す。

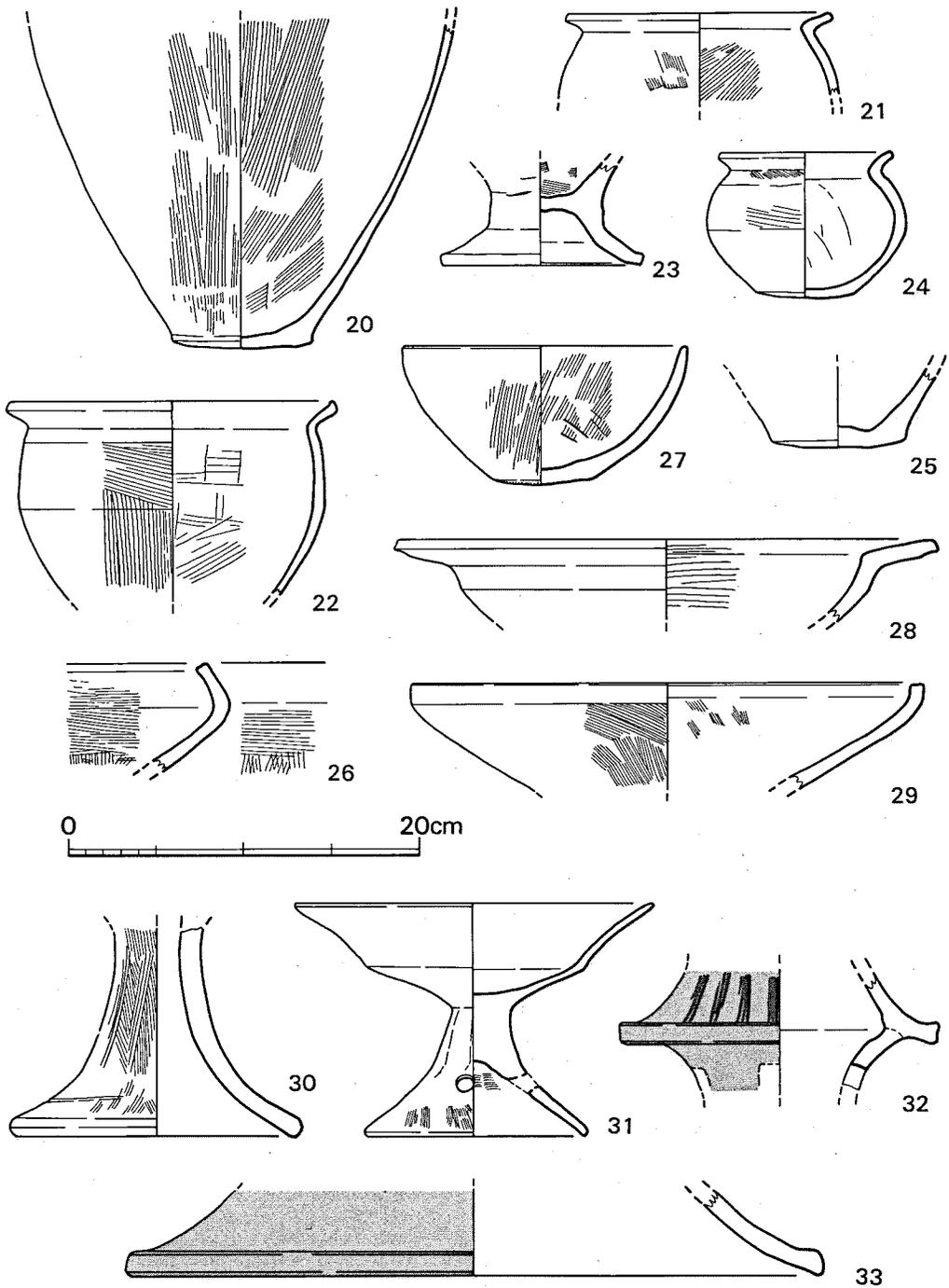
42は杓形器台で外面はナデ、内面は指ナデで仕上げる。上面には径2.0cmの孔を穿つ。裾部内外面と上端部に二次加熱を受けている。裾部径12.0cmを測る。



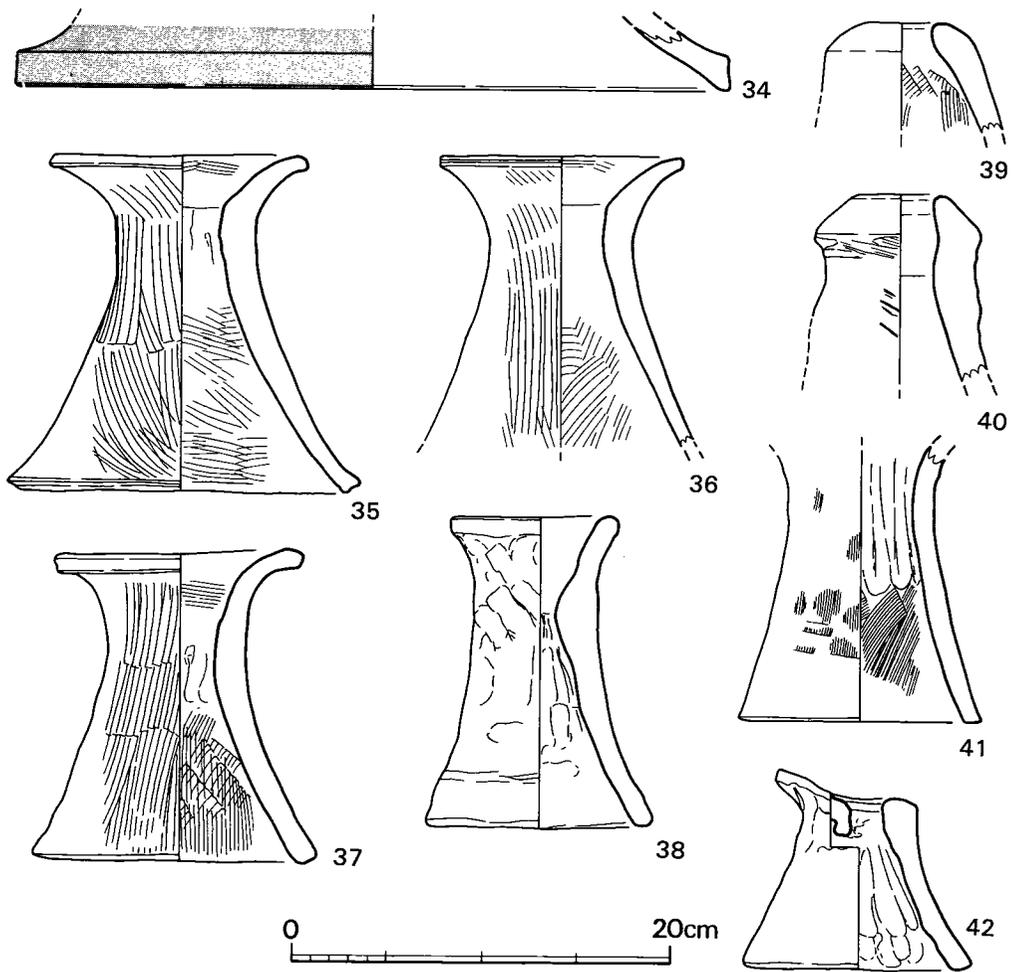
第174図 5号溝出土土器実測図その2 (1/6)



第 175 図 5号溝出土土器実測図その3 (1/4)



第 176 図 5号溝出土土器実測図その4 (1/4)



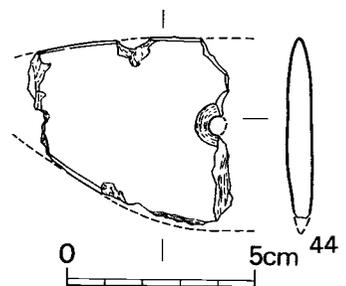
第 177 図 5号溝出土土器実測図その5 (1/4)

石 器 (図版63, 第178図)

溝の埋土中から出土した粘板岩質の石庖丁片であるが材質が劣る。現存では刃部の一部が残存するが、刃を研ぎ直していない。中央部には整美な孔を穿っている。孔の径は5 mmを測る。

鉄 器 (図版63, 第179図)

溝の上層から出土した小形の鍛造鉄斧である。袋部の一部と刃部が欠損している。袋部の一方は外側に広がっている。現長5.9 cm, 刃部近くの幅2.6 cmを測り, 刃部近くが広

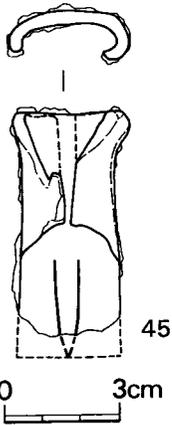


第 178 図 5号溝出土石器実測図 (1/2)

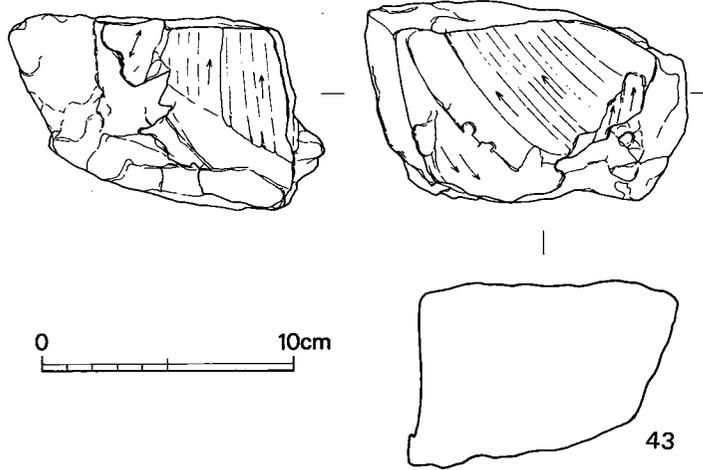
広くなり僅かに撥状を呈すると考えられる。

粘土塊(図版63, 第180図)

溝の上層から出土した粘土塊で2面を板の小口状の道具で掻き取っている。全体に焼成を受けているが、何に使用したのかは定かでない。



第 179 図 5 号
溝出土鉄器実測図
(1/2)



第 180 図 5 号溝出土遺物実測図 (1/3)

(6) 甕 棺 墓

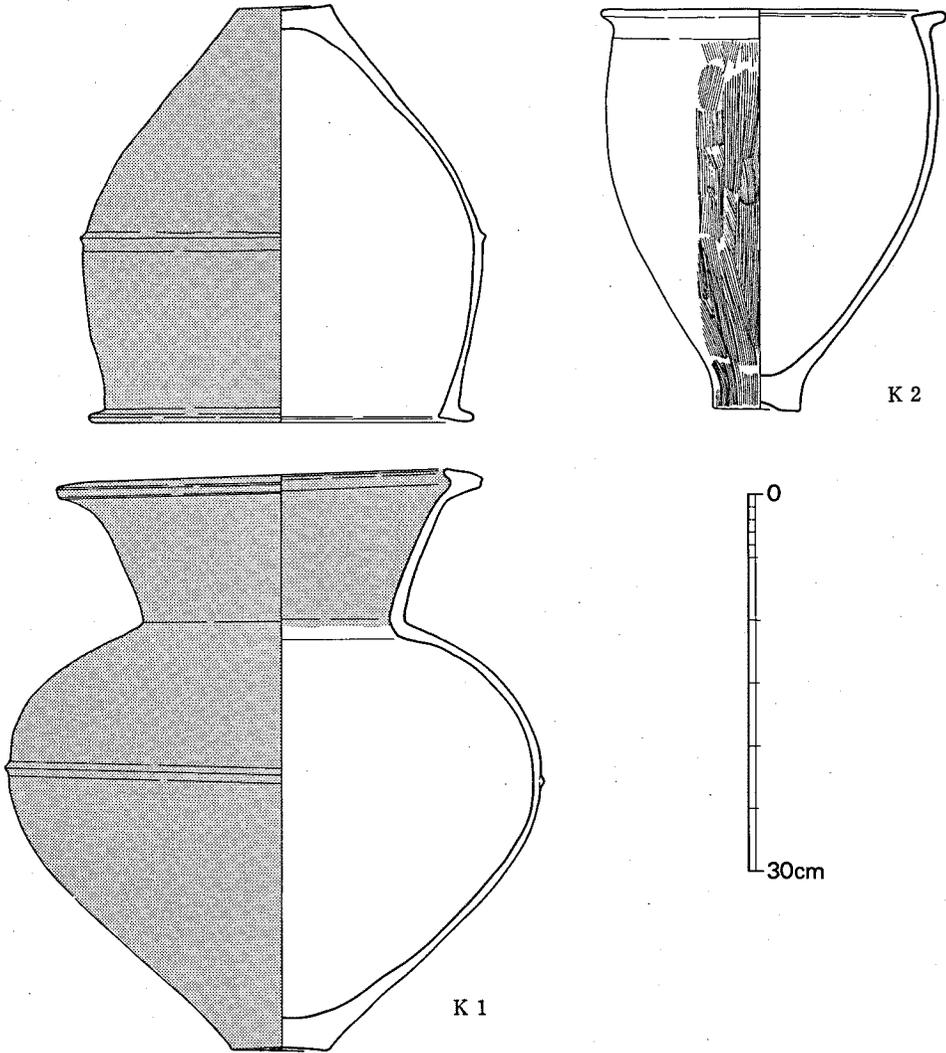
1 号甕棺墓 (図版49-1, 第181図)

弥生時代中期前葉の14号土壌の東側で検出した小児用甕棺墓である。墓壇の平面形態は不整形を呈し、北側は小さなテラスを設けている。墓壇の規模は80cm×90cm、最深部55cmを測る。墓壇の南側隅には奥行28cmの横穴を穿ち、壺形土器を下甕として挿入している。甕棺は壺の頸部を打ち欠き上甕をかぶせた覆口式である。打ち欠いた壺の頸部上半は墓壇内に埋納しており、一種の祭祀的意味あいを示唆していると考えられる。覆口部には目貼り粘土を施しているが下部には認められない。甕棺の埋納傾斜角度は下甕を上位とし -5° を示す。甕棺内は下甕の上面が土圧で破損していたため、土が充満しており人骨等の出土は認められない。主軸方位はN 32° Wを示す。

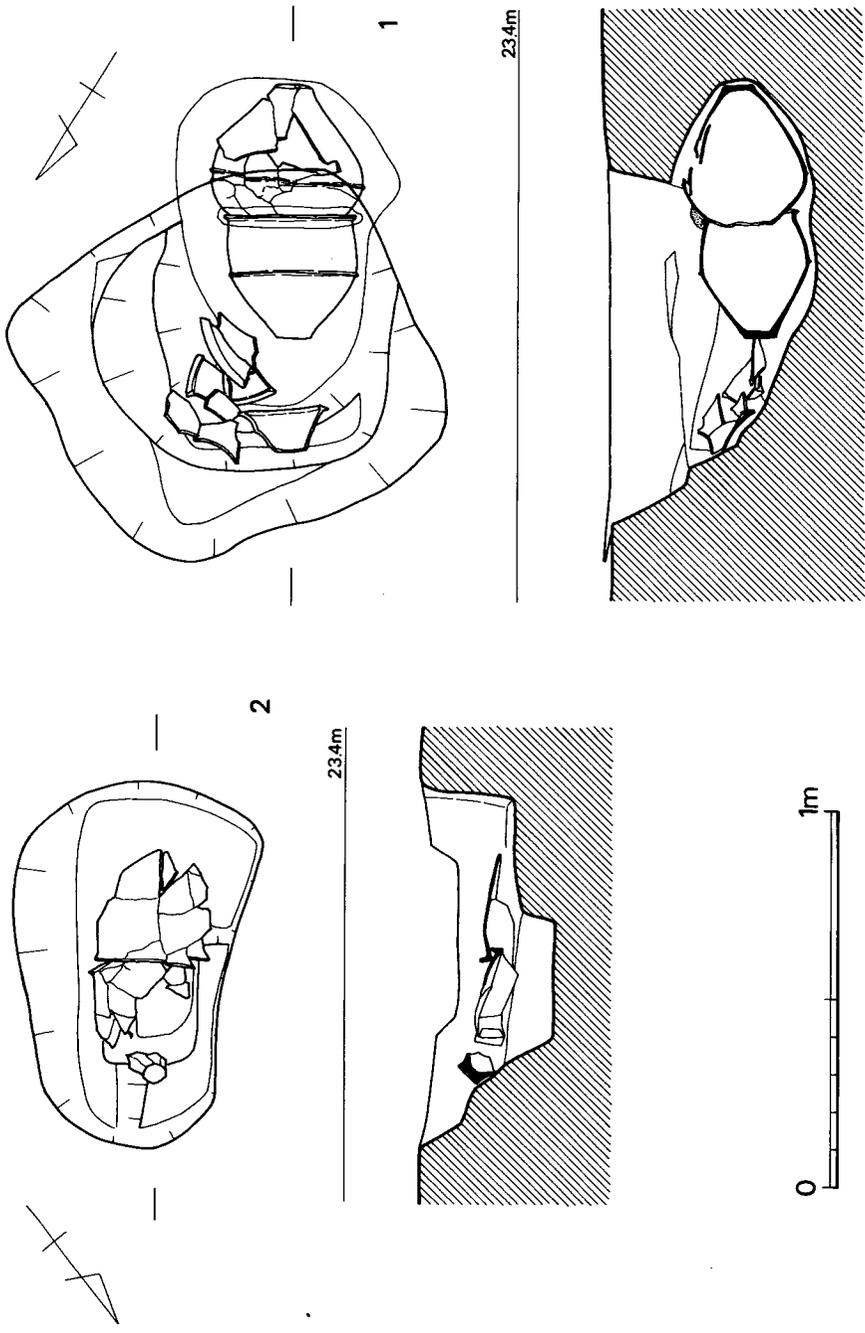
なお、墓壇内から石剣の破片が出土している。

甕 棺 (図版63, 第182図)

上甕 未発達な逆「L」字状の口縁部を有す甕で口縁平坦部は内傾する。頸部は内傾し、胴部は張り気味で最大径を胴中央部に持ち一条の三角凸帯を廻らす。底部は小さく上げ底を呈する。胎土は細砂粒をやや多く含む。調整は外面が横磨き、底部付近は縦磨きをかけ、その上から黒色顔料を塗布している。内面は丁寧なナデで仕上げている。口径30.5cm, 底径7.5cm, 器高



第 182 図 1号・2号甕棺実測図 (1/6)



第 181 图 1 号·2 号墓茱墓实测图 (1/20)

33.2cmを測る。弥生時代中期前葉頃の所産である。

下甕 鋤先状口縁の壺形土器を使用している。甕棺として採用する時点で頸部上半を打ち欠いている。口縁平坦部は外傾する。頸部はよく締り、肩から胴部にかけての張りは著しい。胴中央部には一条の三角凸帯を廻らす。胴下半部は細まり小さな上げ底をなす。調整は口縁部付近を除く内面頸部から外面にかけては横方向の磨きをかけ、胴部内面は丁寧なナデで仕上げる。胎土には細砂粒をかなり含み、黒塗りである。口径27.7cm、胴部最大径43.0cm、器高46.0cmを測る。弥生時代中期前葉頃に比定できる。

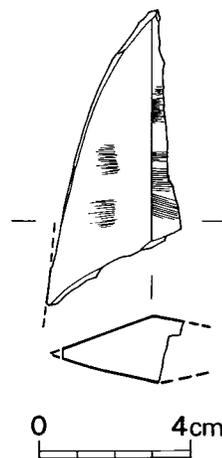
墓壙内出土遺物

石器(図版64, 第183図)

石剣と考えられる破片がある。一部刃部が残っており、刃部が中央の鑄に対して鋭角になることから切先に近い部分であろう。表面は研磨され平滑となっている。厚さ1.8cmを測り、頁岩質である。

2号甕棺墓(図版49-2, 第181図)

F2区の31号・33号住居間で検出した小児用の甕棺墓であるが、同一個体の甕形土器を縦割りにして蓋に使用していることから甕蓋土壙とした方が理解し易い。33号住居の一部を切っている。墓壙の形態は不整の楕円形を呈し、規模は長軸97cm、短軸は45cmから62cm、深さ25cmを測る。墓壙の床面にはさらに長方形の小形の墓穴を掘り、二段掘りを呈している。この小形の掘り込みを覆うように甕形土器を被せて被葬者を埋葬していた。墓穴の規模は長軸40cm、短軸23cm、深さ10cm弱と非常に小さいことから、乳児を埋葬したと考えられる。主軸方位はN38°Eを示す。中からの遺物は無い。



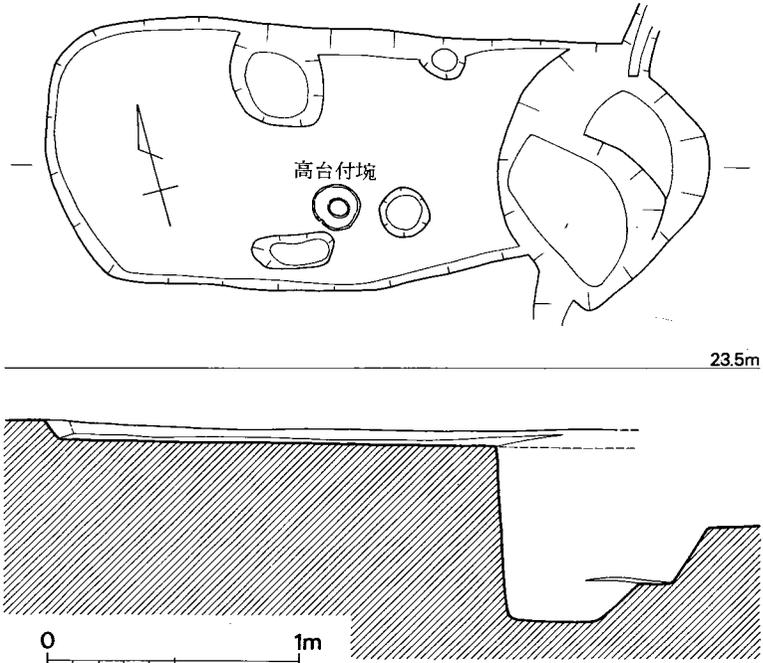
第183図 1号甕棺墓壙内出土石器実測図(1/2)

甕棺(図版64, 第182図)

甕棺に使用した日常什器の甕を復原したものである。未発達な逆「L」字状口縁を有す甕で、口縁上面は内傾する。頸部も内傾し、胴下半は細まり乍ら径の小さな上げ底の底部に続く。焼成は頗る堅固で、胎土は砂粒が多く金雲母を若干含む。明茶褐色の色調をなす。口径27.6cm、底径7.1cm、器高32.1cmを測る。弥生時代中期前葉頃の所産である。

(7) 土 墳 墓 (図版41-1・2, 第184図)

F 2 区の南端で検出した遺構であるが、23号住居とピットを切っており、ピットを先に掘ったため小口壁が不明となった。遺存状態は頗る悪く、壁高は10cm弱である。幅は1.00m前後を測る。底面の南側中央部には土師質の高台付壇が伏せた状態で出土したが、土器の遺存状態が悪く破細したため図示不可能となった。



第 184 図 土墳墓実測図 (1/30)

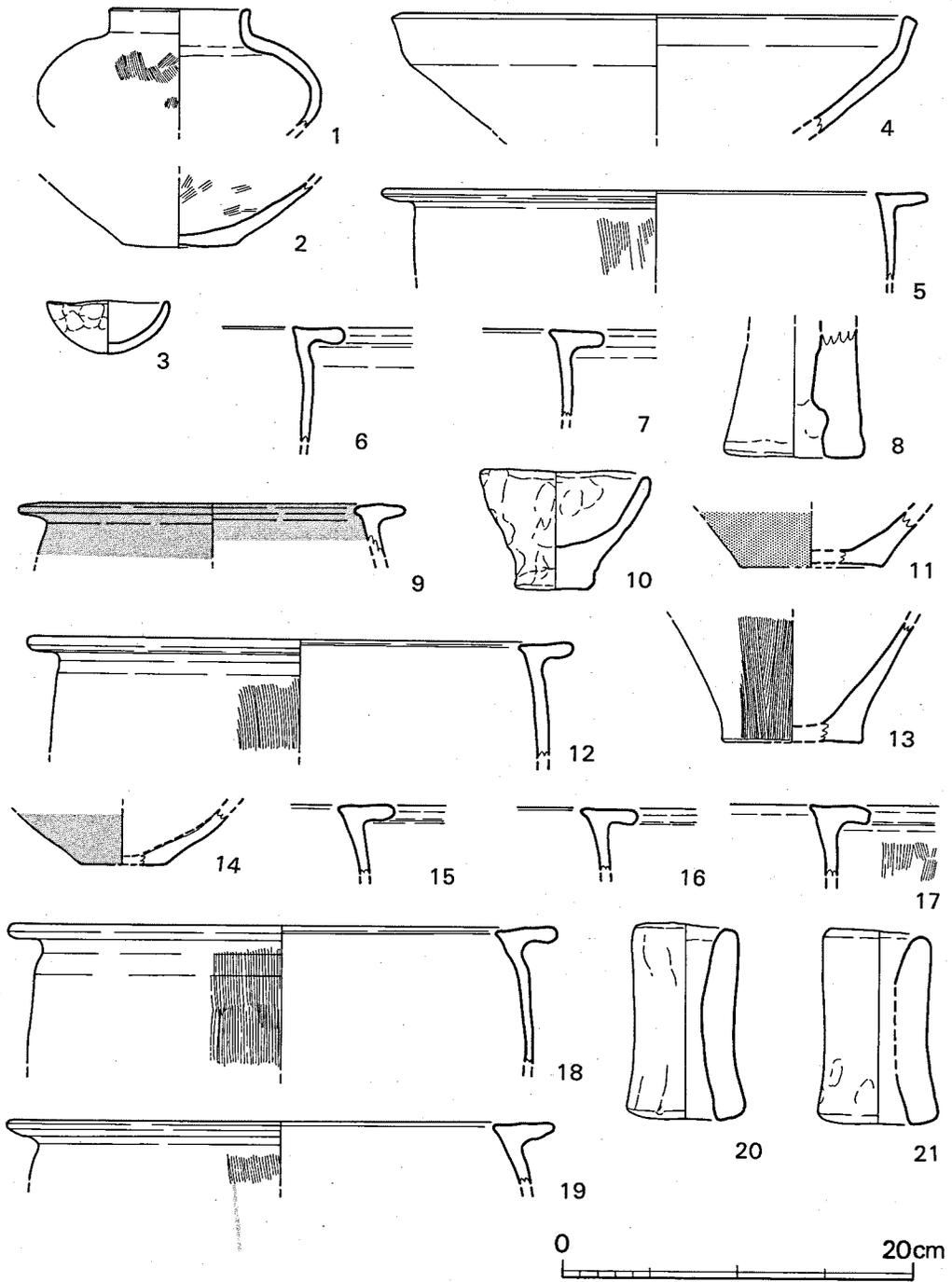
(8) その他の出土遺物

土 器 (図版64, 第185, 186図)

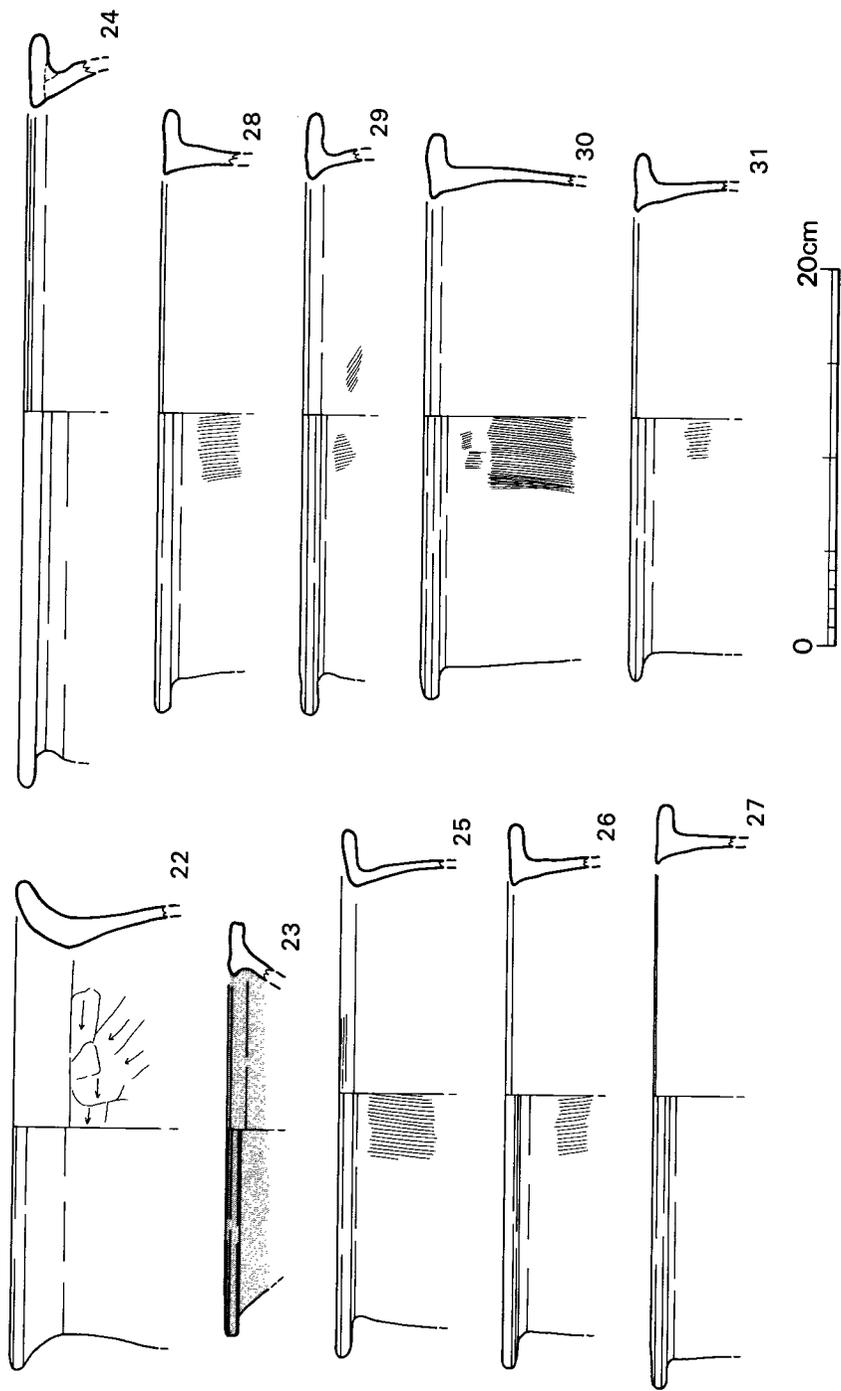
1～3はF 1 区のP-1から出土した土器で1が短頸壺, 2は壺の底部, 3は手捏ね土器である。1は短く上方に開く口縁部に肩から胴部にかけては扁平球状を呈する。調整は外面は極細のハケの上からナデ, 内面はナデで仕上げる。口径は8.0cm。2の底部は平底をなし, 外面がナデ, 内面はハケののちナデ仕上げである。黄橙色を呈し, 底径6.6cmを測る。3は指頭ナデで仕上げた手捏ね土器で, 口径6.9cm, 器高3.0cmを測る。これら一群は弥生時代後期の所産である。

4はF 1 区のP-3から出土した高坏片で, 口縁部は内側に屈折し, 体部は直線的である。調整はナデで仕上げ, 復原口径28.8cm。弥生時代後期前葉頃のものである。

5・6はF 2 区のP-15から出土した甕で, 発達した逆「L」字状の口縁を有す。5は内外面とも二次加熱を受け, 復原口径31.0cmを測る。8も同柱穴から出土した支脚形土器で上半部を



第 185 図 その他の出土土器実測図その 1 (1/4)



第 186 図 その他の出土土器実測図その 2 (1/4)

欠失する。調整はナデで仕上げ、強い二次加熱を受ける。

7はF2区P-20から出土した甕片で、「T」字状の口縁を有する。平坦部は僅かに外傾する。色調は褐色を呈する。弥生時代中期中葉頃のものである。

9はF2区P-25から出土した丹塗り磨研の甕で口縁部は「T」字状を呈する。胎土は丹塗り土器特有の良質のもので、復原口径21.9cmを測る。弥生時代中期後半頃の土器である。

10はF2区P-36から出土した手捏ね土器で、完形品である。つくりは粗く指ナデで仕上げている。底部は厚くつくっている。外面には二次加熱を受けている。

11はF2区P-42から出土した壺の底部片で、外面は黒塗り磨研である。

12はF2区P-44から出土した甕で、発達した「T」字状口縁を呈し、平坦部は僅かに内傾する。調整は外面ハケ、内面ナデで仕上げる。外面には煤が付着する。復原口径30.8cmを測る。弥生時代中期中葉に近い土器である。

17はF2区P-53から出土した甕片で、「T」字状に発達した口縁を有す。調整はハケとナデで仕上げている。弥生時代中期中葉頃の土器である。

14・15はF2区P-56から出土した壺と甕で、前者は丹塗り磨研である。後者は発達した逆「L」字状の口縁を有す。弥生時代中期中葉頃の所産である。

16は「T」字状に近い甕の口縁部で、内外面とも二次加熱を受けている。弥生時代中期中葉頃に比定される。

13・18・19はF2区P-58から出土した甕形土器で、前者はハケとナデで仕上げる。復原底径8.0cm。18・19は発達した「T」字状の口縁を持つ甕で平坦部は僅かに内傾する。弥生時代中期中～後葉頃の甕である。

20・21はF2区P-64から出土した支脚形土器である。2個とも同タイプで器壁は厚い。両者とも二次加熱を受け、調整はナデで仕上げる。前者の口径6.0cm、底径6.9cm、器高11.1cmを測り、後者の口径6.0cm、底径6.8cm、器高11.0cmを測る。

22はF2区P-65から出土した甕で、口縁部は緩い曲線を描き乍ら外反する。調整は外面ナデ、内面は荒いヘラ削りで仕上げる。復原口径25.8cm。

23・24はF2区P-70から出土した壺又は高坏と甕である。前者は現存する内外面とも丹塗り磨研で、復原口径21.9cmを測る。後者は「T」字状に発達した口縁を有し、頸部の内傾度は強い。外面に煤が付着する。復原口径40cm。弥生時代中期後葉に近い時期の所産である。

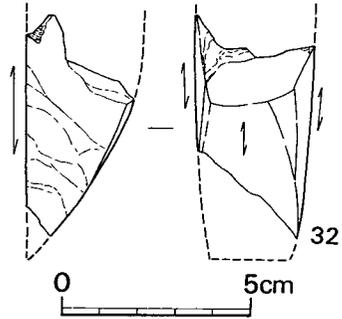
25はF2区P-74から出土した甕で、大きく外反する口縁部を有し平坦部は内傾する。内面の稜は不明瞭である。内外面とも二次加熱を受ける。外面及び口縁平坦部にもハケを施す。復原口径28.0cmを測る。弥生時代中期末期の土器である。

26～31はF2区P-76から出土した甕形土器で、「T」字状あるいは逆「L」字状の口縁を有す。調整は外面がハケ、内面はナデが基調であるが、磨耗しているものが多い。復原口径は26～29.0cm

27—31.0cm, 28—32.0cm, 29—31.8cm, 30—30.0cm, 31—28.0cmを測る。弥生時代中期中葉～後葉にかけての一群である。

石器 (図版64, 第187図)

F 2区 P—68から出土した頁岩質の挟入柱状片刃石斧の小破片である。刃部付近が残っているが不明な点が多い。

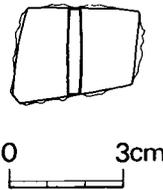


第 187 図 P—68出土石器実測図 (1/2)

鉄器 (図版64, 第188図)

F 1区 P—5 から出土した不明鉄器である。

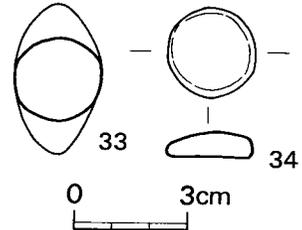
長さ3.3cm, 幅2.5cm, 厚さ3mmの不整形を呈する。刃部は見当らず, 鉄素材の可能性も否定できない。



第 188 図 P—5 出土鉄器実測図 (1/2)

土製品 (図版64, 第189図)

遺構検出時に出土した土製投弾と釘状土製品がある。投弾はラグビー球状を呈し, 長さ4.0cm, 径2.3cm, 重さ16.6gを量る。胎土は頗る緻密で焼成も良い。



第 189 図 表採出土土製品実測図 (1/2)

釘状土製品は径2.3cm, 厚さ7mmを測る。胎土は精製され淡橙色を呈する。丁寧なつくりのものであるが, 用途は明らかでない。

3 小 結

東小田・七板遺跡は、弥生時代中期前葉から奈良時代後半頃までの集落を検証できたが、一断面を垣間みに過ぎず遺跡の総体及詳細な内容は圃場整備事業地内の報告に譲るとして、今回の調査区内で得た成果と問題点を若干触れておきたい。

弥生時代の七板集落の背景

調査区内での竪穴住居は大きく2グループに大別できるが、2区で濠を検出したことと昭和57年度に確認された環濠とから、七板集落は弥生時代後期中葉から後葉頃にかけての大環濠集落であることが解明できた。

北部九州での環濠の出現は、古くは弥生時代前期に遡る。前期の環濠は津古内畑、横隈山の両遺跡でみるように主に袋状竪穴（貯蔵穴）を圍繞する形で設営している。この環濠は貯蔵食物類を害獣や盗難等から防禦する措置と考えられる。管見で知り得る限りでは弥生時代前期の竪穴住居群に伴う環濠は明瞭でない。

弥生時代中期に至ると濠を伴った竪穴住居群は福岡市の比恵遺跡、小郡市の種畜場遺跡がある。筑紫野市所在の常松遺跡では中期末の濠（条溝）の検証があるものの、それに付随する竪穴住居は後期と報告されていることから条濠も後期の可能性が強いが、出土遺物の掲載がないため明らかでない。

弥生時代後期に至ると濠を伴う集落跡は突如増加する。主だった遺跡では春日市大南遺跡、福岡市野方中原遺跡、甘木市西原C遺跡、三養基郡基山町千塔山遺跡等があり、今後も増加する傾向にあると考えられる。この種の集落は幅数メートルにも及ぶ濠を廻らしており、明らかに集落の防禦を意識しての策で濠で集落を圍繞する労働力たるや想像を絶する作業量であったと考えられる。しかも濠は七板遺跡で検証したように外側に土塁を構築し、西原C遺跡で確認された濠の内側の柵列等の方策を付加している等々から、かなり大掛かりの防禦策を講じていたことが窺える。このような例から北部九州の弥生時代後期には集団間の抗争が激化していた明瞭な証左となり得る。

抗争の痕跡は集落のみならず墓地からも窺える。近年、墓から出土する武器類について完形品はもとより破片であつても副葬品としての考え方に根強いものがあつた。これは朝鮮半島から伝播した風習として副葬する行為に意義をみ出ししていたからである。しかし、福岡県穂波町スダレ遺跡の甕棺から出土した胸椎骨に嵌入した石剣の切先が出土したことから、従来破片副葬と考えられていた武器の切先は実は戦闘に使用した武器であるとの指摘がなされた(註1)。

切先が出土した墓は北部九州（一部山口県を含む）で24例が発見されており（註2）、弥生時代前期末から中期中葉頃に顕著に認められる。しかし、弥生時代中期中葉を境に武器片の出土例は非常に少なくなる。これは石器・青銅器の武器から強靱な鉄器の武器へと変化した結果と云われている（註3）。

このように北部九州の弥生時代は中期初頭を中心とする防禦集落と後期を中心とする防禦集落が出現するが、後期にその顕在化が著しい。弥生時代後期には瀬戸内から近畿地方に高地性集落が出現し、関東地方にも環濠集落が設営されるに至り、関東地方以西を包む大乱が発生したと考えられており、後漢書、梁書の倭伝に記載されている2世紀後半の「倭国大乱」に結びつける向もある。

佐原真氏は北部九州の弥生時代前期末から中期中葉頃の墓から出土する武器（主に切先）は剣及戈であることから、抗争は集団間の長が1対1で格闘する所謂決闘形態であるとし、畿内を中心とする周辺地域では石鏃等の発達から弓矢を多用する集団戦を想定している（註4）。

抗争の要因は弥生時代前期末以前に板付遺跡で検証されたようにかなりの高度技術で水田経営がなされていたことが判明し、農業の生産性の安定から人口増加へと繋がり、台地への分村現象が想定され、それに伴う耕地の獲得と水利権等の掌握を狙いとした争いが勃発したことが通説となっている。

北部九州での環濠集落の出現状況をみると、前述したように弥生時代前期から中期中葉頃にかけて濠で圍繞する集落は、前期に袋状竪穴をとり囲む濠を掘る技術は保持し乍らも、非常に僅少傾向を示し、後期に至って突如出現する兆候がみられる。これは前者の抗争と後者のそれとは闘争形態に相違が存在したとも受けとられ、後期に発生した戦争は敵対する相手が一つの集落（集団）であったとも考えられ、後期に大規模の集団抗争が激化した反映であると受けとることができよう。しかし、後期以前の抗争は決闘形態であり集団抗争が発生しなかったと短絡的に帰結することではなく、今後の課題としておく。

註

註1 橋口達也「磨製石剣嵌入人骨について」（2考古学的意義）—スダレ遺跡— 穂波町教育委員会 1976

註2 註1と同じ

註3 註1と同じ

註4 佐原真「弥生時代論，戦い—決闘と集団戦—」—日本考古学を学ぶ(3)— 有斐閣選書 昭和54年

版 圖



(1) 七板遺跡の遠景（昭和57年当時，東から）



(2) 七板遺跡の遠景（昭和60年1月，南西から）



(1) 七板遺跡F1区全景(北から)



(2) 七板遺跡F2区全景(南から)



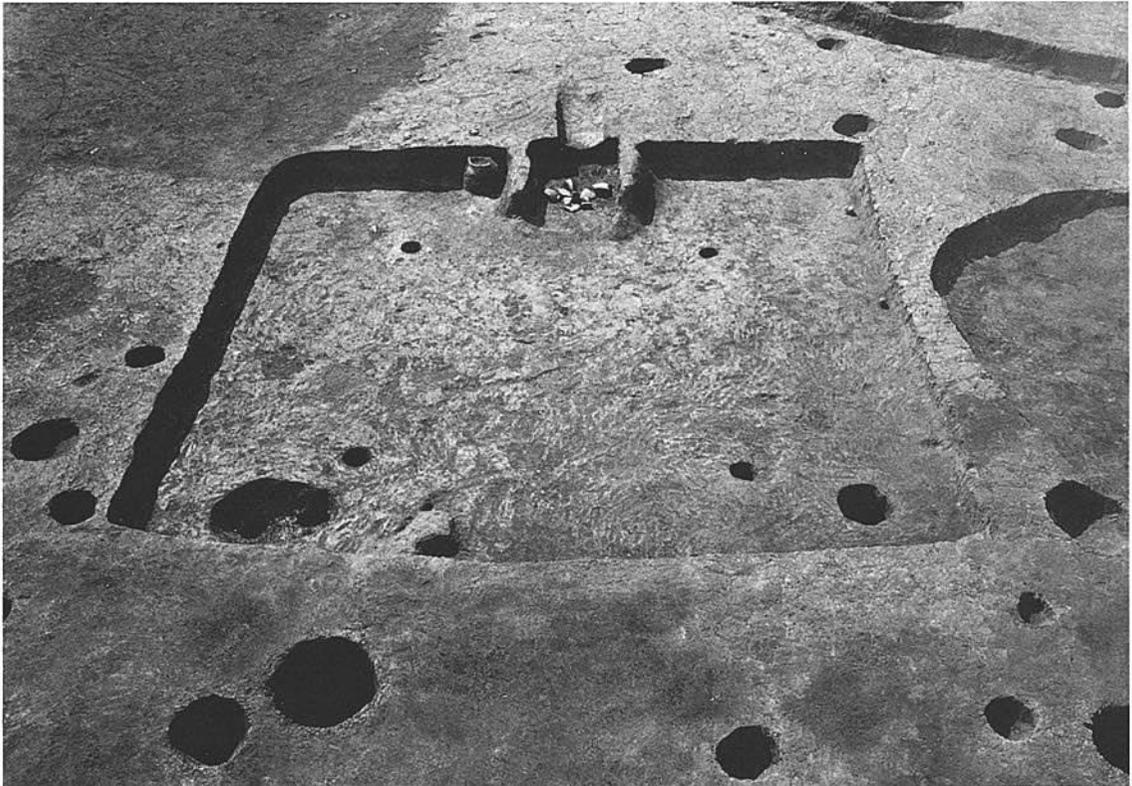
(1) 3号竖穴住居跡（南から）



(2) 3号竖穴住居跡竈内遺物出土状態



(1) 3号竖穴住居跡竈内下層遺物出土状態



(2) 4号竖穴住居跡（南から）



(1) 4号竖穴住居跡竈出土状態



(2) 5号竖穴住居跡(北から)



(1) 5号竖穴住居跡屋内土壌遺物出土状態



(2) 8号竖穴住居跡と1号周溝状遺構（東から）



(1) 9号竪穴住居跡（西から）



(2) 10号・11号竪穴住居跡（北から）



(1) 10号竖穴住居跡屋内土壙遺物出土状態



(2) 12号竖穴住居跡と3号・4号溝状遺構(南東から)



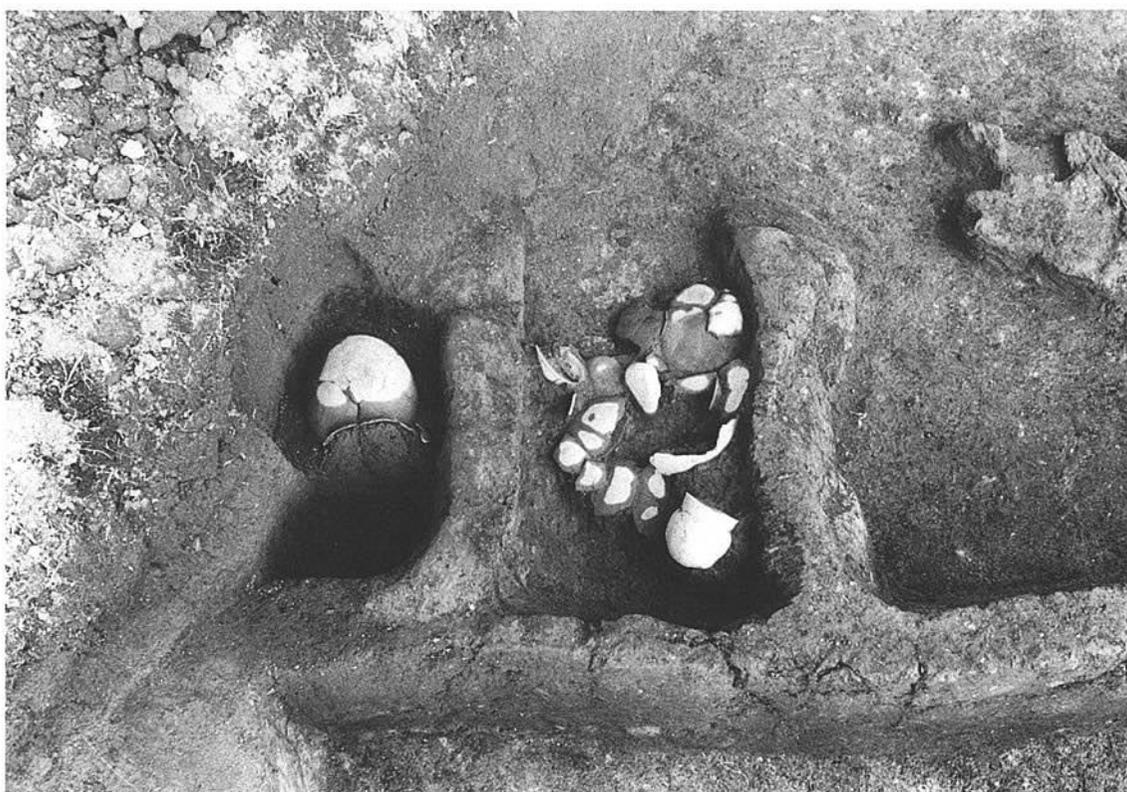
(1) 12号竖穴住居跡屋内貯蔵穴



(2) 13号・15号竖穴住居跡 (北から)



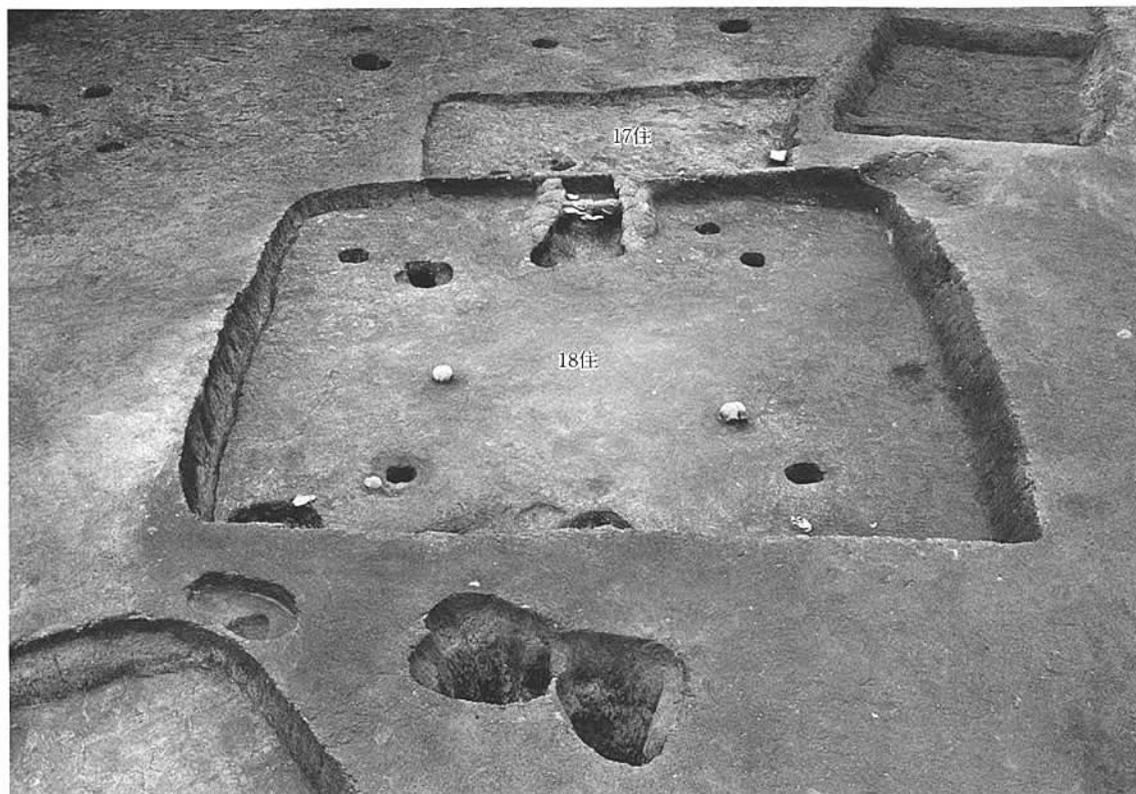
(1) 15号・36号竪穴住居跡（西から）



(2) 15号竪穴住居の竈と遺物出土状態



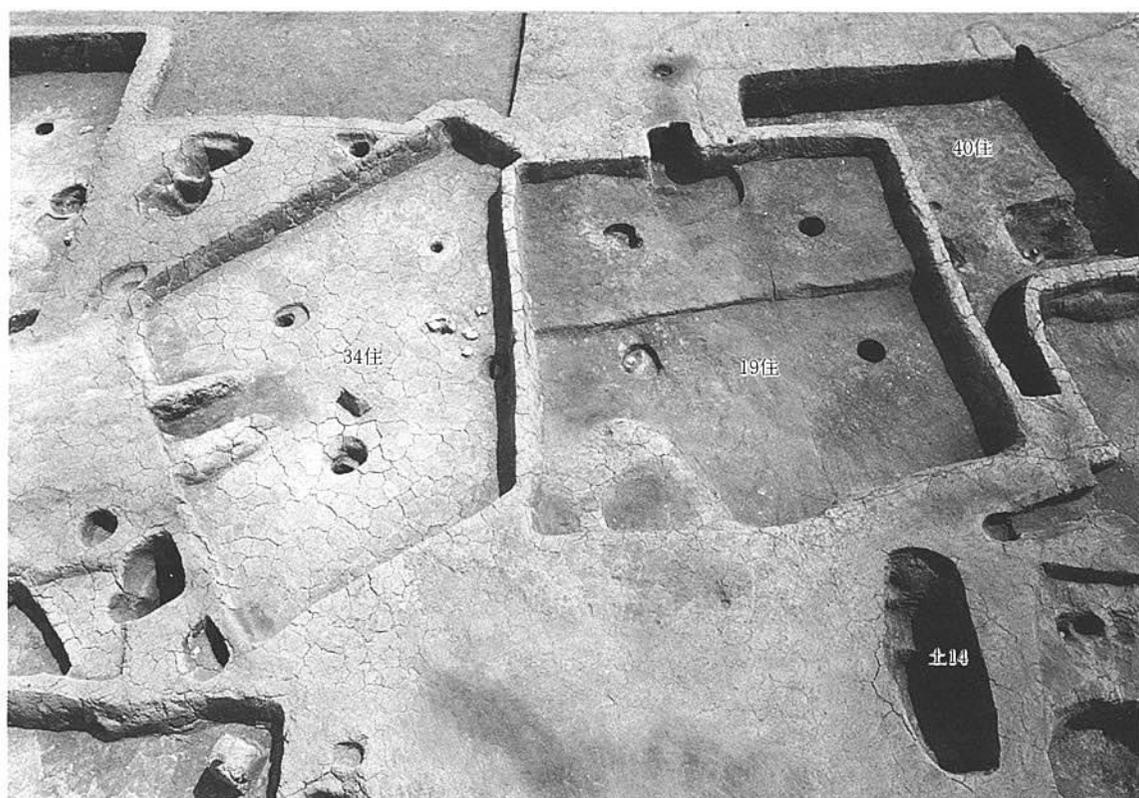
(1) 16号・25号・26号竪穴住居跡（東から）



(2) 17号・18号竪穴住居跡（南から）



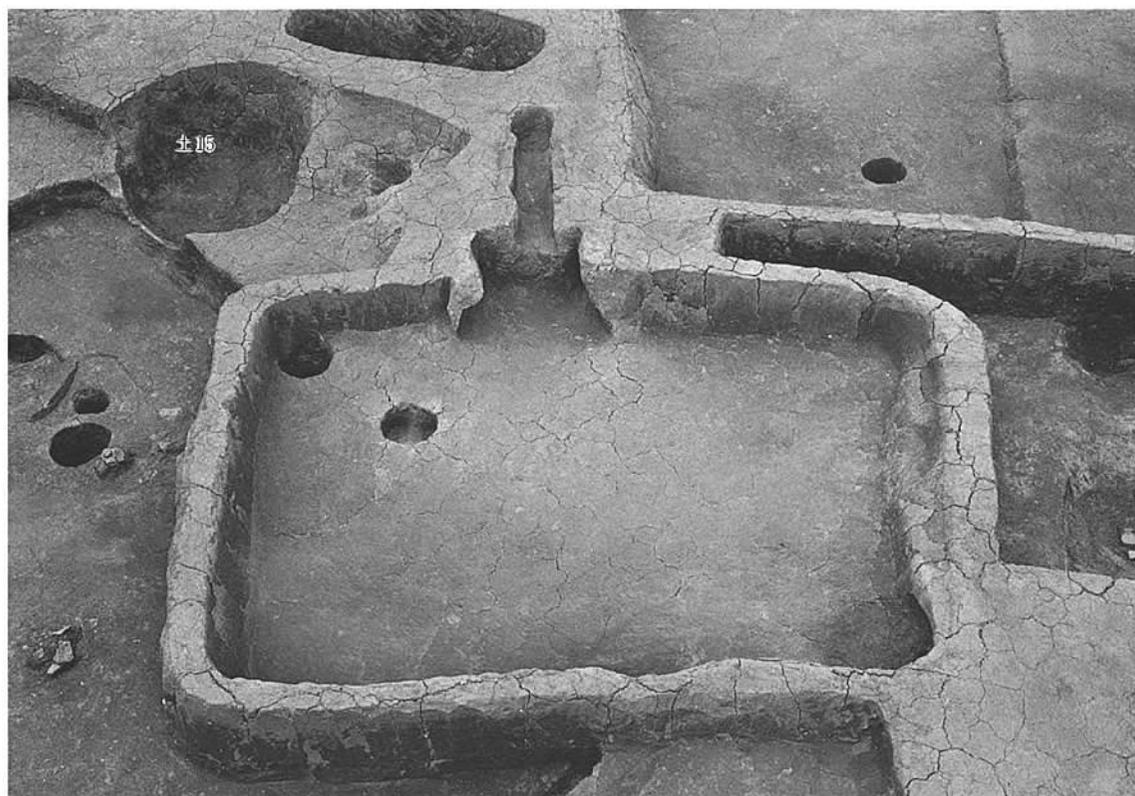
(1) 18号竖穴住居跡竈出土状態



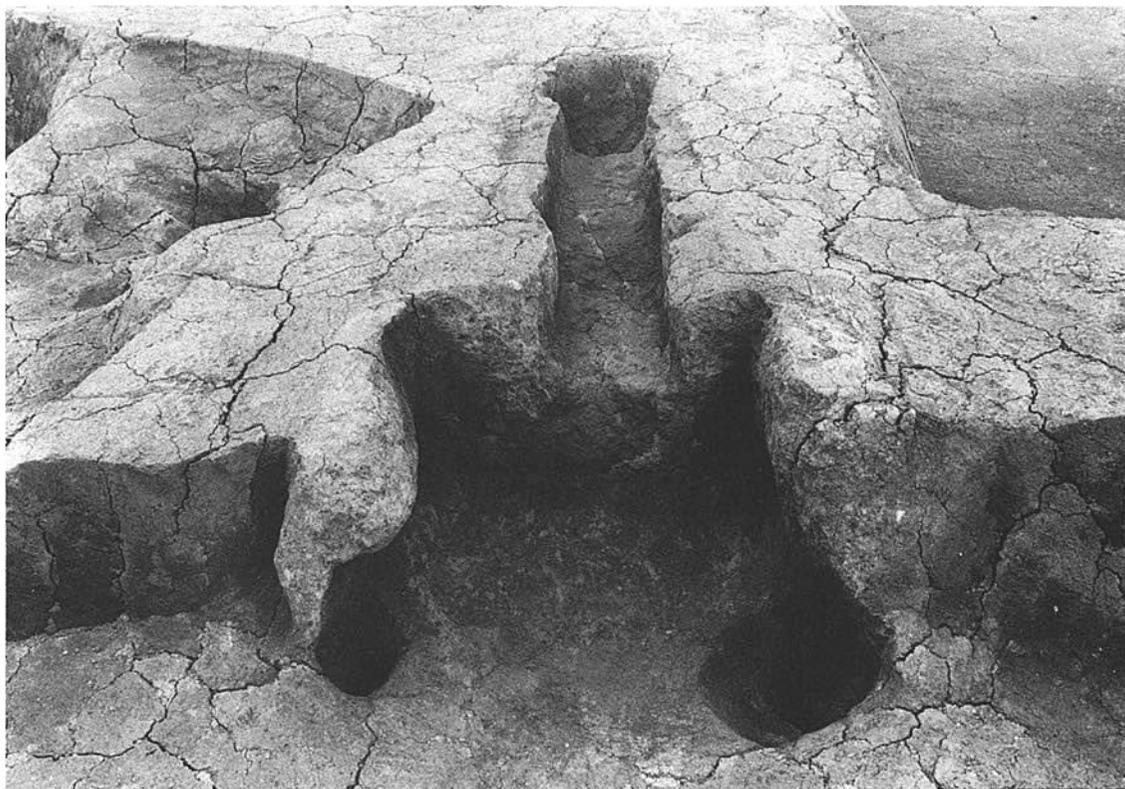
(2) 19号・34号・40号竖穴住居跡, 14号土壇 (西から)



(1) 19号竖穴住居跡竈出土状態



(2) 20号竖穴住居跡, 15号土壌 (南東から)



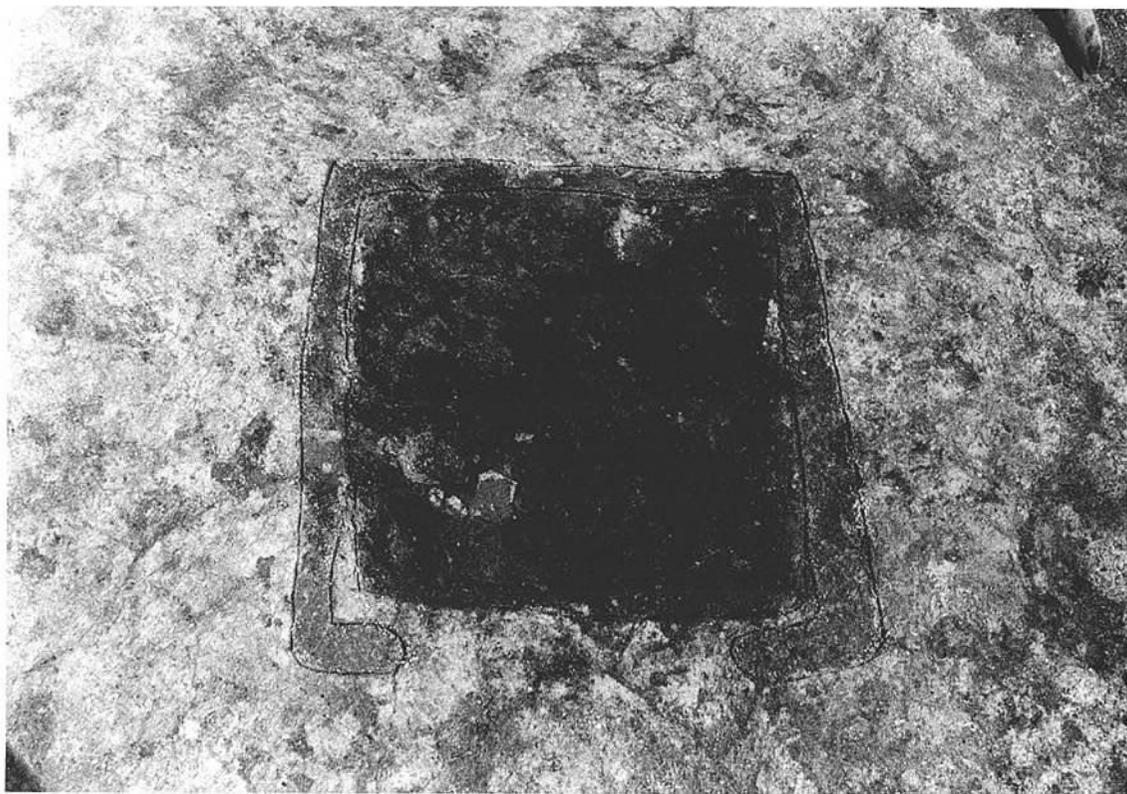
(1) 20号竖穴住居跡竈出土状態



(2) 21号竖穴住居跡炭化材・焼土出土状態



(1) 21号竪穴住居跡炭化材・焼土除去後（南から）



(2) 21号竪穴住居跡の炉跡出土状態



(1) 22号・23号・24号竖穴住居跡，土壇墓（北から）



(2) 23号竖穴住居跡，土壇墓（南から）



(1) 29号・30号竖穴住居跡と3号周溝状遺構（南から）



(2) 31号・33号竖穴住居跡と4号土壌（西から）



(1) 34号竪穴住居跡（南東から）



(2) 34号竪穴住居跡竈出土状態



(1) 36号竖穴住居跡 (南西から)



(2) 37号・38号・39号・40号竖穴住居跡, 14号・15号土坑 (南から)



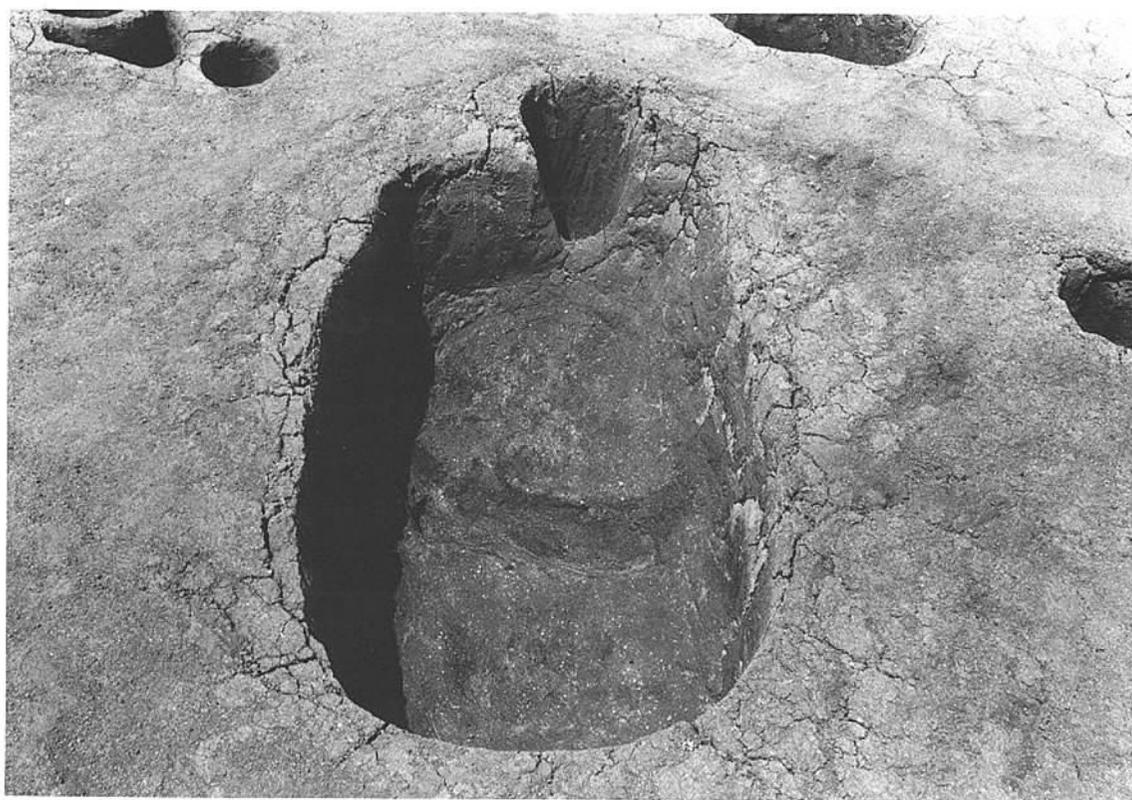
(1) 40号竪穴住居跡（北西から）



(2) 40号竪穴住居跡屋内土壌遺物出土状態



(1) 42号竪穴住居跡と3号周溝状遺構（西から）



(2) 7号土坑（南西から）



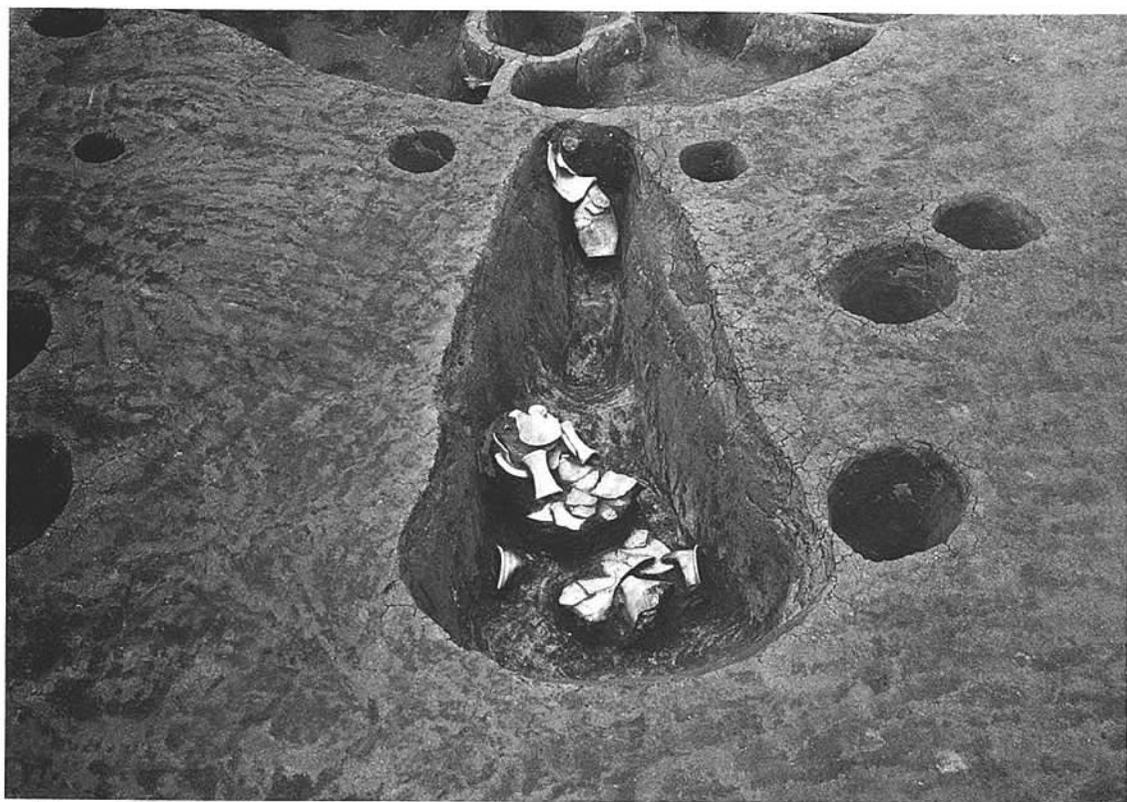
(1) 9号土塹(北東から)



(2) 10号土塹(南から)



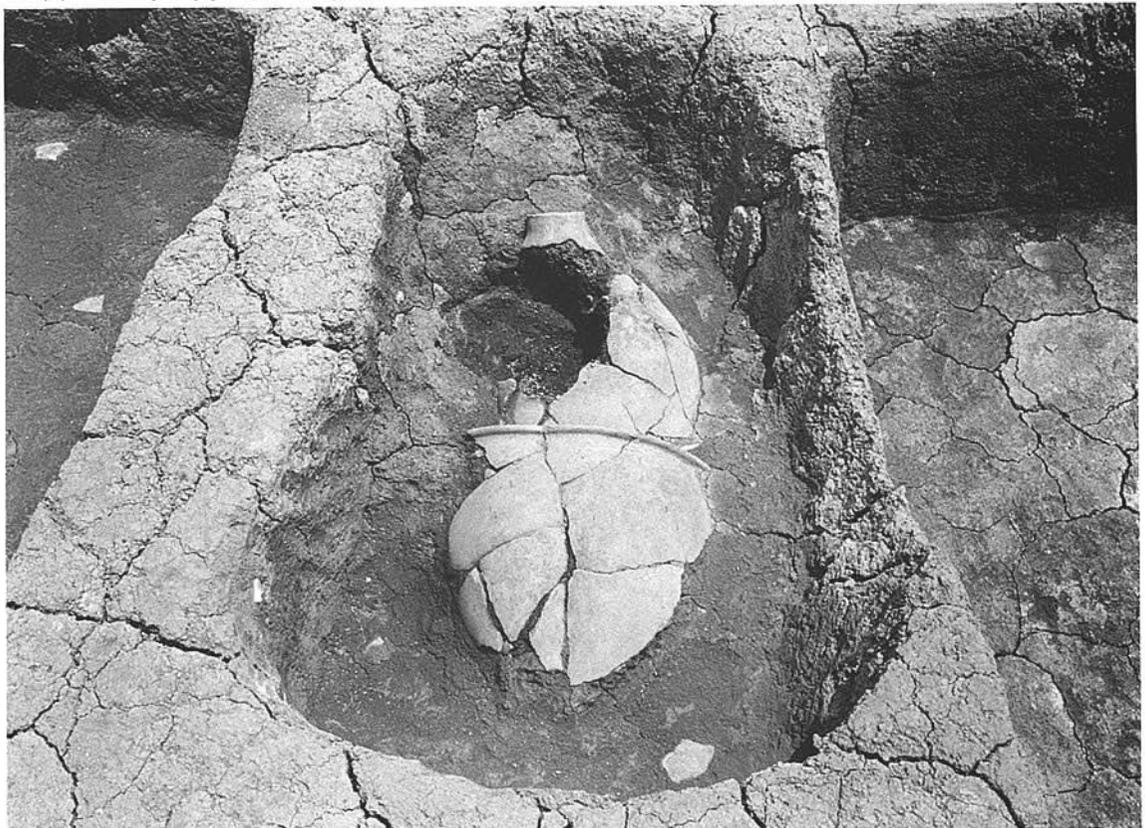
(1) 11 号 土 壙 (南東から)



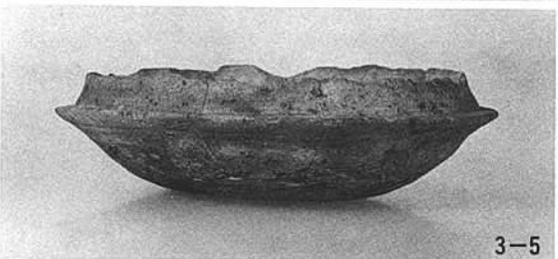
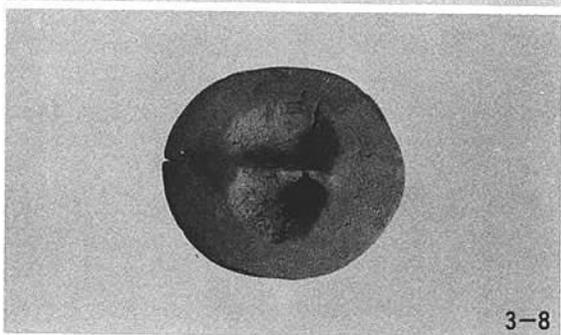
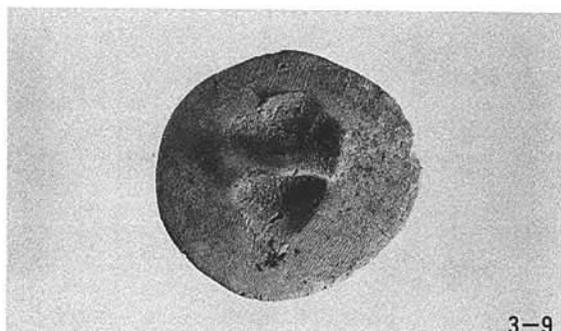
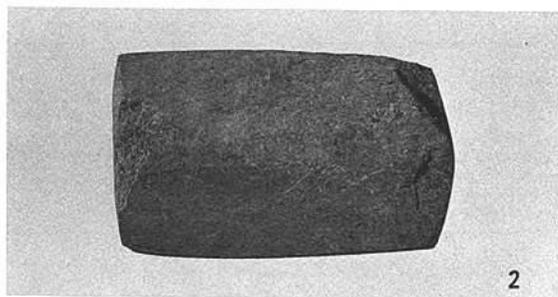
(2) 12 号 土 壙 (南西から)



(1) 1号 襲棺墓 (北から)



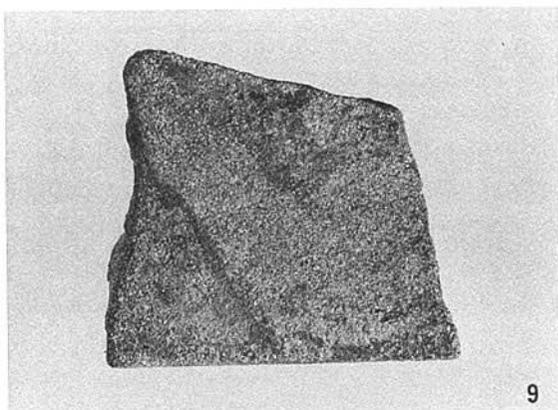
(2) 2号 襲棺墓 (西から)



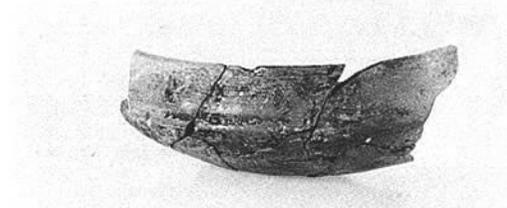
2号·3号·4号竖穴住居跡出土遺物



4-2



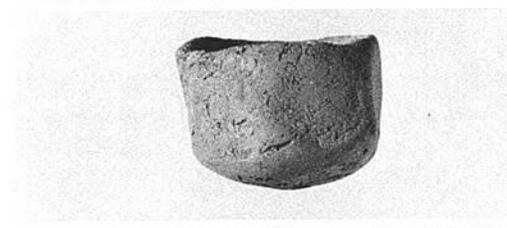
9



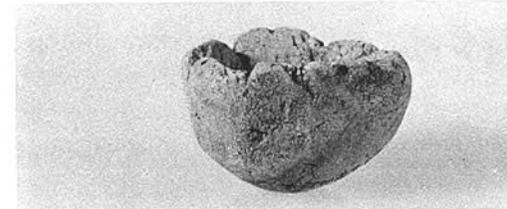
4-3



10-1



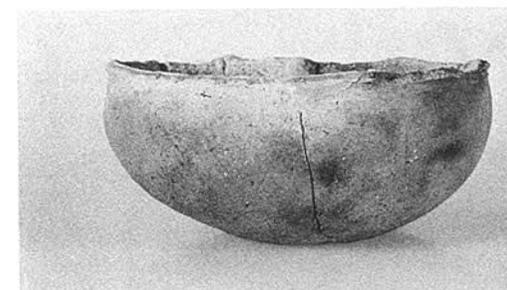
4-8



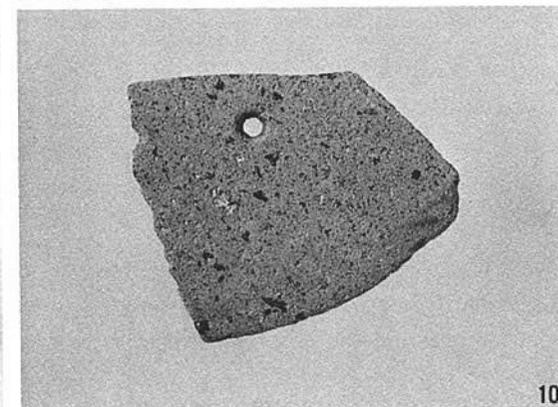
4-9



10-3



5-4



10



5-5



11-2



11-3



11-7



12-2



12



13-8



13



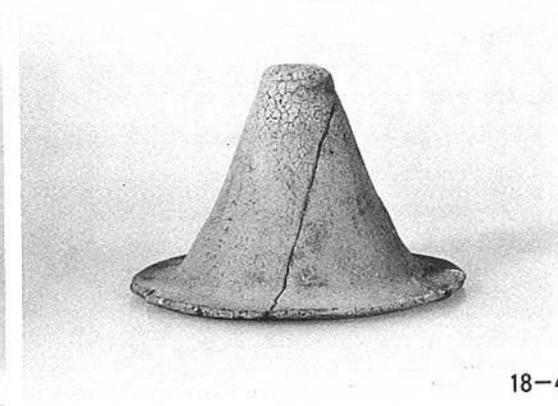
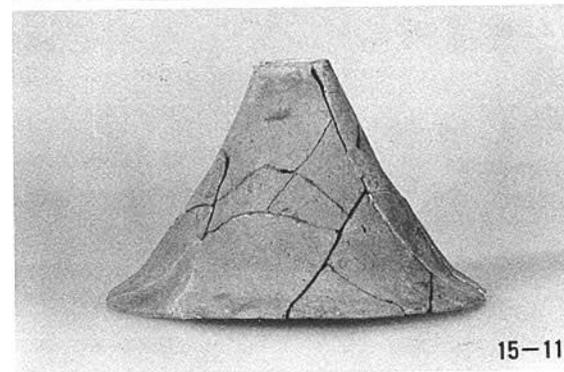
15-1



15-2



15-3





18-5



18-7



18-8



18-9



18-12



18-14



18-15



18-16



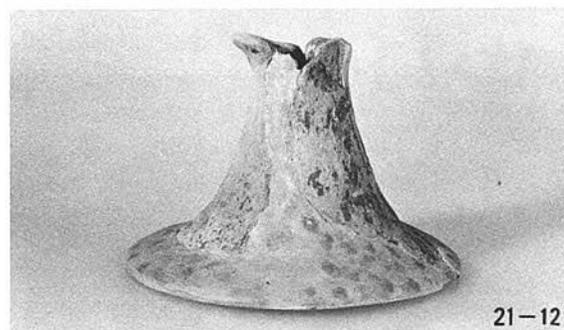
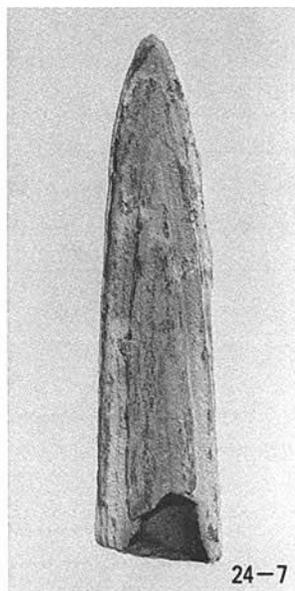
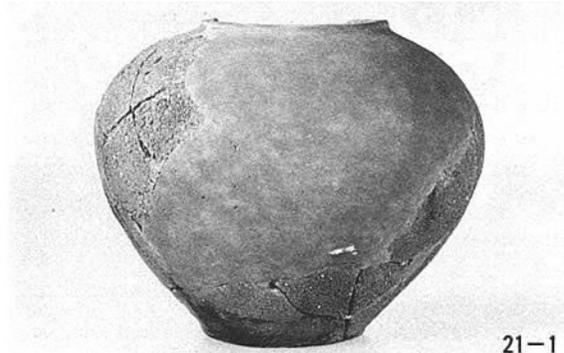
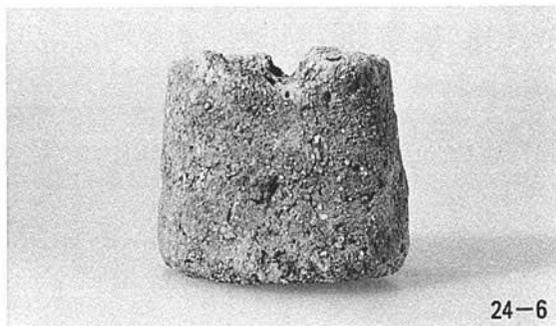
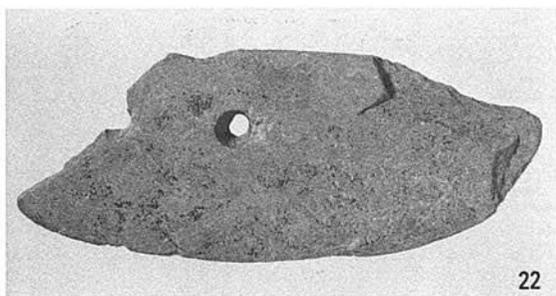
18-17

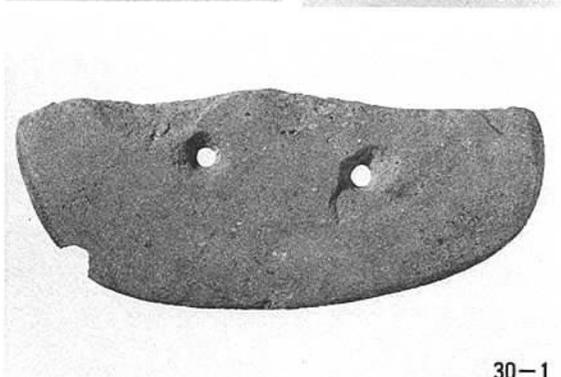
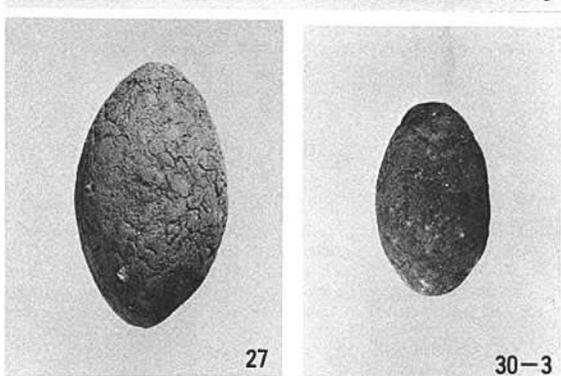
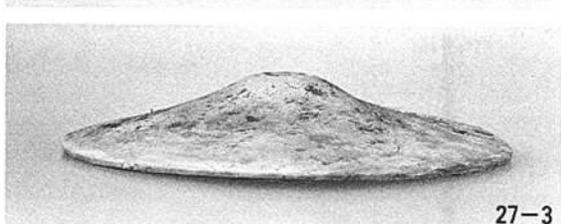


18-18

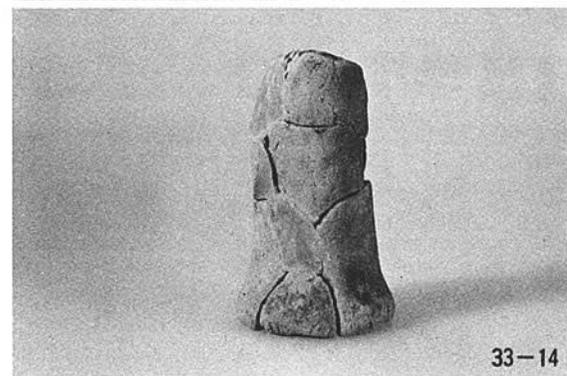
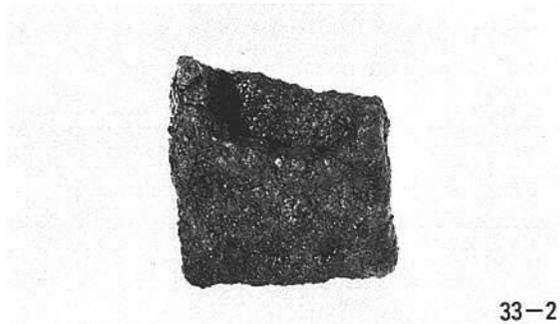
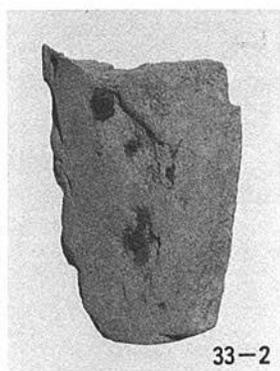


19-3





26号・27号・30号竖穴住居跡出土遺物



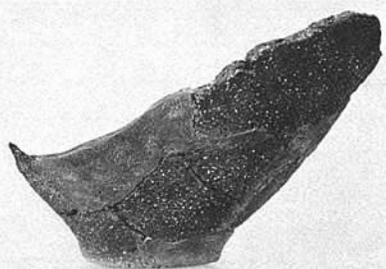
30号・33号・34号竖穴住居跡出土遺物



34



37-1



38-3



38



38



39-2



39-5



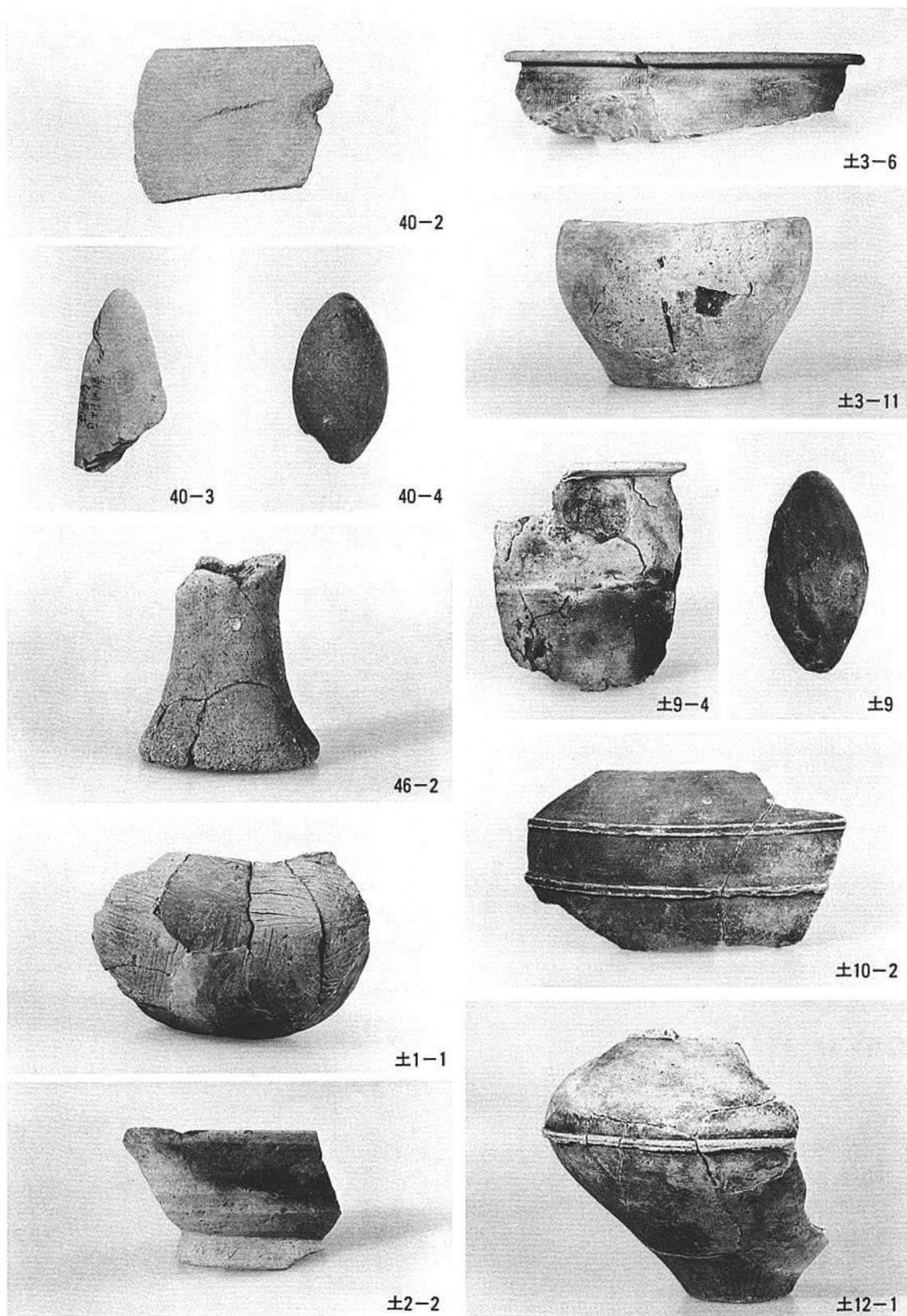
39



40-4



40-1



40号・46号 竖穴住居跡, 1号・3号・9号・10号・12号土壙出土遺物



±12-2



±12-8



±12-3



±12-12



±12-4



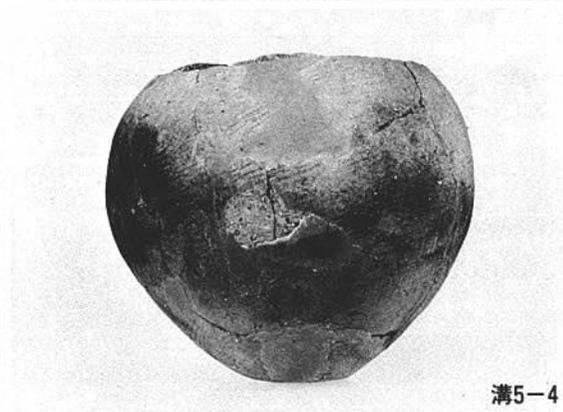
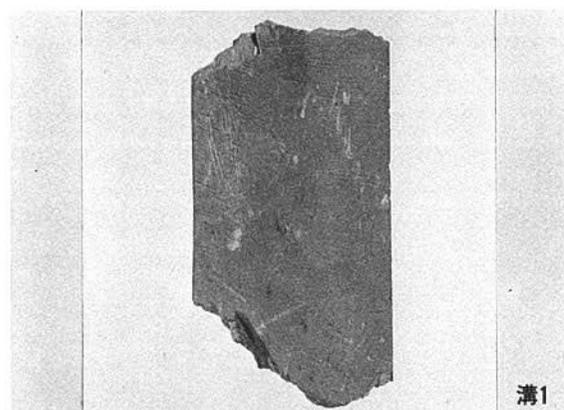
±12-13



±12-5



±12-14

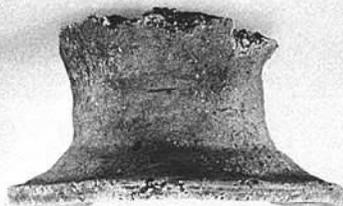




溝5-11



溝5-31



溝5-23



溝5-35



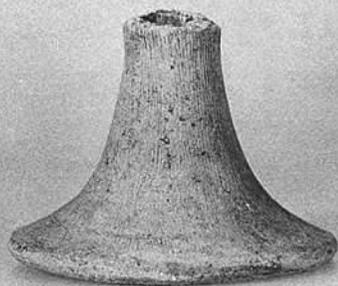
溝5-24



溝5-36



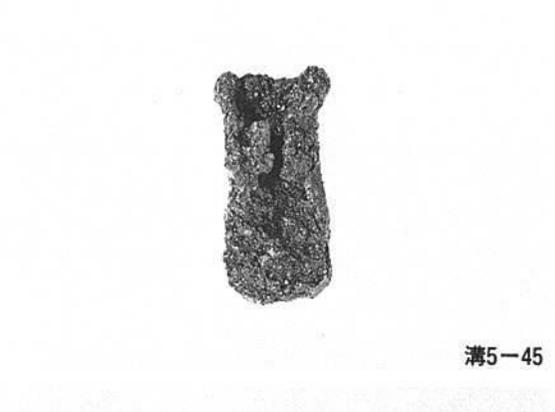
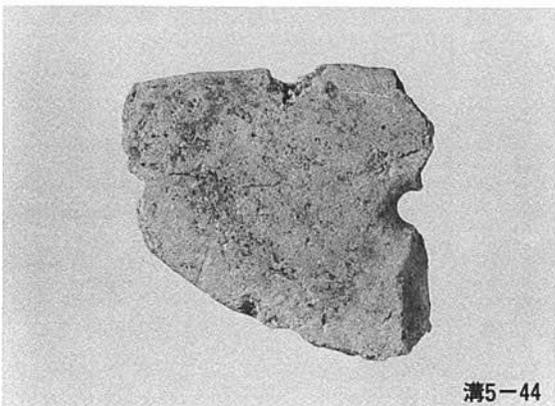
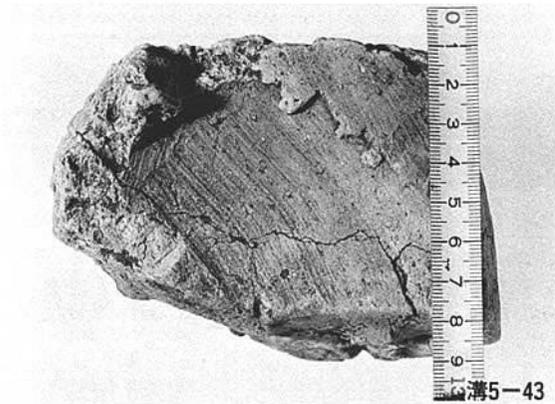
溝5-27



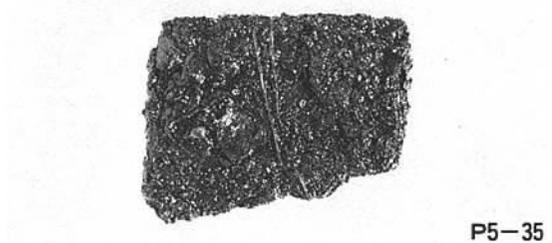
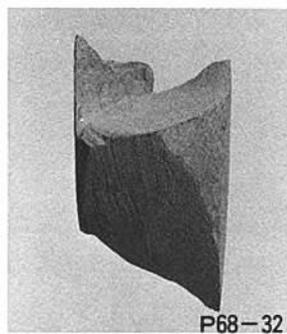
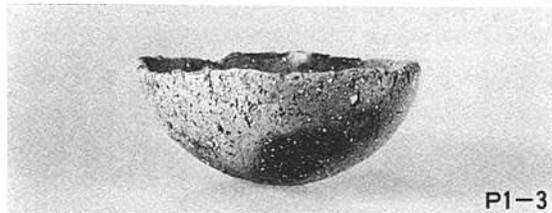
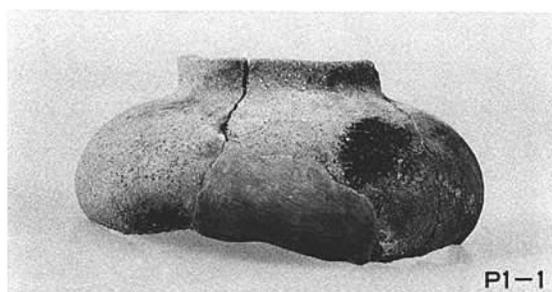
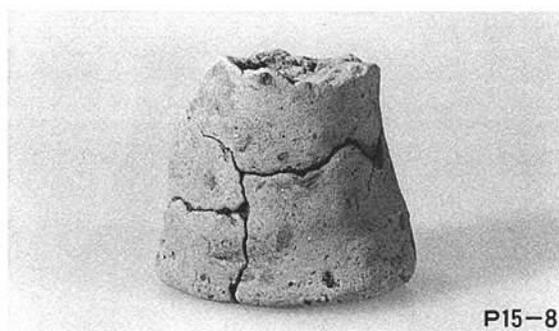
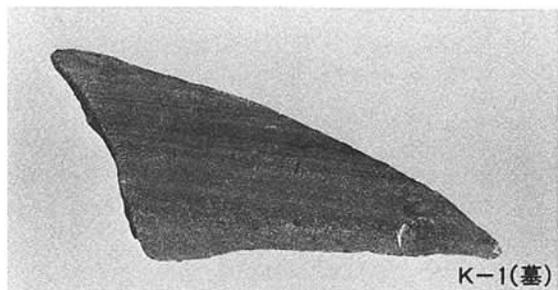
溝5-30



溝5-37



5号溝状遺構出土遺物，1号甕棺



1号甕棺墓, 2号甕棺, その他の出土遺物

福岡県文化財調査報告書

第 70 集

昭和60年 3 月30日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園 7 - 7

印刷 株式会社 西日本新聞印刷
福岡市中央区天神一丁目四番一号